

ドールズディフェンスライン

Rione

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とうの昔に放棄された防衛線と、人知れずそこを守り続ける小隊のお話。

目次

【Top Secret】

番外閑話

Doll's Valentine

502 Got Their Days (前)

502 Got Their Days (中)

502 Got Their Days (後)

Strange Marriage (前)

Strange Marriage (中)

Strange Marriage (後)

What the Wrong...!! (前)

What the Wrong...!! (後)

Luck, or Pluck

Hallelujah, The Halloween!!

What the Wrong...!?! (上)

免疫反応

ERROR 502

Signal Green

Signal Yellow

Signal Red

Bad Gateway

Bad Gateway II

Bad Gateway III

Operation "Antibiotics"

103

98

94

90

86

82

78

74

70

64

59

54

49

42

36

31

25

20

15

9

1

G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d	G r a n d
G u i g n o l X I	G u i g n o l X	G u i g n o l I X	G u i g n o l V I I I	G u i g n o l V I I	G u i g n o l V I	G u i g n o l V	G u i g n o l I V	G u i g n o l I I I	G u i g n o l I I	G u i g n o l
201	196	191	187	182	177	172	168	162	158	154

149

ERROR 404 : (自制心が) NOT FOUND

かない) | 144

ERROR 502 : BAD GATEWAY (もはや不正し

502 as well as 404 | 140

Incident Occurrence | 136

Trickster of Grenade! | 131

不在不通

After Antibiotics II | 127

After Antibiotics | 123

Operation "Antibiotics" V | 119

Operation "Antibiotics" IV | 115

Operation "Antibiotics" III | 111

Operation "Antibiotics" II | 107

e
m
i
308

Dio
santi
simo
miser
cordia
d

Ready
for
Many
303

Unreality
Steps
Forward
299

Pass
by
Jade
294

Stay
Around
Away
290

鷺影踏破

Where
The
Backstage
286

Repa
triation
281

Travel
&amp;
; Trou
ble
10
275

Travel
&amp;
; Trou
ble
9
269

Travel
&amp;
; Trou
ble
8
265

Travel
&amp;
; Trou
ble
7
261

Travel
&amp;
; Trou
ble
6
255

Travel
&amp;
; Trou
ble
5
250

Travel
&amp;
; Trou
ble
4
246

Travel
&amp;
; Trou
ble
3
241

Travel
&amp;
; Trou
ble
2
236

Travel
&amp;
; Trou
ble
231

Il
OBA's
Recollection
226

P90's
Recollection
221

MGL's
Recollection
216

MAG's
Recollection
211

境界旅程

After
The
Festival
206

III	Doll's Defense Line	Output post	382
II	Doll's Defense Line	Output post	377
	Doll's Defense Line	Output post	372
	鐵血戰線		
	Turnout to Mayhem		366
e	Demio Santissimo	Recordia	361
	The Terror Stalks		357
e	Demio 8		351
	Demio Santissimo	Recordia	345
e	Demio 7		340
	Demio Santissimo	Recordia	340
e	Demio 6		340
	Demio Santissimo	Recordia	340
e	Demio 5		332
	Demio Santissimo	Recordia	332
e	Demio 4		327
	Demio Santissimo	Recordia	327
e	Demio 3		323
	Demio Santissimo	Recordia	323
e	Demio 2		315
	Demio Santissimo	Recordia	315

T h e s h o w m u s t g o o n ”	D o l l , s D e f e n s e L i n e R o u n d O, ”	VIII 	D o l l , s D e f e n s e L i n e O u t p o s t	VII 	D o l l , s D e f e n s e L i n e O u t p o s t	VI 	D o l l , s D e f e n s e L i n e O u t p o s t	V 	D o l l , s D e f e n s e L i n e O u t p o s t	IV 	D o l l , s D e f e n s e L i n e O u t p o s t
415	”	409	t	403	t	397	t	392	t	387	t

【Top Secret】

Savage 110BA

種別：RF

実銃説明：サベージアームズ社製のボルトアクションライフル。最
大有効射程（弾が届いてなおかつダメージを与えられる距離）が約1
700mとかいう割かし頭のおかしい長射程を誇る。また、この手の
狙撃銃にしては珍しくスコープ使用が前提でアイアンサイトが付い
ていない。……こんな長射程高威力でかつスコープが必須なレベル
の長距離射撃が前提の銃、一体どこの法執行機関が使うんだ……??

容姿：黒髪ロングに黒曜石じみた黒眼で、常にレイプ目。服も黒い
軍服で、夜間における有視界戦闘でのステルス性はずば抜けている。
あと、笑うのが苦手で笑顔がものすごく怖い。

性格：冷静沈着。502小隊というキチガイの集まりを取り纏めら
れるだけあって、その指揮能力には目を見張るものがある。しかし、
その長所を末期の罨キチであるという点が全て台無しにしている。
なんてこった。

性能：生粋のクリティカルキラー。火力こそ控えめだが、スキルが
発動するとWA2000に肉薄できるレベルの射速と頭のおかしい
クリティカル率で目についた敵を片っ端からぶち抜いていく。装甲
も徹甲弾装備の為意味を成さない。

スキル：『直感集中』

6秒間、自身の一部のステータスを上昇させる

ステータス効果：会心率+70%/射速+70%

開幕CT：6s CT：18s

装備スロット

弾倉：徹甲弾のみ装備可

アタッチメント：夜戦装備を除いてすべて装備可

人形装備：カモフラージュマント/専用装備『Freischitz
Z射撃管制チップ』のみ装備可

Freischitz射撃管制チップ

命中+30

回避+10

会心ダメージ+30

陣形効果

全銃種に有効

火力上昇10% 射速上昇15% 回避上昇15%



FN P90

種別：SMG

実銃説明：FN社が開発したPDW。驚くことに実はMAGと同郷。人間工学という人体の可動域などに配慮した理論に基づいたぬるつとしたフォルムが印象的で、おそらく世界で一番有名なサブマシンガン。

容姿：チビ。金髪ショートで赤目。普段はデフォルトのP90の意匠にウツドランドパターンの迷彩が各所に施されたような服を着ているが、砂漠地帯に行くとなるとなぜか全身をデザートピンク迷彩に塗った服に着替える。

性格：スモークキチ。発煙手榴弾大好き。それ以外は真つ当だが、とにかく発煙手榴弾を愛してやまない性格。また、見知らぬ人が相手だととりあえず背後を取りたがる癖がある。

性能：サブマシンガンでは比較的メジャーな手榴弾系スキル持ちの回避盾。ただしこのスキルがぶつ壊れで、範囲が通常の発煙手榴弾と比べてけた外れに広いため、遅延性能はぶつちぎりのトップクラス。本人の回避もずば抜けて高く、専用装備による補正もかけるともう手が付けられない。ただし、某ゴリアテのような必中攻撃相手だとHPの低さも崇つてなすすべもなくやられるので注意。

スキル：『スモークブレッシング』

発煙手榴弾をランダムに複数個ばら撒き、炸裂地点の半径2.5ヤード内にいる敵の一部ステータスを5秒間低下させる。なお、この効果は他の発煙手榴弾スキルと重複する。

投擲個数：5個〜10個

ステータス効果：敵攻撃速度↓40%／敵移動速度↓50%

開幕CT：1s CT：16s

装備スロット

弾倉：特殊弾のみ装備可

アタッチメント：すべて装備可

人形装備：外骨格／専用装備『502 UX外骨格Type. P90』のみ装備可

502 UX外骨格Type. P90

会心率+25

回避+75

移動速度+5

陣形効果

全銃種に有効

射速上昇20% 回避上昇10%

■ ■ ■
FN MAG
種別：MG

実銃説明：FN社で開発された汎用機関銃。驚くことに実はP90と同郷。7.62x51mm NATO弾を使用する汎用機関銃として、NATO加盟諸国など80ヶ国以上で広く採用されている。ちなみに銃本体だけでも11kgあるので、町で偶然拾ったりしても本編中のように片手撃ちしたりしないように。反動で普通に腕が逝き

ます。

容姿：灰髪ストレートの蒼眼。ベルギーの陸軍服をベースとして魔改造に魔改造を重ねたようなデザインのブレザーを着ていて、腕には『Mitrailleuse d'Appui General』と書かれた腕章が巻かれている。

性格：説明不要の火力キチ。自他ともに認める火力信者で、元氣とマシンガンがあればなんでも出来ると素で言い切るレベルで思考が終わってる。一応マシンガンの要素を抜きにすれば恐らく502小隊の中でも1, 2を争うほどには理知的な性格だが、マシンガンが全てを台無しにしている。

性能：とにかく大火力で敵を片っ端からなぎ倒すゴリ押し主義の権化。陣形バフも火力が1.5倍とか言うシンプルに狂気を感じるほどの弾幕火力主義者。ただし、バフ位置の都合上最後列には置けないため、どうしても低回避とリロード時間が足かせになってくる。

スキル：『火力集中MG』
15秒間、自身の火力が60%上昇する。

開幕CT：2s CT：18s

装備スロット

弾倉：徹甲弾のみ装備可

アタッチメント：夜戦装備以外すべて装備可

人形装備：外骨格／専用装備『502 UX外骨格Type. MAG』のみ装備可

502 UX外骨格Type. MAG

回避+25

命中+25

移動速度+3

陣形効果

全銃種に有効

火力上昇50%

Denel MGL

種別：GR

実銃説明：狂気の6連発グレネードランチャー。これも両手で保持して発射するものであり、間違っても片手に一本ずつ持って乱射するような漢スタイルはしてはいけない。というか普通はできない。

容姿：金髪ポニーで琥珀色の瞳。マルチカム迷彩服の上から緑色に塗装したType3防弾ベストを身に纏い、背中にはグレネードがしこたま詰め込まれた巨大バックパックが背負われている。字面だとわかりづらいが、要するに大人になったフカ次郎。

性格：ピエロのような性格と真つ当な性格の二面性を持ち合わせている。基本的にピエロ状態がデフォルトだが、シリアスな時や真面目な時は素の口調に戻る。502小隊の中では誰よりもクレバー。

性能：高火力・高射速・低命中・長リロード。デストロイヤーを味方にしたら多分こんな感じ。火力はぶつちぎりが高いし射速も悪くはないが、命中が死んでる上にリロード時間も長いので実際にはそこまで強くない。とりあえず命中をカバーできれば一気に化ける。

スキル：『ポップゴーススイーゼル』

ランダムで以下の効果のある榴弾を10発ばら撒く。

- ・閃光榴弾：半径2ヤード内の敵を5秒間目まい状態にする
- ・発煙榴弾：半径2ヤード内にいる敵の攻撃速度／移動速度を5秒間、50%低下させる

- ・焼夷榴弾：半径2ヤード内の敵に3倍の爆発ダメージを与え、5秒間、1秒ごとに3倍の持続ダメージ

開幕CT：15s CT：16s

装備スロット

アタッチメント：夜戦装備／サイレンサー以外すべて装備可

人形装備：外骨格／防弾ベスト／専用装備『502 UX外骨格T

ype・MGL』のみ装備可

人形装備：外骨格／防弾ベスト／専用装備『502 U X外骨格T

ype・MGL』のみ装備可

502 U X外骨格Type・MGL

回避+20

火力+10

射速+10

陣形効果

全銃種に有効

会心率上昇20% 命中上昇10%

■ ■ ■
XTR-12

種別：SG

実銃説明：トルコのUTASマキナ社が開発したオートマチックショットガン。弾薬数は実銃の装弾数がマガジンの種類によって2／5／10発から選択可能らしいので、ゲームシステムの兼ね合いから今回は5発に設定。個人的にはこういう『見た目アサルトライフルだけど撃ってみるとショットガン』っていうデザイン大好き。

容姿：Dragoonのそれと全く一緒の髪色を左側でワンサイドアップにし、マゼンタの瞳をこれまたDragoonの物に酷似したバイザーで隠している。服装はSai-ga-12のそれと似ているが、あちらと違って少しスカートが長く、ノースリーブで某ボカロを彷彿とさせるアームカバーを付けている。カラーリングは黒ベースの落ち着いたものだが、ところどころにアクセントとして青いラインが入っている。

装甲板はユニコーンガンダムの盾みたいな装甲を4枚、ハニカム構造の装甲を6枚装備している。また、脚部には靴に装着する形で用途不明の特殊な形の装甲ユニットが装備されているが……。

性格：一見するとまともだが、中身は完全にぶっ壊れている。というか、出自がもろにグリフィン版ウロボロスな感じなため、ほとんど暴走状態と言って差し支えないレベルにまで精神が崩壊している（あつちはベースがトチ狂っていたためにそこまで大きな弊害はなかった）。一度そのせいでメンタルシステムがクラッシュしてスクラップ&ビルドしたため、現在は小康状態と言ったところか。

性能：わかりやすい盾役。スキルが一〇〇式の上位互換な感じの性能の為、カバ―性能も随一。ただし、専用装備を積むと弾薬量が増える分りロード時間も長くなるため要注意。

スキル：『フィジクスシールド』

5秒間、戦闘可能な味方全員に最大30ダメージを吸収する装甲持ちシールドを付与する。なお、装甲の値はスキル発動者のステータスに依存する。

なお、効果時間中にシールドが破壊された場合、破壊されてからの5秒間、破壊されたシールドの保持者の回避を50%上昇させる。

破壊されなかった場合には、シールドの効果時間が終了してからの5秒間、破壊されなかったシールドの保持者の火力を60%上昇させる。

開幕CT：8s CT：16s

装備スロット

アタッチメント：夜戦装備／サイレンサー以外すべて装備可

弾倉：バックショット／スラッグ弾のみ装備可

人形装備：外骨格／専用装備 『自律稼働型複合浮遊装甲「ワイルドハント」』のみ装備可

自律稼働型複合浮遊装甲 『ワイルドハント』

防御+20

回避+10

弾薬量+3

陣形効果

全銃種に有効
会心率上昇20%
命中上昇10%

番外閑話

D o l l , s V a l e n t i n e

ある日の事。

「……バレンタイン？　なんだそりや」

「ジャパニーズの行事らしいわよ。なんでも、意中の相手にチョコレートを贈るとか」

「なんだそりや……」

旧司令部にて。

M A G が呆れたような声を発した——いや、恐らく実際呆れているのだろう。実際、私も同じ気分だ。

バレンタインデー。なんでも昔いた聖人とやらの名前を冠している行事らしいが、バレンタイン氏はそんなおかしな名前をつけられて嫌だったりはしなかったのだろうか。

で、その古きよきキラキラネームの話はさておいて、なぜ私がそんなことを言い出したかと言うと。

「なんでも上層部作者の意向でね。この手のイベントを通じて戦術人形同士の結束を強めたいらしいわ」

「言いたいことは分からんでもないが、まず502ウ小隊チは結束どうこう以前の集まりだしそのルビはダメだろ、いろいろと」

言われてみればそうだ。

502小隊はヘリアントスの（一応の）指揮下にある独立遊撃部隊。まあ滅多に指令も来ないので好きにやらせてもらっているが、本来ならこんなイベントの通知は来ないはずなのだが……。

「ヘリアンから連絡が来たのよ。なんでも、『今日くらいは大人しくしといてくれ』らしいわ。そう言われると騒さわぎたくなるものだけれど」

「確かに。じゃあちよつくらマシンガン撃つてくるわ」

「待て。行くな。座れ」

「急にドスの効いた声出すんじゃねえよ……」

よつこらせ、と椅子に座り直すM A G。その横では、P 9 0 がソ

フアで丸まって熟睡していた。どうやら昨夜はお楽しみだったようだ。

「で、あたしを呼び止めてまで今度は何の用だ？ 言っとくが、バレンティンなんぞに興味はねえからな。チョコレート贈るくらいだったら弾丸ブチ込んでやるっつーの」

「なんで相手に贈る事前提なのよ……。そうじゃなくて、はいこれ」

私は簡素なラッピングが施された箱をMAGに押し付ける。

彼女は二、三度瞬きをし、手に持ったそれに視線を落とす。

そして私の方を見て、

「……電腦のメンテだったらあたしには出来ねえぞ？」

「はっ倒すわよ。見ればわかるでしょ、ハッピー・バレンタインよ」

「はぁー……。マジか。マジでか」

手元の箱をまじまじと見つめるMAG。少し気恥ずかしい。

そして、何かを思い至ったかのように顔を上げた。

「っ、そうか。ちっと待ってろリーダー！」

「は？」

「なあにすぐに済む、少しばかり座ってな！」

そう言っつて、慌ただしく司令室から出ていってしまった。

突然の事態に状況がつかめない私。

首を傾げながらその場で停止していると、開け放たれたドアからMGLが入ってきた。

どうやら先の光景をばっちりと目撃していたらしく、困惑しながらソファに座り込む。P90が踏みつぶされて「むぎゅっ」と声を上げたが、よっぽど動揺しているのかそれに気付いた様子はない。

「……見てない見てない、ワタクシ何も見てませんの事よ？ ええもう本当、リーダーがMAGにチョコをあげたなんて、そんなまさか」

「しつかり見てるじゃないの」

「うぐっ」

「……そんなに意外だったかしら？」

「まあ、そりゃあ。私はこれでも人を見る目には自信がありますけど、これは流石に予想外でしたね。いやあ、リーダーにそんな乙女な一面

があったとは」

「乙女で悪かったわね。じゃあ、貴方にも——ハッピーバレンタイン」
隠し持っていた箱を押し付ける。

MGLもまたきよんとした顔でそれを受け取り、見つめて意味を
理解したのか、ボンツ！ と顔を真っ赤に染め上げた。

「わっ、わわわワタクシに？ 僕に俺に私に拙者に——チョコレイト
!!!?」

「ええ。で、それが何か問題？」

「あわ、あわわわわわ」

右往左往するMGL。私がチョコをあげることがそんなに意外な
のだろうか。そして、恥ずかしさが最高潮に達したのだろうか——
「御禁制ですーっ!!」と叫びながら部屋を飛び出して行ってしまっ
た。

割と真剣に自身のイメージについて疑問に思い始めたその時、P9
0がのそりと起き上がる。

「っあー……よく寝た」

「ええ。昨夜はお楽しみだったわね？」

「そりやもう楽しかったよ。煙幕ぶち撒けながら無双してたんだか
ら」

「相変わらずで何よりだわ。それでだけど——」

「あー、ちよっと待って」

私が箱を取り出そうとすると、P90は片手でそれを制した。

そして、懐から怪しげな袋を取り出し、私にずっと押し付ける。

「はいこれ」

「……?」

「今までのお礼。ま、言いたいことはいろいろあるけど後でそれ開け
て確認してよ。それじゃ、ボクはちよっと出かけてくるから」

「え？ あっ、ちよっと……!!!?」

それだけ言って、彼女はさっさと出て行ってしまった。あの様子で
はまた鉄血を狩りにでも行くのだろうか。

残されたのは、何やら意味深な袋を渡されて呆然としている私だ

け。

数分ほどそのままフリーズし続け、そこでようやく我に返った私は、いそいそと袋を開封した。

中に入っていたのは――

■ ■ ■

「……これって」

その中に入っていたのは、古ぼけた外骨格のパーツ。

これは見覚えがある。確か、私が彼女を保護した時に身に付けていたものだ。まさか、今の今まで捨てずに持っていたというのか。

そこで私は、その脇に折りたたまれた紙が入っているのに気付く。それは、一枚の手紙だった。

『これを読んでるってことは、ボクはもう死んでいるじゃなくて。死んでない死んでない。とにかく、一緒に入ってたものが何かは分かっていると。プレゼント、気に入ってくれたかな？ ま、しがない感傷みたいなものだけどさ――これでも感謝はしてるんだよ。あの時、ボクを拾ってくれてありがとう。面と向かつては流石にこつぱずかしくて言えないけど、この体が動く限りはボクはリーダーの力になるとここに宣言しよう！』

P・S. お礼は別にいいよ。バレンタインデーとか言ってるけど、ボク辛党なんだ』
……。

不覚にも少し不安に感じたりもしてしまったが、蓋を開けてみればどうだろうか。

どうやら、私はちゃんとリーダーとしてやれていつているらしい。

「よっすリーダー、待たせたな……っておい、どうした!？」

「泣いてる……ん、ですか？」

「……え？」

気が付くと、扉の前にはMAGとMGLの二人が立っていた。どうやら、見られてしまったらしい。

「っ、大丈夫よ」

「いや、そうは見えねえんだけどよ……まったく、まあリーダーがそうい

うんならそうでもいいか」

「ええ、お願いするわ」

「そうかい。んじゃ、あたしからのお返しだ、受け取りな」

そう言っつて、MAGは私にやたらと大きな箱を渡してきた。

見た目に違わない重量だが、一体何を作ってきたのか。

箱を開けて中を見てみると……。

「……ナニコレ」

「見りや分かんذار？ あたしの分身、『FN MAG (1/10スケールフルチョコレート仕様)』だ。だいぶ急ピッチで仕上げたから、クオリティに關しちゃ何も突っ込まんでくれ」

「……いや、完璧な造形だと思っうけど」

「わー、ちっちゃくてかわいらしいですね」

「えっ?」

「え?」

見てみれば、MGLは台車を引いていた。

そこに乗せられていたのは、戦術人形が一体丸々収まりそうなほどに大きなプレゼントボックス。

彼女がそれを開封すると、そこには驚愕の代物が収まっていた。

「……いや、どういうことなの?」

その中に収まっていたのは、私、MAG、P90、MGL……502小隊の姿を形作つた、巨大な彫像だった。材料は100%チョコレートだが。

私とMAGが呆然としていると、作つた張本人であるMGLは恥ずかしそうにしながら、

「いやあははは……実は私、銅像の類を鑄造するのが趣味でして。502小隊こに入隊してから、少しづつ時間を駆けて型を作つてたんですよ。銅像を造る前にバレンタインが来ちやつたので、チョコレート像が初披露になつちやいましたけど」

「……これを、全部ひとりで?」

「はい? はい?」

「……信じらんねえ」

……なんか言いたいことは色々あるが、まあそれは置いておこう。
私は無線機を手に取り、この中で唯一外回りに出ている仲間と話しかける。

「……P90」

『はいリーダー。どつたの?』

「喜びなさい、当分チョコレートには困らないわよ」

『あつ、やっぱりボクも食べさせられるのね……』

「当然」

『はあ……まあいいや。ハッピーバレンタイン』

「ええ。ハッピーバレンタインね」

すっかり日は沈み、濃霧に包まれた夜闇が辺りを包み込んでいる。

それでも、その日だけは——旧司令部の明かりは、夜遅くまで煌々と灯り続けたという。

502 Got Their Days (前)

「という訳で最近何やら噂になっているS09地区まで来たわけだけれど」

「待て。色々待て」

私がそういうと、横に立つ旧国家ベルギーの陸軍を思わせる軍服で灰髪ストレートストの少女——MAGが納得いかないという風に眉間をもみながら言った。

そう、何を隠そう今私たちがいるのはS09地区。遊撃部隊が前線を放棄しているのか、という意見にはあとで答えるので今はそつと胸の奥底にしまっておいてほしい。

「なあ、なあなあなあ。まず何処から突っ込めばいいのかあたしにはもう分かんねえんだよ。教えてくれP90、あたしはあとどれくらい思考を放棄すればいいんだ」

「逆に聞くけどボクにそんなことわかると思う？」

「言われて見りや確かにそうだな」

「H A H A H A ぶっ殺す」

「あ、あははは……」

そして始まるどつたんばつたん大騒ぎ。

そこでMAGと取っ組み合いを演じている金髪ショートのちびっこいのがP90。何をトチ狂ったのか今日は全身をデザートピンク迷彩の服で固めている。確かに行先は伝えていなかったが、まさか砂漠の行軍でも想定していたのだろうか？

そして最後に、その後ろで苦笑いする茶髪ポニーの長身仮面少女、MGL-140。マルチカム迷彩服の上から緑色に塗装したType3防弾ベストを身に纏い、背後にはグレネードがしこたま詰め込まれた巨大バックパックが背負われている。しかも武装はグレネードランチャー二丁持ちという漢仕様。威圧感が凄すぎる。

そこに私を入れた以上四名が、問題児の掃きだめ『502小隊』の内訳だ。

こほん、と咳を一つ。

「……という訳で、最近何やら噂になっているS09地区まで来たわけだけれど」

「やり直すのかよ!？」

「いや、あの、リーダー？ まあ私としても素でいいっていうのは非常にありがたいですけど、その、事情の説明を……」

事情、事情か。

といっても、私は風のうわさで『S09地区に最近トンデモナイ喫茶店が爆誕した』という話を聞いただけなのだけれど。

「いやどこの風だよ。ただただ初耳だぞあたしは」

「そう？ 道行く鉄血兵から聞いた話よ？」

「……そういや、最近めつきり襲撃が減ったな……そのあたりも関係してんのか？」

そう。

その噂を耳にするのと前後して、いつもなら懲りずに元気に進軍してくる鉄血人形の列がぱったりと途絶えたのだ。

それが一日二日であるならば誤情報と偶然だけで済むが、それが二週間も続けばさすがに私も看過できない。度重なる酷使で携行通信機がついにご臨終してしまったため、新型の入手もかねて今回来ることになったのだ。普通ならありえない前線の一時的放棄を敢行したのも、この事態があつてこそ。でなければこんな無謀なことは決してしない。

そしてそれを聞いたMAGは、

「それを先に言えや！」

と叫んだ。言ったら言ったでどうせ『マシンガン関連じゃねえならあたしはパスな』って言うくせに。じゃあ私はどうすればいいんだ。

そういう不満の発露も兼ねて、私は無言でじつとMAGをにらみつけた。

「ちよつ、リーダー!? おい、こつち見ながら目を涙ぐませるなよ!

これじゃあたしが悪者じゃねえか! つつーかなんだその技は!？」

「うわー、MAGってばいけないんだー」

「ドン引きです……」

「小学生か!!」

その後、何だかんだですったもんだはあったものの、どうにか地区内に入ることは出来た。あまりに装備がガチすぎるため、検問に居た男性の笑顔がひきつっていたのは此処だけの話。

地区内に入ってまず立ち寄ったのは、戦術人形などの装備を売っている専門店。この手の類の店は許可証がなければ入れないのだが、その点はきっちり抜かりない。事前にヘリアンに話して受領済みだ。

……なんか今にも死にそうな顔色してたけど、あとで見舞いにも行つたほうがいいだろうか……？

そこで必要な物資を購入し、ついでに銃火器の整備をオーダー。さすがに自分でやるにも限度があるため、数ヶ月に一度程度のペースで本職の手による全面調整フルメンテナンスを必要とするのだ。いつもはスラムに隠れた名職人に頼むのだが、たまには本家本元の方に頼むのも良いだろう。

銃を手放すのに伴い、整備員の手によって火器管制 FCSがオフにされる。出力が大きく低下するが、まあ荒事をするわけでもないし、この状態でも十分戦えるし大丈夫だろう。

「お、重いです……」

「なんで先に荷物を降ろさなかったのよ……」

その脇で、バックパックの重さに耐えきれずにMGLがダウンしていた。さすがに出力15%の民生品仕様ではあの重量には耐えきれなかったか。

それにしてもどれだけ中身を詰め込んでいたのか、そのバックパックは私とMAGとP90の三人がかりでようやく持ち運べるレベルの重量をしていた。気になって中身を検分してみれば、もう出るわ出るわ数えきれない量のグレネード。

これだけ積めていればああなるのもむべなるかなという感じだが、一方でMGLは平時どんなバケモノじみた膂力を誇っていたのかと不安にもなった。あとでヘリアンに頼んでスペックシートでも送ってもらおうか。

「ま、これでおおむね目的は達成したわね。あとは、各自自由行動とい

うごことにしましょうか?」

「自由つつつたつてどうすりゃいいんだよ。あたしはこの辺りの地理には詳しくねえぞ?」

「ボクもー」

「あちこちを放浪してましたけど、ここは流石に初見ですので……」

「じゃあやめにしましょう」

なんてこった、誰一人として地形すら把握できていないじゃないか。まあ、かくいう私も覚えているかと問われたら黙って首を横に振るしかないのだが。

そんな訳で、四人で噂の喫茶店へ行くことに。

「……鉄血の奴らが経営してるって話だが、マジなのか?」

「まあ、本人たちがそう言ってるんだし嘘ではないんじゃないかしら」

「……煙幕投げていい?」

「いったい何と戦っているの」

「……あつ、ええと……これから毎日?」

「焼かないからね?」

たわいもない話をしながら歩くことしばし。気が付けば、私たちは目的の場所に辿り着いていた。

シックな装飾が施された一棟の建物で、軒先につるされた木の看板には『喫茶鉄血』とだけ書かれている。

……こういうシンプルなのは嫌いじゃない。

意気揚々とドアノブに手をかけたその時だった。

「さて、中はどんな感じの——ぐふああつ!!」

内側から勢いよくドアが開かれ、必然的に私はドアで全身を強打した。しかもどれだけの力でこじ開ければそうなるのか、恐ろしい勢いで開かれたドアは吹っ飛んだ私へ向けてまさかの追撃。空中でもう一度弾き飛ばされ、今度こそソックアウトされた。

「な……ぜええ……がくつ」

「ぬおおこんな所で死んでたまるかあ!? 私は逃げるぞ!!」

「逃げんなコラアア!!」

そうして開かれた扉の中から勢いよく飛び出してきたのは、鉄血工

造のハイエンドモデル『尾を呑む蛇』と『夢想家』。一体何をしでかしたというのか、ウロボロスは必死の表情で逃亡し、ドリーマーは町中だというのに武装をフル展開してウロボロスを追いかける。

二人の姿はあつという間に遠ざかっていき、残されたのはノックアウトの影響で立ち上がれずにいる私と呆然としている502小隊のみとなった。

……静寂。何とも言えない空気が場を満たす。

それを引き裂いたのは、半開きのドアから姿を覗かせたもう一つの影だった。

「全く、あの二人はどれだけトラブルを起こせば……おや」
『エージェント』
『代理人』。

鉄血工造の超上位ハイエンドモデルが、S09地区のど真ん中で堂々と姿を現していた。

……両手にそれぞれグラスとグラス拭きを持ちながら。

502 Got Their Days (中)

「……はあ、なるほど」

数刻後。

『喫茶鉄血』では、502小隊と鉄血工造のハイエンドモデルが一堂に会していた。ある意味で非常に歴史的な瞬間だ。

「私達の事は結構有名だと思っていたけど……まあ、そういう事もありませんか」

「オイそりやどういう意味だ？ ああん？」

「MAG、ステイ」

ため息をつくエージェントに、MAGが額に青筋を浮かべて食ってかかる。それを、私は横になりながら制止した。

そのすぐそばでは、ドリーマーとウロボロスが『私は無関係の人に迷惑をかけました』と書かれた看板を首にかけられた状態で石抱きの刑に処されて半泣きになっていた。あまりにも前時代的すぎる。

エージェントはため息をつきながら、

「……どうやら、事情を知らないというよりも根本から認識に差異がありそうですね」

そう言つて、彼女は説明を始める。

私達は耳を疑った。

え、鉄血工造は事故による壊滅じゃなくてクーデターによる解体？

何それ聞いてない。

従業員・自律人形は大多数が共存の道を選んだ？　じゃあ私たちが何のために僻地で頑張ってたの？

エージェントはこの喫茶店のマスターで、ハンターはAR-15の恋人で、エクスキューショナーは医療関連の施設の護衛が生業で、アーキテクトとかゲイガーとかは鉄血工造の後進的存在『17Lab』で頑張ってる？　ええ……???

何もかもが初耳すぎて理解が追い付かない。

「……P90。ちよつと私の頬つねってくれないかしら」
「ん、分かった」

P90が頬をつまみ、ひねりを加えながら思い切り引つ張る。痛い痛い痛い。

「……夢じゃないのか……。」

その様子を見ながら、こういうことが稀に起こるとエージェントは言う。

「なんでしょう、並行世界からの転移、あるいは漂流？　そういうのが度々あるんです」

「……ああ、いつそ夢であってほしかった」

「マジか、異世界とかマジか。え、あたしと気が合いそうな奴とかいる？」

「異世界じゃなくて並行世界なのですけど……まあ、マシンガン（推定）であればM61A2バルカンと名乗る戦術人形がつい先日」

「なっ……バルカン……だと……!？」

「どうしました？」

「……ドエレ——C〇〇〇L〇〇じゃん……?」

「はあ。そうですか」

「……うん？　いや待ってください、なんかおかしくありませんか？」

そこでそう疑問を呈したのはMGLだ。

彼女は顎に手を当てて、感じたことを赤裸々に話す。

『『並行世界』と言うからには、おそらく『戦術人形』や『PMC』、『鉄血工造』などの必要最低限の事象は恐らく重複しているとみていいでしょう』

「そうなりますね。でなければ、あなた方も私たちもここに揃うことはなかったでしょうし」

「はい。ただ、そうなると此処で疑問点が生じます」

ピンと人差し指を立て、MGLは続ける。並行世界論で行くと、致命的な矛盾が発生するという持論を。

「恐らく約2週間前、鉄血工造からの襲撃が途絶えたのとはほぼ同タイミングで私達は旧司令部ごとの世界線に転移したものと考えられます」

「……まあ、考えられるとしたらその時よね」

「そして、リーダーがヘリアントスと通信、ここ……S09地区における『戦術人形専門店利用許可証』を受領したのがつい一昨日かそのあたりになります」

「そうだな。リーダーがしかめっ面で通信機に向かってたのを覚えているぜ」

「となると。何故、ヘリアントスは私たちのことを知っていたのでしょうか？ 私達が並行世界に転移したというのなら、この世界線に502小隊は存在しないはずなのに」

「——!!!」

そこで、この場にいる全員がその事実気が付いた。

確かに、此処は私達とは何ら関係の無い世界観のはず。であれば、彼女が私達のことを知っているはずがないのだ。

では、何故……？

「あーっ!!」

とそこで、横から大声で割り込んでくる影があった。

声のする方を見てみれば、そこには正座した足の上に積まれた石を半分くらい脇にのけ、驚きの表情で私たちを指さすウロボロスの姿。

「思い出したぞ！ 貴様ら、イントウルダーの言っていた『502小隊』とかいう奴らじゃないか!!」

「……イントウルダー？」

「何を勝手に石をどかしているのですか。これはお仕置き追加が必要ですね？」

エージェントはすかさず、先程の倍の高さに積まれた石をウロボロスの足の上に積み重ねる。

「重み倍プッシュユ!!? じゃなくて、それどころではない！ 証拠なら、恐らくだがそっちの方から送り付けてきたろう！ エージェントなら覚えているはずだ、この前急に16Labに送られてきた形式不明のハイエンドモデルだ！」

「……ああー！」

エージェントも思い出したらしく、ポンと手を打った。

それにしても、イントウルダー……うん……？

……あつ。

「なんかあつたっけか」

「MGLはともかくお前は絶対言っちゃダメだろその台詞。この前、どこかの司令部の戦術人形を二人救助したじゃんか」

「……そんな事あつたっけか」

「おーいリーダー」

「待て待て分かった思い出す思い出すから！ アレだろ、あたしが暴走した時だろ!? 確かになんかそれっぽい奴と殴りあつてた記憶があるぞー！」

「嘘でしょ……」

そんなMAGの発言に、エージェントとウロボロスはドン引きしていた。その脇で、ドリーマーはその名の通りに鼻ちようちんを膨らませて夢の世界に旅立っていた。

……うん、そう言えば鹵獲したハイエンドモデルを一体、送り先不明の状態で本部に郵送したんだっただな。

私製の電磁捕縛装置で電脳を破壊することなく身体機能だけを無力化して、段ボールに詰めて送り出したんだ。

どこも壊してないので、多分箱の中で元気に騒ぎ立てていたのだろう。野郎ぶつ殺してやる、みたいな感じで。

なるほどそこで繋がるか……。多分電脳の中までしつかりチェックしただろうし、だとすれば私たちのことも触りくらいは知っていてもおかしくないだろう。詳細は不明だが、どこぞの防衛戦で単独行動してる戦術人形がいる、という感じで。

なるほど、なるほど……。

全員で納得していたその時、扉が外から開かれた。

外から乗り込んできたのは、アサルトライフルの戦術人形達だ。ARR-15、M16A1、SOPMOD2、M4A1、RO635……。あれ。

これ、もしかしなくてもARR小隊？

「やつほー、遊びに来たよ〜ってうわあ！ 何この状況!!」

「よお異教徒。見ての通り修羅場だぜ」

「マシンガン持ちじゃないからって初対面で喧嘩を売るのはやめなさいMAG。そんなにドラム缶に詰め込まれたいの？」

「すまん言いすぎた」

「お、おう……それで、何が起こったんだ？」

「ウロボロス、ドリーマー、ドア、衝突」

「オーケーだいたい察した」

どうやらこの手の事故はこれが初めてではないようで、彼女たちは一様に遠い目をして天を仰いでいた。そんなにか。

ともあれ、私もだいたい本調子に戻ってきた事だし……。

横になっていた体を起こし、パンパンと手を叩く。

こちらに視線が集中するのを感じながら、私は取り敢えず出来る限りの笑顔を浮かべ、告げる。

「――それでは。異世界交流を始めましょう？」

……おい、今小さく「ヒエツ」て悲鳴上げたの誰だ。私だって傷つくんだからな。

502 Got Their Days (後)

自信満々に異世界交流を宣言してからわずか30分。

珍しいことに『CLOSED』の看板を掲げた『喫茶鉄血』の店内は、見たことの無い新手の地獄と化していた。

「おっしやいくぞー!」

「かかって来いぜ真正面から不意打ったるわア!!」

「はい最初はグーツ!!」

「ハハハッ、アーツハッハッハッハッ!!」

「さて、お次は『リングリングゲーム』のお時間ですツ!!」

「楽しいわ楽しいね楽しいよ!! ああワタシ様の胸の中でビューティーが迸る!」

「合唱コンで大地讃頌、ただしクラス全員宇宙人』みたいなっ!」

「ハッ! エイリアンかお前!」

「つつーかなんでこここんな暑いんだよ! 熱帯か? それともジャングルなのかコラー!」

「オツケーじゃー私熱帯魚!」

「ハハハハハ!」

G & amp; Kも鉄血もそれ以外もお構いなしで、呑めや歌えやどんちやん騒ぎ。

いつの間にか特に関係のなさそうなメンツも乱痴気騒ぎに加わって、場はもう制御不能の混沌に陥っていた。

そんな中、私はカウンターで一人くつろいでいた……というより、頭の中がしっちゃんかめつつちゃんかでそれどころじゃない。

「……頭が痛い」

並行世界論、発生していない国家間戦争、存在しない病『E. L. I. D』、旧国家群の延長線上の装備の正規軍、人類と共存している鉄血人形、17Lab、ハイエンドモデルが恋人の戦術人形、etc
……。

今まで生きていた世界との食い違いが、私の電腦を強く苛む。

カウンターにうずくまっとうんうん唸る私の目の前に、横からグラ

スが滑り込んできた。

「あちらのお客様からです」

エーリエントの声に横を見ると、そこにはしたり顔でこちらを見るアルケミスト。

彼女は私の隣の席に座り直すと、友人に話しかけるようなノリでこちらに声をかけてきた。

「よお。あんまり気負うモンじゃないぞ？ 割り切れば楽になれる」

「そんなあつさり出来たら苦労しないわよ……」

アルケミストはそういうと、私の目の前で止まったグラスを手に取り、中身を一息に飲み干した。

……いや、お前が飲むんかい。

カン、と空になったグラスの底でカウンターを叩き、彼女は言う。

「ま、確かに言うほど簡単じゃないよな。私だつてエーリエントがちゃんまくなつたつて時は耳を疑った後に大爆笑したもんだ」

「ちよつとなにいつてるかわからないかなあ……」

「まあ、だろうな」

彼女はそう言うのと、急に私の頭を持って自分の方へ向けさせた。

え、なに？ なに??

そして。

——ちゅつ。

「?」

気が付くと、私の顔のすぐ前にアルケミストの顔。そして、唇の触れる柔らかい感覚。

えつ、えつ。こ、これつてもももしかしなくても、き、キス——

「?」

じたばたと暴れるが、ハイエンドモデル特有なのかなんなのか分からない化け物じみた膂力でガツチリとホールドされているため、逃げようにも逃げられない。つてうわちよつと待っておい馬鹿やめろ舌は流石に——ツ!!?

「——ッ!」

「んっ……」

そして、さんざん私の口の中を蹂躪して、アルケミストはようやく口を離した。

「——くっふふ、ご馳走様？」

「——、……」

なんかもう、もうだった。

正直何も言えない。さっきから電腦がハラスメント警告だとか思考回路に尋常じゃない数のエラーが出現したとか騒ぎ立ててるけど、なんかもうそんなのどうでもいい。

とりあえず、目の前でしたり顔をしているコイツをどうしてくれるよ
うか。

「……エージェント。ここで一番強い酒って何かしら」

「はい？ ——ああ、誰も飲まないので半ば死蔵状態のテキーラが何
本か」

「もうこの際それでいいわ、一本くれるかしら」

「はあ」

コトン、とカウンターのの上に特徴的な形の瓶が置かれる。

私はそれを手に取り、蓋を開け——中身を全て、一息に飲み干す。

カア、と体が熱くなり、途端に世界がぐにやり歪んでぐるぐる回り
始めた。

「——ぷはあ」

「お、おい……？」

そして、席を立ち、アルケミストの両肩を掴む。

外野が何やら騒ぎ立てているが、そんな雑音はもはや私の耳には届
かない。

「お、おい待て分かった私が悪かったちよつとやめ——!!？」

「——お覚悟」

そして。

おぼつかない足取りで、私はアルケミストに襲いかかった。
力任せに押し倒し、くんずほぐれつ大乱闘。

「よっしややつちまえりーダーツ！」

「負けるなよアルケミストお！」

「そこだ、右！ ワンツー叩き込めえーい！」

「カウンターだあ！ 容赦なくシバキ倒せーっ!!」

そして、その脇でP90が肅々と荒れた店内を掃除していた。

「……ゴメンね、ウチの仲間が」

「……まあ、トラブルメーカー二人が同席してる時点である程度は覚悟してました」

「……面倒な仲間を持つと辛いね」

「そうですね……」

遠い目でため息をつく二人。

そんなボクらを置き去りに、舞台は進行していく。

この今日限りの喜劇は、真夜中に突然訪れたイントウルダーが大騒ぎしている全員を（特に502小隊を重点的に）シバキ倒すまで続くのであつた。

……なーんてね？

翌朝。

銃火器の点検が終わったため、私達は人形義体のフルメンテナンスをされていた。MAGのメンテナンスを担当していた研究員が一人オープンボルト教団に入信したり、P90の記憶領域を覗いた研究員が発狂したりとまあ色々あつたが、全体的に見れば恙無く完了したと言えるだろう。

「いや最後に関しては何があつたんだ……」

「MAG。世の中には知っていい事と悪いことがあるんだよ？ ちなみにボクの頭の中はバリバリの後者だ」

「マジでどんな経歴持つてんだテメエは!？」

「はい黙秘しまーす」

素知らぬ顔でそう嘯くP90。まあ、私達502小隊は実力のあるはぐれ者であれば誰でもウエルカムの窓際族だ。経歴に関しては一切考慮しないし、そういう過去があってもおかしくないだろう。詮索する気は微塵もないけど。

そして、私達は再び『喫茶鉄血』を訪れた。

「いらつしやいませ——おや。本日はどのような用件で？」

「特には。……ま、今日で向こう側に戻るから、最後の顔出しね」

「それはそれは」

エージェントはこちらを見ることなく、設備の手入れをしていた。取り敢えず、店の奥の方で血走った目をしてエージェントをガン見している戦術人形については触れないでおこう。絶対ろくな事にならない。

「昨日はなかなか楽しめたわ。ありがとう」

「バルカンとか言うやつに会えなかったのは残念だけどな」

「まだ言うか」

「掃除楽しかったよー、じゃーねー」

「見かけないと思つたらそんな事を……」

「新しいグレネードのアイデアありがとうございましたー！ 完成したらいくつか送り付けますー！」

「公共の場で危険すぎる密談が行われていた!？」

それだけ言つて、私達は店を後にする。最後に見たのは、こちらへ向けて優雅に一礼するエージェント。

そして、我慢の限界を迎えたのかそこに襲いかかる変態NTW-20の姿だった。台無しだよ。

「さあ、帰りましょう。私達の不在ふるさと防衛線へ」

——S09地区を後にする。

相変わらず殺意しか感じないガツチガチの装備に、検問のお兄さんは悟つたような顔をしていた。

帰り道も、それはそれは平和だった。特に大過なく、私達は旧司令部へと帰還する……はずだったのだが。

「撃て撃て撃てえええええっ!!」

「ピヤツハー久々のマシンガンだー！ きもつちいいいいいいッ!!」

「まさか帰り道で元の世界線に戻るとは予想外だったわ……ッ!!」

「ウイツヒツヒイ！ 撃ちますよ？ 撃ちました！ 今こそワタシの出番です！ さあするのです自らを解放、目に映る鉄血共を薙ぎ払え

!!

——どうぞやら、帰投するには少しばかり時間を食いそうだ。

Strange Marriage (前)

「リーダー。D08地区まで行く気はありませんか？」

「良いじゃない。行きましょう」

「いや色々待って??？」

以上の極めて慎重なやりとりを経て、私達——あぶれ者の寄せ集めこと502小隊は現在、D08地区の検問に並んでいた

——これが、これまでのあらずじ。よく分からない？ 知らないわ、そんなことは私の管轄外ね。

MGLに曰く、D08地区にてある指揮官が結婚式をやるらしい。それだけならばよくある話なのだが、なんと新郎が1に対して新婦が9とかいう、神話くらいでしか見かけないような超下級の結婚式ならぬ『重婚式』なのだとか。その時点で私はその指揮官が刺されないか非常に不安になったけれど、MGLによると夫婦仲は至って良好らしい。毎度思うが、彼女はそういう情報をどこから集めているのだろうか？ 一度質問したことがあるのだが、その時MGLは暗い笑みと共に私を見据え、

「ねえ、リーダー。みんなで幸せになりましょう？」

とだけ言ってきたのだ。それ以来、知るのが怖くて聞くに聞けない状況が続いている。聴いてしまったが最後、私は越えてはいけないう線を越えてしまう——そんな気がしてならない。

それきり私は何も聞かず、忘れたことにして過ごしていたのだが……忘れたところにやってくる、とはよく言ったものだ。

とはいえ、結婚するというのはならば、同じ戦術人形な間柄——逆に言えばそれ以外の接点は全くない——としては冷やかしに行くのもやぶさかではない。

そんな訳で、私は即断したわけだ。

なのだが……。

「恐ろしく混んでるわね……。ここの司令部はそんなに人気なの？」

そう。

今現在、ここはとにかく大勢の戦術人形や指揮官で検問前があふれ

かえっているのだ。やたらと胸部装甲の強化された戦術人形と男性が必死で片付けてはいるが、人数が減った先から増えていつているので全然減る気配がない。

……そう言えば、事前に出かけると通信で伝えておいたヘリアンは、一周回って悟ったような表情をしていた。顔は土気色で、胃でも痛めたのか口の端から血が垂れていたが。

とりあえず祝儀代わりにMGL謹製の原寸大スケール銅像を持っていくと伝えたら、溢れんばかりの罵詈雑言と共に却下ということを伝えられた。限界を迎えたのか、そこで吐血して昏倒したが。

「まあ人気なんだろうな。じゃなきゃこんな人も物資も集まんねえだろ」

「じゃあ物資だけ集まってるウチの司令部はどういう判定になるのさ」

「決まってるんだろ、お前と一緒にガワだけのゴミだ」

「よしそこに直れコノヤロウ、その過熱しまくったマシンガンの銃身みたいな性根を修正してやるよお!!」

「だあれがクソの役にも立たねえガラクタだオラア!? いいぜやってやろうじゃねえかよこの野郎!!」

P90の挑発に、MAGがたまらずキレる。というか罵倒だったのか、今のワード。

「というか落ち着け、目立ってる、すごい目立ってるから。すごい注目されてるぞお前ら。いい加減止まれ。」

「二人とも落ち着きなさい」

「大体前々から気に入らなかつたんだよ!! 人の図体みて判断しやがって! 何が『マシンガンもどきのポンコツ』だブチ転がすぞ!」

「だから二人とも……」

「テメエも人のこと言えねえだろうがよ!! お前あたしに言ったこと覚えてんのか! 『市街戦だとマシンガンとか邪魔なだけじゃない?」

「ぶっちゃけいらねえよね」——ふざっけんなマジでこの場でスクラップにすんぞ!? ああ!?!」

「落ち着きなさいって」

「だから——」

「なにを——」

「……、」

私はP90の背後に回り、後ろからしなだれかかるように抱き着く。

「あ？ 何だいリーダー、今忙しいから後に——」

「——そおいつ!!」

気合一発、全力でバックドロップをかました。

轟音と共に砂煙が舞い上がり、見た目華奢な首が折れることなく地面にめり込む。

ビイイーン！ とアニメか何かのように直立不動のポーズになって動かなくなるP90。

その様子を見てドン引きするMAGに、私は笑顔でこう言った。

「この首を支点に逆立ちしてる馬鹿が見えるわね？ ——10秒後の貴様の姿だ」

「戦略的撤退ツ!!」

「逃がすか」

即座に逃走を選んだMAGの後頭部を掴み、そのまま流れるようにバックドロップ。再び轟音と共に土煙が舞い、戦術人形の首が地面にめり込む。体格差の都合上で全力でやらざるを得なかったが、力加減を誤ってスカートが思いつきりめくりあがってしまった。「パンツ！パンツです！」「黒の紐、だと……!?!」とか聞こえてきたような気がするが、まあ無視無視。

すかさずその体に緑色の布を巻き付けると、逆さに直立していた二つの体はあっという間に季節感をガン無視したクリスマスツリーへと変身を遂げた。

パンパンと手をはたき、私は若干こちらから距離を置き始めている周りの方々に頭を下げる。

「……えー、ウチの馬鹿どもが大変失礼をいたしました。現時点をもってコイツらはインテリアに転職いたしましたので、どうかお目こぼしを」

「お、おう……」

とまあそんなことがありつつも、私たちは無事にD08地区に入ることが出来たのだった。あれだけのことをやらかしたのに何故弾かれなかったのかが不思議でならない。

「うわあなんだありや！ デツケエ〜!!」

数分後。

頭に包帯（あとベルトリンク）を大雑把にまいた状態で、MAGが復帰した。並のハイエンドモデル程度ならあの一撃であっさり頭を割れるはずなのに、コレは何処まで頑丈なんだ……？

そんな彼女が見ているのは、ちよつとした体育館くらいのサイズはありそうな結婚式場。屋根の十字架は一体なにを間違えたのか、十字架というよりもほとんどロングソードやミゼリコルデと言って差し支えないものとなっている。大丈夫かこの結婚式。

「いいかりーダー——制圧戦においてマシンガンは最強。よく覚えておくんだな」

「今の状況と全く繋がらないじゃないのよ」

「タネが分かんねえ内はまだまだってこった」

「撃っていいわよね？」

「その『うち』じゃねえよ。結婚式場で何やらかす気だオイ」

「別に」

「別にじゃ済まねえんだよなあ？」

私達がそんな風に談笑……談笑？ とにかく会話しているその脇で、MGLは見慣れぬ男性と会話をしていた。少しばかり耳を傾けてみると……。

「いやあ助かりました。最近はこのちもやる事があんまりありませんでしたからね。お陰でリフレッシュ出来そうです」

「ははは、そりやずつと世話になってきたからな。あの時お前さんが教えてくれなきや、俺はビル街でダイ・ハードして今頃墓の下で寝ぼけてただろうさ。感謝してもしきれねえぜ」

「あはは、言い過ぎですよ。あ、そうそう、あの人はどうです？ え

えと、名前がー……そう、『AL』さん！ 今でも元気してます？」

「ああ、アイツもしつかり死にぞこなってやがる。こないだも俺らに黙って自分好みの戦術人形を経費でオトそうとしてやがったから、総出でボコして止めたがな」

「相変わらずですねー……」

「どうも」

私は目を回したままのP90を引きずりながら、二人に声をかける。というかこの男、だいぶガタイがいいな。

MGLは私を見て、彼に私の事を簡潔に伝えた。

「ああ、この人が今の私の上司です。『サベージ 110BA』って言います。それでリーダー、この人が『UJ』——私の数少ない、損得勘定抜きで付き合える友人の一人です」

「どうも、紹介頂いた『UJ』だ。もろもろの事情で本名は言えないから、コードネームで勘弁してくれ」

「110BAよ。今はこの選りすぐりの外れ物を指揮する仕事についているわ」

「ま、よろしく頼む」

「ええ」

手を伸ばし、握手する。

とそこで、式場の方にも動きがあったようだ——人が続々と入っていつている。

私は引きずっているP90の頭を叩いて起こしながら、

「ああ、そろそろ始まるみたいね」

「そうらしいな。では、俺はこの辺りで失礼させてもらおう——まだ、やる事が残ってる」

「そうね。じゃあ、縁が『合ったら』——また会いましょう」

彼は手を振りながら去っていった。

それを見届けてから、私達は現地の戦術人形に案内されて式場の中に入っていく。

さあ——激動の重婚式が始まる。

Strange Marriage (中)

式場に入ると、ここの所属と思しき戦術人形によって席へと案内された。

席に座ると、彼女は名簿を取り出して、

「一応仕事なので確認しておきますね。4名でお越しの『502小隊』
さまで宜しかったですか？」

「正確に言うならば一人と一人と一人と一人だけだね」

「HHHHHブラックジョークウ！ 祝い事場でやめろや！」

「え、ええ……」

私の発言に、すかさずMAGが突っ込む。名前も知らない戦術人形はドン引きしていた。

MGLは未だに目を回しているP90の介護をしながら、彼女に説明する。

「ああ、あんまり気にしないでいただけると助かります。ちよつと私達は成り立ちが特殊ですので……ほらPさん起きてください」

「回る回るよ世界は回る……ぐるぐる……」

「それどつちかという私のセリフです」

彼女は何かを察したのか、何も言わずに名簿にチェックを入れて去っていった。

とそこで、MAGがふと問いかける。

「そう言えばよう、結婚つつたつて新婦は誰だ？ 新郎は現地の指揮官にしても、新婦9人つて相当だろ。大富豪か。そんだけの量のスケ何処でオトしてきた」

「言葉に気をつけなさい、ここは公共の場よ。——その質問に答えるけれど、新婦は全員が戦術人形らしいわ」

「人形趣味かよ」
アガルマトワイリア

呆れたようにMAGが言う。しかし、私的には仕方が無いことなのだろうと感じていた。

戦術人形は、多少の例外はあれどその大多数が私達のような女性形だ。しかも、その全員が見目麗しい美少女とききた。

不気味の谷に陥らないとも限らないが、基本的にその姿は人間とほぼ見分けがつかない——であれば、世の男が惚れるのも当然なのでは？

……代償として、ヘリアンのような人間なのにモテない敗北者も、最近増えているらしいが。

それにしても……。

「しっかしまあすげえメンツだな。よくもまあこれだけの人数集めたモンだぜ」

そう言つてMAGが視線を向けた先では、老若男女人形人間問わず、文字通り十人十色な面々が談笑したり、テーブルの上の料理を平らげたりしていた。

——たとえば、以前かち合つた時とは微妙……いやだいなぶ雰囲気異なる404小隊。その中の416と思しき人形はこちらの視線に気づくと、不敵な笑みを浮かべて右手で鉄砲のジエスチャーを作り、ばあん、とこちらを撃つてきた。そして、口パクでこちらに言う——

『Get Dunked On♪』

「ノリノリね」

「今のアイツならマシンガンの良さを分かつてくれそうだな」

「分かつたから座つてろ。また埋めるぞ」

「結婚式場でそれはミスマッチすぎるぜ」

「大丈夫よ、今度は別の木にするわ」

「いやそうじゃなくて」

——たとえば、G&P.Kの制服に身を包んだ白髪の少女と、それを囲む様々な人形。さらに、彼女とその隣に座るハンドガンの戦術人形——P.P.Kの左手薬指では、お揃いの指輪が輝いていた。誰もが幸せそうだ。

……しかし、あの少女の人間味を感じさせない無機質な目は一体……？

「(……MGL、『アレ』は?)」

「(……義眼。それも、見た目から推測するに、とびっきりの厄ネタですよ……リーダーは知らないほうが賢明です)」

「(……本当に何でも知ってるのね)」

「(……何でもじやありません。生き延びるために必要なことだけです)」

——たとえば、席には座らずに、ゴテゴテにカスタムしたアサルトライフルを持って式場全体を鋭い目で見渡す、雇われ者と思しき隻眼の男。……G & a m p Kの制服を着ている辺り、まさか彼も指揮官なのだろうか……？ あとスリングで背中に保持してる対戦車ミサイルに関しては絶対ここでは使わないと思う。

「ガツチガチだな」

「鉄血の奇襲を警戒してるのでしよう。あの手の輩は信用は出来ないけど信頼は出来るわ」

「でも流石にあのミサイルはねーわ」

「コマンドーにでも憧れているのかしら」

「どこで使い方を覚えた？」

「まあ実地検証でしょうね」

「世紀末かよ」

「世紀末よ」

「そーいやそーうだった」

「H A H A H A H A」

「楽しそうですねお二方……」

——たとえば、見るからにわたし前線指揮官ですと言いたげな雰囲気、男の男と、楽しそうに彼と談笑する戦術人形——トンプソン。男の方が視線を外すたびに、トンプソンは顔を赤らめたり体をくねらしたり、とにかく乙女な反応を見せていた。見ていて微笑ましい。

「指輪がないってことは結婚してないのよね」

「あの調子じや時間の問題だろうな」

「みんな指揮官に恵まれて羨ましいなあ」

「急に空気を重くするのはやめなさいP90」

——たとえば、左目に眼帯を付けた銀髪ノツポの女性と、それに付き従う戦術人形。アレは……アサルトライフルの『G r G 3』だろうか？ ぶこ丁寧に彼女たちも指輪装備済みだ。なんだ、生身の人間が

一人もいない我が502様態に対しての嫌がらせなのか？

……いや、考え過ぎか。

「なあなあどうして女の指揮官ばっか結婚してるんだ」

「それ以上いけない」

「キマシ？」

「ないから」

「百合っていいよね」

「貴方は何を言い出してるのP90!？」

——たとえば、先ほどの傭兵とはまた別に、フル装備で周囲を警戒する男。両手に武器を持ち、背中に武器を大量に背負いながら仁王立ちするその様は、極東の有名なソルジャー——ベンケイ・ムサンボウを彷彿とさせる。

しかも、服の隙間から覗くその体の大半が機械に置き換えられていた。……一体彼の過去に何があったのだろうか。

「ありや相当デキる男だな。さっきの傭兵野郎たあ別方面のプロだぜ」

「どちらかといえば裏方面に近そうね」

「あーやだやだ、人間サマはえげつねえ事ばっか考えやがる。吐き気がするぜ」

「戦術人形が言っちゃいけないでしょうそれは……」

「知らねえよ。倫理コードなんざ捨てられた段階でエラー吐いて喪失ロストしたわ」

「……そう……」

——たとえば、呆れた様子で辺りを見回すHK416……HK416!?

……どういうことかと思ったら、MGL曰く彼女は姉妹品の『HK417』らしい。で、これから結婚式に出るのも『HK417』らしい。まるで意味が分からない。どうやらそこに座ってる417はアサルトライフルで、新婦の417はライフルらしいが……謎だ。

「……416よね」

「……416だよな」

「……416だよね」

「……見た目じゃ全く区別つきませんね」

「あの時かち合ったのは目が死んでたけれど、こっちの彼女は光がともってるわ」

「判断基準そこですか……」

——たとえば、こう、その……『普通』としか言いようのない容姿の冴えない中年。周りから『ガンズミス』と呼ばれているようだが、腕利きの整備士なのだろうか。だったら是非とも整備を頼みたいのだが。

「整備なー。あたしのマシンガンも整備してほしいわ」

「じゃあボクも自分の銃整備してほしいかな。最近どうも違和感があるんだ」

「銃どうこう以前にこいつらの電腦を整備してほしい気分ね、正直」

「そんな殺生な!!」

「あ、あはは……」

——たとえば、横にどでかい弾薬箱とガトリング砲をでーんと置いた戦術人形。なるほど、あれが噂に聞く『M61A2バルカン』か——私がそう思ったとき、ガタツと音を立ててMAGが立ち上がった。

「COOL! COOL!! COOOOOOOOOOOOL!!!
パーフェクトだウォルター!! なんだありや最ツ高じゃねえか!
すげえすげえ!」

「やかましい黙れ火力キチ」

「んだとコラ煙幕チビ」

「は?」

「あ?」

「マシンガンの事しか頭がないから見捨てられるんだよ」

「思考停止で尽くしてばっかだからあつさり見放されるんだぜ」

「ハア?」

「あ?」

「……」

「エイシャオラアツ!!!」

そして、総括してMAGはこう言った。

「文字通り人がゴミみてえだな」

「ひどい感想ね。あと頬を腫らしながら言われても説得力に欠けるわ」

「しよーがねーだろそのチビが突っかかってきたんだから」

「それに乗った時点で同罪だから貴方も戻ったときに覚悟しておきなさい。いいわね？」

「……へい……」

「MAGさん顔が！ 顔色が緑色につ!？」

とそこで、バツン！ と式場が突然暗くなった。にわかになぎわつく場内。

しかしその直後、前方のスペースにスポットライトが当てられ、マイクを持ったさっきの胸の凄い戦術人形——『イサカM37』が現れる。

『えー、大変長らくお待たせいたしました。これより、第一回……いや第一回もなにもないわね……ゲフンゲフン、第一回D08地区結婚式を執り行います!』

その言葉と共に、外からの光をさえぎっていたカーテンが同時に排除され、差し込む光と共に新郎が姿を現す。なるほど、彼がここの指揮官か。

そして、式場後方にあった両開きの扉が開かれ——そこから8人の花嫁が姿を現した。

「……一人足りねえぞ?」

MAGが不思議そうにつぶやく。その直後、扉が閉じ——再び開く。

——そこには、9人目の花嫁が立っていた。

Strange Marriage (後)

カツ、カツ、カツ……とヒールが床を打つ音が、静まり返った式場にゆっくりと染み渡る。

「ワオ……」

MAGが感嘆する。ほとんどマシンガンの事しか興味を持たないあのMAGが、だ。

そして、9人の花嫁が、1人の花婿と向き合った。

その間に立った神父が、聖書を片手に厳かな声で彼らにこう問いかける。

『汝——^{????}はこの女らを——FAL、G36C、Mk23、HK416、スプリングフィールド、WA2000、UZI、デストロイヤー・ヴィオラ、HK417を妻とし』

『良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず——』

『——死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを』

『神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか?』

その問いかけに、タキシードを身に纏った指揮官——いや。

一人の『夫』が、堂々と胸を張って応える。

「——誓います」

その言葉に、神父はにこりと微笑みながらうなづく。

そして、新婦の方へと向き直り……神父が新婦に……いやなんでもない。とにかく、神父は9人の花嫁の方を見て、今度はこう問いかけた。

『汝ら——FAL、G36C、Mk23、HK416、スプリングフィールド、WA2000、UZI、デストロイヤー・ヴィオラ、HK417は、この男、^{????}を夫とし』

『良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず——』

『——死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うこと

を』

『神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか?』

彼女たちもまた、異口同音にこう言った。

「『——誓います』」

それを聞いた神父は再び満足げにうなずき、こちらでその様子を見守っていた私たちの方へも視線を向けながら——なぜかMGLを見た時微妙に体が震えていた——、こう告げる。

『皆さん、お二人の上に神の祝福を願い、結婚の絆によって結ばれた彼らを神が慈しみ深く守り、助けてくださるよう祈りましょう』

『宇宙万物の造り主である父よ——あなたはご自分にかたどって人を造り、夫婦の愛を祝福してくださいました』

『今日結婚の誓いをかわした彼らの上に、満ちあふれる祝福を注いでください』

『彼らが愛に生き、健全な家庭を造りますように』

『喜びにつけ悲しみにつけ信頼と感謝を忘れず、あなたに支えられて仕事に励み、困難にあつては慰めを見いだすことができますように』

『また多くの友に恵まれ、結婚がもたらす恵みによって成長し、実り豊かな生活を送ることができますように』

『我らの主 イエス・キリストによって』

——AMEN.

神父はそう謳い、厳かなしぐさで十字を切った。

その直後に、花嫁が手に持ったブーケを一斉に放り投げる。その数、合計9個。ブーケトス……確か、アレをキャッチすると結婚できるのだったか。

そして、そのうちの 하나가宙を舞い、私たちの座る席へ一直線に落

下し——

「ああ? なんだ、何が起こつて——むがつ!?!」

——MAGが、顔面で受け止めた。

「えっ」

「えっ」

「えっ」

MAGを除いた全員が、予想外の展開に硬直する。

そのMAGは、無駄な反射神経を発揮して、顔に直撃した瞬間にブーケを片手でがちりホールド。見事にブーケをキャッチしてしまった。

Q. ……つまりどういうことなの？

A. アーマードコアの新作が出る（錯乱）

……他のテーブルがブーケの行方に一喜一憂している中、このテーブルだけは暗い雰囲気に含まれていた。

当の本人を除いた全員が、某特務機関総司令の姿勢で沈黙している。

あまりに重い雰囲気^{CV:立木文彦}に他のテーブルが努めてこちらを気にしないようにしている中で、P90がゆつくりと口を開いた。

「……リーダー」

「……なによ」

「……現実って、無情なんだね」

「……そうね」

心なしか、お互いの声^{CV:立木文彦}がとても渋い声になっていた、ような気がする。

ちなみにMAGはというと、

「………そういや、ブーケってキャッチした奴が結婚できるってあれだよな。あたしが結婚……結婚……?」

と、まじめな表情で首を傾げていた。

アレにしては珍しく自分の将来を考えて――

「まあこまけえことはいいんだよ!!（AA略）あたしは愛しのマシンガンと結婚するぜFOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

――るわけがなかった。畜生。



新郎新婦がお色直しの為に一度退場し、その間を現地の戦術人形――『Gr G36』が卓越したマイクパフォーマンスで繋ぐ。ってこらまでまで、マイクでジャグリングするんじゃない。パフォーマンススってそう言う意味じゃない。

そして、アナウンスと共に着替えを済ませて現れた新郎新婦がやってきて、戦術人形数人がかりで運び込まれた巨大なケーキ——どれくらい巨大かというと、成人男性の身長のだいたい1.5倍程度——に、新郎新婦がほとんど斬馬刀と言っても差し支えないサイズのナイフを叩き込む。

アレが初めての共同作業というものか。

「あれが共同作業か」

「MAG、不満なの？」

「あたし的には大人数でマシンガンを撃ちたい」

「OKその口を閉じて黙りなさい」

切り分けられたケーキが各テーブルに配られ、パーティーが始まった。

呑めや歌えやどんちゃん騒ぎ。これ本当に結婚式か？ と疑うレベルの乱痴気騒ぎだ。

私達もケーキを食べ、テーブルの上のワインを飲み、各々好きなように楽しんでいる。

MGLは特に周りの気にすることもなく、早くも4本目のワインボトルに手を付けていた。逆に、ケーキに関してはあまり口を付けていない。

P90は久しく食べていなかった甘味にがつつき、恐ろしい勢いで料理を制覇していつている。基本的に戦ってばかりだから分らなかったが、意外に大食いだった。

私は、酒も甘味も適度に嗜みつつ、周りの方へと目を向けていた。うん、どのテーブルも楽しそ……なんかすごい勢いで巨大ケーキを平らげてる場所があるぞ。しかもあそこってさっきの義眼少女のテーブルか!?

「信じられないわね……」

——そして。

502小隊きつての問題児、MAGはというと。

「——であってつまりマシンガンとは大地であり天空であり大海原なんだこれはマシンガン原理主義という遥か太古から存在する教義で

ありあたしらはその流れの最先端に立っている他の銃種なんざ目じゃねえぜマシンガンとは何から何までがトップに位置している最強の銃と言っても全く過言じゃあないなんだよく分からねえなら解説してやるよそうならさっさとそう言ってくれりやよかつたのにそのあたりはライフルの数発撃つてすぐ満足しちゃもう浮気性なところが出てるんだなおつと話が逸れた本題に戻るかそれでマシンガンの万能性だが火力と射速については分かるなコレは当然他の銃の追隨を許さねえ圧倒的な弾幕力だ弾薬も精々50発が限度な他の銃に比べりや圧倒的に多くてこれもまたマシンガンの強さに拍車をかけてるって訳だな命中命中そうか分からねえのか当たるまで撃つんだから命中率100%に決まってんだろ簡単な計算だぜ防御もそうだ攻撃は最大の防御つまりずっと撃つてりやそれはずっと守ってることになるホントマシンガンは最ツ高だぜまあそんなマシンガンの唯一の弱点がずっと撃つてると銃身がイカレちまうって点だがこれに關してもマシンガンだけで隊を組んで順々に撃ちまくるようになりや解決だぜこれでマシンガンイコール最強アンド最高の銃という方程式が証明できたなどころでお前さんオープンボルト教団に興味はねえか大丈夫だ我が至高のマシガン様はマシンガンであろうとそうでなからうとも平等に寵愛を授けてくださる至高の御方だぜHK417だったか416だったかには分隊支援火器モデルつーのがあるらしいなそれはつまりお前も実質マシンガンの一員ってことだどうよお前で28人目だ別に死ぬ時間が来た訳じゃない怯える必要なんざ欠片もねえお前は新世界の先駆けになれるんだ鉄血工造の中でも賛同してくれてる奴はいるんだぜあたしらは固い絆と地と流血となによりベルトリンクで繋がっているコイツがどうということなのかと言えばここで話はちつとばかし戻るが――」

「えっ、あつ、うん……私ライフルだからよく分からないかなーはははは……」

早々にスイッチが入り、挨拶目的できたのだろうHK417B――BはブライダルのB――に熱く語っていた。さらつと洗脳しにかかるのはやめなさい。

って酒臭っ!? まさか酔ってスイッチ入ったのか!? よく見たらMAGの右手には日本酒のボトルが……ってどこから持ってきたそれ!!

私はMAGをぶん殴って止めつつ、HK417の服にこそっと小さな袋を仕込んでおいた。

彼女が立ち去った後に、MGLが問いかけてくる。

「……一体なに渡したんですか?」

「今は便宜的に指揮官の世話になってるとはいえ、私たちも一応本業は遊撃部隊だから。何か依頼とかがあったら助けになれるように、ちよつと、ね」

「はあ。そうですか」

そうして楽しむことしばし。

すつかり陽も傾いたあたりで、G36が再びマイクを取り、司会進行を再開する。

同時に、バルカンがガタツと椅子を倒しながら、ガトリングガンを構えて式場の外へと飛び出していく。

「よっしやあ! 待”つてたぜエ! この”瞬間”をよオ!!」

この言葉を聞いた時点で、私はもう彼女の性格を察していた。

——MAGマシンガンの同族かあ……。MAGがまだ起きてたらとんでもない事になってたなコレ。

そして、参加者全員で式場の外へと出る。

「やっぱ最高だぜ!! 弾は違えどこの迫力は他の銃とスケールが違うぜ! ガトリングサイコー!!!」

そんなことを叫びながら、バルカンは空へと向けてガトリングを乱射する。

分発6600発の圧倒的レートで打ち上げられた弾は光の筋を残しながら空を裂き、途中で姿を消した——曳光弾?

いや違う、これは——!

直後、空中で立ち消えしたかに思われた曳光弾——否、『花火』が弾け、夕焼け空に大輪の花を咲かせた。

怒涛の勢いで打ち上げられる『花火』は途切れる事無く続き、赤い

空には色とりどりの大きな花が咲き乱れる。

それを見ながら感嘆する私の横で、MGLが片手に持っていたグレネードランチャーを構えた。

「ちよっ!？」

「一発くらい大丈夫ですつて。ではっ、サブライズ☆」

ぽんっ、という軽い音と共に、グレネードが1発放たれる。

それは空中で勢いをなくし、そのまま落下する……かに見えたが。

途中で弾頭後部が小爆発し、再び空へと向けて加速する。

「タンDEM弾頭!？」

「今回の為だけに作っておいた特性弾頭です！ さあ来ますよっつ！」

——起爆。

打ち上げられては消えていく大輪の華に紛れて、D08基地指揮官の指揮官の顔を象った花火が大きく映し出された。

ざわつく場内。

果たしてどんな技術を使ったのか、似顔絵花火の下には『Celebration!!』という文字が書かれていた。

しかし、MGLが撃ったものだとはバレてはいない……らしい。いや、何人かは絶対知ってて黙ってるのだろうが、それにしてもガバガバすぎないか？

「くっふふふ、上手くいったみたいデスね？」

「貴方ねえ……。一歩間違えれば大問題よ？ まあ、大丈夫そうならいいけれど……」

咲き誇る大量の花火を見ながら、私はふと思う。

——願わくば。彼らの歩む道筋に、祝福のあらんことを。

What the Wrong.....!! (前)

——502小隊はグリフィン&クルーガー本社へと帰還した。

その存在を危ぶむ上層部からの干渉を見事に跳ね除け、つかの間の安泰を手にする事となる。

そして、彼女たちは今——

「あたしィ!! 110BAィ!! もうクラッシュしたくないのおおお!!!」(※110BA)

「いざいざご照覧あれッ! 戦術剣豪七番勝負!!」(※P90)

「……なんで私がマシンガンなのよ、私が一体何をしたって言うの……ブツブツ」(※MAG)

「……あれっ、私だけ特に何も変化がない……?」(※MGL—140)

——とんでもないことになっていた。

502小隊は諸事情によりほぼ全員が中大破した状態で帰還した訳だが……どういふ訳か、『修復及びメンテナンスを行った戦術人形の性格が反転する』という珍事が起こってしまったのだ。

結果。

- ・ 110BAはフレンドリー&フランクな性格になり、
- ・ P90はアンブツシュよりも一騎打ちを好むようになり、
- ・ MAGはマシンガンをも嫌いするようになり、
- ・ MGLは特に何も変化しなかった。

その様子を見ていたXTRが、最早呆然としながら思わずと言った調子で零す。

「……………、どうしてこうなった……………?」

「そんなの私が聞きたいですよ!? 何したんですか一体!」

『私にも分からん』

『本当に申し訳ない』

その襟元に掴みかかり、MGLが半泣きで抗議する。

ちなみにヘリアンはこの惨状を目の当たりにしてついに胃が限界を迎え、吐血のち卒倒——今は病院のベッドでうんうん言いながらうなされている。そこまでショッキングな光景だったのか。

「ふはははっ、こうなるとは流石の私も想定外であらコフツ」

「ファツ!」

『ウツソだろお前ここでオーバーフローしやがった!!』

『メデイック、メデイイイイイイイイック!!』

吐血してぶっ倒れるXTR。突然の惨事にMGLが瞠目する。驚きのあまり、顔の右半分を覆っていた仮面がポロリと外れてしまった。彼女の融解焼損したグロテスクな顔が露わになる。

さらに、折り悪くもその瞬間を絶賛暴走中の3人が目の当たりにしてしまった。

「あっ」

『……………』

そして、長い沈黙の末。

『……………イ、エアアアア!』

ダイスロール失敗。上空に飛んでいきそうな悲鳴をあげながら、三人揃って泡を吹いて気絶してしまった。

その様子を見たMGLは、落とした仮面を拾い上げて再び身に着け

る。

「……いや、いや……」

目の前には泡を吹いて目を回す仲間。足元には血の海（※吐血）に沈む恩人。

混乱が極限に達したMGLは、万感の思いと共にこう洩らすほか無かった。

「ええ〜？　なんだこれ〜〜〜?!」

■ ■ ■

その後、その惨事を目の当たりにしていた現地職員の手を借りて、どうにかこうにか馬鹿どもを16Labまで運び込むことに成功。いくら装備が復活して出力が戦術人形のそれに戻ったとはいえ、同じ戦術人形4人を1人だけで運ぶのはさすがに無理があった。

今はMGLを除いた4人全員が簡易ベッドに寝かされている。

死屍累々となった病室（仮）の隣の部屋で、MGLは猫耳白衣の研究者——ペルシカリアと向き合っていた。

「……それで、何が原因かわかりました？」

「うーん……なんとも言い難いね。こんなことが起こるのは初めてだよ」

「ですか……」

スペックシート片手に嘆息するペルシカ。それに続いてMGLもため息をつく。

そして、全く同時に同じ言葉を吐き出した。

「……どうしてこうなった……」

ひとまず3人が目覚めてから事情聴取をするという事でこのばはどういした。1人は3人に勝てないが、2人でなおかつ片方がその道の専門家なら多少なりとも勝ちの目は出てくる。

というわけで、目を覚ました頃合を見計らって病室（仮）に突入。扉を開けるや否や、半泣きのXTRがペルシカにすがりついた。

「うわっ!？」

「ペルシカ〜！　助けてくれペルシカあ〜！　もう私の手には負えぬのじゃ〜！」

「さては君も反転してるな!? メンテナンスに叩き込むよ!?」
『いや、コイツは特に変わってないぞ』

『極度の混乱でキャラクターが行方不明になってるだけね』
『たまにあるんだ、こういうの』

「あるんだ……(困惑)」

混乱するMGL。なんだこれは、どうすればいいのだ。

その時、110BA達が彼女の存在に気付いたらしい。各々が好きなように反応を返した。

「あつ、MGL! 大丈夫? 怪我治った? 何処も痛くない?」(※110BA)

「え、あ、はい……」

「^{われ}吾らがこうして無事なのだ、^{なれ}汝も無事なのだろう? このP90に隠し立てが通用すると思うてか!」(※P90)

「いや隠した覚えはないって言うか何キャラですかそれ」

「グレランいいわね……この鉄屑と交換して欲しいわ……」(※MA G)

「自分のアイデンティティを放り捨てているという自覚はないんですか!!?」

短い間に飛び出してきた問題発言の数々に、電腦が激しい頭痛を訴える。

思わず眉間にシワを寄せるMGLだったが、

「うーん……原因が分からないことには手が出せないなあ。もうちよつと情報集めてもらつていいかな」

「私に死ねと!」

「いやあそんなまさか……ソナコトハナイヨ??」

「じゃあなんで後半片言なんですか!」

「うええくべるしかあゝ」

「ハイハイ分かったから白衣に縋り付くんじやないの……」

「あつ、ちよつと!」

そう言つて、頼みの綱のペルシカはXTR共々離脱してしまった。残されたのは、なぜだか非常に明るい性格になっている110B

A、ジャパニーズサムライみたいな性格になっているP90、ダウナーでマシンガンを毛嫌いするようになったMAG、そして特に何も変化が見られなかったMGLの4人。

「いや、いや……いやいやいや……私にどうしろって言うんですか……?」

「笑えばいいと思うよ!」(※110BA)

「首置いてけ」(※P90)

「はあ……不幸だわ……」(※MAG)

てんでばらばら、見当違いの返答を返すバカ三名。それを聞いて、MGLはますます頭が痛くなった。

と、とにかく、一刻も早く彼女たちを元に戻す方法を見つけないければ……!?

What the Wrong.....!! (後)

「……さて、ではお集まりの皆様」

——「閣議」を始めたいと思います。

502小隊を全員席に着かせ、そうMGLが冷や汗をダラツダラ流しながら言う。しかし残念なことに、これから始まるのは閣議でもなく会議でもなく怪議である。

「えー、では今回の議題ですが……」

「ひゃっはー！ ジョンのサウンドは最高だぜー！」

「誰ですかジョン!？」

「義によって助太刀いたす」

「誰への義に対して何の助太刀をするんですか！」

「なんでっ！ なんでっ、私はっ、マシンガンっ、なのよっ!? 私が一体何をしたというのっ!?!」

「知らねえよ!!」

開始からわずか一分足らずで議場は破綻した。

いつの間にか身に着けていたヘッドホンでロックな音楽を聴いてノリノリの110BA。これまた出どころ不明のジャパニーズKANANAをしゃりんと抜刀し、あらぬ方向へと突きつけるP90。ガリガリと頭を掻きむしり、狂ったように叫ぶMAG。

それに対して律儀にいちいち突っ込んでいたMGLだったが、最期にはキレ気味に叫び返すのみとなっていた。

さらにダメ押しの一撃。

ガチャッ! と病室(仮)のドアが開かれ、金髪ロングでオッドアイの少女が乗り込んできた。

「おっす。おっす! ペルシカー、いるかー……」

彼女はどうかやらペルシカに用があつたらしい。

だが、残念ながらここにいるのはペルシカではなく502小隊。選りすぐりの……キチガイじゃね? 気狂いではあるね ぶっ壊れだよな ワンチャンエリートかも?……一匹狼の寄せ集めである。

少女は目の前の惨状に目を向ける。

「……あー……」

そして、一通り状況を確認したのち、ポリポリと頬を搔きながら、MGLの方を見てこう問うた。

「……アンタ誰だ？」

「えっ、こつちが聞きたいんだけど」

……これが、ヘリアンを苦しめる2大胃痛要因、502小隊とM61A2バルカンのファーストコンタクトである。この出来事は、胃痛と胃痛が悪魔合体してついにヘリアンの胃を粉碎せしめたとして、長きにわたって語り継がれることになる。

——なんてな？ ハハハッ、傑作だぜ』

■ ■ ■

カクカクシカジカシカクイムーブツ

「ええ……マジかよ。ヘリアンの言ってたこと本当だったのか」

「あの人無事ですか？ 吐血して運ばれて行きましたけど」

「無事だよ。フルーツ盛りあと六文銭置いてきた」

「なにサラツと葬送しようとしてるんですかちよつと。そしてウラヤマシイ、そういうのがあるんでしたらこつちにも送ってほしかったです」

「無茶言うな、一つしか持ってきてなかったつーの」

どことなく不満そうに言うMGLに、苦笑いしながらバルカンが言う。ちなみにヘリアンの病室には、恋愛沙汰に関連する花言葉の果物ばかりが詰め込まれたフルーツ盛りが届けられていたという。例えば『素^な木^なの^な愛^な』『小さな恋人』とか。それを見たヘリアンは、野郎ぶつ殺してやると静かに決意を固めたとか何とか。

そんな敗北者の怒りはさて置いて、バルカンは「そうかあ……うーん……」と考え込む様子を見せた後、

「……まあ、取り敢えず冷えた水でもぶっかけとけば治るんじゃないやね？ 性格反転してるって事はなんか強い衝撃を与えればいいと思うぞ」
「荒療治にも程がある!？」 そんな荒業で直る訳がないでしょ!! それとなんかいやな予感しかしな——おつと」

ポリリ、と再び仮面が外れて落ちる。幸い今回は他の仲間は見な

かったようだが、目の前に立っていたバルカンだけはぼつちりと仮面の下の素顔を見てしまった。

バルカンは顔を引きつらせて、

「うげっ……うわあ、グロテスクにも限度があんだろ……マードーのアレで慣れといてよかった」

「すいませんねSAN値直葬モノのスプラッタで。ペルシカが『直したいなら義体を乗り換えたほうが手っ取り早いよ』っていうレベルの損傷なんですよ」

「むしろ良くそれで平然と動けてんなお前な？」

「まあ、運よく顔の右側が吹っ飛ぶだけで済みましたけどね。一步間違ったら義体が木っ端微塵でした」

「運良すぎだろ」

それはさておき
閑話休題。

バルカンは入ってきた扉を再び開けると、

「まあちよつと待ってる！ 今いい物持ってくる！」

「絶対ろくな事しませんよね!? 分かりますよ貴方も同類だつて！

何もしなくていいですから!! ちよつ、待って！ 困ります!! 困ります!!

ます!! お客様!! 困ります!! あーっ!! 困ります!! お客様!!

あーっ!!」

■ ■ ■

10分後。

バルカンは見るからにヤバ気な液体がなみなみと入ったバケツを持って16Labに戻ってきた。

「来たぞ！ なんかクツソ酒臭えけど取り敢えずショック療法でなんとかしようぜ！」

「しなくて！ いい！ ですから！ 頼むからそつとしないでください
お願いします!! 鈴鹿……じゃなかったペルシカが解析頑張ってる
ところですから！」

「まあまあそう言わずに」

「言いますつて!! これ以上なんかやらかしたら本気でヘリアンが死にますよ!?! ちよつ、やめつ、ヤメロオー!!」

中身をぶち撒けようとするバルカン、それを全力で妨害するMGL。どったんばったん大騒ぎ、バケツの中身も溢れんばかりに波立っている。

「離せっ！ 暴れんなよ！ 動くと溢れるだろ！」

「なんでこんな事になってるんですか?! って！ 強烈に酒臭いですけど！ あとどのみちこぼれますよねぶち撒ける気なんですから!!」
「あー、そういや……酒? ……なのか? ——まあ関係ねえ! 正気にさせてやるよ!」

「ちよつと待つて! 話聞いて!!」

「聞かぬ! 媚びぬ!! 省みぬ!!!」

「オーマイフアック!!」

だがその時、MGLの脳裏に電流が走った。

——このまま膠着状態になるのも面倒だし、いつその事先んじて仕掛けて中身を全部こぼさせてしまえばいいのでは!?

……こんな発想が出るあたり、彼女も立派なキチガイである。

そしてさらに悪いことに、MGLは行動に映るのが極端に早いタイプの人形であった。

「——ふんっ!!」

「うおっ!?!」

気合一発、MGLはバルカンに思い切り足払いをかけた。

そして、彼女の目論見通り、バルカンは盛大にすっころび——

「ぎゃっ!!」

「——あら?」

——彼女の持っていたバケツが、中身を含めて全部MAGに直撃した。

「——えっ、ちよつ、なっ——」

ガァン!! (大破)

「アッー!?!?!」

顔面にバケツの直撃を食らい、さらに中身のほぼ全部を浴びてしまったMAG。これにはさしもの彼女もたまったものではなく、悲鳴を上げてぶっ倒れてしまった。

そして、床に伏したままのバルカンは撒き散らされたバケツの中身を指で掬ってぺろりとなめとり、

「……やっべ。これ水じゃなくてスピリタスだわ」

「馬ツツ鹿じゃねえの!? どこに水と間違えてスピリタス持つてくる馬鹿がいるんだよ! いや目の前にいるけどさあ!!!」

……その後、バルカンは解決方法を見つけたペルシカによって連行され、MGLを除いた502小隊のメンバーは対応マニュアルに従って動いたXTRによって元に戻されたという。

なお、この珍事ののち、戦術人形のメンタルを一時的に変化させるカプセル『スナオニナール』『ヒックリカエール』『ツンデレール』などといった何処に需要があるのか分からない品物が開発されることになるのだが……それはまた、別の話。

L u c k , o r P l u c k

「ふーんふっふふくん♪」

ある日の事。

上機嫌に鼻歌を歌いながら、P90が紙に何がしかをしたためていた。

その様子が気になった私は、こっそりと後ろから内容を覗き込んでみる。そこに書いてあったのは……。

「……『遺書』?」

ガツ!! と、私の両手がP90の両肩をホールドしていた。

そして、その体があつくんがあつくん揺さぶりながら割と真面目な焦りと共に問いかける。

「なに!? 何する気なのP90!? 特攻する相手なんていないし居たとしてもさせないわよ!!!」

「ぐえっ!! りっ、リーダー待って揺らさないでそれ以上いけないさつき食べたクソ不味いレーションがうっぷ!!」

慌てて手を放す。

P90は椅子から飛び降ると、青い顔をして走り去っていった。

その様子を呆然と見送っていると、P90が走り去った後の開いた扉からひよこつとMGLが顔を覗かせる。

「一体全体何事デスカ? マツハでマツカでマツシグラに飛び出していったわけデスガ!」

「キャラブレてるわよ、MGL」

「はっはっはあ、何を今更。ワタクシちっともブレてませんの事よ? というかそれより大前提としてこっちが建前上の『素』な訳です

しィ?」

「……冷や汗ダラダラでそんなこと言われてもねえ……」

これまた真っ青な顔をして反論するMGL。どうやら本人としても自覚はしているらしい。

私はため息をつきながら、MGLに諸事態の原因である一枚の紙を差し出した。MGLはそれを受け取ると、タイトルだけ読んで察した

ような表情を浮かべる。

「つぁー、これはまた……」

「心当たりは？ 私はないわ」

「……まあ、ジnkスの一種ですね。それもこういう場所じゃ結構ポピュラーなタイプです」

「全く以て初耳なのだけれど？」

「もつと俗世に興味を持ってください」

バツサリと言い切るMGL。

……この調子だと、MAGの方も怪しいわね。

とその時、荒々しい音と共に乱暴にドアを開けながらそのMAGが部屋に入ってきた。うわさをすればなんとやら、か。

「おーつすP90、いい加減書けたか……あん？」

どうやらP90を探していたようだ。丁度いい、コイツもとっ捕まえて話を聞いてみようではないか。

私はたまたま持っていた10mほどの長さの鎖を懐から取り出し、何時ものように一瞬でMAGを縛り上げる。

「確保」

「なんつ——げえつ、リーダー!？」

「大人しくしなさい、さあ一から十まで全部吐いてもらおうよ」

「なんだ！ あたしまだ悪いことバレてねえぞ?! あたしがなんかやったっていう証拠でもあんのか!」

「軽く自白してますけど!？」

「やった事はやったのね？ じゃあ、少しオハナシしましょうか」

「やつべえ墓穴掘った!？」

そのまま、MAGのを縛り上げた鎖の端を持ち、私は、地下ブロックへと連行していった。

途中で壁にガンガンぶつかったり階段でゴツゴツ落ちたりしていてえいてえと悲鳴を上げていたが、そんなこと知ったこっちゃない。

私はMAGを椅子に縛り付け、その脇に積まれてあった資材の山からとある道具を一個取り出した。

さあ吐け、貴様いったいP90に何を仕込んだ!!

「やっべえリーダーがマジモードだ。いや違うって違うんだよ!!」
「何が違うのよ」

「とりあえずその手に持った拷問器具を離せ! 話はそれからだ!!」
「そんなこと言う悪い子の口は此処かしら?」

「おいっ、そこは口じゃねえバカ! ちよっ、待てっ、やめる腕がす
なっ! もう何しようとしてるかはわかってんだよ! やめっ、ヤメ
ロオー!!」

ちっ。

私は渋々MAGのスカートにかけていた手を放し、道具をその辺に
放り捨てた。

そして、唇が触れ合いそうなほどの至近で目を合わせて問い詰め
る。

「……じゃあ、なんであんな真似をさせたの」

「近い、近いって。……はあ、仕方ねえな。それじゃ全部教えてやる
よ」

「随分と態度が反抗的ね……?」

「いってえ!! 胸を掴むな! ちよっ、どこ弄ってやがる!」

「いいから話さない」

「分かったから手離せや!」

手を放す。

MAGは心なしか赤みを帯びた表情で、荒い息を吐きながらぼつぼ
つと話し始めた。

「はあ……じゃ、話すぜ。ありゃジンクスだよ、ジンクス」

「だからジンクスって何よ」

「知らねえのか? 『戦場で遺書を書くと死なない』っつーアレだ」

ふむ、そんなものがあつたのか。

で、それがどうして私以外に流行ってるんだ?

「あのな、別にはやってるわけじゃねえからな? まあ、その、なんだ。
保険みたいなもんだよ」

「……保険?」

「そ、保険。あたしらは基本的にぶっ壊れたらそこまでだろ?」

まあ、そうだ。

私たち502小隊は電腦のバックアップが存在しない——だから、この体が破壊されたらそこまでなのだ。

……確かに、そういうジnkクスに頼るのも、不思議ではないのかもしれない。

「そういうこった。あ、あたしも当然書いてるぞ。読むか？」

そんな事を言つて、MAGは空いた片手で懐からやたらめつたら分厚い封筒を——つてなんか微妙に縄抜けされてる!？」

そう驚いていると、MAGは呆れたような表情でこう言つてきた。

「いや、なんか今日はやたらと締めつけが甘かつたぞ。リーダーも動揺することつてあるんだな？」

「当然のように私の緊縛の腕を評価しないで欲しいのだけけど?」

「文句はそれを評価できちまうレベルに達するまで縛り上げた自分に言え」

言つて、MAGは私に封筒を押し付けた。

私は嫌々ながらも封を切り、中身を取り出す。100枚はあるであろう紙束がクリップで止められているのを見て、早くも破り捨てたい気分になった。

「待て、その手に持ったライターはなんだ、どっから出した？」

「あら、本当ね。丁度いいところに」

「待て待て待て待て!! 燃やすなよ? 絶対燃やすなよ!？」

「それは中身次第ね」

分厚い紙束を手に持ち、読み始める。

さて、このマシンガンキチは一体どんな内容を——

『前書き』

この手紙には読んだ戦術人形のシステムを強制的にマシンガン専用書き換える認識プログラムが仕込まれてありま

私は迷わず火をつけた。

「アッー!! あたしが丸1週間かけて書き上げた力作が——っ!？」

「だったら変なミーム汚染なんて仕込んでる場合じゃないでしょう!？」
ぶん殴るわよ!？」

嘆くMAGと叫ぶ私。

……その後、日が暮れてまた昇ってくるまで説教は続いた。

ちなみにその時、P90はトイレでずっとグロッキーになっていたという。

H a l l e l u j a h , T h e H a l l o w e e
n !!

10月31日。

ハロウィンというイベントが実は前夜祭であると知っている人はなかなか少ない。特に総人口自体が激減した今となっては殊更にそれが顕著になっている。

さて、何が言いたいかと言うと……G&P.Kでも、元々のハロウィンがどんな祭典だったかなど知ったこっちゃねえと仮装大会が始まっていた。

老若男女人形人間問わずの仮装祭り——もはや誰が人形で誰が現地民なのか、性別が違ったりでもしない限りは判別がつかないレベルで混沌とした有様が広がっている。

そして、そんな喧騒を本社脇にある臨時拠点の窓から見下ろしながら、私は自身の頭を苛む頭痛に悩まされていた。

『リーダー。ヤバい、抜けなくなつた』

『開幕早々何やってるのよ……』

目の前には、顔の形にくり抜かれたカボチャを被ったまま途方に暮れているアホが若干約一名。

どうやらこのアホ——MAGはジャック・オ・ランタンの仮装をしたらしいが、途中でこれだと個性が弱いと思つたらしい。そこで私は素の状態が一番個性強いんじゃないかと思つたが、本人のあつてなきが如しな名誉のために黙っておいた。

そして、いの一番に被ったカボチャを脱ごうとして事態が判明したのだとか。

「そもそもなんでその仮装にしようと思つたのよ」

『少し前にカボチャ食つたから余つた皮を有効活用したんだよ。ちやうどハロウィンの時期も近かつたからな』

「ああもう、こういう時に限って変な行動力を！」

ちなみにだが、ハロウィンでよく見るオレンジ色のかぼちやは本来

食用ではなく観賞用。食べれないことは無いだろうがあらゆる方面において保障はできない。

もう微妙に考えるのが嫌になってきた私は、袖捲りをしながら座っていた椅子を立った。

「……もう面倒だから物理で解決してもいいわよね？」

『待て！ 落ち着け！ リーダーの馬鹿力でぶん殴られたらあたしの頭まで逝っちまう!!』

「誰が馬鹿力よ誰が」

『イデデデデデデ!? ちよつ、カボチャ越しにアイアンクローはやめつ、アツー!!』

ギリギリとカボチャ頭に負荷をかける。いつその事このまままとめてかち割ってしまったおうかとも思ったが、それをやるとメンテナンス部門から文句を言われるので既のところまで思いとどまった。

『逝ったかと思っただぜ』

「本っ当に面倒ね……」

私のため息混じりに呟いたその時、ガチャリと臨時拠点の扉が開かれた。

そして、道化師の服装をした何者かが踊り狂いながら拠点へと入り込んでくる。

「真のネオカオス！ 我が胸の内にハロウィンがほとぼしる！ 絢爛たるカボチャ細工達は道を狭しと駆け巡り魑魅魍魎の行列が生ける人を恐怖に誘う！ 踊れ踊れよ愉快に踊れ、そうさ世界はファンタジー!!」

「……また随分と楽しんでるわね、MGL?」

「あ、やっぱりわかります?」

私と話しかけると、道化師——MGLは顔に付けていたピエロのマスクを取る。今は特殊メイクか何かで誤魔化している様で、いつも付けている顔の半分を覆う仮面も外して整った素顔を晒していた。

「いやあ、特殊メイク様々ですね！ まさかまた仮面無しで外を出歩ける時が来ようとは!」

「……何回も聞くけど、別に直ったわけじゃないのよね?」

「そりやまあ、16Labの太鼓判ですよ。これを直すとなるとフ
レーム諸共総とつかえになりますからね——そんなお金ありません
よ私」

「……一応G&P.Kの所属なんだし、頼めばどうにかなるんじゃないの?」

「曲がりなりにも前科持ちなんでその辺の保険が使えないんですよ
ねー。あと電脳アダマに色々和不味いものが大量に入ってるので、変にい
じつちやうと関係各所が3桁回くらい倒産してもお釣りが来るレベ
ルでヤバい機密が大量に流出しちやいますよ?」

「私が悪かったわ」

「賢明な判断ですね」

よつ、と道化師の衣装を脱ぐMGL。一体外で何をしてきたのか、
その下の下着しかつけていない体がほんのり上気して赤くなってい
た。

そして、今度はスーツにネクタイと比較的かつちりした服装に着替
えていく。果たして今度は何に仮装するつもりなのか。

「……で、MAGさ……MAGは一体何してるんですか?」

『お前そのいちいち敬称つけようとしてやめるのどうにかならねえの
? 地味に心にくるんだけど』

「だったら自分の日頃の行いを鑑みてください」

『いやあたしなんも悪いことしてねえだろ!!』

「即答(ですか)!!?」

驚いた、まさか自覚がなかったとは。あそこまでやらかしといこ
れとは一周回っても生やすは清々しい。

私達が戦慄している時、またも臨時拠点の扉が開かれる。

今度は何事かとそちらを見ると……目を回したP90が
マイケル・マイヤーズ
XTR-12に掴まれて運ばれていた。

私は頬がひきつるのを自覚しながら、面倒事が増えるのを承知で問
いかける。

「……それは一体?」

『……、』

スツ、とナイフを逆手に構えるマイケル。同時に、どこからか非常に聞き覚えのあるピアノのフレーズが聞こえてきたのは気のせいである。と信じたい。というかブギーマン^{そっ}じゃなくてTHE^{そっ} SHAP^ちEの方なのか。それでいいのか。

「……消えゆく灯」？ それとも「傷ついた鏡」？」

『やたらといい匂いのする髪束。あとでつかい墓石』

非常に殺意を感じる組み合わせだった。そうまでして殺したい相手がいるのか。

XTRの殺意の行き先はさて置いて、私は彼女の担いでいるチャックキーに扮装したP90に目を向ける。

「で、そっちは一体どうしたのかしら」

『褐色赤毛の不審な女に追いかけて回されたそうだ』

「オーケイ、通報しておくわね」

サブマシンガンの戦術人形の中でも上位に入る足の速さを誇るP90を此処まで追いつめるあたり、非常に執念を感じた。一体何がその変質者をそこまで駆り立てたというのか。

とりあえず私は上司に報告することを心に決めた。

『……それで、コイツどうすればいいのよ』

『ああ、誰かと思えばMAGだったか。てつきり前衛的なインテリアか何かかと思っただぞ』

『誰がハロウィン限定家具だぶっ殺すぞ!! 何百枚コイン積まれたってそっちには顔見せねえからな!!!』

『そこまでは言っていないし一体何の話だ!?!』

突然トンチキなことを言い始めたMAGにXTRが当惑する。だが、私達はいつもの事としてスルーした。この程度で困惑しているようでは502小隊は務まらない。

さて、そろそろ真面目に解決策を考える必要があるそうだ。このままではこのバカ騒ぎが終わった後に面倒だし、いつまでもこの状態が続くとなると色々なものに支障をきたす。

そこで、私は考えた。これをハロウィンに乗じて解決する方策を。

——その時、私の電脳に閃光走る。

「……閃いた」

数分後。

「これで行くわよ」

『マジで言ってる？　ねえそれマジで言ってる???』

臨時拠点の玄関前で、チャッキーとマイケル・マイヤーズ、ジョーカー、そしてゴーストフェイスが顔を突き合わせていた。内訳は前から順番にP90、XTR、MGL、私。

そして、肝心のMAGはというと地面に置かれた重量級のトロツコに雁字搦めに拘束されている。彼女の被った南瓜頭に縛り付けた縄の先端を私達が持つ格好だ。

『え、マジで？　何しようとしてるか大体想像はつくんだけどマジで？』

「大丈夫？　介錯する？」

『終いにはつ倒すぞドチビイ!』

『……哀れな』

『ガチで悲しんでるような口調やめろや！　え、マジで?!　嘘だろ!?!』

「……R・I・P」

『まだ死んでねえっつーの！　その格好ジョーカーコスで言われると不穩極まりねえわ!!』

「準備は整ったわね？　じゃあ逝くわよ」

『全然整ってねえわ！　むしろこれで準備がどうかねえだろ！　あとなんか字が違う気がしたんだがマジで大丈夫なんだろうな——ツ!?!』

有無を言わさず出発。

頭を引っ張られて悲鳴をあげるカボチャを搬送しながら道を歩く不審者の集まりを目にして、仮装軍団は速やかに私達の進行方向から退いていった。まあ残当ではあるのだが、なんか悲しい。

——その後、MAGの被ったカボチャ頭は5キロ程引きずり回したあたりでようやく外れた。

勢い余ってカボチャがXTRの後頭部に直撃したり、砕けたカボチャによって辺りが悲惨なことになったり、『毎年ハロウインの時期

が来るとカボチャ頭を生贄に捧げる儀式が行われる』という噂がまことしやかに囁かれる様になったが……まあ、それは蛇足というものだろう。

What the Wrong...!?! (上)

「さて、という訳でだね」

「どういう訳よ。というか何故私はここにいるのこの目の前の痴女は誰なの説明しなさいMAG」

「ゴイツの素性はまだしもなんでリーダーがここにしているのかはあたしが知りてえ。おかしいな、あたしら結構シリアスやってなかったか？

今回舞台裏とかそういうノリなのか？」

よく分からないことを愚痴るMAG。舞台裏というのが何を指しているのかは分からないが、とりあえずこの目の前の半裸人形についての説明をしてほしい。新人か？

私のそんな思考を察知したのか、P90がこそつと耳打ちしてきた。

「いや、新人はいるけどそこの変態じゃないよ。新人はそっちで盾に囲まれてるほう)」

「いることにはいるのね、新人」

「(今回は向こうから押し付けられてきた感じだけどね。ま、後で紹介するよリーダー)」

「そう」

「ははは、そろそろ話を戻していいかね？」

不審女がそう言いながら、懐から何かを取り出した。

それは3つのプラスチックボトルに詰められたカプセル状の媒体であり、ボトルのラベルにはそれぞれこう書いてあった——『スナオニナル』『ヒックリカエル』『ツンデレール』。

それらに特に心当たりのない私達は一様に首をかしげたが、MGLだけは目を剥いて叫んだ。

「げっ!?! まさかそれは!?!」

「はっは！・ 恐らく君の思っている通りのものだよマスクドガール!

これは少し前に君たちがやらかした性格反転騒動を元に作られた、戦術人形のメンタルマップに作用するナノマシンカプセル! 中々ペルシカも面白いことを考えるじゃないか!!」

そうやって、ボトルをこれ見よがしにシヤカシヤカと振る麗人で、結局コイツは一体誰なのかそろそろ教えて欲しい。どうやら私以外のメンバーは全員知っているようだし、疎外感が凄い。

そんな事を思っている間にも、状況は刻一刻と進んでいく。

「ははは！ 実を言うのだな、これ自体はもう用済みなんだ。これ見よがしに取り出して見せたのも、ただのパフォーマンスの一環にしか過ぎないということだな」

「用済み……？ どういう事よ、というかそもそも誰なのよ結局」

「その質問には後で真摯に堪えさせてもらうとしようブラツクレデイ、もとい110BAよ！ さあ、ショウタイムだ！」

高らかに宣言し、彼女はボトルを全て放り投げたかと思うと今度はあからさまにヤバ気なスイッチを取り出した。

それを見たMGLが慌てた様子で叫ぶ。

「もうすでに仕込み済み!? なんて用意のいい……ッ!!」

「その通り！ 既に君たちの食事に雑に混ぜ込んでおいたのさ！ 誰も気づかなかつたのは正直予想外だったが、しかしこれは僥倖以外の何物でもない!!」

高笑いしながらそう謳うその姿はまさしく大犯罪者のそれであり、不覚にも私はそのパフォーマンスに気を惹かれてしまっていた。

そして、次に聞こえてきたMAGの叫びで正気に戻る。

「リーダー！ そいつを止めろッ！ 『スイッチ』を押させるなッ！」

「いいや！ 『限界』だッ！ 押すね——今だっ!!」

そうやって、麗人は手に持ったスイッチを押した。

その瞬間、私は意識が暗闇に包まれているのを自覚して——

「——あら？」

「……あのさあ。いくらなんでも不用心すぎんかお前？ ちよつとそこに座れ、修正してやる」

——気付くと、真つ暗闇の空間に正座した状態でブランクからクドクドとありがたいお小言をもらっていた。

■ ■ ■

そして、現実世界では。

「さあ！ さあ！！ さあ!!! タノシイ正義殺戮の時間デス!!!」(※110B A)

「いざー！ 尋常にイ!! ——参る!!」(※P90)

「……ああ、空はあんなに青いのに……なんで私はこんな……ブツブツ」(※MAG)

「我が行く末に敬礼を、かの青空へ礼拝を!! アナタはワタシワタシはアナタ、世に知らしめることもなし！ 世界は回る回れよ世界、全て溶け墜ち無為へと戻れ!!」(※MGL)

「……ええ……」

——まあ案の定というかなんというか、とんでもないことになっていた。

困惑するアリアンロッド。もしもこの場にリンクスがいれば殴つても止めただろうが、しかし残念な蛾は彼女はこの場に居ない。

しかし、天は(非常に残念なことではあるが)彼女を見放さなかった。

「ほら先達ども、若輩者が戻ってきたぞ——どうやら部屋を間違えたようだな、失礼する」

戻ってきたのは、リンクスと同じく所用で席を外していたXTR。

彼女は扉を開けて部屋の中の惨状を目にして——そつと扉を閉じようとした。

しかしそこにアリアンロッドが張り付き、全力決死での妨害を見せる。

「はっは！ 浮盾の君よいところに来てくれた！ 実はちよつとワケアリでな、少しばかり手伝ってはくれまいか!!」

「嫌に決まっているだろうなんで私が貴様の尻ぬぐいなんぞせねばならぬ!? 勘弁してくれ、もうゴタゴタはうんざりなんだ!! 大体想像がつくぞ、此度の一件貴様が主犯だろう!!」

『本体様、迫真の拒絶である』

『まあ前回で懲りたからね、仕方ないね』

『懲りたっというか関わりたくないと思っただけでは?』

『自分を一般人形だと思ひ込む暗部所属』

「やかましいわ好き勝手言いおつてからに!! 騒ぐ暇があるなら手伝え貴様ら—!!」

背後からやんややんやと騒ぎ立てる『声』にXTRが怒鳴りつける。しかし結局助けは得られず、数秒後には彼女は半開きの扉から伸びた手によって部屋の中へと引きずり込まれた。

たまたまその光景を目撃していたG&mp;K所属の一般スタッフは『往年のホラー映画の中に迷い込んでしまったのかと錯覚した。当分鉄血と戦術人形の顔は見たくない』と言って上司の片眼鏡合コン熟女（胃薬常用者）に1ヶ月の有給申請を叩きつけたという。

免疫反応

ERROR 502

——目標をサイトに収める。敵は見慣れた鉄血の戦術人形だ。『人形』という割には犬っぽい四足歩行のメカがいたり四輪走行の小型タンクが混ざってたりするが、まあよくある事。

別段慌てることも無い、いつも通りの汚れ仕事だ。

「……、」

——発砲。

標的の頭部が丸ごと吹き飛んだのを確認しながら、ボルトを操作して次の弾丸を装填する。同時、サイト越しの視界が別の鉄血を捉える。

装填、捕捉——発砲。

装填、捕捉——発砲。

三回目あたりで向こうもようやくこちらの存在に気付いたようだが、関係ない。

どの道、ライフルも持ってない相手が1kmも離れた相手にできる反撃などたかがしれている。たまに迫撃砲が混ざっていたりするけれど、基本的にはその手の類を真つ先に破壊するように私はしているから、心配はない……はず。

装填、捕捉——発砲。

装填、捕捉——発砲。

装填、捕捉——

装填——

「……敵小隊の全滅を確認」

……3つのプロセスから成り立つ単純作業を幾度となく繰り返した結果、見渡す限りの視界から鉄血兵の姿は無くなった。残ったのは辺りに散らばる無数の残骸だけ——撤退はおろか潜伏すら許さない、我ながら完璧な塵殺だった。

その場でしばらく周辺警戒をした後、私は耳元の通信機に手を当て、スイッチを入れる。

途端にバリバリとド派手な発砲音が耳朵を叩き、思わず顔を顰めた。

しかし挫けることなく、私は通信を試みる。

「……あらかた片付いた。そっちはどう、P90」

「んー、こっちも大体は仕留めたよー。110BAもその様子じゃミスってはないみたいだね」

「当然」

声をかければ、やかましい騒音と共に帰ってくるのは快活そうな声。唯一の相方、P90の物だ。が、この騒音自体は彼女が起こしているものではない。

つまり、もう一人仲間が居るのだが――

『斉射掃射速射高射乱射アあああ！ ヒヤツハー!! マツシンガーン、たーのしーいなー！ やっちまえー!!』

『……また発作起こしてるし……』

「……、」

――正直な話、アレを仲間とは思いたくない。

今まさに最前線で轟音とともに弾丸をばらまいているだろう馬鹿の名前はFN MAG。眩い笑顔と共に片手持ちした10kg超のマシンガンを振り回す変態だ。

しかも思考パターンもマシンガンに汚染されているのか、大火力を正義と信じて止まない大艦巨砲&弾幕主義者。

どうしてこんなのとチームを組むハメになったのか。私は数ヶ月前に引き込むことを決めた自分を殴りたくなった。

しかし愚痴っついていても始まらない――私は通信機を弄り、今なお通信機越しに音響テロを仕掛けてくる馬鹿に声をかける。

「MAG。撤退」

『イーハーツ!! ――ああ、なんだってー? よく聞こえねーぞー!』

「だったらまず引き金から指を離しなさい馬鹿」

『なんか耳がキーンとしてきた……』

『あー、ちと待て。すまん、あと一匹仕留めりや終わりだ』
その言葉と同時に、弾丸が金属を引き裂く嫌な音がより一層強くなる。

程なくして、ぱったりと発砲音が止んだ。

突如として訪れた静寂の中で、その怒涛の発砲音を撒き散らしていた下手人の声が届く。

『うーっし、状況しゅうりよー。んで、何の話だ?』

『作戦終了。とつとと撤退して』

『りよーかい。その辺の残骸はどうするよ』

『……使えそうなモノがあったら各自持って帰るように』

『オーキードーキー。んじゃ、旧司令部ポイントで集合な』

『そうね』

通信終了。

P90にも同じ事を伝えて、私はその場から離れる。

——戦術人形は貴重な資源だ。

人形本体は分解してしまえばオイルと鉄材と少しのパーツになるし、銃は持っていけば弾薬も手に入る。だから私はこうしていつもヘッドショット一発で済ませているわけだ。まあ、一度に持ち運べる量には限度があるから、何往復もする必要があるけれど。

『うげっ、全部スクラップじゃねえか。一体誰だよこんな惨いことした奴は!』

『うん、どう考えてもキミだよね!』

「鏡を見なさい馬鹿」

ああ、紹介が遅れた。

私はサベージ110BA——ライフル持ちの戦術人形であり、性能と引き換えに大事なものを喪失したいわゆる『コワレモノ』であり——
ドールズステイフエンズライヴ
この誰もいない防衛線を守護する部隊、502部隊の隊長だ。

私たちはずっと前からこうしてきた。きつと、これから先もこうしていくのだろう。

さあ続けよう、栄光無き防衛戦を。

いつか世界に平和が訪れる、その瞬間まで。

「待たせた」

「お疲れ様ー……つて、ええ？」

「おーっすりーダー、突然で悪いが緊急の案件だ。……これ、どうするよ」

『ワン』

「……何それ」

「うわっ、何処で拾ったのそれ？ 凄いですり寄られてるけど」

「いやあ、武装のわりに見た目がファンシーすぎっから民生品パチつて改造した鉄血の所のワンコロだと思っただけだよ。完スルーして目に映った鉄血のヤツら薙ぎ払ってたら懐かれた」

「ええ……」

『ワフツ』

「おっ、そいつぁ弾薬か！ いい子だパチ公、このバッテリーをやるう！」

『ワン！』

「なんか名前付けてるし、餌付けまでしてるし……しかもそのバッテリー何処から持ち出したのさ？」

「んー？ 110BAの自室からちつとばかし拝借してな……あつ」

「オーケー、少しお話しましょうか」

「しまった墓穴掘った!？」

……その前に、この駄人形をどうにかする必要がありそうだ。

人の部屋からバッテリー持っていくとか何を考えているのだろうか。

Signal Green

「んで、リーダー？ あらかた片付いたがどうするよ」

『ワフ』

「……そうね。じゃあ……」

「しりとりでもしようぜ」

「どうしてそうなる」

とある日の事。

いつもの様に、私達は戦場で鉄血を仕留めていた。

今この場に居るのは110BAとMAG、それからペットのパチ公（仮）。P90はいつもの様に潜伏しているため不在。単騎で敵陣に突っ込む癖があるため生傷が絶えないが、引き際はわきまえているし問題はないだろう。

いきなりトンチキなことを言い始めたMAGに、思わず真顔で突っ込む。しかし彼女は相変わらず真意の読めない——訂正、『マシンガン撃ちたいもつとドンパチしたい』と心の底から思っているような表情で、大真面目にこう言い放った。

「いいかりーダー。言葉の応酬ってのは時に『口撃戦』と呼ばれるくらいに激しくなる。言葉が遠距離兵器であることを考えると、つまりこれは銃撃戦に近似できるわけだ。んで、これを秒間10発く15発のペースで続けければ、あたしらはマシンガンを撃ってることになる!!」

世紀の大発見だぜこれは!!」

「ちよつと何言っているか分からないのだけけれど」

「なんで分からねえんだよ」

「常識的に考えて分かるわけないでしょう」

一体何をどうすれば会話が銃撃戦になるのだろう。確かに世の中にはマシンガンとクという言葉が存在するが「つまりはその言葉が意味する通りにマシンガンが正義っつー訳だ！」勝手に人の思考を読んだ挙句に介入しないでほしい。心なしか、パチ公も嘆いているように見える。

そんな下らないことを話している合間にも、私は目につく鉄血兵を

片っ端から射抜いていく。一体たりとて通す訳にはいかないのだ。

あるいは心臓部を撃ち抜き、あるいは頭部を消し飛ばし、あるいは四肢をもいで失血死オイル抜きさせる。

その様子を眺めながらMAGは、

「ひゃー、おつかねえ。容赦って言葉を知らねえのかよ」

「これが一番確実なのよ。あと容赦なく弾幕張って相手をスクラップにするような奴にだけは言われたくない」

「さいで」

ガシャン、横で銃弾を装填する音が響く。

おいまさか……

「じゃあ一匹ずつチマチマ撃つの面倒だし、手っ取り早くまとめて排除しようぜ！」

「やめっ——」

私が静止するより早く、マシンガンから銃弾の雨あられと爆音が放たれる。

私が伏せ撃ちしている所の真横で撃ち始めたため、隣にいる私に諸に被害が及んできた。

具体的には、頭上から大量のベルトリンクと空薬莖が降って来る。

痛い。あと爆音で聴覚が壮絶に痛めつけられる。辛い。

そして、見る見るうちに視界内の鉄血兵がスクラップになっていく。あれでは資材の獲得は絶望的だろう。

「ヒヤッハー！ ホントこの世は地獄だぜーっ!!」

「私にとっては今この瞬間が地獄よ……!!」

呻くように愚痴るが、今まさにこの地獄を生み出している馬鹿には届かない。マシンガンを撃っている最中のコイツは極限の陶酔状態にあるため、基本的に何を言っても無駄なのだ。

だから、これを止めるには……

「おっと、弾切れた。リローデイン！」

「やめろー！」

「イツテエ!?!」

『キャン!?!』

おもむろにバックパックから予備弾帯を取り出した馬鹿目掛けて、
たまたま手の届くところにいたパチ公をシューツ。別にエキサイ
ティングはしない。

あわよくばショック療法で異常なところが全部直ってくれないだ
ろうか。

「イテテ……ああ？　ここは何処だ、あたしは誰だ？　いいやあたし
こそがマシンガンだ、こればかりは譲れねえ」

「……、」

直るどころか悪化した。

どうすればこのマシンガンキチを穏便に排除できるか、私は割と真
剣に考慮し始める。

結論：不可能。ああ無情。

仕方が無いので、私は馬鹿の対処を諦めて敵の残骸から使えそうな
パーツを確保し始める。戦術人形どうし、銃種さえ一致すれば基本的
に規格も同一のため弾薬類は流用できるからだ。

きつと本部では私達は書類上MIA位の扱い戦闘中行方不明になっているだろう
し、外部からの補給は望めない。よって、こうでもないと長期間は
やって行かれないのだ。

「おーおー、惨憺たる有様だな。見てて清々するぜ」

「次、許可無しに至近で撃ち始めたら撃つから」

「サラツと殺害予告すんのやめてくれねえかな頼むから」

ひとしきり使えそうなものをバックパックに詰め込み、さて拠点に
戻ろうとしたその時。

ザザツ——と通信機にノイズが走る。

「？」

「……どうしたリーダー？」

「いや、今通信機が……？」

耳に手を当て、周波数を調整する。

……この手のザツピングは得意だ。シリアルセキュリティのかけ
られたサーバーだろうが今は廃れたダイヤル式の金庫だろうが、私は
不思議とそのどれもを一発で突破できた。だから、今回もきつと行け

るだろう。

かくして私の予想は的中し、程なくして何処かの通信と接続される。

『ザザザツ——CQ, CQ! こ——らは——分隊、現在——と交戦中！ 敵部隊は——めて強力、応——む! 繰り——、こちら——』

ノイズ混じりに届いてくるのは、何処かの小隊からの救援要請。怒涛の発砲音とセットで聞こえてくる事と通信内容を鑑みると、中隊規模の敵とち合ったか。

銃声とはまた違った爆発音が聞こえてくる所を見ると、敵陣がグリフィンサイドに迫撃砲あるいはグレネーダーでもいるのだろうか？

まあ、知らない相手の編成事情なんてどうでもいい——私達は502小隊。今は防衛戦なんてことをしているが、本来は遊撃が本分だ。

「MAG」

「おうさ、仕事だな」

「ええ。P90が帰ってくる前に手早く済ませて帰りましょう」

Signal Yellow

ドールズデイフェンスライン
不在防衛線の一角にて。

いつもなら閑散としているそこは、しかし今では激戦区に早替わりしていた。

そこで争っているのは一分の戦術人形、そして九分の鉄血兵。
「数が多いーっ!!」

悲鳴をあげながら手当たり次第に弾丸と焼夷手榴弾をばら撒いているのはMicro UZI。ツインテールとややツンケンな口調が特徴的な少女だ。

それにしたって普段の彼女ならばこんな真似は絶対しないはずなのだが、しかし今回は事情が事情。

見渡す限りの鉄血兵、陸が三分に敵が七分。これではせつかく2丁持ちしている銃火器も気休めにしかなりはしない。

仕方なく、片手で銃を乱射しながら空いたもう片方の手で手榴弾を乱投していた。反動の比較的少ないSMG、そして常人を遙かに凌駕する戦術人形の筋力という二つの条件が揃っているからこそできる荒業だ。

「多いー! 多いよー!」

「言ってる暇があったらもっと投げた方がいいんじゃない……?」

そしてその横で似たようなことをしているのはVector。こちらは無気力そうな表情で乱射乱投をしている。

そうして出来上がったのは炎の舞う地獄の戦場。本日の天気は銃弾の雨ときどき焼夷手榴弾、流石の荒れ模様だ。

しかし銃弾も手榴弾も無限にある訳では無い。

程なくして、カキン! とUZIの持つ銃から甲高い音が響くと同時に弾幕が途切れる。

UZIは何度も引き金を引くが、しかし弾丸は出てこない。

「——やばっ、弾切れた!?!」

その横ではVectorが感情の読めない顔で手に持った銃を縦に振りながら、

「……詰まった」^{ジャム}

考えうる限り最悪の状況だった。

ある程度削れたとはいえ敵との物量差は圧倒的。このペースで投げているのは手榴弾も直ぐになくなるだろう。

そうなれば、待っているのは死だ^{破壊}。

あるいは、それよりも酷いことが待っているかもしれない。

悲惨な未来予想図が脳裏をよぎり、UZIは思わず後ずさる。

「や、やだ……！」

だが、その時。

ゴンツ!! という重い音と共に、すぐそばまで迫っていた鉄血兵の首があらぬ方向へとねじ曲がった。その頭には、それこそ砲弾のような見た目の金属塊がめり込んでいた。

その様子に、思わずUZIとVektorが顔を見合わせる。

そして。

「ヒューヤツハアーツ!! FIRE IN THE HOOOOO
OOOOOOOOOLE!!」

軽快な叫び声と共に首が折れた鉄血兵に銃弾の雨が降り注ぐ。ほどなくして、チリツと小さな火花が見えたかと思えば、その瞬間に周囲の味方諸共に大爆発を巻き起こした。

それもそのはず——二人は知る由もなかったが、あの金属塊、正体はなんと迫撃砲用の榴弾。以前MAGが敵の迫撃砲をスクラップにした際に、まだ使えそうだった弾薬のみを接收していたのだ。

まさかそれがこんな所で役に立つとは。

「よう隣人さん! ご機嫌どうだいつて危ねえ!」^{ハイジョー}

そんな声と共に鉄血兵を蹴散らしながらやってきたのは、両手にそれぞれマシンガンと鉄血兵の装備であろうガトリングガンを持った少女。ブレザーと軍服の中庸をとったような服装を返り血で真っ赤に染め上げながら、彼女は眩い笑顔でやってきた。

それを見た瞬間にVektorが全力投球で焼夷手榴弾を投げつけてしまったが、彼女——MAGは器用にも首の動きだけで回避して見せた。手榴弾でヘッドショットを狙うほうも大概だが。

しかしそれを気にもとめず、MAGは鉄血規格のガトリングガンで手近な鉄血兵を殴打し、まとめてその辺に打ち捨てる。そうして懐から取り出すのは大量の榴弾。これまで幾度となくスクラップにしてきた迫撃砲、その汗と涙の——訂正、鉄と油の結晶だった。

「そおら吹っ飛べ!!」

それを一切の躊躇泣く放り投げる。

そしてその直後、金属同士がぶつかり合うとともにそのうちの一つに風穴が開いた。

起爆。

周りの鉄血兵を巻き込む小爆発が連続して起こる。

明らかにMAGの仕業ではない。そもそも彼女はマシンガンナーだ、手に持っているそれでそんな器用な芸当が出来るはずがないし、そもそも彼女はそれを構えてすらいない。

——では、一体誰が？

「ハッハア、いい仕事だリーダー！」

『当然。考え無しに突っ込んでつたのをフォローしたんだし、後で埋め合わせしてちょうだいね』

「うげっ、マジでか！ リーダーの言う『埋め合わせ』ほど怖えモンはねえんだが!?!」

『……鉄血のハイエンドとどっちが怖いって聞かれたら?』

「そりやリーダーだろ? 常識的に考えて」

『……後で覚えてなさいよ。通信終了』

「……やべえ、あたし死ぬかも」

青い顔で小刻みに震え始めるMAG。

彼女の脳裏をよぎるのは、数々の楽しかった思い出。その大半がマシンガンを乱射している風景である辺り、実にらしいといふかなんと言いか。

「——つええいやめやめ! リフレッシュだリフレッシュ、こういう時はマシンガンを撃つに限る!」

どうしてそうなる。

そして彼女は警戒心MAXな二人にあるものを投げ渡した。それ

はやや古びたSMG用のマガジン。これまたスクラップにした鉄血兵から徴収したものだ。

そして彼女は二人へウインクすると、側頭部をぶん殴られてダウンしていた鉄血兵の頭部を迷いなく踏み抜き、それが持っていた銃を拾い上げる。偶然だが、それもマシンガンだった。

そうして両手に持った銃を構え、今なお中隊規模を維持する鉄血へと向けて高らかに宣言する。

「鉄血野郎ども、ようこそ不在防衛線ドールズデイフェンスラインへ！ 歓迎するぜ、盛大にな
!!」

——発砲。

一対数十という絶望的な物量差の中、圧倒的な殲滅戦が幕を開ける。

Signal Red

「うーし、粗方片付いたか」

ガシヤン、と音をたてながら、MAGはマシンガンを下ろす。あまりに長時間連射し続けた故か、その銃身は赤熱し、煙をたなびかせていた。銃だけでなく彼女本人の立ち姿も凄惨で、全身を余すことなく煤と返り血で汚していた。

しかしMAGは自分の姿など気にもとめず、手に持った愛用のマシンガンに対し視線を向ける。白煙を立ち上らせる愛銃の姿に顔を僅かにしかめ、

「あーあ、やりすぎた。こりや帰ったらオーバーホールだな……」

「あ、あのー！」

「んあ?」

気の抜けた声を発しながら振り返るMAG。

そこには、自身に負けず劣らず血と煤に汚れた二人の少女。誰であろう、自身が先程まで守っていたVectorとUZIである。

しかしMAGはコテンと首を傾げると、

「……誰だ?」

「ええ!?!」

まさかの発言に、二人は思わず叫んでしまう。

どうやらあまりに長い時間マシンガンを撃った——≡長い時間トリップしていた——結果、マシンガンを撃つ直前の記憶がトんでしまったらしい。マシンガンさえ撃てれば何でもいいのかコイツは。

しばらく首を捻っていたMAGは、ようやく得心が行ったとばかりに手を叩く。

「……む。むむつ? ——あーあーあーあー! お前らかさっきの救援要請! そうかすっかり忘れてた!」

「思い出すの遅すぎませんか!」

「いやー悪いな、マシンガン撃つてると記憶回路が埋め尽くされちゃうんだわ。スローモーションとか俯瞰視点とか、とにかく色々マシンガン撃ってる光景で」

「どういう記憶回路してるんですか……」

「史上稀に見る純トリガーハッピーだね……」

平然と言い放たれたトンデモ発言に、二人は思わず嘆息。助けが来てくれたのは本当に嬉しいが、こんなイカレ人形に来て欲しくはなかった。

……ところで、乱射し始める直前に『リーダー』と無線に呼び掛けてた気がするのだが……。

ポン、とMAGの肩に手が置かれる。マシンガンの撃ちすぎでやや蕩げ気味だった彼女の表情が一瞬にして凍りついた。

ぎぎぎぎぎぎ、ときこちない動きで少女が振り返ると、そこには怖気が走るほどにイイ笑顔が浮かべた黒軍服の少女が。

そして、全身から滝のように冷や汗を流す（ような感触を覚えている）MAGは一言、

「……てへぺろ?」

「ハイクを詠め! イヤーツ!!」

「アバーツ!」

そしてその腹に突き刺さる怒りの鉄拳。哀れMAGは速やかに気絶昏倒。

そして黒軍服は崩れ落ちたMAGを脇に抱えると、突然の事態に困惑する二人に声をかけた。

「……こつちに拠点がある。ついて来て」

■ ■ ■

旧司令部、通称『ポイント0』、その一室——かつて『司令室』と呼ばれていた部屋。

そこで、502小隊と先ほど救助された二人組——偵察部隊γ（γ）
「焼夷同好会」が対面していた。

「……で、どういうことなの? なんか見慣れない面子が増えてるけどさあ……」

ジト目でそう零すのはP90。その背中には戦利品と思しき弾薬・部品類がぎつちり詰まったバックパックが背負われていた。

そして彼女の疑問はもっともなものだろう。敵を仕留めて帰って

きてみれば、なんか拠点に見知らぬ人形が二体。疑われないわけがない。

しかし、私もMAGもリアクションを返さない。返す余裕が無い。怪訝に思ったP90はその片方に声をかけるが……

「ねえ、大丈夫？　なんでそんな暗いの？」

「……実はな」

重苦しい口調でMAGが口を開く。

すわ鉄血との総力戦か——と身構えるが、

「マシンガン壊しちゃった……直るまで当分の間撃てねえ……」

「もういい分かった、キミに訊いたボクが馬鹿だったから黙れ」

うおおん、と嘆く馬鹿に対してP90が冷たいまなざしを向ける。

そして次に、私に視線を向けてきた。今まさに号泣しているマシンガンキチはともかく、大分悩んでいるのであとにして欲しい。

「リーダー。事態はE^{過去形}—D、それともI^{進行形}—N^{進行形}—G？」

「……言いづらいけど、I^{進行形}—N^{進行形}—Gね。それもとびきり面倒なのが」

「マジかあ……」

空を仰ぐP90。天井に覆われていて空模様は伺えないが、きつと彼女の心象は哀しみの雨が降り出していることだろう。

しかし泣き言は言っていられない、502小隊のモットーはMAGに曰く『長期戦万歳ブラツク上等』なのだ、ひとまず対策を打たなければならぬだろう。

「……敵は？　どんな奴？　リーダーが面倒っていうくらいだからハイエンドは当然いるでしょ」

「ええ。これを見て頂戴」

ピッ、と手に持つリモコンを操作する。私の知る所ではなかったが、P90は毎度の如く疑問に思っていた。

(……どうやったなら視線を向けている相手に(しかも自分と同じく熟練の戦争屋にだよ) 欠片も気取られない動作ができるんだろう……?)

ほどなくして、低く唸るような駆動音と共に天井からスクリーンが下りてくる。おそらく旧司令部の備品だったものだが、施設ごと放棄

されて久しいのにも関わらず問題なく動作していた。少なくとも私は整備した覚えはないけれど、どれだけ頑丈なのだろうか。

そして、これまた備品であるプロジエクターが起動する。

そこに映し出されたのは、本体下部にドラムマガジンを、本体上部にロングマガジンを取り付けた狂気の銃を振り回す黒い人形。その後ろには、無数の鉄血兵が控えていた。

それは。P90にとっては忘れられない、忘れるはずのない因縁の相手。

「鉄血工造のハイエンドモデル、コードネーム『侵入者』^{Introducer}。これが、私たち502小隊が今回戦う相手よ」

「……この国の首脳が危険思想者だ。」

「まあ、そういう私の率いる502小隊にはP90とMAGゲリラ戦のプロ 乱射テロの常習犯がいる訳だが。つくづく思うが、どうして私はこの二人を引き込もうと思っただのか。不思議でならない。ところでUZ-IはともかくVectorはなぜ顔を赤らめて俯いているのだろうか？」

「まあそれはさておき、もちろん私はノーマルだ。ボルトアクションの神に誓ってノーマルだ、断言できる。」

「……仕方ないわね、じゃあこういうのはどうかしら」
リモコンを弄る。

次に映し出されたのは、倉庫にぎっちり詰め込まれた大量の資源。

それを見た二人の視線が露骨に揺らぐ。

やがて、恐る恐ると言った調子でVectorが口を開いた。

「……これは？」

「不在防衛線が溜め込んだ資源ね。そもそも所属人数の絶対数が少ないから、どうしても余るのよ」

その量は平均して三万前後（単位は一律でキログラム法に準拠）——彼女達がどこの司令部の所属か私には皆目検討もつかないが、それにしてもこの量の賄賂えんじよは無視できないはずだ。

だからこそ、それは私たちが突くべき穴となる。

「もし貴方たちが協力してくれるなら、この死蔵してある資材の半分を譲るわ。悪い話ではないと思うけれど」

「おい『死蔵』って言いきつちまったぞウチのリーダー」

「実際死蔵でしょ。ここに所属して以来ボクは弾薬以外の保管量が四桁以上の単位で減つてるところ見たことないんだけど」

「おいおいマジかよ。で、なんで弾薬だけそんな減つちまってるんだ？」

「自分のやってきた事を少しは省みろ!？」

叫ぶP90。実際その通りで、502小隊が食い潰す資材のうちの九割方はMAGが原因だ。次点でP90、そしてワーストが私。火力

キチと煙幕キチが揃い最強に見える（資材消費的な意味で）。

背後でぎゃいぎゃい言い争う馬鹿から努めて意識を逸らしつつ、私は二人へと語りかける。

「で、どうかしら。乗るか、反るか——」

その問いかけに、2人は顔を見合わせた。その隙をついて、私は後ろの馬鹿二人を物理で黙らせる。恐ろしく早い一撃、私でなければ見逃しているだろう。というか、自分でやっているのに自分が視認できないのはおかしい。

そのまま、何食わぬ顔で視線を前の二人に戻す。

その時、彼女たちは互いに頷きあっていた。そして、二人は私の方を向く。

「……まあ、乗るしかないよね？」

「それしか私達には道がなさそうだしね……どの道弾もないし配給も切らしてるし……」

「——OK, d. 契約はここに成立した」

壁に立てかけておいた愛銃を掴む。

リモコンを操作し、プロジェクターの電源を切ってスクリーンを格納する。

さて、五人も面子が集まれば十分だろう——そう思い、私はダウンしている馬鹿二人……もとい部下二人に声をかけた。

「P90、MAG」

「あいてて……んあ？ どうしたリーダー」

「倉庫に行く。『アレ』を作るよ」

「……マジかあ」

MAGが天を仰ぐ。

彼女は私は何を作るか理解したようだ。P90も隣で青い顔をしながら倒れ伏して……これはさつきゲンコツ落としたせいか。

ともあれ、死蔵していた資材が輝く数少ないチャンス、これを生かさずしてなんとする。

ずんずんと倉庫へ向けて歩みを進める私の背後から、こんな会話が耳に届いた。

「あの、MAG……さん？　なんでそんな焦ってるんですか？」

「……いやあ、アイツって狙撃兵の癖にゲリラ戦に滅法強くてな。そも、502小隊の隊長はアイツな訳だが、502小隊の存在自体が本来書類上のものだけのはずだった」

「……でも、三人も在籍してる……」

「そう。あたしやP90はリーダーからヘッドハントされてここにいる」

「そうなんですか」

「だが、リーダーはその例外。『書類上の存在』という枠に追放されるレベルの何かをやらかして、結果こうなってる」

「……じゃあ、つまり……」

「そう。アイツのゲリラ戦法って味方も巻き込んでしまうんだ」

「……まさか」

「噂は聞いた事あるんじゃないか？　一発も発砲せずに罠とナイフだけで敵陣一つ壊滅させた、『人毘戦線』ドールトラップって奴の存在。その正体が我らがリーダーって事さ」

B a d G a t e w a y Ⅱ

倉庫に到着。

ろくに整備もしていないせいで半ば廃屋のような様相を呈しているが、少なくともまだ実用に耐えるレベルの耐久性は保持している。私は倉庫には不釣り合いな程に重厚な扉に手をかけ、そのまま腕に思い切り力を込めた。

ギギギギギイ……と壮絶な音を立てながら、ゆつくりと倉庫の中に光が射し込んでいく。

「はあ……」

相変わらず固い。そろそろサビ取りなりなんなりした方がいいのだろうか。

というか、いつそ丸ごとリフォームすべきなのだろうか。幸い資材は譲渡分を加味しても十分にあるし、やるとすればいい頃合いだろう。

まあ、それは後回しだ。私は脇に放置してあるボックスから、工具を引っ張り出す。

「うわあ広い……っていか本当にぎっちり詰まってる……」

「……大型建造何回できるかな」

「おつとV e c t o r、それ以上はいけねえ。なぜならこの司令部において代用コアを使う作業は全部禁止されてるからな。リーダーの意向で」

倉庫の中を覗き込みながら話す二人組に、焼夷同好会扉に手をかけたM A Gがそう告げる。その脇では、やや不満げな顔のP 9 0が腕を組んで立っていた。

「? そうなんですか?」

「そ。だから大型建造も出来ないし、編成拡大も出来ない。まあリーダーの考えだからあたしらは従うだけなんだが、ぶっちゃけそろそろ火力不足になるんじゃない?」

ガツン、としたりげに語るM A Gの額に工具が直撃——ナイスショット、私が投げたヤツだ——し、たまらずひっくり返る。しかし

そこは戦術人形のスペック、何事もなく起き上がってこちらに文句を言ってきた。

「編成拡大なんて許可出来るわけじゃないでしょう。これ以上トリガーハッピーを増やしてもろくな事にならないのは目に見えてる」

「うっへえ辛辣。しかも実際その通りだから何も言えねえ」

苦い顔をするMAG。

その場にいる全員の脳裏を過ぎったのは、5人がかりでマシンガンを乱射しまくるMAGの姿。その表情は一樣に、輝かしい笑顔で満ち満ちていた。

『やっちまえー!!』

『ひゃっはー!!』

『わははははっ!!』

『撃て撃て撃てえーっ!!』

『気持ちいいぜええええええっ!!』

……………

地獄絵図としか表現のしようのない地獄絵図だった。こんな事になる可能性が容易に想像できる以上、編成拡大を許可する訳にはいかない。

かと言ってP90なら許可できるかといえば、これもノー。許可した暁には戦場・司令部問わずありとあらゆる彼女のテリトリーが煙幕に沈む。私達502小隊はともかく、他の戦術部隊に優しくない前後不覚の感覚的迷宮を作り出す訳には行かないのだ。

ならばリーダーの私ならいかと言えば、当然それもない。部下が拡大なしで戦っているのに、どうして私だけが出来るものか。独断専行は上等だけれど、そこまで非情になった覚えはない。

だから結局、私達はよっほどの事がない限りはダミーリンクなしで頑張る……つもりだ。

「MAG。はいこれ」

「おう……おう?」

さっき投げつけた工具とともに、『制作』用の工具を投げ渡す。P90にもだ。

そして、倉庫から鉄材と弾薬を大量に引っ張り出す。うん、これだけあれば足りるだろう。

それらを手に取って渋々ながらも加工し始めたMAGに、恐る恐るといった調子でその光景を眺めていた二人が問いかけてきた。

「……何が始まるんです?」

「大惨事大戦だ」

■ ■ ■

接合、溶接、固定、分解、点検。

そのプロセスを何度も繰り返し、日の落ちる頃に漸くそれらは完成した。

「——出来た」

額の汗を拭う。

目の前に積み上がるのは、大量の焼夷系トラップと戦略兵器の数々。

不味い、笑みが止まらない。こんな数の罠を作ったのは久しぶりだ——これで、これでこれでこれ!!

「これだけあれば、ヤツらを殲滅できるはず……うふ、うふふふふふ」
「ハイそのプロゲリラ、怖え顔して悦にひたってる所悪いけどよ——」

MAGが自分の背後をくいつと親指で指し示す。

そこには、榴弾、閃光手榴弾、発煙手榴弾……とにかくありとあらゆる爆発系アイテムが山となっていた。これを全部使って罠を作れば一体どれだけの——あつ、ヤバい濡れる。

「これどうやってアイツらの所まで運んで『設置』する——つて聞こえてねえな、完全にトリップしてやがる」

「MAGさん……あの人大丈夫なんでしょうか」

「ん? ——ああ、大丈夫だ。あたしが火力キチでP90が煙幕キチ、じゃありーダーは? 答えはご覧の通り、末期の罠キチって訳だからな。あれもただの発作だ」

「発作!? つていうかフリークしか居ないんですかこの小隊は……ッ!?!」

「逆接、むしろ周りが擁護できないレベルのフリークだからこそここに居るんだよなあ。どうよVector、お前もあたしらと同じ香りがするんだが、良ければウチに来ねえか？ 今なら焼夷手榴弾投げ放題だぞ？」

「サラツとウチの部隊員を勧誘しないでくれる!？」

「……迷う」

「Vectorも迷わないで!？ お願いだからNoって言って!？」

後ろで何かが騒いでいるが、そんな事はもうどうでもいい。

——仕掛けたい。ただひたすらに、誰にも邪魔されること無くこのうず高く山と積まれた手榴弾たちをブービートラップにして陣地に張り巡らしてしまいたい!

無意識の内に右手が手榴弾へと伸ばされていく。

しかし、すんでの所で私の理性が好奇心を上回った。

バツ！ と私の左手が蠢き、今まさに手榴弾を手に取ろうとしていた右腕を引っ掴む。

「くうっ……静まれ私の右腕……!」

「リーダー、急に厨二病みたいな事言っただけ——ああ、発作ね。ていつ」

「あいたあ!？」

P90が私の後頭部を空のマガジンで殴りつける。痛い!

だけど、お陰でようやく冷静になった。

とにかく、私は努めて上気した顔を冷ますようにしながら、指揮下及び共闘状態にある全員の方角へと向き直った。

そして、とびきりの笑顔を浮かべて言う。

「さあ、始めましょう。これで、あのにっくき鉄血兵共を皆殺すわよ」

B a d G a t e w a y Ⅲ

この前鉄材で作っておいた大量のワイヤーを手を持ち、倉庫の奥で放置されていた迷彩服を引っ張り出す。うわ、埃っぽい。

「ゲツホゲホッ！ うわくつそ埃すげえ！」

「これ、明らかにサイズ合わないよね……？」

「……出撃する前にその辺りの手入れが必要ね」

あちこちでおびただしい量の埃が舞い、誰も彼もが咳き込む。かく言う私も、さつきから咳が止まらない。

「ゲホゴホ……長居しているとフィルターがやられそうね。一旦外に出ましよう」

「うーい」

倉庫を後にする。

トラップ用のアイテムも全部外に出し、いざ扉を閉めようとした時、問題が発生した。

両手をかけ、全開で力を込める……が。

「……動かない」

「おいおいマジかよ。ついにぶっ壊れたかこのドア」

「むう……」

ギリギリと力を込める。

やがて、私の二の腕から白煙と焦げるような臭いが漂ってきた。

それを見たMAGが慌てて私を止める。

「待て待て待て待て！ 焦げてる焦げてる！ それ以上やったらアクチュエータがイカれるぞ!？」

手を離す。

私は両腕を振り回してみたが、さつきまでと比べてレスポンスが遅れている気がするような……？ あと、腕を動かすたびに内部でギリギリ不穏な音がする。

「あーあ、こりゃ出撃前に修理だな」

「……そうね」

「まあその前に、コイツを閉めなきゃな……つとお！」

ガゴン！ という轟音と共に、MAGのヤクザキックが鉄扉に叩き込まれる。

バキッ！ つという破碎音と共に、鉄扉が片方遠くへと吹き飛んだ。

「……おいこら」

「……やっちゃまったぜ○産」

「日○に罪を被せるなーッ！」

「ゲエーッ!?!」

P90怒りの叫び。

彼女は何処からか二丁のP90を取り出し、両手に構えた。

……あれっ、心なしか目前にプロレスなどで用いられるリングが見えるような。

「装弾数50+装弾数50で装弾数100!!」

「いやもう片方の銃どっから出した!?!」

そして天高く跳躍し、

「いつもの2倍のジャンプが加わり、F || m gで29.8100の1

960火力!!」

「そこで運動方程式かよ!?! いや待って待って落ち着け話せばわかる!!」

MAGの決死の突っ込みも空しく、P90はトップスピードで彼女目がけて突っ込んでいく。

しかもよく見たら、その口元にはピンをまとめて口にくわえる形で3つの発煙手榴弾が風に揺れていた。

「そして、いつもより3つ多い発煙手榴弾の粉塵爆発を加えれば、1960+50^{火カ}×3の——MAG! お前をうわまわる2110火

力だーっ!! 懺悔しやがれ大戦犯、^{サンダー}稲妻十字空裂斬!!」

「ついにキン○マンすら関係なくなりやがった! グワーツ!?!」

真上からの十字砲火(ただし芸が細かいことに全てゴム弾に換装されていた)を食らい、トドメの天空×字拳。相手は死ぬ。

綺麗に後方に吹き飛んでいったMAGを尻目に、P90はその場で綺麗に着地した。もしや前世は猫かなにかか。まあ、それ以前に戦術人形に前世なんてものが存在するかどうかは著しく疑問だが。

私は動きの悪い両腕で彼女を静止しつつ、呆然と立ち尽くす焼夷同好会の二人へ向けて言った。

「……とりあえず補給の類を済ませましょう」

「あつ、そう言えばまだだった……」

その一言で、やたらと覚悟に満ちた目をして二人が正気に戻る。さては私が特攻を命じるとでも思ったか。別にやってもいいけど許可も降りてないのに使い潰したら問題が——ゲフンゲフン、いくら正式に指揮下に入った訳では無いとはいえ、そう易々と仲間を使い潰せるような冷血になった覚えはない。

さて、修理修理……。

■ ■ ■

修復と補給を終え、ついでに迷彩服の清掃も済ませた。後は装備を今一度確認すれば、完璧なゲリラ部隊の完成という訳だ。

「傾注！」

姿勢を正した部下（臨時含む）を見据え、私は今回の作戦概要を説明する。

作戦名『免疫反応』——侵入者イントゥルーダーという名のウイルスを撃退するには、この上なくちようどいい作戦名だろう。

「今回の作戦はゲリラ戦。目的は侵入者イントゥルーダー及びその指揮下の鉄血兵に対し、水際で限界まで出血を強いることにある。止めを刺せれば万々歳ね」

「リーダー、質問があるんだけど」

「何、P90」

「さつき提示されたハイエンドの写真の出処も気になるけどそれはさておいて、敵の数はどれくらいなのさ。いくらキチガイ小隊として有名な502ボク小隊達でも数の暴力だけは覆せないよ」

P90がひと目でわかるほどに逸る気持ちを抑えながら私に問う。確かにアレと彼女にはちよつとした因縁があるようだし、トドメを指すためにそれを確認するのは当然か。ちなみに写真はたまたまVictorが所持してたのでそれを拝借した。偵察の帰りに襲撃されていたらしい。

……ところで、いつから私の受け持つ隊はそんなぶっ飛んだ称号を得ていたのだろうか。……いや元からか？ 私を筆頭として何処かしら頭のネジが吹っ飛んでる奴しかいないし……。ともあれ。

「アレにどれだけの指揮系統があるかは不明。けれど、前例から考えてもハイエンドが単騎では一個大隊程度が限界ね。だから、最大でも1200体——一人あたり240体倒せば行ける計算よ」

「いや脳筋か!!」

UZIが突っ込む。Vectorは何も言わなかったが、表情からして同意見なのだろう。

しかし、私の率いる502小隊は涼しい顔をしていた。当然だ、私が効率的な鉄血の殺し方を骨の髄まで叩き込んだのだから。

——一つ。

バカ正直に正面からかち合うな。アイサツ前のアンブツシュ上等、トラップだって存分に使え。卑怯だと思えば、それがお前の敗因だ。

——一つ。

使えるものは最大限に使え。敵の銃だろうがなんだろうが、なんならその辺に転がっている石でも上手く使えば相手は殺せる。

——一つ。

対多数の相手の時には同士討ちを誘発させろ。数に劣る以上はその数を逆手にとるのは当然。むしろ戦力差による慢心がある分、単騎よりも弱い。

——一つ。

誰も信用するな。味方なんて概念はゲリラにはない、鉄血兵だろうがIOP製人形だろうが視界に入ったら敵対対象と思え。

——一つ。

感情的になるな。計算づくで動き、最少の消費で最大の結果を生み出す一つの機械として己を定義しろ。『理性』とは我々の持つ最大の武器だ。

以上、総称して『サルでもわかるゲリラ五ヶ条』。実経験を元に私が

作り上げたものだが、これさえ覚えておけば個人でのゲリラ戦は少なくとも安泰と言つていいだろう。

まあ、私が何を言いたいかと言えばだ。

「では、作戦を説明する。——見敵必殺、見敵必殺だ。アンブツシユだろうとトラップだろうと手段は問わない。最少の消費で最大の戦果を上げなさい」

「Sir, Yes sir!!」

「サーじゃねえだろぶつ飛ばすわよ」

「Yes ma, am!!」

「……あー、えつと……了解?^{Copy}」

「……了解」

「よろしい」

「では、諸君。楽しい楽しい戦場へ行きましょう?」

Operation ”Anti-biotics”

「……こちら『トラップパー』。状況報告を」

『うい。こちら「レギオン」、敵影未だ見えず』

『こちら「ハントレス」、同じく』

『……「イフリート」、同じく』

『え、これマジで言うの？ ……はあ、仕方ないか。こちら「トゥーハンド」、同じく敵影は確認できず。そろそろ設置終わりそうだよ』

無線越しに味方と情報を交換する。

今、私達は不在防衛線の一角、俗に言う最前線に潜伏している。誰が呼んだか不在前線^{ドールズフロントライン}。

罠を仕掛けつつ向こう二、三時間は待機しているのだが……影も形も見当たらない。

本当にこっちに来ているのだろうか。焼夷同好会の二人が写真の他に不在防衛線^{ドールズデیفENSEスライム}に向かう的な内容の音声データも持っていたから、これだけの準備をしてきた訳だが……。

「……そう言えば、侵入者^{ウイルス}は電子関連に秀でているらしいわね」

『ウイルス……まあ、そうですね。AR小隊がそれで酷い目に合ったって話ですし』

『AR小隊だあ？ 聞いたことねえぞそんな部署。窓際か？』

『502小隊^ちの方がよっぽど窓際だよ火力キチ。だから黙ってる』

『おん？ シバくぞテメエ？』

『なんだやんのかコラ』

『いいぜこの野郎銃捨ててかかってこいや、鉄血の前にテメエからスクラップにしてやる』

『野郎ぶっ殺してやる』

『落ち着きなさいバカ二人。……でないとドラム缶に詰めてオイル漬けにするぞ』

『『ウィッス!!』』

馬鹿二人が馬鹿みたいにいがみ合っているが、ちよつとだけドスの効いた声を出してあげればこの通り。

考えてみれば、この二人の考えが一致しているところを見たことがない。

さて……鬼が出るか蛇が出るか。

まあ、鉄血を現世から叩き出すのは確定だし、気楽に待っていよう。

■ ■ ■

『……こちら「トラップパー」。状況報告を』

『うい。こちら「レギオン」、敵影未だ見えず』

『こちら「ハントレス」、同じく』

『……「イフリート」、同じく』

『え、これマジで言うの？ ……はあ、仕方ないか。こちら「トゥーハンド」、同じく敵影は確認できず。そろそろ設置終わりそうだよ』

一連の通信を聞いて、彼女は凄絶な笑みを浮かべていた。

彼女の名は侵入者——現在不在イントルーダー防衛線ドールズデイフェンスラインへと侵攻している大隊

の総隊長であり、何を隠そう以前基地へと単騎で潜入してきたP90を返り討ちにした張本人だ。

どうやら敵はごく少数、多くても一個小隊程度。

彼女が率いているだけの頭数があれば、旧式の銃火器に頼る木っ端人形共など余裕で殲滅できる。

——少なくとも、その時の侵入者イントルーダーはそう考えた。故に。

「——進軍なさい」

「総員、進軍開始ッ!!」

彼女は己が部下へと命ずる。圧倒的な殲滅を、そして蹂躪を。

その命令を補佐の一人が復唱すると同時に、今の今まで微動だにしていなかった歩兵が一斉に侵攻を始めた。

第一段階。Dinergateが先行して辺り一帯を走査し、そこをVespidoとRipper、ProwlerとStrikerの混成部隊が制圧していく。

第二段階。制圧した陣地にGuardとJaegerが居座り、高倍率サイトでDinergateが到達する前に遠距離の走査を開

始。

第三段階。大隊長補佐のDragon達と大隊長である侵入者が悠々と侵入し、末端が走査することで得た情報を元に命令を逐次下す。

しかし、彼女は心の中で疑問に思っていた。

こんな大規模で移動している以上、向こう側も当然こちらの侵入には気付いているだろう。だと言うのに、目立ったりアクションが一向に返ってこない。狙撃やトラップなど、何かしらのアクションが混ざっていてもいいはずなのだが……。

(……徹底的に籠城する気かしら)

先程盗聴した通信を鑑みても、その可能性は非常に高い。

しかし関係ない。たとえ何処に潜もうが何を講じてこようが、我らは一切合切を無視して真正面から踏みつぶすのみ。

……まあ情報はあるに越したことはないので、再び敵の通信網に潜入。ポロツとこぼしてくれたりしないだろうか。

『——でな？ ジョンの野郎はマイケルにこう言ってやったのさ。『おいおいチャーリー、俺はボブじゃなくてダニエルだぜ?』ってな!』

『三人称ガツタガタじゃないか……!』

『んでその後、よくよく考えたら二人は自分の名前がベンジヤミンとジェイコブだつてことに気付いて爆笑するってのがオチだ』

『どのみち間違っている!』

『あつ、やばいトラップ踏んだ——イイツ→タイ←メガアアア→!』

『……人の真横で閃光トラップに引つかからないで……眩しい』

『……静かにしないと後ろから頭ブチ抜くわよ、特にそのバカ二人』
「……………」

スツ、と静かに盗聴通信を切断する。

そして、テキパキと機材をしまい、イントルーダー侵入者は心の底から天に吠えた。

「——余裕かツツツ!!!」

そして、額に青筋を浮かべて補佐であるDragonへ叫ぶ。

「我慢ならん、もう我慢ならん!! 私たちをコケにするのもいい加減にしろ! 全軍突撃用意ツ!!」

「えっ!? 突撃って何処にですか!？」

「隊長! 数km先に放棄された司令部と思しき施設を発見しました!」

「でかした! ——今の報告は聞いたな!? 恐らくそこがこの防衛線(仮)の要衝だ! 余すことなく踏み潰せツ!!」

『了解!』

『了解!』

『了解!』

『ワカリマシタ』

『シユリユウダンヲナゲロ』

『手榴弾だーっ!』

『敵の潜水艦を発見!』

『駄目だ!』

『駄目だ!』

『駄目だ!』

『ワー』

命令と同時に、最低限を残した全ての索敵行動を放棄。鉄血大隊は旧司令部——不在防衛線司令部へと進撃を開始した。

侵入者が犯した失敗、それは。

よりにもよって502小隊を相手にし、なおかつ露骨に怪しい通信という名の挑発に乗ってしまった事だ。

II Operation "Antibiotics"

『いたぞおおお、いたぞおおおおおおおおお!!』

『どうした何がいたのさ！ 透明化する未確認人型知性体でもいたの!?!』

無線越しにMAGの大声が届く。報告にしたってもうちよつとどうにかならなかったのか。物理的に耳が痛い。

負けじとP90が叫ぶ。

それに対して、スツと平静に戻ったMAGが淡々と報告していく。

『侵入者だ。野郎、ガチで一個大隊分引き連れてきてやがる！ くつそ二個小隊分もマシンガンナー引き連れてるぞ!?! 羨ましい！ 銃だけでいいから半分よこせ！ ついでにアイツのゲテモノもだ！ あたしには分かるぞ、あれもマシンガンだとなあ！ ハッハーツ!!』

「……リーダー、アイツに聞いたボク達が馬鹿だったかも」
「……というか、長時間マシンガンに触れてないせいで禁断症状が出始めてるわね……」

そう、MAGは重度の重火器依存症。それ故に、最低でも2日に一度はマシンガンを持っていなければ禁断症状を起こしてしまい、最終的には半径数km以内に存在する発砲可能なマシンガンの反応を検知して一直線にそちらへと向かってしまうのだ。重度というかもはや末期。

以前、諸事情で末期症状を発症したことがある。その時MAGはたまたま検知範囲ギリギリを通っていたハイエンドモデルを一体フルボッコにして銃を奪い取り、あろうことかその指揮下にあった鉄血兵を一体残らず血祭りにあげてしまった。その際強奪した銃はスクラップになってしまったが、MAGは大破しながらも

「すっげえ気持ちよかった（意識）」

というコメントを残している。正直何を言っているのかさっぱり分からなかったが、少なくとも表情は今にも昇天してしまいそうなほ

どに蕩けていた。そこまでか。

それはさておき、どうやら向こうは私たちがこの前線に潜伏していることを既に看破しているようだ。その行軍に一切の迷いがなく、何がよりの証拠。

盗聴でもしていたか、それともどこからか高倍率スコープ越しに覗かれたか。

まあそんな事はどうでもよろしい——私たちはただ敵を塵殺するのみだ。

「MAG。出せるわね？」

『おうさ。あたしが出れねえのは死ぬほど不満だが、まあ肝心の武器がねえんだから仕方ねえさ。だから——』

『——あたしの分まで頼んだぜ、パチ公っ!!』

『ワオオオーンッ!!』

その声と同時に、近くの塹壕から一つの影が飛び出した。

それは四本の足で地面を蹴り、ファンシーなカラーリングをした見た目からは想像もつかない速度で突っ走る。

その正体は誰であろう——MAGのペット、Diner gateこと。パチ公である。

その姿を視認すると同時に、私は迷うことなく全員に指令を飛ばした。

『——作戦開始ッ!!』

■ ■ ■

『敵襲！ 敵襲ーッ!!』

無線越しに響くJaegerからの一報。

それとほぼ同時に、部下から敵に関する情報が届けられる。

『十時方向より敵襲！ 敵は単騎で——ってDiner gate!?!』

「どういう事だ！」

『分かりません！ ただ妙にファンシーな塗装のDiner gateがこっちに向けて一直線に——ぐわああああーっ!!』

『べ、ベスパダイーン!!』

『なんだアイツ、なんなんだアイツ!?!』

『速すぎる！ 敵性個体、通常の三倍の速度でこちらに接近中！』
『なんでこつちを襲うんだ、味方のはずだろ!?!』

『じよ、冗談じゃ——ウワーツ!?!』
まさに阿鼻叫喚。

たった一匹のDiner gate相手に、こちらは大混乱に陥っている。

これでは蹂躪される一方だ。そう考えた侵入者^{イントルーダー}は、すぐさま全員に指示を飛ばす。

「チイツ、総員一旦退きなさい！ ただしGuard、お前らは残れ！」

『了解!』

『了解!』

『了解!』

その言葉に、Guardを残した全員が一斉に後退していく。
しかし、その時だった。

——ピン、と短い金属音が響く。

「たまたまそこに目を向けたRipperが見たものは——
「……しまった、トラップ——」

トラップか、と言い切る前に、ワイヤートラップに接続された破砕手榴弾がRipperを巻き込んで盛大に爆発した。

大隊に激震が走る。

『何事だ!?!』

『トラップ、トラップだ！ ワイヤートラップがそこらじゅうに仕込まれてやがる!』

『なんでだよ、さつき通った時には何も無かったはずだろ!?!』

『なんだ、発煙手榴弾だと?! 煙幕ごときでどうにかなると——ぎやああああつ!!』

『13番が殺られた！ 誰だ!?!』

『分からねえ、煙幕で見えなくなったと思ったら急に死んじゃったんだ!』

『アツツ、アツウイ!?! 畜生、焼夷手榴弾だ！ ここは俺に任せて先に

行け!』

『分かった、先に逝ってくる』

『何処に逝ってんだテメエは戻ってこい!』

その時、侵入者は全てを悟った。

放棄されて久しいはずの司令部と、そこを中心として形成される原因不明の最前線。

そして、侵攻する大隊の後を追うようにトラップを張り巡らす、民生品は愚か軍用の戦術人形でも到達できるか怪しい異常な作業速度。そして、その中に仕込まれた煙幕トラップと、煙の中に潜む正体不明の暗殺者。

その理由を、彼女は知っていた。その正体を、彼女は識っていた。

所属人数、僅かに三名。しかしそのどれもが折り紙付きの破綻者。

『人罠戦線』、『白煙残響』、『敵性コード』、『弾幕火力教徒』——あろう事

か所属する全員が名前付き。

並外れた危険度故に敵は愚か味方からすらも疎まれた異常者の寄せ

せ集め——そう、その正体は。

怒りのままに、侵入者は堂々たる姿で屹立する前線基地へ向けて

咆哮する。

「——謀ったな、502イツ!!!」

III Operation "Antibiotics"

「よしよし、上手い感じに攪乱できてるね」

白煙に紛れながら、P90はそう嘯いた。

実際は攪乱どころか大混乱なのだが、本人は視界不良のせいでのこまでの戦果を上げていることに気がつかない。無線を盗聴してもいいが、そんなことしたら一発で居場所が割れるためにする訳にも行かない。

(……ま、リーダーからは好きにしろって言われてるし、元よりそうするつもりだけど？ 誰かにあつたら即刻発砲OKって気楽でいいねー)

「なつ、貴様どこから——ガフツ!？」

「はいキミに用はないからちよつと黙ってねー」

たまたま出くわした鉄血兵の口に銃口をねじ込み、短く連射。

タララツ、と小太鼓を叩くような短い音と共に、スクラップがまた一つ増産される。

さて、次はどうしてくれようか。

(……ともあれ、何があつたとしても、あのハイエンドだけは絶対にボクが潰す。リーダーにも一応の許可はとつてあるし)

本来許可など必要ない(502小隊において上下関係は名目上のものでしかない)のだが、律儀に彼女は許可を得ていた。ついでに、MAGが暴走したら何としても止めろという^{面倒くさい}ありがたい指令も頂いた。厄介すぎて涙が出そうだ。

「……ま、とりあえず^{フィールド}陣地を増やしましょー」

間延びした声とともに、辺り一面に発煙手榴弾がばらまかれ、ただでさえ濃密だった煙幕がより一層広く濃くなつていく。曲がりなりにもここら一帯はトラップだらけのエリアのはずなのだが、これほどの視界不良なのになぜ引つかからないのか。

原理は実に単純——三桁に上るほどの物量のトラップの尽くが、P

90が引つかかる前に鉄血兵によって発動しているためだ。彼女もこんな感覚式迷路の中だ、トラップによる自爆は当然警戒していたが……まさかここまでとは。

とか言っている間にも、P90の周囲ではドツカンバツコン爆発音が響いている。

一際大きく爆発音と破砕音が響いたかと思えば、トラップで吹っ飛んだと思いき鉄血兵の頭が飛んできた。

「おっと」

P90はそれを片手で受け止めると、明後日の方向へと投げ飛ばす。

そしてそれが『偶然』近くにセツトしてあった焼夷トラップに接触し、起動。巻き込まれた鉄血兵の一人がダミーリンクもろともあつという間に灰になった。

五里霧中にして死屍累々の戦場を悠々と突き進むP90。

目的の相手がいる位置も、ここが戦場のどの辺りなのかすらも判別のついていない彼女だが——まさになんか『白煙残響』の危険性。

敵味方の配置も現在地すらも知ることを放棄し、目につく何もかもを塵殺して突き進むのだ。それ故、彼女は今まで圧倒的な戦果を挙げてきた。無数の味方殺しや、仲間からの信用を引き換えに——彼女は名前付きとして扱われるまでに至った。

結果、上層部の中でその戦闘スタイルが危険視され、『鉄血工造の偵察』という名目の下に発煙手榴弾なしで敵陣へと放り出された。簡潔に言えば体のいい捨て駒にされたわけだが……何の因果か、彼女の旅はそこで終わらず、ただ根強い因縁を残すに留まることとなる。

だから、これはその時の清算だ。今度こそこの手である忌々しいガラクタをぶちのめし、自分のことを捨て駒にしてくれやがったあの元指揮官を見返してやる……！

「何処だ、何処だ……！」

地の底を這うような低い声と共に、彼女は目についた全てを蹴散らしていく。

だが、やってくるのはどれもこれも十把一絡げの雑兵ばかり。本命

いった。

呆れた目で一連の過程を眺めていたP90の耳に、110BAリーダーからの通信がこれまた呆れた声色で届く。

『……こちら「トラップパー」より「ハントレス」へ。簡潔に言うけど、「レギオン」……面倒、普通に呼びましょう。MAGが禁断症状を起こしたわ』

「……うん、確認したよ。というか目の前突っ切ってたし……。はあ……」

『なら丁度いいわね。出撃前にも伝えたけど、殺してでも止めなさい』
「念願のアイスソードかよ……」

通信終了。

P90は仕方なく、今なお咆哮と共にマシンガンの方向へと突っ走る馬鹿を追いかけ始める。なに、視界不良で居場所が分からない？

大丈夫だ、問題ない——何せあれだけの声量の咆哮なのだ、正確な位置は分からずともどの方向に居るのかは容易く把握できる。

「頼むから死ななくてくれよ、侵入者……！」
イントルーダー

そして、P90は周りから見れば変にズレた、しかし本人たちからしてみれば冗談抜きに切実な願いを胸に秘め、全力で駆けだした。

『丁度よかったリーダー聞いてくれよマシンガンマシンガンだぜ至高どころか旧人類の作り上げた文明の中で最も素晴らしいものが列を為してあたしに群がってきてくれてるんだぜつまりこれはもうあたしとマシンガンは一つになるしかないよなまたとないチャンスだ今度こそあたしは究極マシンガンドールズとして産声を挙げられるつまり一心同体になれそうなんだまさしく天にも登りそうな気持ちとはこの事だよところでリーダーはマシンガンには興味はねえかマシンガンはいいぞ火力連射力制圧力全てにおいて他の銃の追従を許さないまさしく最高の銃だおまけにその姿も完膚無きまでの黄金比これはもう祭壇作って拜んでも許されるレベルじゃないのかおっとリーダーには難しかったか要するにマシンガンを崇めよマシンガンを讃えよ全て全てはマシンガンに通ずる即ちこれマシンガンウォールイツセマグナムつまりまず最初にマシンガンを求めようとしたことが偉大なんだ分かってくれるかリーダーあたしはこの神託に従ってあの鉄血野郎どもを一匹残らずスクラップにしてマシンガンを徴収しなけりやならねえんだそう言えばさつきから煙幕が濃いなつまり闇討ちしてマシンガンを奪ってそのマシンガンで他の奴らを撃つてさらに撃つた奴のマシンガンを奪って他の奴を撃つておいおいここは楽園かよここがマシンガンのエデンかこれはもうあたしも解脱してオーブンボルトの神様の元へ向かうしかないんじゃないのか至高なる御方よいま貴方の下へ向かいますおっとお前は侵入者か奇遇だないまウチのリーダーにマシンガンの素晴らしさを説いてるところなんだお前もちよつと聞いてけよ嫌だとは失礼だなこれさえ聞いてくれればお前も立派なマシンガン教徒だあの時お前が持つてる銃を初めて見た時からお前には素養があると思つてたんだ他の奴らも誘つてみたんだがやっぱりマシンガンを使つてない情弱どもには理解できない話みたいで聞き終わつたと思つたら一斉に自害しちまつたんだよまあ人身御供として考えればいいのかもしれないがだつたらせめてマシンガンで死んで欲しかったなおっと話が逸れたさあお前もオーブンボルト教団に入ろうぜお前で28人目だ別に死ぬ時間が来た訳じゃない恐れるなお前は新たな世界への扉を開くんだ今は

まだ規模は小さいがこれからあたしが大きくしていくし既存の宗教なんざ軽く上回る一大勢力になるんだあたしらは固い絆とベルトリンクで繋がっているつまり何が言いたいかと言えばやべえ達する達するウ!!!』

「

……。

……………。

……………。

……はっ、思考停止していた。

一周まわって元に戻ったかと思えば全然そんなことは無く、むしろ正常(?)な会話が出来るようになった分狂気度が跳ね上がった。聞いたのが色々人間性を損なっている私だから良かったものの、一般的戦術人形が聞いていたら1D6も辞さない勢いだ。……そう言えば、横にいる二人は無事だろうか。まさかとは思うが……。

恐る恐る私は視線を横に向ける。

そこには、

「マシンガンを讚えよ! マシンガンを讚えよ!!」ズンドコズンド

コ

「……うわあ」

手遅れだった。

生気を感じない濁った目をしながら、出処不明の太鼓を叩いて踊り狂う『焼夷同好会』の二人。どうやら一時的狂気に陥っているようだ。こうなる前に止められれば良かったのだが……何分初めてのパターンで、対処が間に合わなかった。

幸い敵がこちらに来ていている気配がないため、P90は上手くやっているらしい。協力は仰いだが二人が参加するのはあくまでプランBであるため、使う必要がなければ彼女達の出番もない。

仕方が無いので、無線のチャンネルを切り替える。……切り替える直前に『ゴシヤツ』だの『グチャア』だのおおよそ現代戦においてあつてはならない音が聞こえてきたのは気のせいだと信じたい。

「P90、聞こえるかしら」

『どしたのリーダー。ボク今からMAG止めるところなんだけど』

「その予定はキャンセルよ。今そっちに行ったら確実に帰って来れなくなるわ」

『……もしかして行き着いちゃった?』

「恐らく。こっちも二人がやられて動くに動けないのよ」

『うっへえ』

無線越しに露骨に嫌そうな声が届く。無理もない。

とにかく、と私はP90にその辺のザコ敵の掃討、ついでに資材の回収を命じた。ついでにMAGは私が止める、とも伝えておく。

「……さ、私も仕事をしましようか」

自身の名前にもなっている銃を構え、サイトを覗き込む。

——さあ、狩りの時間だ。

Operation "Antibiotics"

マガジンを入れ替え、弾頭を非殺傷の物に入れ替える。基本的に、338ラプアマグナムは当たれば即殺だけれど、故意に弾頭を弄ってしまえばギリギリ殺さない程度の物に仕上げることができる——今回の弾頭もその試験の一環だ。ちなみに想定用途はMAGの鎮圧で作ったのはつい数日前。晴れ舞台が来るのが早すぎる。

さらに、煙幕による激しい視界不良に対抗して照準器を交換。今装着したのは最新式、赤外線検知式のハイテクサイトだ。まあどう言いつくろつても違法パーツであることに変わりはないし、むしろ変にハイテクな分壊れやすくて扱いづらいのだけれども。

そうしてサイト越しに煙幕の中を覗くと、ド近接で殴り合い宇宙している戦術人形を二体ほど発見。直前の通信の内容を鑑みても、これがMAGと侵入者で間違いないだろう。ついでにその付近でしゃがんで身を隠していると思しき影は……あれはP90か？

「マシンガンを讚えよ！ マシンガンを讚えよ!!」ズンドコズンドコ

「……、」

……無視だ、無視。相手にしたって良いことは無い。

そして、タイミングを伺い続けることしばし——二つの影がクロスカウンターを決める形で殴り合い、その動きが停止する。

今だ！

「——そこっ……!!」
発砲。

轟音と共に非殺傷弾頭が放たれる。

続けてボルトアクションで再装填し、すぐさま二発目を撃ち込んでいく。
それらは音速をはるかに超越した速度で空を裂き——

寸分違わず目標のこめかみをブチ抜いた。

ばたり、と力なく倒れる二つの影。

サイト越しにそれを確認した私は、思ったことをそのまま口に出していた。

「……あれえ??」

おかしいな、確か私は胴体を狙ったはずなのに。どうしてダブルヘッドショットを決めているのか。

呆然とする私の耳に、呆れた声をしたP90からの通信が届く。

その一言は、今の状況をこれ以上ないほど端的に表していた。

『……ワンターントウーキルウ……』

■ ■ ■

110BAの手によって見事なダブルヘッドショットを決められる数刻前。

イントルーダー侵入者は壮絶に困惑していた。

原因は目の前のコイツ。

「ああああアアアアアア」

■ ■ ■ ■ ■

———
!!!!

「なんだお前は……!?!」

部下を蹴散らしながらとんでもない速度でやってきた一体の戦術人形。しかも信じがたいことに、ダミーリンクによる編成拡大はおろか最低限の武装すらしていない。

あまりにも無謀すぎる突貫に、にわかに入イントルーダー入者の思考が停止する。

補佐であるDragonが咄嗟に銃を向けるが、発砲よりも早く戦術人形——MAGがその懐に入り込む。

「くっ、貴様に手は出させん——ッ!?!」

「うるせえ邪魔だ。マシンガン使ってねえなら……死ねよ」

ドスの利いた声と共に飛ぶ拳一発。一体どんな威力をしているのか、Dragonの駆るモビルワーカーが一瞬でスクラップにされた。

「うわあああ！ 機関部の熱が……ゆ、誘爆す——!!」

轟音と共にDragonの搭乗していた機体がパイロットもろともに爆散する。

突然の事態に呆然とする侵入者^{イントゥルーダー}。しかし状況はそんな彼女を置き去りにしてさらに進行していく。

「マシンガンおいてけ！ なあ！ マシンガンだ!! マシニングナーだろう!?! なあマシンガナーだろお前!!」

叫ぶMAG。

さらにそこから例の怪文書発言と来て、侵入者^{イントゥルーダー}の思考回路はもはやパンク寸前だった。

貞操の危機——そう思った侵入者^{イントゥルーダー}は、咄嗟に手元の通信機を手にとる。

『こちら代理人^{エージェント}。どうしました、侵入者^{イントゥルーダー}?』

「たっ、助けてくれ代理人^{エージェント}！ 変態が、マシンガンフェチの変態が襲ってくる!!」

『……はい?』

「マシンガンおいてけええええええええええつ!!」

「ぎゃああああああつ!!」

通信機を放り出し、恥も外聞もなく逃走する侵入者^{イントゥルーダー}。その際に辺り一面に張り巡らされたトラップを踏まずに済んだのは、幸運と呼ぶべきか災難と呼ぶべきか。

しかしあつさりと回り込まれ、いよいよもって後がなくなる。
そして……

▼その時不思議な事が起こった!

「……畜生、ふざけやがって! 誰がテメエなんか、テメエなんか怖かねえ!!」

……不思議なことというか、追い詰められすぎてタガが外れただけなのだが……まあそれはさておき。

侵入者^{イントゥルーダー}は手に持っていたマシンガン——正確にはマシンガンのような何か——を放り捨てると、

「野郎オブクラッシャーアアアアアア!!」

拳一つで立ち向かっていった。オイオイオイ死ぬわアイツ。

そして壮絶なキヤットファイトの末に、クロスカウンターを決めた二人に襲い掛かる非殺傷弾。

それらは完全に動きが停止していた彼女達のこめかみを正確にブチ抜いて見せた。

「ぐっはあっ!!?」

ゆっくりと二人の身体が崩れ落ちていく。

最後にその視界に映ったのは、呆れた顔をしながらズタ袋を二つ持つドチビの戦術人形だった。ああせめて死ぬならこんなチビ野郎ではなくエージェントに膝枕されながら逝きたかった。

「誰がドチビじゃいー!」

がつつりと後頭部を蹴飛ばされ、今度こそ意識が沈み込んでいく。

あと、意識を失う最後の瞬間までMAGが「マシンガン置いてけえ畜生オ!!」と叫んでいたのは気のせいであると信じたい。誰かそうだと行ってくれ。

——オペレーション『免疫反応』完遂。

自軍成果18、自軍損害1。

総合評価『A』。

A f t e r A n t i b i o t i c s

後日談、というか本作戦のオチ。

トップである侵入者^{イントルーダー}以下、指揮系統が軒並み壊滅して指揮能力を喪失したためか、鉄血大隊はほどなくして全滅。残されたのは不発弾と化した罠の数々と多量のスクラップのみとなった。

そのせいで私たちは当分の間不発弾処理に追われることとなるのだが、まあそれはさておき。

こちらの被害は大量に消費した資材、中破したMAG、およびMAGに洗脳された戦術人形二名のみ。恐ろしいことに自爆損失以外は何も被害がない。

既に煙幕も霧散した中で、燃え盛る戦場を背景にP90が帰還してきた。ズタ袋を二つ引きずって。

「状況終了。帰ってきたよ、リーダー」

「……ごめんなさいね、止めは私が刺す形になっちゃって」

「あれは仕方ないって。ボクだってあんな状況だったら二人まとめて動きを止めてるよ」

「マシンガンを讚えよ！　マシンガンを讚えよ!!」ズンドコズンド

コ

「……………」

「マシンガンを讚えよ！　マシンガンを讚えよ!!」ズンドコズンド

コ

「……とりあえず、あれも止めましょうか」

「……そだね」

未だに宗教的儀式を繰り返している『焼夷同好会』の二人。いい加減近くで騒がれるのも鬱陶しくなってきたので、私たちは二人がかりで目を覚まさせることにした。

そうして効率的かつ物理的な手段に講じることを暫し。

「——はっ!?　ここは何処、私は誰?！」

ドールズステイフエンズライ

「ここは不在防衛線で貴方は戦術人形のMicro UZI。少なくともマシンガンでないことは確かだね」

「……頭痛い」

「ごめんねー、ちよつと物理で解決しちゃったからねー」

どうやら二人とも目を覚ましたようだ。

そして、彼女たちに事の仔細を告げる。敵大隊を殲滅したこと、特にそつち側に被害が出ていないこと、約束通り資材を譲渡すること……etc.

トラップを設置したことくらいしか仕事をしていなかった二人は大きく疑問げだったが、どうやらちゃんと受け取ってもらえるようだ。後で契約不履行とか騒がれてもお互いのためにならないし、向こうも分かってくれたらしい。

だが、その前に司令部へ報告をしたらしく、通信設備の貸与を求められた。

そこで、私たちは大きく困ることになる。

というのも、私たち502小隊は全員がM戦闘中行方不明IA、K戦死IA、A無断離脱WOLという聞いていて馬鹿らしくなる超法規的処分を受けたロクデナシだ。今更通信をつなげてもらうく扱いをされるとは思えない。最悪スパイ判定もありうる話だ。一応上層部には話は通っているが、はてさてその上層部が末端まで情報を通達しているかどうか……。

「……どうする、リーダー？　ボクはリーダーに従うだけだけど」

「……つなげてみましょう」

通信設備を起動。

久しく使っていなかったために操作が覚束ないが、どうにかオンラインネットワークに復帰できた。しかしここで終わりではない。

困ったことに、この通信設備はセキュリティクリアランスレベルが異常に高く、何をするにしてもセキュリティレベルを最低三段階は下げないといけないのだ。常々思うが、放棄前は一体何をしてきたんだ、此処は？

躍起になって格闘することしばし。ようやく平常運用できるレベルにまでセキュリティレベルを格下げし、いよいよ通信を試みる。

私はUZIとVectorに席を譲り、脇から様子を眺めることに。

「うわっ、だいぶ旧式だね……」とか「ここをこうして……あ、やばっ」などの不安すぎる言葉とは裏腹に、特に大過なくどこかの司令部と通信がつながった。

「よし繋がった！ HQ, HQ! こちら偵察部隊γ、戦況報告に来ました！」

『偵察部隊γ……何い!? 二人とも無事だったのか!』

通信機越しに届くのは快活そうな青年の声。……人間の姿を見るのは久しぶりだ。私はP90と顔を見合わせる。どうやら彼女も同じらしい。まあ、彼女が502小隊に入ってから随分と経つし、それも仕方がないか。

何やら向こう側の話題で話し込んでいるが、どうやらそれも終わったようだ。少し盗み聞きしたりもしてみたが、内容はいたって普通。無事だという報告と、今まで何をしていたかの近況報告程度だった。ところで、会話の節々に「大量の作戦報告書」とか「過労死」だの「脱走」とかの不穏なワードが聞こえてきたのはあれはいったい何でしょうか。なに、もしかして最近の前線基地は奴隷でも飼ってるんですか？

まあそれはさておき……要件を話すために、私たちはUZ1達と席を替わる。

「話は終わったみたいね」

『……君たちは?』

「私は110BA。で、隣のちびっこいのがP90。言っても分からないと思うけれど——まあ、気が向いたら『502小隊』で調べてみなさいな。一定以上のセキュリティクリアランスさえあれば、きっと私たちの真実が見れるわ」

『……そうか。それで、君たちが彼女たちを助けてくれた部隊という認識でいいのかな?』

「まあ、そうなるわね」

『そうか。では、まずそのことについて礼を言わせてくれ。君たちの助力がなければ、私たちは大事な仲間を失うところだった』

「(……仲間、ねえ。あつさりボクの事見捨ててといてよく言うよ)」

「(……じゃあ、彼が?)」

「(いいや、全然赤の他人だけど?)」

険しい表情で黙り込むP90。

もしやと思つて声をかけたが、どうやら私の杞憂だったようだ。彼女を見捨てたのはもうちよつと規律に煩そうな男だったらしい。私にはそれが誰かは分からなかつたけれど、かつての上司だった片眼鏡の女を連想した。アイツは今どこで何をしているのだろうか。あの時異動のお礼に鉛球をぶち込んでやれなかつたのが今でも悔やまれる——今なら迷うことなく眉間をぶち抜いてやれるのに。

おっと、思考がそれた。今は『彼』の話を聞いてあげないと。

『そのうえ資材までもらえらるとなつては、私たちも相応の返礼をしなければならぬだろう。なにか頼みたいことがあるらば、何でも言つてくれ』

「あらそう? ……じゃあ」

——上層部につないでくれるかしら。

私は、面と向かつてそう言つた。

P90が驚いた表情で私のほうを見る。が、関係ない。私には私の狙いがある。

ふふふつ。

死んだはずの、殺したはずの戦術人形から強請られるなんて——アイツらには、いい薬でしょう?」

A f t e r A n t i b i o t i c s Ⅱ

その日、PMC『グリフィン&クルーガー』は激震した。

唐突に繋がれた通信。困惑する通信管制官を尻目に、二人の少女がコンソールに映し出される。

片方は背が高く、服装から髪色から何から何までが全部黒塗りの少女。もう片方は比較的背が小さく、腰にいくつかの榴弾を吊っていた。

そして何より目を引くのは、彼女たちが手に持つ無骨な銃器。これだけで、彼女たちが戦術人形であると看破するには十分だった。

『ご機嫌麗しゅうPMCの皆々様？ 本日お日柄も良く……この後何だったかしら』

『敬具、とか？』

『それは手紙。しかも一番最後に着けるべきものね』

『えー。もう用事終わりでよくない？ こんなのと長時間顔合わせたくないよ』

『MAGの世話か交渉か二択で選ばせてやるって言ったたら？』

『もちろん交渉だよリーダーまっかせて！』

一瞬で手のひらを返した小さいほうの少女。

そんなコントを繰り広げているうちに、通信管制官を押しつけて一人の女性がコンソールに張り付いた。グリフィン&クルーガーの上級代行官のヘリアントスだ。

彼女はコンソールに映し出された映像を見て、これ以上ないほどに眉間にしわを寄せる。

「……貴様ら、一体何の用だ？」

『あら、ヘシアンじゃない。婿は来てくれたかしら？』

「誰がスリーピー・ホロウの首なし騎士だ!? あと合コンの話はやめろ！」

『あつ、ふーん……そうね、悪かったわ』

「おい。今の言葉に込められた悪意、感じ取ったぞ」

『ねえリーダー、もしかしてこの人……』

『ええ。合コンにおいて国士無双の名を頂くほどに負けを積んできた、テンプレートに王道を征く神話級負けヒロインね』

「誰が韓信だ！ 誰が神話級負けヒロインだ!? よし貴様ら其処を動くな逆探してそっちに向かうからな……ッ!!」

平時の余裕を湛えた態度をかなぐり捨てて叫ぶ上司に、席を乗っ取られた管制官の頬がひきつる。一体彼女たちの間にどんな確執があるというのか……どう考えても藪蛇なので、彼はそこで考えることをやめた。

そこで、ハツと顔色を変えたヘリアンが管制室にいた全員に叫ぶ。

「……貴様ら、今のは絶対に関りに話すなよ!! この通信およびそれに関する他言の一切を禁する！ 違反者には相応の処罰が下るからそのような！ いいな!」

いつそ清々しいまでの職権濫用だった。

そして、ヘリアンはあまりの強引さにドン引きしている管制官たちを全員管制室から放り出し、しばらく肩で息をしながら立ち尽くしていた。

努めて平静になり、改めてコンソールに向き直る。

「……で？ 何の用だ110BA。異動して以来ぱったり音沙汰がなかったが、どうして今になって連絡をよこしてきた？」

『理由は単純。502小隊の実在が露見したわ』

「……はあ??？」

何でもないかのように投じられた爆弾に、ヘリアンの思考が停止する。

え、バレた？ キチガイどもの存在が？ ……一般の指揮官に？

もはや恥も外聞もなく、ヘリアンは聞き返す。

「……マジで？」

『大マジ』

「そうか……」

椅子にもたれかかるヘリアン。

手で顔を覆い、深々とため息をつく。

そしてそのままの調子で、絞り出すように彼女はこぼした。

「はあ、これで上層部にも露見するのは确实だな……お前なあ、せっかく人が苦勞して隠してやってるのに……異動だつて私が書類を書き換えて融通してやってるんだぞ、少しは労わろうとは思わないのか……？」

『それに関しては申し訳ないと思ってるわよ。多少は』

「でも多少なんだろう……？ で、他に何かあるのか……？ 独断専行とゲリラ戦という概念の塊みたいなお前がそれだけで連絡をよこすとは思えないんだが……」

『ああ、それに関しては単純よ。所属は問わないから、使える戦術人形を一体よこしてくれないかしら』

その言葉を聞いただけで、ヘリアンは向こう一年は胃薬と昼夜を共にする事を覚悟した。

そして、『使える』というやけに含みのこもった言い方に疑問を覚える。彼女の知る110BAならば、『単騎で戦場に放り出しても笑顔で帰還できる戦術人形をよこせ』とか訳の分からんことを言い出してくるからだ。

だが、ヘリアンはその言い方の意図に気付き、サツと顔色を悪くした。

「おい、おい……まさかとは思うが……」

『ええ、恐らくそのまさかね。上層部のスキャンダルなりなんなりを握った戦術人形を一体。それでいいわ』

「いやいやいやマジかお前……」

頭を抱えるヘリアン。

確かに心当たりはある……が、しかし奴は502小隊のメンツにも引けを取らない指折りの問題児だ。アレのせいでいったいどれだけの戦術人形が物理的に駄目になってきたか。そんな奴を502小隊に入れる？ そんなもの、気化ガソリンで満たした部屋に時限式の放電機を投げ込むようなものだ。何が起きるかは想像がつくが、それがどれほどの規模になるかは全く分からない。最悪グリフィン&クルーガーというPMCその物が消滅するかもしれないのだ。

だが、この時のヘリアンは殆ど自棄になっていた。どうせ彼女が手

塩にかけて育てていた502小隊の存在は明るみになる。だったら存在がわかかっていても手出しが出来ないようにしてしまえばいいじゃないか!

平時なら絶対に早退して休養を取るであろう危険思考のまま、彼女は突っ走ってしまう。

「……よし分かった、だったら貴様らの手に余るド級の爆弾を502小隊そこにぶち込んでやる! 返品交換一切お断りだ、それでいいな!」

『ええ、構わないわ』

「言ったな!! よし今からそつちに送り込んでやるからな! 絶対に文句言うなよ!!」

そのまま彼女は返答を聞かずに通信を切断。

今の通信に関するログの一切を削除して、速やかにとある戦術人形戦闘中行方不明に異動の辞表を出す。ただしMIA戦術人形のオマケつきだが。

そして。

「くっふふふ、サプライズ! 回る回るよ世界は回る、楽しい時間の

始まりサ!」

ドールズデイフェンスライン不在防衛線に今、ぶつちぎりの危険分子が姿を現した。

不在不通

Trickster of Grenade!

『焼夷同好会』を資材とセットで元居た基地に送り返し、ドールズデیفエンスライン不在防衛線がいつも通りの静寂を取り戻してから僅か数日後の事。

「おつすリーダー、体調も良くなってきたしマシンガン撃たせろ」

「秒で帰れ」

「キハハ、着任祝いでグレネード撃っていいかな？」

「秒で帰れいや誰だお前!？」

以上の慎重極まりないやり取りの末に、502小隊に新しい仲間が加わった。

ジト目のP90、発作が収まっても相変わらずマシンガンキチのMAG、そして以前と何も変わらない死んだ魚の目をしている（自覚のある）私の前で、彼女は優雅に一礼。

メイド服と軍服を合わせたような一風変わった服を風に棚引かせ、こう言い放ってみせた。

「遊びましょー！ 遊びますー！ こちとら狂ったグレネーダー、おやおや貴方はアリスさん？ いつでもどこでもだれとでも、世界は進むし舞台は回る！ つまり私はチェシヤキャット、MGLのお通りサ！

あ、言い辛しいしMGLミグルって呼んでネー！」

「……ヘイリーダー、今度は何やらかした？」

「別に。ちよつと上司を強請っただけよ」

「ならいいか」

「いいの？ 上司強請ってんのに『ならいいか』で済ませちゃうの?。」

「マシンガンが撃てりやなんだっていい」

「そうだねキミってばそういう奴だったね！ ボクが馬鹿だったよ！」

「つつーかグレネードつつったか？ 戦術人形にグレラン持ちがいたなんて話は聞いたことねえが」

「いやいやいや……FALとかFAMASとか普通に居たじやんか……」

顔の右半分を仮面で覆った戦術人形、MGL―140……コイツが、ヘリアンすら匙を投げるド級の地雷。……らしい。

傍から見れば変わった服装のピエロにしか見えないが、実際のところはどのようなのだろうか。

私は興味本位であることを問いかけてみた。

「MGL。ヘリアンの隠し事って知っている？」

「そりやもう当然！ 人の後ろ暗さを明かすのは大得意なものでして。ヘリアンってば実は夜な夜な某指揮官の私室に入り浸ってはバレないように○○○を×してそつと△△△――」

「カメラ止めてー!!」

×
とんでもないネタが飛び込んできた。具体的に描写するとR―18タグをつけないといけないようなのが。

あまりの衝撃にMAGは手に持っていたマシンガンをとり落とし、P90が飲んでいた紅茶を噴き出す。P90はともかく、『あの』MAGが意図的でなくともマシンガンをぞんざいに扱ってしまうというレベルの厄ネター――といえばその爆弾の規格外さがよくわかるだろう。

「これは……結構な大物が来たわね……!」

「リーダー？ いかにも戦闘中ですみたいな感じの笑み浮かべるとこ悪いけど、ここ司令部だからね？」

P90が呆れた様子で私を諭す。……言われてみればその通りだ。その横では、MAGがとり落とししたマシンガンを拾い上げて簡易的にチェックしている。あ、部屋を出た。これは外で乱射してテストする気だな。

……は、さておいて。

「……コホン。ようこそ、502小隊へ」

いったん場の空気を入れ替えよう。私は死にかけの表情筋を動かして、精いっぱい笑み（なお主な用途は威嚇）を形作る。

両腕を大きく広げ、何時ものようにこう言い放った。

「歓迎しましょう、盛大にね？」

■ ■ ■

「さて、ではイカれた野郎どもを紹介しましょう」

「もうお腹一杯だよリーダー」

「貴方たちの紹介よ」

「じゃあいいか」

「彼女はP90。502小隊の特攻隊長ね」

「P90、P90？ ワーオ、サプライズ！ なんとたまげた、あの

『スモークドール白煙残響』とこんなところで会えるとは！ ねえどんな気持ち？

ねえねえ散々尽くしたのに捨て駒にされるってどんな気持ち？」

「リーダー離してコイツ殺せない！」

「落ち着きなさいP90！ 殿中！ 殿中よ！」

反射的にP90を羽交い絞めで取り押さえたが、どうやら勘が当たったようだ。PDW片手に暴れるんじゃない、暴発したらどうする。

で、そのまま流れるように絞め落としつつ、私は自分の紹介に入る。

「部下が失礼したわね。私は110BA、この小隊の隊長を務めているわ」

「うん、まあ、知ってるよ。悪名高い『ドールトラップ人毘戦線』でしょ？ ご存知し

てますこの通り」

「急にテンション下がったわね……」

「キャラ作るってのもなかなか大変なんですヨ？ こちらら爆弾満載した軍用車みたいな人生送ってますもんで」

「要するに撃てば爆ぜる特大の地雷ってことじゃないの」

「そりゃ勿論」

先ほどまでとは打って変わって疲れきったような表情で座り込むMGL。

やはり彼女も修羅場は経験してきたのだろう。だが、こちらだって修羅場の10や20経験している。

というより、自分たちで作ってる。

その最もたる原因が――

「帰ったぞリーダー！ リハビリがてらその辺の鉄血兵を軽く3ヶ
タくらいスクラップしてきたが、あたしもようやく本調子に戻ったみ
てえだ！」

「この火力キチ……それ以外にやる事はないの？」

「つたりめえよ！ あたしにやこのマシンガンがありや十分だ！ 火
力は全てを解決する！」

「それで解決できるのは荒事くらいよ。……はあ、それで、この火力信
者がMAG。502小隊が誇るぶっちぎりのキチガイね」

「誠に遺憾である」

「遺憾も何も事実でしように」

「まあ実際そうなんだけどな」

認めるのかよ、否定するんなら最後までし通せよ——そう言いかけ
たが、すんでのところで思いとどまる。

気を改め、私はMGLに502小隊についてを説明しようとしたの
だが……

「よし、じゃあ新入り！ テメエにこの小隊の何たるかをあたしが教
えてやろう！」

「オウ、マジエステイック！ いっちばん連携も何もあつたもんじゃ
なさそうな人に教えられるとは意外だヨ！ 意外だネ！」

「何か言ったかコラ？ ——まあさておき、いくぜ？ 師匠直伝、『も
しもじゃないときにも使えるマシンガン五ヶ条』!!」

「……はい？」

「ひとつ！ 鉄血兵を見かけたら迷わずマシンガンを撃て！

ふたつ！ なんか影を見たらとりあえずマシンガンを撃て！

みーつつ！ 敵に囲まれたら一片も躊躇わずにマシンガンを撃て

！

よーつつ！ 敵味方入り混じった乱戦でも構わずマシンガンを撃

て！

いつーつつ！ 特に理由がなくとも撃ちたくなったらマシンガンを

撃て！

——以上だ!!」

「いや待て待て待て待て!!」

いつから502小隊はそんなマシンガンキチの集いみたいなモットーを掲げだした!? 隊長の私も初耳だぞ!? つつーかそれ以前に『師匠』!? この馬鹿のさらに上をいく馬鹿がいるというの……!!?

私が衝撃の事実に愕然としている間にも、状況は進行していく。

「ようし覚えたな!! 早速実践だ!」

「いや待って話を聞いてそもそもわたしグレネードの戦術人ぎよ——!!?」

MAGはMGLの腕をつかみ、そのまま拉致っていく。

バタン! と乱暴にドアが閉じられ、部屋には私と私が絞め落とされたP90だけが残された。

念願の仲間(?)を見つけたことではつちやけたMAGに果てしない頭痛を覚えながら、私は一人こぼす。

「……ヘリアン、貴方の気持ちも少しだけわかったわ……」

少しじゃなくて全部分かれば貴様——という声と、MGLの悲鳴が聞こえた気がした。

Incident Occurrence

私たちの502小隊に新たな仲間^{爆弾}が加入してから数週間が経った。

MGLはすっかり隊の風潮に順応し、今日も元気に鉄血兵を爆殺しに出撃している。ところで毎度ののように大量のグレネードを消費しているのに、弾切れにはならないのだろうか？ 少なくともこの倉庫にはアレの規格に対応するグレネードはないはずだけれど。

あと、グレネードランチャー二丁持ちの単騎駆けはさすがに男らしすぎないか？ 一緒に出撃したMAGが「良い火力だ」とか言って頷いていたが、彼女が認めるレベルの超火力つてどういうことだ。正直私はいつか来る同時出撃の時が恐ろしくて仕方ない。

そして。

私は今、ヘリアンに^{叩きつける}提出する始末書の束を書き上げながら、白い目で目の前の仲間^{馬鹿ども}たちを眺めていた。

「……で、何か申し開きは？」

「マシンガン撃てて楽しかった」

「久々にエンジョイできたよ！」

「なんかすいません」

「宜しい、MGL以外は後でオシオキね」

「何故ッ!？」

不服そうな表情を浮かべる馬鹿二人。しかしこれ見よがしにそういう道具を見せつけると、顔を真っ青にして黙りこくった。何故だろうか。戦術人形だったら生半可な道具は通用……するか。むしろ精密機器のオンパレードな分、下手したら普通の人間よりも脆い。まあ、代わりにパーツには替えがきくようになっていなければならないけれど。

けれど、問題は別にある——彼女達が出会ったという未知の小隊についてだ。いやまあ、若干約一名は既知だったようだけれど。

「404小隊……そんなものもあるのね」

「Yes! Yes! Yes!」 OH MY GOD——UMP45を小隊長として、UMP9、HK416、G11……以上四体の戦術人形からなる小隊サ。あらあら不思議驚いた、彼女もまた指

揮を取れるイレギュラー！ AR小隊とも502小隊ともまた違う、数少ない指揮官を不要とする部隊なんだ！ 不思議だヨ？ 不思議だネエ！」

道化師の殻を被ったMGL。ということは、これ以上は彼女でも知れないことなのだろう。理由は不明だが、MGLは全てを知っているならば素の状態を教えてくる。

そんな彼女が殻を纏った状態で話しているということはつまり、上層部の後ろ暗い部分を詳らかに出来る情報収集力をもつてしても知りえない『ナニカ』があるという事か。

「あ、そうそう。彼女達、なんでも『ある指揮官』にゾツコンだとか？ 彼が何処にいるのかは誰も知らない、彼が何をしているのかは誰も知らない！ 愛が重すぎて逃げたらしいけどネ！ 愛ゆえに？ 愛だから！」

「……バグってんじゃないの？」

「これ以上はボクでも知りえない！ こりやもうさっぱりお手上げな、この先行つたら逃げられない!? ああもうやめやめ、わしゃもうすつかりトヘトヘじゃ！」

それだけ言つて、彼女はその場にぶっ倒れた。調べてみたところ、どうやらろくに補給もせずMAGとP90に付き合っていたらしい……これは二人のオシオキを増やすしかないか。

そんなことを思索しながらMGLの遺体（死んでない）を検分していると、後ろから声がかげられた。

「ヘイ。ヘイヘイヘイ！ ちよい待ちリーダー、その手に持つてるいかにもな器具はなんだ？」

「これ？ 苦悩の梨よ」

「……どうやって使うの？」

「どうやって？ そんなの決まってるじゃない——これを貴方達の【残酷な描写】に突っ込んで中で【残酷な描写】して、それから【残酷な描写】するのよ」

「ヒエッ」

これ見よがしに可動部を動かし、キリキリ音を立てる。MAGとP

90は盛大に顔を引き攣らせた。いいぞもつとやれ、キリキリキリ……。

ところで昔はこんなケツタイな道具を使つて誰かを拷問していたらしいが……それにしても、これは戦術人形相手でも使えるのだろうか。

まあ、相手の情報が欲しければ適当な雑兵とつ捕まえてコード繋いでチキチキすればいいだけの話だから、使えたとしてもこれから先は廃れていくばかりだろうが……。

「……で、他に情報はないの？ その……444小隊について」

「あかしげやなげ？」

「やめえや。——あー、それでリーダー？ アイツらなんだがな、あたしらが見た所じゃなんかを探してるみたいだったぞ。それも大分ガチな感じで」

「ガチな感じ」

「うん、なんか露骨に目がイッてた。間違いなくボク達とは違う方向にぶっ飛んでるよアレは」

「ぶっ飛んでる」

「なんかすごい返り血塗れの制服着てるし、明らかに挙動不審だし。あれだね、三日くらいマシンガン断ちさせた時のMAGにそっくりだ」

「末期じゃないの」

「「そうだけど？」」

……頭が痛くなってきた。

恐らく、404小隊とやらはMGLが言うところの『ある指揮官』を追いかけているのだろうが……今は、その災害の矛先がこちらに向かつてこないことを願うばかりだ。

しかも相手はSMGが2にARが2で構成されるゴリゴリの前衛部隊。それに対して、こちらはSMGが1人とM^{前衛}Gが1人、RF^{後衛}が1人とGR^{後衛?}が1人。バランス的にはこちらの方が優秀だが、瞬間火力ではどうしても見劣りする。……いやまあ、その分1人1人が粒揃いのキチガイな訳だが。

あれ、もしかしてイケるかも？

とか思った矢先に。

「ああクソ、アイツらまだ追ってきてやがるのか……あ？」

「……んん？」

ひとりでに扉が開き、部屋の外から見慣れない男が銃を構えて入ってくる。

——樽の面倒事が爆弾背負ってやってきた。

「確保ー！ 確保ーっ!!」

「おっしや任せろお!!」

「うわっなんだお前ら!? おいやめろ流行らせコラー!」

「暴れんなよ、暴れんなよ……」

私が指令を飛ばすや否や、動ける二人があっという間にその不審者を取り押さえた。数分に及ぶ大騒ぎの末に、男は簀巻きにされてあつけなく御用となる。って待て待て、よりも寄ってベルトリンクで縛りやがったこいつら。暴発したらどうするんだ。ハチの巢だぞ。

そうして確保した矢先、ドタバタの余波で閉まっていたドアが蹴破られる。

「指揮官大丈夫……ええ!」

「もう一匹入り込んだ! 私がとっ捕まえる!」

「リーダー任せた!」

「ハアイジョージイ、マシンガンは良いぞ!」

「なんだお前らなんてモノで縛りやがるコノヤロウふざけんなHA☆NA☆SE!!」

「ちよつ、待つ、なんなのどういう事ちよつとやめつ、ヤメロオー!」

続いて部屋に入り込んだ戦術人形——持っていた銃からして、おそらくアサルトライフルか?——は私が速やかに確保、拘束。

ベルトリンクで縛る訳にもいかないのです、応急的にたまたま手に持っていた鎖で雁字搦めに縛り上げた。あんまり抵抗するものだから最終的には亀甲縛りで天井から吊るす形になってしまったが、まあ尋問さえできればいいので問題は無い。

「……はっ!? なに、何の騒ぎ!?!」

余りにも大騒ぎすぎたせいで、MGLが目を覚ましたようだ。しかしここで新たな問題が。

突然の事態で慌ててしまったのか、立ち上がった拍子に彼女の顔から仮面がポロリ。そうして現れたのは、ケロイド状どころか焼損した部品・内骨格までもが露出した、こういっては悪いがバケモノじみた

素顔。

……なるほど、仮面で隠してるのはそういうわけか。外面は修復不能なまでに損傷してるけど、どういう訳か電脳は損傷しなかったと。それで仮面を使っているのか……誰にも見られたくないから。

で、それを真正面から直視してしまった下手人二人はというと……。

「イェアアアア!？」

ダイスロール失敗。二人そろって泡を吹いて気絶してしまった。

その様子を見たMGLは、落とした仮面を拾い上げ、顔にはめ直してからぼつりと一言。

「……別にいいモン、気にしてないモン……ピエロフォビアはこれっきり、良くも悪くもキミ次第……」

……あとでフォローしておこう。ショックを受けながらもピエロを演じられるだけのメンタルは大したものだが、あのままでは普通に塞ぎ込んでしまいそうだ。

それはさておき、縛り上げた二人組を前にして、私達は話し合う。

「……で、これはどう思う?」

「まあどう考えても厄ネタだよな。404小隊とかいうのの目当てはコイツらか」

「それ通る? いやその通り! 彼こにそが愛の重いヤンデレに見初められちゃった哀れな青年、その名も?????」

「……ちよい待ち、今なんて?」

?????

「……だけど?」

「聞き取れないのだけれど」

「そりゃあフリー素材とはいえこっちで勝手に設定いじっちゃまずいし」

「何の話よ」

いや本当に何の話だ。よく分からないが、しかしこれ以上先は掘り進めては行けないような気がする。

警笛を鳴らす直感に従い、私はそこで思考をシャットダウンした。

そして、その横で亀甲縛りされている(私がやりました)戦術人形

と思しき少女に目を向ける。

「……じゃあ、こっちは？ MAG、分かる？」

「マシンガン持ちじゃないから異教徒だって言うことならよく分かるが？」

「OKその口を閉じて黙りなさい。で、P90は」

「まあお察しの通り戦術人形だねー。銃の見た目からして多分アサルトライフル持ちだろうけど、その指揮官？と一緒に逃げてきたみたいだ」

なるほど、脱走兵か。

「逃げ出してからどれくらい経ってるかは分かるかしら」

「ちよい待ち……うわっ、もしかしなくても向こう二、三ヶ月くらいは整備してないなこれ。よく壊れなかったな……」

「なるほど」

「で、恐らく逃げてる原因は、まあ……うん……」

「アイツらだろうなあ」

「奴らだロ？ 奴らだネ！ 重いよ気持ち持ちは重い、アレを見ちゃえば誰でも逃げる！」

三人の意見が一致する。

私は直に見たわけではないので断言出来るわけではないが、恐らくドンピシャだろう。イカれている方向性がまるで違う三人（しかも一人はそもそもイカれてすらいない）の意見が一致するなど、そうそうあることでは無い。つまりそういうことなのだろう。

まあ、とりあえずの身元は割れた。それで、気にすべきは次の問題だ。

「じゃあ……誰が404小隊の相手をするか決めましょう」

一瞬で室内が静寂に包まれる。

その言葉を聞いて浮かべた表情は多種多様——MAGは面倒そうに表情を歪め、P90はやって来るであろう面倒事の後始末に顔を顰め、MGLは困惑を隠しきれない笑みを浮かべた。

総じて、一斉に私に言う。

「「マジでっ」」

「そんなに嫌か」

「そりやそうだ。なんであんな自制心がNot Foundしてる奴らの相手なんざしなくちゃならねえんだよ、あたしは嫌だぞ」

「キミもたいがい自制心吹っ飛んでるじゃん。まあ相手をしたいかって言われればボクも迷わず『No』と答えるけど」

「……息を潜めてやり過ぎすっていう選択肢はないんですかね……？」

「その手があったか」

「そりや無理ね、申し訳ないけど」

そう言うと、皆が一斉に私の方を向く。その表情は一様に、『なんで言いきれなんだ』と言いたげだった。

そこで私は、オペレーション『免疫反応』で使つて以来のスクリーンとプロジェクターを持ち出す。

そうしてスクリーンに映し出されたのは、旧司令部の外部の光景。

特に使う意味もないためほとんど死に状態だった監視システム——それがようやく日の目を見た。

旧司令部の外部には広大な荒野が広がっている。

そして、そのど真ん中を堂々と行進する四つの影。

「うん？ ——げっ!!」

その正体にいち早く気付いたP90が顔を歪める。

続いて、MAGとMGLもその正体に気付き、顔色を変えた。

よく見れば、その影は人の姿をしていることが分かる。そして、その手に特徴的な武器を持っている事も。

その銃の銘を、あるいはその戦術人形の銘を——誰かが呟いた。

「HK416、UMP9、UMP45、G11……」

——そう、404小隊である。

ERROR 502 : BAD GATEWAY
(もはや不正しかない)

バタバタと、にわかには旧司令部が騒がしくなる。

司令室に入る扉の上には、無駄な達筆で『404小隊緊急対策司令部』と書かれた紙が貼られている。

ちなみに、これを書いたのは意外にもP90。IOPは何を考えて戦術人形にこんな機能を搭載したのか、それは誰にも分からない。

「……さて。では、『閣議』を始めましょう。今回の議題は『404小隊をどうやって撃退するか』ね。MGL」

「Yes! ではまず、前提条件を共有しましょう!」

MGLがそう言つて、手元のリモコンを操作する。

すると、プロジェクターが起動し、スクリーンにあるものが映し出される。

それは、今回の相手——404小隊の隊員のバスタップ写真と、彼女達の仔細なデータだった。

UMP45：SMG，小隊長。冷酷無比

UMP9：SMG，狂犬。お前も家族だ

HK416：AR，完璧主義者。酒が入るとヤバイ

G11：AR，観測手兼狙撃手。ナルコレプシー疑惑

「だいたいこんな感じ。カオスだヨ、カオスだネ?」

「なるほど、わからん」

どうということなの。

胸に抱いたその感想は小隊員全員が一致していたようで、私達は同時にその言葉を言い放った。そしてその気持ちは説明している側も一緒に、MGLは苦々しい表情を浮かべている。

だが、そこで折れることなく説明を続けられるのが彼女の長所だ。逆に言えばいくら地雷を踏みぬこうとも気にせずに進進してしまえ

「何故だア!!」

泣き崩れるMAG。当たり前だ。

明確な交戦状態にある訳でもないのに、どこの世界に対話抜きで殲滅しようとする輩がいるのか。旧時代の国家であるアメリカとソ連だつてそんな事しなかつた。核戦争にはなりかけたけど。

シヨックでノックアウトした馬鹿は放っておいて、P90が続いて手をあげる。

「仕方ない、じゃあボクが行こう」

「何を以て『仕方ない』としたのかはさておいて、どうやるの?」

「まず煙幕をばら撒くでしょ」

「ふむ」

「そして視界不良に乗じて404小隊に接近する」

「ほうほう」

「で、交渉。まあ、指揮官カツコカリは差出してもいいから、コツチに危害を加えないと約束させる」

「うん」

「もし決裂したらその場で殲滅しよう」

「……うん?」

「まずリーダーが向こうの小隊長の頭を吹き飛ばしまーす」

「えっ」

「で、その後私が残った三人のうちランダムで二人を仕留めまーす」

「えっ、えっ」

「で、ラスワンをMGLかMAGがスクラップしちゃえば一丁上がりつて寸法さー!」

「ストーツプ!!」

私とMGLが全力で制止する。良かった、彼女はまだ常識的だった。そしてP90がまともだと少しでも信じていた私が馬鹿だった。「よし、じゃあ二人がダメだと分かったところで、貴方に意見を聞くとしましょうか。MGL」

「私ですか!?!」

「じゃあさっきの案で行く? 確実に目をつけられるけど」

「……どうにかしましょう」

涙目になりながらMGLが言う。

なんか悪い事をしているようで罪悪感が湧いてくるが、しかし私では良案は思い浮かばない。精々が『旧司令部にたどり着く前に全員ヘッドショットする』くらいだ。さっきの二人と大差ない。

しばらく頭を抱えて悶々と思い悩んでいたMGLだったが、何かか思いついたのかハツとした表情で顔を上げた。

「……何かいい案が？」

「さっきのP90さんの案を応用しましょう」

「……あれに応用する余地があるとでも……?」

「そーだそーだ、あたしの案が一番手っ取り早いぞー」

「少し黙ってる火力バカ」

「煙幕チビが何言ってやがんのかねー」

「……あゝ?」

ガタン、と音を立てて、MAGが席を立つ。彼女が親指で扉を指し示すと、P90は頷き、同じく席を立つ。

彼女達二人が司令室を後にしようとした辺りで、私は声をかけた。

「はいそー、ストップ・ザ・お前ら」

「どったらコイツをどうにかしてくれ!!」

「無理ね。ほら、ドラム缶に詰められたくなかつたらとつとと席につけ」

「了解!!」

流れるように脅迫をかけ、バカ二人を席に座らせる。

どうやらコイツらは使い物に無さそうもないので、私はMGLの案を採用する事にした。

「……で、もう貴方の案を採用するのがほぼ確定になった訳だけれど。どんな案なの？」

「え? あ、はい。ええとですね、大筋は先程のP90さんの案を利用して、もし交渉が決裂した場合は即座に撤退、後日嵐が過ぎ去ってから再度旧司令部に帰還するという感じ、なんですけど……」

「決定」

よし、それで行こう。

……が、その前にやる事がある。

「じゃあ、行きますか」

「はい？ ……え、どちらへ？」

そんなの、決まっているだろう。

私は扉を開けながら、MGLの方を向いて言った。

「餅は餅屋よ。——この事態の原因に一番詳しくそうなのが二人、とっ
捕まえてあるでしょう？」

ERROR 404 : (自制心が) NOT FOUND

「404小隊についてだあ？——色々拗らせちゃまった人形の集まりだよ、そんなくらいアレ見りや分かんדרろ？」

場所は引き続き、旧司令室。

ダイスロール失敗のショックから復活した指揮官カツコカリと戦術人形を地下牢から連れ出して質問をしたところ、返ってきたのは簡潔極まりない一言だった。

ちなみに地下牢に関しては後から増設したものではなく備え付けの様だった。ただ、おびただしい量の血痕が残っていたことから、ろくなことに使われていなかったのは想像がつく。

「……まあ、アレは確かにそうとしか言いようがないわね……」

502小隊も含め、今この場にいる殆どのメンツが苦々しげな表情を浮かべる。そうでないのは、能天気マシンガンのメンテナンスをしているMAGくらいの物だ。お前はブレるということを知らないのか。

何か対処法のようなものを聞ければ御の字だったが……やはり、そう上手くは事は運ばない。となれば、残された手段はほぼ力業だけになるのだが……。

……これは、仕方ないな。

「……ええ、これは仕方ないわね。そう、仕方ないのよ！他に有効そうな解決法がないから私はゲリラ戦を選択しただけで、別に喜び勇んでやってるわけじゃないの！」

「ちよつと、ちよつとリーダー？」

「ヘイリーダー。輝くような笑顔で工具と罾の材料持ちながら言っても欠片も説得力ないぜ？」

「別にいいじゃない。腕や足の一本や二本吹き飛んだところで構わないでしょ？ コラテラルダメージよ、コラテラルダメージ」

「いや致し方ある犠牲だろうが!? ただでさえこの前の時の不発弾が

『免疫反応』

大量に残ってんだ、これ以上増設したらあたしらが自爆して吹っ飛ぶわ!!」

「その場合ボクが一番危ないぞ！ 見境なしに煙幕撒き散らすんだからな！ ただでさえK I A^{戦死}扱いでここにいるのに本当になつてたまるか！」

「——いや、オレとしてはそれくらいやってくれた方がいいな。ショック療法が効くかもしれない」

「いやウツソだろお前!?!」

とんでもないことを言い出した指揮官カツコカリに、MAGとP90が瞠目する。

そういえばMAGがツツコミに回るのは珍しいな——などとそんなことを思いながら、私は再び指揮官カツコカリに問うた。

「ショック療法、というのは？」

「アイツらな、どうも毒電波にやられてるっぽいんだわ。それも好感度反転系の奴。その前からまあ怪しいっちゃ怪しかったんだが、アレにやられて完全にタガが外れた感じだな」

「なるほど、それで……」

「よっしゃマシンガンの出番だな!! 任せとけアイツら全員スクラップにしてやるぜ!!」

「ショック療法だつってんだろ馬鹿!!」

「イッテエ!!」

案の定マシンガンを構えて暴走しかけたMAGの脛にすかさずP90がヤクザキックをぶち込む。ナイスショット、あれは痛い。

脛を抑えて飛び回るMAGを尻目に、私は戦術人形の方に事情聴取をしていたMGIへ声をかける。

「MGL。そっちはどう？」

「あ、はい。そのですね、どうやらRFB……さんは別口みたいですよ。その指揮官カツコカリさんとは数週間前に出会って、404小隊にロックオンされちゃったのでなし崩し的に同行する羽目になったとか」

「ねえ、そのカツコカリってのどうにかならない？ 地味に心に来る

ものがあるんだけど」

「でも身分証明できないじゃないですか」

「そこを突かれると痛い」

カラカラと笑う指揮官カツコカリ。ベルトリンクで縛られているのにえらく気丈だ。

未だに亀甲縛りされたままのRFBに対して質問を飛ばそうとしたその時、私が耳に装着していたインカムがザザツとノイズを発生した。基本的にこれがノイズを発生するのは通信接続時にエラーが発生した時くらい——つまり、向⁴⁰側⁴から何らかのアップローチをしてきた可能性が高い。

……嫌な予感がする。

私はその場にいた全員に通信（らしきもの）が届いた旨を伝え、そのまま備え付けの通信システムと監視システムを起動。

両システムは連携がとれるようになっていて、組み合わせればなんと司令部内はおろか司令部を中心とした半径数十m以内までなら映像と音声をまとめて把握できるのだ。……本当に、廃棄前はどんな施設だったのだろうか？

「……よし。つなげるわよ」

「待つてリーダー。ボクすごく嫌な予感が——」

インカムの通信システムを旧司令部の物とリンクさせ、システムを起動。

監視システムおよび通信システムから得た映像・音声がプロジェクターとスクリーン、そしてスピーカーを通じて、私たちに届けられる。

予感が外れていればいいのだが——果たして。

■ ■ ■

『しーきかーん♪』

『ミ・ツ・ケ・タ??』

■ ■ ■

「「ヒェツ」」

映し出されたのは、戦術人形と思しき少女の顔、その一部分のド

アップ。より具体的に言えば、目。

ハイライトが行方不明でかつ瞳孔全開の目を映したスクリーンは、心の奥底に潜む根源的な恐怖を呼び起こすには十分だった。

SANチェック、の文字と共に六面ディスプレイがテーブル上に複数転がる光景が脳裏をよぎる。

それと同時に、鋭い発砲音と共に映像シグナルがロストした。

しかし盗聴ユニットの存在にまでは気付かれなかったようで、少女たち——404小隊の話し声と思しきものがスピーカー越しに耳に届く。

『……どうだった?』

『うん、ビンゴ。指揮官は此処にいる』

「いや、一方通行の監視カメラ越しに何で把握できるんだよ……!?!」

『貴方を褒めるのは癪だけどよくやったわ、ナイン。それで、指揮官?』

聞こえているでしょうけれど——絶対、ニガサナイカラ??』

『それと、その泥棒猫……うん、5人位かしら? 分かっていると思うけど、首洗って待つてなさいね?』

『えへ、えへへへ……今行くから待つてね、しーきかーん……?』

『指揮官……また一緒に寝ようよ……? 今度こそ、ずっとずっと一緒だよ……』

その直後。

ガリガリガリガリ!!! というすさまじいノイズ音と共に、映像に続いて音声も沈黙する。慌ててシステムチェックをすると、通信システム・監視システムともに一番外周に存在するユニットが一つずつオフラインになっていた。訂正しよう、盗聴器の存在までしっかり把握されていた。

おそらく向こうは話し合いをする気など毛頭ないだろう——間違はなく対話の線は消えた。たどえ何が障害物として立ちはだかろうと、彼女たちはその全てを塵殺して指揮官を奪取する気だ。

Q. ……つまりどうということ?

A. 戦わねば生き残れない。

「コンデイションレッド発令! 総員、甲種戦闘配置ツ!!」

「うっはやつべえ、ハイエンドモデルなんざ目じやねえ修羅場だなこれ!! パチ公、ひっさびさの出番だぜ!」

『ワオン!』

「MGL、発煙弾と焼夷弾をそれぞれ一丁ずつに装填! 適宜こっちで指示出すから、屋上でポイントマンよろしく!!」

「はっ、はい!!」

「おい待て、待て待て待て!! これ! これ解いて!!」

「私も!!」

ドタバタと、今までとは比べ物にならないレベルで旧司令部が騒がしくなる。

時刻はすでに夕暮れ時——もう少しで、戦場は暗闇と濃霧に包まれることになるだろう。

そうなれば、防衛する側である私たちは極めて不利になる。旧司令部は502小隊の四人だけでカバー出来るほど小さくはない。

であれば、取れる手段はただ一つ——Bitzkrieg電撃戦。

完全に夜になる前に短期決戦を仕掛け、そして殲滅する。これしかない……が、向こうもプロ。おそらくそう上手くは行かないだろう。

私はMGLとともに旧司令部の屋上に陣取り、照準器をナイトスコープ夜戦用のそれに入れ替える。

ナイトスコープ越しの緑がかった視界に映る、4つの影——間違いない、404小隊だ。

私はその姿を視界にとらえたまま、インカムで指示を飛ばす。

「現時刻を以て緊急Extrapolation戦役『Route存—302』を開始する——
総員出撃用意!」

『こちらP90、いつでも行けるよ!』

『こちらMAG、パチ公ともども準備OKだ!』

『ワオン!!』

「MGL、オーダー・コンプリート! さあ、カオスの始まりサ!」

——さあ諸君、戦争をしよう。

ンガンの弾幕を避けれんだ！ チートか！ こうなったらあたし手
ずから拘束してマシンガンの素晴らしさを小一時間語つ——』

『はいちよつと黙つてろマシンガンキチ!! ——えーと、こちらP
90！ 戦況はあんまり芳しくないね、なんかアイツら煙幕なんても
のともしないで突っ込んでくるけど！ 第三の目でも開いてんじや
ないの!?!』

『あつバレたクソっ！ テメツ、オラアツ!!』

MAGの叫びとともに、遠慮のない発砲音が響く。どうやらまた出
くわしたらしい。

突然襲いかかってきた音の大洪水に、私は思わず顔を顰める。すぐ
持ち直してナイトスコップ越しに捜査を始めるが、やはり目立った戦
果は挙げられない。

「お、おい……大丈夫、なんだよな……?」

『畜生面倒くさい——MGL、曳光弾換装！ 出来次第煙幕内に発砲、
アイツらのアイセンサ潰してやれ!!』

「オーキードーキー！」

ガコン、という音とともに彼女が右手に持っているランチャーの弾
倉が開く。中から撃ち残しのグレネードが排出され、MGLはすかさ
ずそこに曳光弾を叩き込んだ。

弾倉を格納し、すぐさま発砲。

六つの光の線は真っ直ぐに煙幕へと向かい、その中へすつぽりと収
まった。

途端に、煙幕全体が眩い光を放ち始める。いや、どうということなん
だ。

「P90……一体何を考えてるのよ……」

『だから新型だって言ったでしょ。発煙手榴弾「ミラーハウス」、ボク
が自信を持って言える自信作さ』

『うわ！ なんだ！ 眩しいぞ！ テメエ404何しやがったぶつ殺
す!!』

「二次被害が出てるけど」

『バカは人的被害に含まないからセーフ』

「アウトよ」

「……大丈夫、なんだよな？」

飄々と言いつ切るP90。

彼女と私の会話が聞こえていたのか、背後から指揮官カツコカリが不安そうに声をかけてきた。さすがに不安にもなってくるか。

日はとつくに水平線の彼方へ沈み、旧司令部は暗闇と濃霧の中に浮かび上がる陸の孤島となった。昔はこの地域で濃霧はなかったらしいが、そんなことは知ったことではない。汚染と崩壊を繰り返したこの世界が、私たちの知る全てだ。

故に。

私は端的に、問に対する答えを返す。

「ええ、任せなさい。私達は502小隊、Bad Gateway通せんぼならお手の物よ」

『あつクソしくった！ リーダーそつちに一人行つたぞ！』

「オーケイ」

煙幕から飛び出す影が一つ。

ナイトスコープの中心に収め——発砲。

銃口から飛び出したA.T.U.B.対戦術人形用非殺傷弾は空を裂き、標的の額へと一

直線に突き進んでいく。

そして。

「なっ」

撃ち落とされた。

道半ばで弾丸は爆散。

突然の事態に硬直する私の目の前で、さらにお返しとばかりに私目にかけて一発の弾丸が飛来してくる。

「——くそっ!!」

「リーダー!?!」

咄嗟の判断で銃ごと身を引くが、その途中で腕を持っていかれそうな程の衝撃を受けた。

そのまま後方へと退避し、ライフルの様子を確認する。

……わざわざ分解して内部を見るまでもない。飛来した一発の弾丸は、見事にナイトスコープに突き刺さっていた。これでは修理も出来ないだろう。

私は通信機越しに全員に指示を出す。

「こちら110BA——ナイトスコープがやられたわ。これ以上の支援は無理ね」

『ハッ、リーダーの銃ブチ抜きたあ中々やるじゃねえか!』

『えっ、それ普通にヤバくない?』

「ヤバイわね」

今ので502小隊の戦力は大きく低下した。

MAGもP90も遠慮なく突貫しているが、やはりそれは私とMGLの支援ありき。そのうちの片方が無くなってしまった今、バカ正直に突撃を繰り返すのは得策とは言えないだろう。

数秒の黙考——そして、私は結論を出す。

「110BAより502小隊各員に通達。これより外部防衛線を放棄、旧司令部内で決着をつけるわ」

「はいっ?」

『……リーダー、本気?』

『へい。へいへいへい、それってYO! まさかだけど——』

「ええ」

想起するのはかつてやらかしてしまった禁忌の戦法。

502小隊に飛ばされる遠因ともなった、最高最悪の戦場構築。

「アレをやるわよ」

そして。

「――撒き死ねやア!!」

衝撃が放たれる。

戦術人形の見た目華奢な体が後方へ凄まじい勢いで吹き飛ぶ。

その勢いは凄まじく、その体は吹っ飛んだ先にあつた『消耗品倉庫』と書かれた鉄扉に激突。突然の高負荷に耐えきれずに、扉はあっさりと吹き飛んだ。

それでもなお勢いは弱まることなく、扉が破られた部屋の中に積まれている段ボールの山を盛大にぶちまける。

そこまでして、ようやく動きが停止した。

その様子を見たMAGは右手をぶらぶらと振りながら、

「チツ、あのジジイだったら壁までまとめてぶち破れたんだろうがな……っつーかそれ以前に一発で仕留めちまつてるか。あーやだやだ」

そのまま踵を返して立ち去ろうとするMAG。

しかし、相手は他ならぬ愛恋に狂餓えるう戦術人形少女。

並の戦術人形なら一撃で大破する一撃でも、リミッター解除状態の相手に通用するかわわれれば――まあお察しの通り、それでも無いわけ。

「……えへ、えへへへへへ」

乱雑に崩された段ボールの山の中から微かに聞こえる、気味の悪い笑い声。

それを戦術人形特有の高性能な聴力センサで捉えたMAGは、静かに天を仰いだ。

「Holy shit……」

直後に、段ボール山が内側から弾け飛ぶ。

MAGが物陰に飛び込んだ直後、遠慮のない弾幕掃射が先程まで立っていた場所を通り過ぎて行つた。

見れば、倉庫の中でゆらりと立ち上がる不穏な影。

「えへへ、えへ、えへへへ……しーきかーん……絶対逃がさないからね、待っててね……邪魔な奴らを片付ければ、本当の家族に……」
「なれるかボケ。兵器が夢見てんじやねえぞ」

情緒不安定な独り言に対して、MAGが吐き捨てる。

不愉快な返答に眉を顰めるUMP9。

「……ねえ、邪魔なんだけど。どいてくれない？ 今なら殺さないであげるからさ」

「アホ、ンな要求に誰が従うか。つーかどけつつーんならテメエらだろ、ここは502小隊の拠点だわ」

そう、とUMP9は呟く。

そして、ハイライト不在の双眸でMAGを見据え、手に持ったSMGを構え直した。

「だったら、予定通り全員殺せばいいよね！ そうすれば、私たちと指揮官はずっと一緒になれる！」

「……おいシキカリ、お前一体何したんだマジで」

『……すまん、正直俺にも分からない。いったい何処で何を間違えた』
「いやあたしが知るかよ」

ジト目で即答するMAG。

その通信内容を聞き取ったのか、UMP9は輝くような笑顔を浮かべた。

そして叫ぶ。

「指揮官！ 指揮官！ しーきかーん！ 皆来たよ、ほら怖がらないで出てきてよ！ 何もしないから！」

『怖がるに決まってるだろ、お前がそう言っただけで何もしてこなかった試しがねーわアホー！』

「えー！」

「……その、ドンマイ」

『お前のその気遣いが何より有難いぜ、MAG』

「これだからマシンガン持ちじゃない戦術人形は駄目なんだ」

『訂正しよう、お前を一瞬でも信じかけた俺が馬鹿だった』

「だろうな。他の奴らからも言われまくってるわ、直す気ねーけど」

『いや直せや!? 多分だけどお前それさえ直せば絶対『指揮官……?』

どこに居るの……、どこ、どこ、どこドコ何処!!』ヒエッ』

怒鳴り声が鼓膜を揺さぶる。

ついでに、404小隊のものと思しき声も微かにだが聞こえてきた。あれは多分HK416か？ 110BAが相手にしているはずだが……。

続いて、インカム越しに盛大な爆発音が響いてきた。

それはインカム無しでも聞こえるほどに大きく、建物が揺れると共にパラパラと建材の破片が降り注いできた。

「あー……そうか、今上の方は魔窟になってんのか。うっは、行きたくねえー……」

「行く必要なんてないでしょ？ だって、お前ここで死ぬんだし」

「誰が死ぬかボケ。あたしが死ぬ時は全世界にマシンガンを布教し終えた時だ」

首を傾げたUMP9に対して、MAGは吐き捨てる。その理論で行くと、向こう数世紀は稼働し続けるつもりのようなのだが、果たしてそれまで持つのだろうか。コイツの場合平気そうなのが余計にリアリティを誘う。

そして、

「つたく、マシンガン撃てねえのはこの上なく癪だが——リーダーから不殺って命じられてんだ、従うしかねえわな」

そう言って、再びファイティングポーズをとり。

片手でぐいぐいと挑発しながら、不敵に笑って見せる。

「邪魔を、するなッ——!!」

「来いよ恋愛狂い。そんなに愛が欲しいってんなら、あたしの拳をくれてやらあ!!」

咆哮と共に襲ってくるUMP9、そしてそれを迎え撃つMAG。ラウンド2が幕を開ける。

Grand Guignol III

所変わって、此処はMAGとUMP9が激突していた階の一つ下——いわゆる『地下倉庫』にて。

彼女たちは仲間と同様に激戦を繰り広げていた。

「しっつこいなあもうー！」

「……邪魔……！」

現在、地下階層は過剰な量の煙幕によって極度の視界不良に陥っている——この事実だけで、ここで戦っている戦術人形が誰か大体の想像はつくだろう。

そう、『スモークグレナード白煙残響』P90だ。

それに対するは404小隊の腕利き狙撃手、G11。

眠たげに細められた目からこれまたハイライト皆無の瞳を覗かせながら、彼女は手に持つ銃を取り回す。

——発砲。

パリン！ という甲高い音とともに、光源がまた一つ消失した。

それに伴って、煙幕のどこかから声が届く。

『あつー！ くそつ、やりやがったなー！ 資材だって無限じゃないんだぞ、ただでさえ蛍光灯は作るの面倒なのに！』

「……そんなこと知らないし……」

小太鼓を叩くような音とともに、5.7mm弾の雨がG11に襲いかかる。

しかし彼女は物陰に身を潜めてこれを回避し、返す刀で銃弾を叩き込んだ。

手応えはない。

まあ仕方ないだろう——G11はそう考え、煙幕の中をゆつくりと動き始めた。

それにしても、

『おーにぎーんこつちら、手ーの鳴ーるほーうへーん』

「……、」

ウザい。ただひたすらにウザい。

煙の中からどこからともなく届いてくる煽りが、G11の額に静かに青筋を浮かばせる。

だが――

「――手の鳴る方へと言ったな、あれは嘘だ」

「ッ!!」

背後から突然低い声が響く。

咄嗟に振り向き発砲するが、やはり視界は煙幕一色で何も見えない。

そして、

『あれは嘘だ――と言ったなそれも嘘だ！ ダイナミック・ハンマーッ!!』

今度は正面からの一撃。

あろう事か、持ち手に『100t』と印のされたハンマーが複数ずつ飛んできた。こんなものを喰らえば戦術人形だとしてもただでは済まないだろう。

横っ飛びに回避するが、その脇でとんでもない轟音が響いた。見れば、表記に偽りなし――重力によって落下したいくつものハンマーが、それぞれ床にクモの巣状のヒビを走らせている。

唐突に訪れるシンプルな命の危機。なんという事だ、ここで死んだら指揮官と同じ布団でにやんにやん出来ないではないか――その思考が、G11の眠気を遥か彼方へ追いやった。

カツ!! とその双眸が見開かれ、ハイライト不在&瞳孔全開の瞳があらわになる。

「邪魔……邪魔、邪魔、邪魔!!」

乱射。

目に付いた怪しい場所へと手当たり次第に発砲する。ただでさえ弾痕まみれだった地下改装がより一層スタボロになっていく。

そんな修羅場の中、P90が何をしているのかと言うと……。

(うわぁー……これは後が面倒そうだな……)

乱射しながら進軍する彼女の背後に悠々とついて行っていた。吐息が届きそうな距離にいるのにどうしてバレないのだろうか。

答えは簡単——煙幕の視界不良に加えて、彼女は隠密行動に特化した装備をしているのだ。某戦争屋式TRPGでいえば隠秘ガン振りである。

ゆつくりと歩くG11の後ろをついていきながら、P90は時折発煙手榴弾を放り投げる。

新型発煙弾『ミラーハウス』——通常の煙幕に加えてチャフと特殊フレアを複合した、お手軽妨害兵装だ。

チャフによって特殊フレアによる熱と非可視光線を乱反射させるため、煙幕の範囲内において既存の照準器はほぼ全てが使用不可能となる。使えるのはせいぜいがアイアンサイト程度だが、しかしそれも煙幕の存在によって妨害されるのだ。

ハンドメイド品なのもあって、一個単価は通常の発煙手榴弾の三倍近くにも上るが……しかし、妨害という面においてこれ以上ないカードである。

そんなわけで、彼女たちは互いに目視で相手を探すしなくなり——先に相手を見つけたP90が、こうして相手をおちよくりつつも妨害を継続している訳だ。

「へーいー……こっちこっちー！」

「!!」

発砲。

しかし放たれた銃弾はあらぬ方向へと飛んでいき、旧司令部の備品を一つ破壊した。

それは、部品の大半を喪失しながらも、歪んだ声でこう話し続ける。

『へーいー！ コツチコツチー！』

「……スピーカー……？」

そう、それこそがP90の打ち出した対策——その名も『全包围スピーカー』。名前が安直？ 大変結構、わかりやすくいいではないか。

これは、404小隊の相手をするにあたってP90が
← 単独にしても相手するのは骨が折れる

だったらまともにかち合わなければいい

←
じゃあ煙幕じゃん、地下を使う

←
でも煙幕の中でも声から位置バレしそう……

←
じゃあ音源を複数用意すればいいんじゃないの？

という理になつてゐるんだかかなくなつてないんだか分かりやしない
思考によつて生み出された奇策だ。

現在、地下階層には破壊された分を除外しても二桁個数のスピー
カーが待機している。

それをフル活用すれば、

『どこ狙つてんのー！ こつちだつてば！』

『バーカこつちだよー！』

『へいへいピツチャービビつてるー！』

『こつちだと言つたなあれは嘘だ！』

『と言つたなそれも嘘だ！』

『粉バナナ！』

『パパパパワー（ドドン！）』

——このような地獄を生み出すことすら容易い。

あちこちから聞こえた標的の声に、G11は焦った表情で辺り
を見回す。

「なんだよ……なんなんだよ、お前ら！ 指揮官と私の邪魔なんだよ、
とつと顔だして殺されるよ!!」

『顔出せだつて！』

『きやー！ 週刊誌にスキャンダルぶち抜かれるかも！』

『どうするっ？』

『どうしようっ？』

『出しちやうっ？』

『出しちやおつか？』

『じゃあ、お言葉に甘えて！』

「——やあ」

「えっ——？」

振り向くと、そこにはスタンロッドを振りかぶったP90の姿。

G11が発砲するよりも早く、首筋目がけてそれが振り下ろされた。

そして、

「あばばばっばばバンドウェイジィ……!?!」

不思議な悲鳴とともに、少女の矮躯が崩れ落ちる。

その様子を見ながら、P90はスタンロッドを振り下ろした体勢のままため息をついた。

「……はあ。全く、ゼーんぜん隙見せないでやんの。何とか虚は突けたけど……不殺とか面倒な制約なければ背後とってズドンで一瞬だったんだけどなー」

そして、G11を縛ろうとして、手元に縄がないことに気づく。と
いうか、あつたらさすがに用意周到がすぎる。

しかし。

縄を探し始めた彼女の背後で、ゆらりと立ち上がる暗い影。

それに気付いたP90は、驚きで目を見開いた。

「——アハハ。なーんて、言うと思っただ？」

「……わお」

G11は狂気的な笑みを浮かべながら、その双眸でP90の姿をしっかりと捉える。

しかしハイライトは相変わらず不在、瞳孔全開。おまけに先程の電撃のダメージもまだ残っているようで、ピントもあっていない。それによって余計に恐怖度が増している。

「この程度——想定範囲内だよ!! アハッ、ハハハ! ヒヤハアア!!」

「だーめだこれ、ショックで完全にトンじやった」

諦念の籠もった声でそう嘯きながら、P90は己の半身である銃を構える。

こうなってしまうては、もう加減は出来ないだろう。向こうが殺す

気で突っ込んでくる以上はこちらも殺す気で行くしかない。

「——邪魔をするな、理不尽に死ね——!!」

「かかってこい、この拗らせ恋愛狂——!」

——第二ラウンド、開始。

Grand Guignol IV

続いて、地下階層でもエントランスでもない地点にて。

旧司令部中層、通称『デイスカッションエリア』。ちなみに司令室はこの階層に位置する。

其処でもまた、激戦が繰り広げられていた。

「焼夷弾も催涙弾も何でもできる！ 踊れ踊れよ愉快に踊れ、光呑み込み闇を吐く！ おやおや困ったこいつはまずい、みんな揃って狂気の果てに!? 世界は回る回るよ世界、生まれて来たるは死ぬためサ！ 笑って遊んで酔いしれる、さもなきやアナタと出会うは悪魔、集めた大罪こしらえて、作るは七つのエンディング!?」

「ごちゃごちゃ騒がしい、立ったまま死ぬ……!!」

502小隊所属のMGL-140。それに対するは、404小隊の隊長であるUMP45。

非殺傷グレネードをばら撒きながら狂い舞うMGLに、UMP45はギリリと歯ぎしりしながら肉薄する。

しかし、接近したところで待っているのはグレネードランチャー本体による痛烈な殴打。

では、何故それでも接近しようとするのか？

その答えは、彼女の持つ銃にあった。

その銃口にはべったりとピンク色の何かがへばり付き、UMP45の持つ銃を強制的に発砲不可能な状態に仕立て上げていたのだ。

『銃を持った戦術人形は特級の危険対象に値する』——だったら、その銃を使えなくしてしまえばいい！ 武装解除は、皆が幸せになる為の第一歩！」

「それで世界が平和になったら、私たちは此処にいないツ!!」

「YES!! けれども残念セカイは無情、破滅ばかりの世紀末！ となればモチロン武装は必須、結果このザマ無限にループ！ 回る回るよ世界は回る、人を置き去り一人で進む！ つまりワタシは戦争屋、狂った世界を吹き飛ばせ！」

狂ったように歌い踊るMGL。UMP45はそれに噛みつき、ナイ

フ片手により懐深くまで肉薄していく。

しかしMGLは余裕の表情でグレネードランチャーを振り回し、懐からのタクティカルナイフでの鋭い連撃をすべて防いでしまう。

より一層怒りの表情を強めながら、UMPは疾駆する。

だが、そこでMGLは困ったような表情を浮かべた。

「……おっとおーっとコレまさか？ もしや徹底抗戦するおつもりで？」

「当然でしょう。指揮官にくつつく悪い虫は、私が全部潰さないと……!!」

「あーらら。こいつは困ったどーしよう」

ポリポリと仮面で隠れていないほうの頬を搔くMGL。

目の下の涙模様が表情に合わせて歪み、とても不思議なことになっている。

「その指揮官がオノゾミなのさ——なんでも殺しはダメだって。おかげでワタクシ大・変・面・倒！ そのせいで数少ない作るのめんどいやたらとお高い三重苦の非殺傷弾乱射してるんデスヨ？ ちよつとはアタシの苦労も考えてほしいね全く！ 世界は不幸に満ちている！」

「……いや、知らんし」

プンスカ怒るMGL。それに対して、UMP45は思わず真顔になりながらもそう返答した。

しかし攻撃の手は緩めない。MGLも分かっているようで、相変わらずくるくると回りながら辺り一面に催涙弾と閃光弾をばら撒いている。

だが、そこでUMP45は疑問に思った。

(……普通のグレネードランチャーだったら、ここまで近距離の環境で爆破は出来ないはず……)

ピンと来た。

通常のグレネードランチャーは、誤って味方を爆撃しないように近距離では弾頭が炸裂しないように設計されている。

その『近距離』の判別基準は、ライフリングによる弾頭の回転数。

『一回転辺りの進行距離は約〇m』という情報をあらかじめ入力しておくことで、一定数以上回転しなければ何かに命中しても炸裂しないように設定されている。

違うシステムを採用しているグレネードランチャーも存在するが、おそらく大多数はライフリング型を採用しているだろう。

だが、解せない点がひとつ。

グレネードの内のいくつかは、不自然なところで炸裂しているのだ。

床に落ちてしばらくした所で突然爆発したり、空中で炸裂したり。通常のグレネードランチャーの挙動を知っている側からしてみれば、不自然極まりない。

そもそも大前提として、グレネードとはどこかにぶつける事で炸裂させるもの。それがその辺に転がって自由に炸裂したり、あまつさえ空中で炸裂するなど、どう考えてもおかしい。

——では、どうやって？

「ウィッヒッヒー！」

ぽん、という軽い音と共に、再びグレネードが放たれる。

UMP45は視線を鋭くし、腰を低く落とした。

そして。

「——せえっ!!」

気合い一発、なんとグレネードを蹴り返したのだ。

発射の勢いはそのままに蹴りの勢いまでもが加算され、放たれた弾頭はとんでもない速度でMGLの元へと打ち返された。

そしてその弾頭は、MGLの背後の空中でやはり不自然に炸裂する。

「あつぶない!!?」

「やつぱり……!」

慌てて回避行動をとるMGLとは裏腹に、UMP45は確信を得たという風に叫んだ。

そう、そのカラクリとは——

「お前、自分と弾頭の距離で爆発するように仕込んだな！ 自分の体

に、何か細工をして！」

「あーつとどうとうバレちゃった！ 当たりだヨ？ 当たりだネエ！

そうさ私は戦術人形、利点ありきの有効活用！」

歌うMGL。

どうやら彼女、自身の体に細工をしている様だ。グレネードとリンクしている所を見るに、それもビーコンに類する何かを。

それを距離観測の基準とすることで、理解不能な炸裂の仕方を成立させていたということか——よく良く考えれば、床に転がっていたものは彼女が遠ざかった瞬間に炸裂していた。

タネは割れた。

であれば、あとは距離感を調整して突っ込んでいくのみだ。

「グレネードがなんだって言うのよ！ イクゾオオオオオオオオオ!!」

「いいよ、来いよ！ そんなわけで爆碎掛けますねえ、エンジン全開!!」

叫びとともに突っ込んでいくUMP45。対するは、仕掛けを見破られてもなお余裕そうな表情を崩さないMGL。

『俺たちの戦いはこれからだ！』というテロップが流れてきそうな光景と共に、激戦は続く——。

Grand Guignol V

MAG、P90、MGL——ここまで、三人の戦闘を詳らかにしてきた。——であれば。

残るは、一人しかないだろう。

旧司令部最上層、通称『アンノウン・プレース』。名前の理由は、502小隊の誰にもこの階層の部屋の使用が理解できなかったため。

そしてそこは今、110BAの独壇場となっていた。

「あつははははっ!! この程度じゃ足りないわ——もつと、もつとよ!!」

「このっ、自軍規制……ッ!!」

狂ったように哄笑する110BAに、その相手であるHK416が叫ぶ。

それもその筈——今、アンノウン・プレースには蜘蛛の巣もかくやというレベルの密度でトラップが設置されている。MAGが魔境と評したのもむべなるかな、と言ったところだ。

そう言っている合間にも、416は手慣れた手つきでトラップを一つ解除し、その時間で110BAが二つのトラップを仕掛ける。

先ほどからこの繰り返しだ。堂々巡りすら成立していない。

「どうすれば……!!」

もしもこの場に居るのが彼女たち404小隊だけならば、容赦なくトラップを起爆して旧司令部を瓦礫の山に変えていただろう。

だが、この施設の屋上では愛しい愛しい指揮官が待っているのだ。絶対にそんな手段はとれない。

では、どうすべきか。

悩んでいる間にも、刻一刻と状況は変化していく。

『ドールトラップ人罠戦線』……まさかここまでなんてね……!」

「ま、お褒めに預かり光栄の至り、つて所かしらね。今回は時間が足りなかつたから少なめだけれど、満足いただけただけでようで何よりよ」

からからと笑いながら、110BAは榴弾片手に言う。文章では分からないだろうが、お互いにハイライトが仕事を放棄していた。1

10BAは黒曜石のような瞳を淀ませて、416はトパーズの瞳を昏く染めて。

なんという修羅場。耐性のない者が見たら速やかに失禁すること請け合いだった。

「……それで？ 愚かしくも502小隊に楯突いたのだし、当然殲滅される覚悟はできているのよね？」

『ザザツ——おい待て殺すなやめろ！ 不殺って言ったよな!』

「ああ、冗談よ冗談。少し言い過ぎたわね」

『そ、そうか……』

110BAが耳に着けているインカムから、男性の怒鳴り声が届く。

彼女はそれに対して、こう返事を返した。

「電脳は残すわ」

『いやそれ以外も残せや!!』

通信切断。

通信機のスイッチを切り、彼女は狂気的な笑みを浮かべてHK416を見据える。

そして、手に持っていた手榴弾を思い切り投げつけた！

「チッ!!」

416は素早くこれを撃ち落とす。

直後、バシユウツ!! という音と共に世界は白く塗りつぶされた。

その正体は、

「発煙手榴弾……!」

『悪いわね。煙幕はあの子だけの特権じゃないのよ?』

瞬く間に階層が煙で埋め尽くされ、相手の姿はおろか設置された大量のトラップすら視認できなくなる。

416は銃を構え、その場で辺りを見回し始めた。

そのままナイトスコープを覗き込むと、そこにはすでに110BAの姿はなく。

「……クソツ」

悪態をつき、416はゆっくりと歩き始める。

隅々に仕掛けられたワイヤートラップを可能な限り避け、時折解体しながら、彼女は周囲を検分し始めた。

……しかし、これだけの量を仕掛けておきながら一回も自爆していないのはどんなテクなのだろうか。文字通り蜘蛛の巣のように張り巡らされているのに、彼女の進路上には解体された罫の一つもありません。

「どうやって……?」

「知りたい?」

「ッ!!」

背後から聞こえる声。たまらず背後へ向けて発砲するが、手ごたえはない。

どれだけ近ければそうなるのか——彼女の耳には、吐息の当たる感触がしつかりと残っていた。

しばらく呆然と突っ立っていた416だったが、こうしちやいられないと再び調査を始めた。愛しの指揮官の為にもこんなところで立ち止まってはられない。

——やがて、目の前に一つの扉が見えてきた。すりガラス越しの風景は暗闇に塗りつぶされ、伺うことができない。

「……ここに、指揮官が?」

……ノブを回す。特に施錠はされていないようだ。

ゆっくりと扉を開く。そこには——

——視界一面に広がる曇り切った夜空。そして先ほどまで自分たちが通っていた荒野。

……ついでに、どこにも見当たらない床。

……あれ?

「——きやあつ!」

バランスを崩しかけたが、すんでのところで立て直した。

急いで扉を閉め、内側から鍵を閉める。ああ、これ内鍵だったのか、とそこでようやく気付いた。

どうしてこんなふざけた扉があるのかと周囲を検分してみれば、扉の上に小さな看板が。

そこに書いてあったのは——『筋肉式マシンガンペイルアウター』。訳が分からない。

「……何なのよ、本当に……」

「実際訳が分からないわよね。それ、ウチの馬鹿が大喜びで増設した扉なのよ」

「!!」

振り返る。

すっかり煙が晴れたそこには、大量に仕掛けられたトラップ地帯にぽつりと存在する空白地帯^{ブランクスポット}。そして、その中心に置かれたテーブルと二つの椅子。

110BAはその椅子の一つに座り、優雅に紅茶を嗜んでいた。

彼女は416に空いている席を勧め、

「まあ、かけなさいな。多分だけれど、情報交換は大事よ?」

「……、」

416はわずかな逡巡の末、ゆっくりとそのエリアに近づいていく。

110BAは銃を構えるどころか床に置いていて、戦意の欠片も感じ取ることとは出来なかった。

故に、彼女は席に着く。着いてしまう。

その直後。

バツン! という音と共に、辺りが暗闇に包まれる。

同時に、椅子に座った416の体を重厚な拘束具がギチギチに締め上げた。

「なっ……これは!!」

「驚いたでしょう?」

そう嘯く110BA。416は怒りの表情とともに、彼女のほうに顔を向ける。

彼女は相変わらず悠然とした笑みを浮かべていたが、しかし416的に突っ込みたいところは別にあった。

「私謹製のダイナミック拘束椅子『がちりチェア』よ。どう、手も足も出ないでしょう?」

「お前も巻かれてんぞ!!」

「ええ、こればかりは私のうっかりミスね」

そこにあつたのは、416と同様にがちり拘束された110BAの姿。

そして、目の前がスポットライトによって明るく照らしあげられる。

……そこにいた、不気味極まりないピエロ人形も。

416は青い顔をして、110BAに問うた。

「……ねえ、もしかしてアレも?」

「……ええ、アレもトラップの一環ね」

そして。

彼女たちは顔を見合わせ、そして言う。

「——助けてええええええええええええええええええええええええ!!!」

——悲しいかな。

——二人そろって、ホラー系に対する耐性は皆無だった。

Grand Guignol VI

「……なあ。俺たちは此処にいて大丈夫なのか？」

旧司令部屋上。

星一つ見えない曇天の寒空、その下で毛布にくるまる野郎と少女、辺りを歩き回るペットロボット。

何とも言えない光景の中で、野郎が口を開く。

誰であろう、彼こそが今回の騒動の原因（を連れてきた戦犯）である指揮官カツコカリである。

ドカンバコンと派手な音が響いてくる下層のことを務めて無視して、彼はつぶやく。

「……さあ？」

それに返答したのが、アサルトライフルの戦術人形のAm RF B。彼女は首を傾げ、もぞもぞと毛布の奥にもぐりこんだ。

どのみちここでの戦闘行動は全て502小隊に一任されているし、自分たちがどうこうできるわけもない。

『ワン』

ほら、やたらと頼りない護衛もそう言っている。

彼(?)はアイトをピカピカと点滅させながら、相変わらずその辺を歩き回っていた。

というか、見た目がどう見ても鉄血工造の『アイツ』なんだが……なんだこれ、背信？

「民生品のペットロボットじゃない？ やたらと見た目がファンシーだし。ほら、取説(?)にもそう書いてあるよ指揮官」

「サラツと人の心を読まないでいただけますかねえ。あとその露骨に機密っぽい書類どっから出てきたの」

「なんかその辺に置いてあったよ」

「返してきなさい」

【TOP SECRET】と銘打たれた小さな冊子をパラパラとめくりながら、RF Bが言う。

それはこの旧司令部に遺された数少ない手がかりであり、此処が何

の為の拠点だったのかを示す重要な書類だったのだが……しかし残念ながら、RFBにとっては暇つぶし程度の価値しかなかった。

彼女はポイとそれを投げ捨て、指揮官カツコカりに擦り寄る。

「指揮官」

「どつたの」

「……好きだよ」

「そうですか」

懐から煙草を取り出し、おもむろに火をつける。

彼はそれを口にくわえ、星のない夜空を見上げた。

……相変わらず、風情の欠片もない空だ。

「……ま、こういうのも悪くはねえかな」

『ワフ』

「おうワンコロ、お前さんもそう思うか」

『グルルルルル』

「思わんのか」

どうやら同意は得られなかったらしい。寂しいことだ。

彼は相変わらず轟音に揺られながら、手に持った通信機のスイッチを入れる。

先程はイカレマシンガンと会話しただけだったが、あそこから状況に進展は見られるだろうか。

スイッチオン。

『くたばれ^{自衛規制}?!?!』

『テメエやんのかゴラアマシガンとやんのかゴルア!!』

『残念だったな、トリックだよ』

『指揮官 ア”ア”ーンッ』

『ウエーンヒツヒウエンヒツヒ！ 遊びましょ！ 遊びます！』

『泣いて死ねッ!!』

『イーサアーン!!』

『なんてこった！ 警察官が殺されちゃった！』

「おい最後」

どこの誰だバ〇オ7やってんの。

確かにあの死に方はあんまりだと思っただけどきあ。

あれってやってからしばらく虫とカビと夜中のトイレが怖くなるよね。

「……大丈夫なのか？」

音声だけでも阿鼻叫喚なのが伝わってくる。

あんなのが自分のところまで踏み込んで来たらと思うと、恐ろしくて夜も眠れない。いや眠れないのは元からか。

考えてみれば、ココ最近まともに寝てないな。睡眠時間が1日三時間くらいしかない事がザラだった。指揮官(仮)の彼でそうなんだ、当然その部下はもつと酷い。不眠不休で働きづめだ。

「月月火々水木金金つと……あー、ブラックつれえ」

部下が忙しければ上司も忙しいという末期企業——それが、我らがグリフィン&クルーガーである。こんな酷いことがあつていいものか。おお神よ、さては寝過ごこしてるなオメー。常日頃から復活する余力を残しているくらいなんだからもうひと働きはして頂きたいところだ。

それはさておき。

相変わらず阿鼻叫喚な音声を放ち続ける無線機に視線を向け、彼は煙草をくわえながらこう洩らした。

「……なんかもう全部ほっぴらかして逃げてえな」

「逃げられてないからこうなってるんじゃない？」

「実際その通りだから始末に負えないんだな——これが」

そう。

なんかあまりにも動作が板についていて忘れかけるが、一応彼らはドールステイフェンズライン不在防衛線の『客人』である。というか、現状では厄介事を持ち込んだ爆弾野郎としての面のほうが大きいし、実際本人も自身をそう認識している。

「まさか居場所が割れるとは思ってなかった」

「恋する乙女は怖いんだよー、指揮官?」

「ええまあ、身をもって体感してるよ。現在進行形で」
「だねえ」

『ワン』

ワンコロが一声鳴いて同調する。いやいや、女性関係で悩むってタマでもないだろう、見た目的にも。

そんなことを考えながら、彼はぶかぶかと煙草を吹かす。

その時だった。

バアン！ と勢いよく扉が開かれ、そのまま大破する。一体全体どういう勢いでこじ開けたらそうなるんだ。

そしてそこから姿を現したのは――

「――邪魔、邪魔、邪魔、邪魔!! なんて死なないの、どうして邪魔するの!?!」

「はん、テメエのクソ雑魚STRでこのあたしがどうにかなると思ったら大間違いだぜ！ くたばれキチガイ野郎が!!」

――UMP9とMAG。

彼女たちは戦術人形にあるまじき――いや、『だからこそ』か?――ゴリゴリの肉弾戦を繰り広げながら、のんびりしていた二人(と一匹)へ向けて突き進んでいく。ところで彼女たちは最下層のエントランスでドンパチしてたはずだが、もしかして取っ組み合いながら登ってきたのか?

そして当然彼らもそれに気付くが、だからと言って何ができるといふ訳でもない。

「えっ、あ、ちよ、待っ――」

結果。

小気味のいい音とともに、指揮官(仮)と戦術人形がストライクされた。なお、パチ公だけはギリギリのところまで回避したことをここに明記しておく。

そして、無辜の民(?)を二人ほど吹っ飛ばしたことに気付かず、バカ二人は組んず解れつ殴り合いを続ける。

「潰す潰す潰す潰す!!」

「おうやってみろやゴリア!!」

……夜は長くなりそうだ。

指揮官(仮)はRFBと共に濃霧に囲まれた暗闇をスローモーショ

ンで飛んで行きながら、そんなことを思っていた。
あと、上半身から落ちる墜落はとても痛かった。

Grand Guignol VII

MAGとUMP9は屋上で指揮官カッコカ리를巻き込んだの大乱闘。

P90とG11は地下階層で煙幕に満たされた屋内戦闘。

MGLとUMP45は中層でグレネードを撒き散らす大混戦。

110BAと416は上層で24時間耐久ホラー。

さて、彼女たちは一体どうなっているのか——それを確認するために、二週目へと突入してみよう。

■ ■ ■

「オラアアアアッ!!」

MAGは殴り合っていた。

それは一体誰と？ 決まっている、倒すべき敵であるUMP9とだ。

来いよUMP9、銃なんか捨ててかかってこいとばかりに煽りまくった結果、UMP9は野郎ぶつ殺してやると見事に一本釣り。

その結果、階段を超高速で駆け登りながら拳と拳でぶつかり合い、屋上までたどり着いて——前回ラスト現在へ至る。

MAGは肩で息をしながら、独特の構えと共に油断なくUMP9を見据える。

「……HOLY SHIT……!! 内臓に一発ぶち込んだのに何で平

然と動けてんだテメエは!」

「愛があれば何でもできるんだよ!!」

「しまったそういう事か!!」

「納得してどうするんだオイ」

愕然とした様子でリアクションを取るMAG。それに対して指揮官カッコカリが突っ込む。

……ところで、彼がいる場所まで侵入を許している時点で当初の作戦目標はすでに破綻しているのだが、それに関してはいいのだろうか？ RFBは訝しんだ。

が、口には出さずに心の中にしまっておいた。どう考えても藪蛇だ

ろう……おそらく、彼女がそれを口にしたら次の瞬間には、指揮官カッコカリはあつという間にあの狂犬に襲われて【自主規制】な目に遭ってしまうに違いない。幸い今の彼女はMAG以外の何もかもが目に入っていないようだし、黙っておいたほうが身のためだ。

とそこで、MAGがぽつり。

「……よくよく考えてみりや、なんであたしは律儀に不殺なんて守ってんだ……?」

「待て。そつちに舵を切るな。戻ってこい」

余りにも不穏極まりない一言に、RFBは真顔で言う。

もしここに502小隊の同僚がいれば殴つてでも止めただろう。だがしかし、生憎とここには部外者しかない。

よつて——

「……ああもう面倒くつせえ!! 404テメエ小隊全員まとめてスクラップにしてやらあ!!」

「おいバカやめ——!!?」

——こうなるのは自明の理と言えた。

ガシャン! という重厚な音と共にマシンガンが構えられ、そしてその照準がUMP9へと向けられる。それを見た指揮官カッコカリが制止しようとするが、もう遅い。

轟音と共に7.62mm弾の雨あられが放たれる。

あわや大惨事か、と思われたその時——

『ザザツ——上から来るぞ、気をつけろ!』

MAGが腰に吊っていた無線機から、110BAの今にも死にそうなほどにか細い声が届く。

その直後、轟音と共に旧司令部の天井が吹っ飛んだ。

瓦礫と粉塵の中から姿を現したのは、超巨大なピエロ人形。

「下からじゃねーか!!」と舌打ちするMAGを他所に、相変わらず死にそうな声での解説が続く。

『そ、それは私の特製トラップの「スケアリー・クラウン」よ……見ての通り自律人形としての体をなしているわ』

「またあたしから隠れてトンデモネエ代物作つてんなオイ!? ——

で? そのピエロ君はどんな感じの奴なんだ!?

『対象を捕まえて高圧電流とハッキングで電脳を焼き切るわ』

「見た目のわりにめっちゃ凶悪だった!?!」

驚愕する一同。

つまりは、相手はトラップの皮を被ったりーサルウエポンだったという事だ。なんとという事でしょう。

ピエロ人形——スケアリー・クラウンはバネ状の腕を大きく伸ばし、MAGやUMP9めがけて襲い掛かる。

「オイオイオイ、マジかコイツマジでかコイツ! もしかして敵味方の区別ついてねえな!?!」

『私が単独行動してた時の遺物だもの……基本的にマスターたる私以外は例外なく敵判定よ』

「ウツソだろお前冗談じゃねえ! つつーかあたしらに隠してまで封印してたものが今更どうして起動した!!」

『……その、トラップばら撒くときにハイになりすぎて……うっかり起動しちやっただ♡』

「ファック! ファック!! ファーック!!!」

青筋を浮かべながら叫ぶMAG。そうしている間にも、小ジャンプしながらのマシンガン引き撃ちは忘れない。

だが、このピエロ野郎いったい何で出来ているのやら——7.62mm弾の雨あられを受けているにもかかわらず、火花を散らして塗装が剥げるだけで一向にダメージを与えられている気配がない。これは一体どういうことだ?

『ああ、それね。見た目はピエロだけど装甲が鉄板・セラミック・水銀の複合装甲なのよ。理論上は対物ライフルまでならゼロ距離でも弾くわ』

「馬ツ鹿じゃねえの!?! 本当に馬鹿なんじゃねえの!?! こういつちゃ悪いがあたしがツツコミに回るなんて相当だぜ!?! 一体何考えてやがるんだぜ!?!」

『本当に申し訳ない』

「それ反省してねえ奴のセリフう!!」

叫ぶMAG。

そしてその傍らでは、UMP9が鬼気迫る表情でピエロのラツシュを躲していた。まあ捕まれば一発アウトな以前に素の臂力も並の戦術人形を易々と上回っているのだ、よっぽどフィジカルに自信のある人形でもない限りは普通避ける。

一撃で分厚いコンクリートにヒビを入れる一撃に耐えられるフィジカルの戦術人形が居るかは甚だ疑問だが——ショットガン持ちならば、あるいは？

そこへ、110BAからの助言が届く。

『基本ドクトリンは既存の戦術人形の物を応用してるから、従来の戦術がそのまま通用するはずよ！』

「ああん!? 要するに何が言いたい!!」

『——顔を狙いなさい!!』

「よしきた任せろ!!」

迷うことなく承諾。

それと同時に、考え無しに放たれていた弾幕に明確な指向性が付与される。それは一直線にピエロの顔へと向かい、顔面で盛大に火花を散らす。

直後、その攻撃を嫌がったピエロが両手で顔を覆い、大きくのけぞった。それと同時に、ある部分が露わになる。

「あれは……なるほどそうか、こんなゴツイモンを屋内で無理に動かしゃそうなるわな。正直リーダーのセンスを疑うが、コイツに関しちゃ上等だ」

『何か分かったの?』

彼女の視線の先にあるのは、自律人形・戦術人形問わず、人型／準人型の機会としては最重要視される部分——即ち、脚部。

ピエロ人形のそれは、恐らく重量二輪に分類されるであろうその脚部は、見事に大破していた。

その様子を眺めながら、MAGは110BAに伝える。

「あのピエロ野郎、足回りが死んでやがる。無理やり動かそうとしたんだらうな、悪趣味な車輪が鉄筋噛んで見事にスクラップになって

ら」

『ザザッ——ねえねえ呼んだ？ ワタクシの事呼びました!? 残念た
だいま緊急事態、タネ明かされてタマも少ない、いよいよヤバイよコ
イツはヤバイ、カオスカオスだインサージェンシー!!』

「呼んでねえわ帰れ! ——それでだな、足回りんとこだけ内部機構
が露出してやがる。ありやなんだ……歯車か?」

『歯車? ……ワオ。MAG、貴方ツイてるわね』

突然そんなことを言い出した110BA。

MAGは不可思議そうな表情を浮かべて、彼女へと聞き返した。

「ツイてるって……突然何言いだしてんだリーダー。ついにぶっ壊れ
たか?」

『勝利上の建前とは言え曲がりなりにも上司に対するその物言いは
いつそ敬意を表するわMAG。つじやなくて、その歯車群はスクエア
リー・クラウンのコアよ。そいつは腰回りに主要なパーツが配置して
あるの』

「ってことはなんだ、話は早え」

ニヤリ、と。

凶悪な笑みを浮かべて、MAGは今一度マシンガンを構え直す。

「顔面狙って隙作ってから機関部ぶち抜きや、あたしの勝ちだ!」

「……その過程で俺らに被害は出ないよな?」

「知らん。悪いが頑張って生き延びてくれ、シキカリ」

「ちよおい!?!」

そこは110BAが作りにつつたトラップや兵器の数々を応急的に保管しておくための階層——通称『トリックルーム』。

相も変わらずおぞましい量の兵器が保管されている。

……というか、なんか増えてる？

「さてはまたなんか作ったなりーダー」

イイ笑顔で武器を量産しまくる110BAの姿が脳裏をよぎる。

とそこで、背後から凄まじい轟音が響いた。

『■■■■……■■■■——ツ!!!』

「うつわあ荒れてる。あれだな、キレたときのリオ○ウスとかその辺みたいな感じだな」

そんな見当違いの感想を抱きつつ、彼女は手早くうずたかく積み重ねたトラップの山に手を伸ばした。

いくつか目的にそぐいそうなものを見繕い、片っ端から仕掛けていく。

血塗れ（に見えるような塗装の施された）トラバサミ、対戦術人形高性能シビレ罠、落とし穴のタネ、地雷型タル爆弾……どこかで見たようなものから明らかに物理法則を無視しているオーパーツまで、とにかくありとあらゆる物を仕掛けた。

仕上げにこれでもかと追い煙幕をぶちまけ、1m先も見えないような状況を作りあげれば……簡易式ではあるが、ゲリラ戦の環境が出来上がりだ。

あとは、G11が自分から突っ込んで自滅するまでただ座して待たばいい。

「〜♪」

『■■■■■■——!!!』

方向とともに、階段のあたりで轟音が鳴り響く。

同時に、ドンガラガツシャンと豪快な音を立てて山がいくつか崩れた。

積もりに積もった年代物の埃が大量に巻き上げられ、煙幕と混ざりあつて見えなくなる。

P90はケホケホと軽く咳き込みながら、

「あーあー、こりゃ酷い」

と洩らして辺りを見回す。

その時、バチンツ!! という甲高い音とともに、「いったあーい!」という悲鳴が聞こえてきた。音からして、どうやらトラバサミに引つかかったらしい。しかしそこは戦術人形、すぐに閉じたトラバサミをこじ開ける音が響き、銃声が連続して炸裂した。どうやらスクラップにされてしまったようだ。

しかし向こうはどうやら罠を避けるという選択肢が頭から抜け落ちていくらしく、高圧電流がスパークする音や地面に穴が開く音、拳の果てにはド派手な爆発音までもが響いてくる。

P90は恐怖した。『アイツ本当にただの戦術人形なのか?』と。

しかし、恐ろしいことにここは愛(方向性は不問)さえあれば大抵の事はなんでも出来る世界線。

並み居る罠を全て引つかかってから脱出・破壊するというプロレスラーも裸足で逃げ出すレベルの所業をかましてなお、G11は健在だった。

「何処……何処にいるの……指揮官……?」

が、フィジカルは健在でもメンタルはどうやらとびきりの危険域にまで達しているらしい。P90の事を指揮官(仮)と誤認でもしているのか、虚ろな表情で地下階層を闊歩していく。

その際にひっくり返ったダンボール箱とすれ違ったが、彼女はそれをスルーした。

……中に、先程まで相手にしていた敵が収まっているとも知らずに。

「(やっべー!! マジやっべー!! 簡易潜入キット

『トラッシュユ・アンブッシュ吾輩は蛇である』がなかったら確実に死んでたねボク!! いっつも変な道具に振り回されてばかりだけどこればかりは感謝するよリーダーツ!!)」

中では、P90が冷や汗をダラダラ流しながら箱に備わった小さな穴越しに外を見ていた。

当然、G11が地下階層を歩き回っているのは視認している。

これは、まずい。非常にまずい。

「勘づかれる前にここを脱出しないとな……。地下だと煙幕張れるから便利だけどその分自爆しそうだ！ この階層だとなおさらに！ とつとと上に上がってここを閉鎖しないと……）」

ダンボール箱が少しだけ持ち上がり、そそくさとその場を後にする。非常にシユールな光景だった。

その時。

カチリ、という音と共に、P90は足裏に固い感触を覚えた。

「……？」

足をのけ、下を向いてみると、そこには——『Warning！

ゼツタイ押すな!!』と書かれた、これみよがしな赤いボタンが。

「……、」

P90の思考が停止する。

バンツ!! と地下階層の照明が全て非常時を示す赤色に切り替わり、けたたましい警報音が響き渡った。

『緊急事態発生！ 緊急事態発生!! 非常事態宣言の発令を確認!! 10分後に本施設は「自浄」を行います!! 関係者各位は速やかに本施設を離脱してください!!』

「……あー……」

P90は天を仰いだ。

そして——

「——逃げろっ!!」

簡易潜入キット『トラッシュ・アンブッシュ吾輩は蛇である』を脱ぎ捨て、一目散に逃亡を図る。

少し遅れて、事態に気付いたG11も地下階層を離脱して行った。残されたのは、膨大な量の兵器の山。その時、積み重なった鉄の塊が不気味に蠢き——

『——、』

その中から、一つの赤い光点が姿を覗かせた。

Grand Guignol IX

「おやまあ参ったコイツはまずい、傷が痛みが止まらない！ 回せ回せとワタシは言うが、残念これでは止まりもできず！ 残った手段は数える程度、よって最後は道連れサ!! という訳でドーン!!」
「くっ……!!」

中層、『デイスカッションエリア』。

今では最早その面影すらも見受けられないが、そこでは二人の戦術人形——MGLとUMP45が相変わらず激突を続けていた。

両者共に満身創痍。

UMP45は片腕が欠損し、左足の配線が露出している。肝心の銃本体も廃銃1歩手前な有様だ。

対するMGLは仮面が吹っ飛び、融解焼損した素顔を露出。四肢にまんべんなく少くない被害を受け、あちこちで内骨格や配線が剥き出し。グレネードランチャー本体に至っては、二つあるうちの一つがとうの昔にスクラップとなっていた。

UMP45はMGLの仕掛けたトリックを看破して以降、より積極的に接近戦を狙うようになった。

しかし、MGLとて素直に倒されるほどポンコツではない——設定を調節して炸裂圏を大きく縮小することで対応してみせた。

「あつはははっ！ いいぞ、もつとだー！」

「煩い黙れ潰れて死ね——!!」

しかしそれは、自分すらも巻き込む諸刃の剣。MGLは狂ったように歌いながらも、頭の中では冷静に戦術を構築していた。

（うーん、なりふり構わず突っ込んでこられるのがこんなに面倒だとは。これじゃあグレネードの持ち味もほぼほぼ潰れちゃってますし、どうした事やら……まあサブアームなんて持ってないんですけどね！ いつもニコニコあなたの近くに這い寄る榴弾——つと、思考が逸れた）

……冷静に、戦術を、構築していた。多分、恐らく、きつと。

そこで、ガチン！ という音とともにグレネードの射出が止まる。

弾切れだ。

「これでっ——終いだあッ!!」

ここぞとばかりにナイフを構え、突貫するUMP45。

しかしMGLは冷静に、グレネードランチャーをまるで野球バットのように構え直した。

そして。

戦術人形特有の膨大な膂力をフル活用し——UMP目掛けてランチャーを振りかぶる!!

相手の目的に気付いたUMPが軌道変更を図るが、時すでに遅し。

「——終いはあ、そっちだッ!!」

轟音と共に、UMP45の体が後方へと吹き飛ばされた。同時、度重なる酷使によって限界を迎えたランチャーが今度こそ内部機構を破壊されて廃銃となる。

ガクン、とMGLの体から力が抜ける。自身の分身でもあるグレネードランチャーが二丁とも壊れたことで、システムにエラーが発生したのだ。

(——システムチェック、銃火器の喪失により出力が大きく低下。オペレーション『戦術人形』^{タクティカル}を強制シャットダウン、続いてシステムを民生品用へとシフト。以降、グレネードランチャー『MGL—140』の獲得まで全機能を85%カット)

破損した自身の体を支えることすらままならず、ガツクリとその場で膝をつく。

ぎこちない動きでUMP45を見据えるが、彼女は瓦礫に埋もれたまま動き出す様子を見せなかった。よく見れば、その脇には無残な姿と化したサブマシンガンが一丁転がっている。度重なる損傷と実銃の喪失によるパワーダウンで恐らくセーフモードに入ったのだろう。

戦術人形と銃は一心同体だが、だからってこんなシステムを導入しなくても良かったのでは——MGLは思ったが、しかし口に出せるほどの余裕はなかった。

今にも崩れ落ちそうな体を意志の力で無理矢理に律し、おぼつかない動きで再び立ち上がる。

「っ、あー……派手に、やられましたね」

壁に手をつき、ゆっくりとUMP45の方へと歩いていく。

バツン！ という音とともに照明が真っ赤に切り替わったのは、その時だった。

『緊急事態発生！ 緊急事態発生!! 非常事態宣言の発令を確認!!』

10分後に本施設は「自浄」を行います!! 関係者各位は速やかに本施設を離脱してください!!』

「……? ……?? ……?!?!』

突然のことに理解が追いつかず、MGLの体と思考がフリーズする。

この時、地下区画では問題の自爆（自浄？）ボタンをうっかり押しってしまったP90が壮絶に焦っていたりするのだが、彼女にそれは知る由もなく。

彼女は瓦礫に半ば埋もれて気を失ったUMP45を見る。

……恐らく、時間は全く残されていないだろう。先程のアナウンスを信じる限り、あと10分で旧司令部は何らかの手段でもって『浄化』される——恐らく、旧司令部の中にいる者は一人として生きて帰れないレベルの代物だ。

「……、」

MGLはこの先の未来を見据え。

そして、覚悟を決めた。

■ ■ ■

「……ん」

目が覚める。

鋭く目を刺す赤い光とそれを覆う無機質なノイズ、そしてけたたましく耳朶を打つサイレンと共に、UMP45は自身が誰かに『担がれている』事を知覚した。

もしや指揮官か——とそう考えた彼女だったが、どうやら真相は異なるらしい。

「あ……っと、変に動かないでくれませんか。正直こっちもギリギリなんですよ」

背負われた背中から聞こえてくるのは、につつき相手の声。数少ないグレネードランチャーの戦術人形。確か、MGLと言ったか？

UMP45はわけも分からず、思った通りの言葉を発してしまった。

「……どうして助けたの」

それに対して、彼女はおぼつかない足取りで歩みを進めながらも、こう言いきった。

「死にたかったのならご愁傷さま。生憎、平然と他人を見捨てられるほど私も腐っちゃいないんですよ」

「……そっちがお前の『素』か」

「なにか問題でも……っつと」

目の前で積み重なった瓦礫の山へ向けて、MGLがグレネードを蹴り込む。それは一際大きな隙間の中に入りこみ、金属音を響かせた。そして。

「——ファイア！」

起爆。

爆音と共に瓦礫が吹き飛び、粉塵があたりに撒き散らされる。

粉塵が晴れた先に広がっていたのは——下り階段だった。電気系統はとつくにダウンしているらしく、その全容は暗い闇に包まれていて伺えない。

「……こんな事なら下層の方で戦^やれば良かったですね。あと10分でどこまで降りれるか」

「そんな事知らないわよ。そもそもここで戦うことにしたのはそっちでしょうっ。」

「いやはや耳が痛い」

そう言いながら、ゆっくりと階段を降り始める二人。

しかし、降り始めてすぐ、何かにぶつかった。鼻面をほんのり赤く染めて、MGLの体が少し仰け反る。

「あいたっ」

「ちよつと、どこ見て歩いて——……っ？」

バランスを取り直し、再び前を見据えたところで——二人は気づい

た。

それが、瓦礫ではないという事に。

それが、金属で形作られてある事に。

それが、鉄血人形に酷似した形式不明の自律人形である事に。

そして。

それが、こちらを単装視覚センサーで見据えている事に。

』

不気味な駆動音とともに、『それ』は地面に転がっていた無骨なメイ
スを手取る。

その光景を見ながら、MGLは乾いた笑いと共に呟いた。

「……ごめんなさい、一階層分も降りられないかもです」

——『自浄』開始まで、あと8分。

Grand Guignol X

「……ねえ、聞きたいことがあるのだけれど」

「……何よ」

旧司令部最上層、通称『アンノウン・プレース』。

そこで、椅子に縛られ、ホラー映画耐久馬拉ソンに強制的に参加させられている二つの戦術人形。

先ほどから上で盛大にドンパチやっているらしく、断続的に銃声と爆発音と振動がこちらに届いてきている。

そこで、110BAはふとHK416にこう問うた。

「貴方たちはあの男が目当てでここまで来たのよね？」

「当たり前じゃない。それとも何、他の目的があるとでも？」

「——興味深いわね」

「は？」

不愉快そうに眉を顰めるHK416。

それに対して、110BAは心の底から不思議そうな顔をしながら、こう言った。

「私達は戦術人形、兵器でしょう？ 本来、『感情』なんて物は不要なのでは？」

「……、」

「生憎と私は欠陥品だから、その手の類の感情が欠落しているの。でも、ないからこそ思うのだけれど——」

——恋愛なんて、必要ないじゃない？

416は激怒した。必ず、この目の前で平然としているふてえ野郎を殺してやらねばと決意した。相変わらず椅子に拘束されている状況は続いているため、どうしようもないのだが。

110BAはそんな416の様子に気付くことなく、あらぬ方向を見つめながら、

「むかしむかしの話だけど、『王は人の心がわからない』って言った騎士がいたらしいわね？ 人がなった人の頂点は、人の心がわからなかった。けれど、何よりも人を想っていた王の心もその騎士には伝

わっていないかった」

「……、」

「同じ人どうしでさえこうなのよ？　であれば、人と人形、同一にして逆反対である私達が、相互理解なんて出来るわけないじゃないの。私達は兵器。ただ命令に従って破壊を巻き散らせばいいの」

——ま、そんな風に生きれたら苦労はしないのだけれどね。

よつと、と軽い調子で、110BAは腕を引いた。

それだけで、つい先程まで彼女を強固に戒めていたはずの拘束具が呆気なく弾け飛ぶ。

信じられない光景に、416は自らの目を疑った。

「……どれだけ最適化したらそんな真似ができるのよ……？」

「さあね。面倒だから80%を超えたあたりからカウントしてないから、忘れたわ」

「……それだけ最適化しておいて、なんでダミーの一つも持っていないのよ」

「隊の方針。というか、ダミーに関してはそつちも人の事言えないでしょうに」

その通りだった。

404小隊も502小隊も、ダミー無しの本体一本勝負という点ではそつくりである。現状、行動理念があまりにも正反対だが。

……というか、本部は何を思っってこんな奴らを使役してるんだ？
馬鹿なのか？

416はなおも自分の方の拘束を破壊しようともがいているが、残念ながら最適化レベルが足りないようで拘束はビクともしない。

110BAは無線機を手に取り、通信を繋げた。

「MAG。聞こえる？」

『おーすりーダー、聞こえるぞ！　——つぶえ、かすつたあつぶねえ！！』

「そつちはどう？」

『わかってて言ってるんだろコラ！！　普通内部機構って脆いもんじゃねーのか、パーツ単位でさえ7.62mmの至近弾を弾くとかマジで

なんなんだあのデク人形!? 実はオリハルコンとか使ってますとか言われても信じるぜ!』

「やけ気味に作った作品なのよね、その子。正直何使ったか覚えてないのよ。でも、ハイエンドモデルを含んだ鉄血の小隊を単騎で壊滅させた時はさすがにビビったわ」

『んなモン基地内で起動してんじやねえアホーッ!!』

MAG、魂の叫び。あまりの音量に、110BAは思わず無線機から耳を離して顔を顰めた。聴覚センサーが悲鳴をあげ、キーンと耳鳴りのようにハウリングを起こしている。

なおも文句を叫ぼうとしたMAGだったが、再び口を開く前に強引に通信が遮断された。

今度は何事か、と嫌そうな顔をする110BA。

『あつ、あー! 誰か聞こえる!? メーカーメーカーSOS!! ヤバイよヤバイよ誰か応えてよー!』

「落ち着きなさいP90、今度は何よ」

『あつリーダー! えつと、それが——』

その時。

バツンツ!! という音とともに照明が全て真っ赤に——非常灯に切り替わる。

そして、壁に設置されたスピーカーがけたたましい音量でがなりたてた。

『緊急事態発生! 緊急事態発生!! 非常事態宣言の発令を確認!!』

10分後に本施設は「自浄」を行います!! 関係者各位は速やかに本施設を離脱してください!!』

「は?」

突然の事態に思考がフリーズする110BA。

そんな彼女を他所目に、無線機はP90の声で、申し訳なさそうに報告した。

『その……地下区画にあった赤いボタン、踏んじやった☆』

「は?」

『……えつと、その……』

「は??」

『……そ、そのー……』

「は??」

『ご、ごめんなさーいっ!!』

通信切断。と同時に、110BAのあまりの握力に耐えきれなかった無線機がバキリと音を立てて砕け散る。

416は110BAの顔を見るなり「ヒツ!」と短い悲鳴をあげたかと思えば、そのまま泡を吹いて気絶してしまった。一体彼女は何を見たのだろうか。

110BAは416を拘束していた拘束具を引きちぎり、彼女の体を肩に担ぐと、近くに落ちていた自身の分身110BAを手を取った。

そして、

「……覚悟してなさい、P90」

ドスの効いたというレベルでは済まないド低音だった。

ちょうど同時刻、P90は旧司令部の外で謎の悪寒に襲われたという。彼女は無言で階段まで歩く。

階段は既に半ば以上崩れ落ちていたが、知ったこっちゃない。そんなことは私の管轄外だ、とでも言わんばかりに、そのまま階段跡を飛び降りる。

——着地。

バキャツ!! というとんでもない音と共に、110BAは何かを踏み潰したことを自覚した。

辺りを見回すと、そこにはボロボロのUMP45を担いだこれまたボロボロのMGL。

で、足元には鉄血工造の戦術人形『Aigis』に酷似した自律人形の残骸。恐らく旧司令部に備え付けられていた自衛機構だろう。

……ホントに何してたんだこの司令部?

「りっ、リーダー!」

「MGL。無事だったのね」

「アツハイ、どうにかこうにかハーモニカ。この通り生きてますのことです」

「ああ、下らないギャグしか言えないほどに損傷したのね……可哀想に」

「前代未聞のけなされ方!!」

「嘘よ。とりあえず無事なようで何よりだわ」

『「自浄」まで、残り8分』

スピーカーから声が届く。

それと同時に、旧司令部という建物全体が嫌な振動をし始めた。

……これは、まさか。

「——事情説明はあとにした方が良さそうね。急ぐわよ、MGL」

「えっ、あつはい了解!」

片方は機敏な動きで、もう片方はおぼつかない動きで旧司令部から脱出していく。

残されたのは、その場に倒れ伏す戦術人形だったもののみ——

Grand Guignol XI

そのころ、屋上階では。

『緊急事態発生！ 緊急事態発生!! 非常事態宣言の発令を確認!!
10分後に本施設は「自浄」を行います!! 関係者各位は速やかに本施設を離脱してください!!』

「ああ？ なんじゃこりゃあ!？」

けたたましい声で騒ぎ立てるスピーカーに、MAGが立ち止まって眉を顰める。

好機とばかりにピエロ人形——『スケアリー・クラウン』が手を伸ばすが、間一髪のところまで捉え損ねた。

MAGは鋭く舌打ちし、すぐ近くで突貫を繰り返しているUMP9に声をかけた。

「オイコラ雌犬ウー！」

「殺すぞクソが。で、何さ」

心の底から不愉快そうに顔を歪めるUMP9。それに対してMAGは、こともなげにこう言い切った。

「——あとは任せた！」

UMP9がその言葉の意味を理解するよりも早く。

MAGは指揮官カツコカリとRFBの胴体を引っ掴み、屋上から飛び降りる——!!

唐突に訪れた浮遊感と暴風に、彼らは思わず叫んでいた。

「ぎゃーっ!?!?!」

「イヤッホオオオオオオオオオウツ!!!」

MAGは心の底から楽しそうに叫びながら、重力に身を任せて降下していく。

それを見たUMP9が追いかけてようとすが、逃がしてたまるかとはかりにピエロ人形の攻撃が激化していく。先ほどまではUMP9とMAGの二人が目標だったために攻撃がある程度分散していたのだが、今は標的が一人しかいない——攻撃がそこに集中するのは道理だろう。

——嵌められた。

そのことを理解した彼女は、怒りのままに咆哮していた。

「やつ……りやがったなこの??野郎——!!!」

そんな叫びを背後に、MAG達は重力加速度によってぐんぐんと加速している。

指揮官とRFBはなおも叫び続けるMAGの体にしがみつき、悲鳴をあげながら全力で抗議していた。

「バーカ、もうほんとバーカ！俺ら死ぬよ!? ねえこれどうなんの!? いや待って待って地面近い速い怖い死ぬカリーナ助けてくれええええええええええッ!!」

「やだ指揮官離さないで怖いやだ死にたくない誰か助けて死ぬんだつたらゲームの山に埋もれて死にたいいいいいいいいいいいッ!」
「ハッハッッ! この程度でビビってんじやねえぞテメエら、お楽しみはこれからだッ!!」

そう言つて、MAGは懐から何かを取り出した。

それは、俗に『フックガン』と呼ばれるものだった。例によって例の如く、連射できるマシンガン仕様——フックガンはその性質上撃つたらワイヤーを巻き戻すまで使えないため、フックの装填された銃身を複数束ねることで連射を可能としている。よつてガトリングガン仕様と言つたほうが正しいか?——に魔改造済みである。

いやもう節操なしかお前。一体どこに需要があるんだその珍兵器は。

MAGはそれを構えると、すぐ近くにそびえたつ旧司令部の壁面めがけてフルオートで連射した。

ズガガガガッ!! という音と共に、三人の加速度がとんでもない勢いで食い潰されていく。しかしその体にかかるGは尋常なものではなく、あまりの荷重に耐えきれなくなったワイヤーがバツンバツンと音を立てて次々と破断していく。

そして、地面に直撃するギリギリ、さらに破断せずに残つたワイヤーが残りわずか一本になったところで——彼女たちの体はようやく停止した。

ぶらぶらとワイヤーに揺られるMAG。その脇で、指揮官とRFBは泡を吹いて目を回している。

「ふいー、今回はギリギリだったな。やっぱ定員オーバーで無理に使うもんじゃねーわ」

とそこへ、

「逃がすかあああああああ——へぶっ?!?!?」

すぐ横を後追いで飛び降りたと思しきUMP9が通り過ぎ、地面に着弾していた。アレは痛い、間違いない。

あんなふうにはなるまいと思いつながらフックガンを手を放し、3mほど下の地面に飛び降りる。

そこでは、P90が雁字搦めに縛り上げられたG11と共に待っていた。彼女はMAGに気が付くと、片手を挙げてみせる。

「よう。そっちはどんな感じだ?」

「見ての通りだよ。待ち伏せして仕留めた」

「そうかよ」

そこへ、入口から416を背負った110BAとUMP45を背負ったスタボロのMGLが姿を現した。

「おっ、無事だったかりーダー」

「随分と早かったわねMAG。私の秘蔵っ子はどうしてくれたのかしら」

「置き去り」

「ええ……」

困惑の声を漏らす110BA。

とそこで、彼女の視線がP90を捉えた。すると、ビクリと下手人の体が震え、さりげなく110BAから距離を取り始める。

110BAは無言でMAGに416を渡すと、底冷えのする笑顔を浮かべて言った。

「さあP90。オシオキの覚悟はできてるわね……?」

「いやありーダーこれは不慮の事故であって別にボクにも悪意があったわけじゃないんだよだからねっねっその手に持った道具を手放しておくれよていうかそれは何に使うものなんだよやめてキリキリ鳴

らさないで待つて落ち着いて話せばわかるからやめてそこはそんな物を入れる物じゃnアツ——!!」

目の前で繰り広げられるスプラッタに、MAGは思わず顔をそむけた。

そして、らしくもなく十字を切りながら、

「……迷える魂よ。まあ、その、なんだ。安らかに眠ってくれ、アーン」

「雑だしまだ生きてるし不謹慎だからそういうのやめr待つてリーダーこれは違うのホントに話せばわかるからやめてやめて許してそこらめえええええええええつ!!?」

ドタバタとくんずほぐれつ大騒ぎ。

半ば諦めの境地に達しつつあるMGLとMAG。だが、次の瞬間――

■ ■ ■
——ピツ、と短い電子音が響いた。

■ ■ ■
——ドムツ!! とくぐもった爆音が連続して響く。

私はすっかり【自主規制】な状態になってしまったP90を尻目に、旧司令部の方を見る。

見れば、入口から粉塵のようなものが噴き出していた……なんだ?

とそこで、私の頭の中に電流が走る。『自浄』って、まさか!!

「総員退避イッ!!」

「なんだ今度は何の電波を受信したんだリーダー!?!」

「ふざけてる場合じゃない! いいからとつと逃げなさい——」

「——旧司令部が倒壊するわよッ!!」

その言葉と同時。

旧司令部の各所で小規模な爆発が起き、柱がまとめて吹き飛んだ。自らを支える手段を喪った巨塔が、ゆっくりと傾ぎ、崩れ落ちていく。

「マジかマジかオイオイマジか信じらんねえ嘘だろおおおおお
おおッ?!?!?」

叫ぶMAG。しかしさすがの対応力で、指揮官カツコカリとRFBを肩に担ぎ、足元で縛られて転がっているG11と地面にめり込んだUMP9の足を引っ掴み、即座に逃げの態勢に入っていた。約二名ほど引きずる形になっているのはご愛敬。

そしてその後ろを、私とMGLがそれぞれHK416とUMP45を担いで撤退していく。私に関しては、ものついででなんかヤバい痙攣の仕方をしているP90を背負っていたりする。

そして、這う這うの体で安全圏にまで離脱した、その直後。

轟音と共に、旧司令部は完全に倒壊——ただの瓦礫の山と化した。

——オペレーション『不在不通』完遂。

自軍成果4、自軍損害3。

総合評価『C』。

A f t e r T h e F e s t i v a l

「おっ……オイイイイイイ!! 無くなったぞ!? 一瞬であたしらの拠点が瓦礫の山と化したぞ!!? えっ、なんだこれ新手のドッキリか何かか!?!」

絶叫するMAG。指揮官カツコカリとRFBを地面に置くなり、私の襟首を引つ掴んでがくがくと揺さぶってくる。が、残念ながらこれはどつきりではなく紛れもない事実だ。

その横で、MGLが唾然としながらつぶやいていた。

『自浄』ってこういうことですか……。施設の被害を度外視して異端分子を破壊するなら、確かにこれが手っ取り早いですけれど……」

が、正直な話、私としてもそれどころではない。

私はP90とHK416を地面に降ろし、MAGを全力で一本背負いして——その場につくりと崩れ落ちる。

「えっ」

「持っていかれた……! 丹精込めて一つ一つ造り上げた私の罠が

……一瞬で……!」

「……込めていたのは丹精ではなく殺意では?」

「だよなあ」

外野がそんなことを言っているが、正直どうでもいい。

生きる意味がごっそり失われた。ついでに拠点も。これからどうしよう。やばい死にたい。つらい。

「月月火々水木金金♪」

「リーダー!?!」

「……何があった?」

「スーパーフアミコンのリセットボタン陥没して戻らないウケるww」

「オイこれヤベエぞ! メディック! メディック!?!」

……なんか、疲れた。

「MAG」

「……なんだよリーダー」

「これ以上は無理。一時的に指揮権を貴方に預けるから、私が起きるまで自由にやって頂戴」

「は?」

「正直もう限界……少し休む、わ……」

「リーダー? リーダー!? オイオイマジかあたしに任せてもろくな事にならねえってリーダーが一番よくわかってんだろ!? そんなあたしに全権委任とかマジで言ってるのか!? そこまでシヨックだったか拠点の喪失が!! いやあたしもシヨックだけでも!! マジでか!?!」

MAGが叫ぶ。

が、私はろくに反応を返すことが出来なかった。

ソフト関連に関してはろくに整備アップデートしていないのと度重なる負荷が祟り、さらにそこへダメ押しの一撃。これによって、ついに負荷がO Sの許容量を超えたのだ。

視界が暗くなっていく。体に力が入らない。意識が薄れていく。

……ああ。

少し、眠ろう。

よお、ご隣人ネイバー。あたしだ、MAGだ。

この事件——あー、404と502のかち合いだし、とりあえず『不在不通』とでも仮称しとくか——は、こんな感じで終結した。なんやかんやでシキカリはあの異教徒とキチガイどもを引き連れて自分の所属する司令部に戻ってっつし、あたしらはめでたく拠点を喪った。いや、資材の入ってる倉庫が生き残ってただけまだラツキーか? どうだろうか。

ともあれ、向こうにもそこそこ損害は与えたが、こっちの被害は甚大だ。あたしとP90こそほぼ無傷だが——精神面? ノーカンに決まってるんだろ——、MGLは持ち武器が全部スクラップ、義体もズタボロ。リーダー——110BAに関しては体は無傷だが、電腦がクラッシュしちゃったっぽい。ぶっちゃけリーダーの方が損害的には深刻だな。

戦術人形は基本的に替えの利く『兵器』な訳だが、そいつは人形義体——ハードに限った話だ。電脳——ソフトに関しちや話は別。基本的にワンオフで替えは利かねえ。

どこでもいいからしつかり司令部に所属してりや、新規参入時点で同期されてバツクアップがとられるから、極端な話人形義体を喪失しても復活は可能なんだがな。ああそりや、新しいカラダをなじませるまではそれなりに弱体化するぜ？ でもまあ、それも新造されたカラダに慣れるまでだ。基本的にやあ元に戻る。

だが、だ、だネイバー隣人。あたしらは502小隊、煮ても焼いても食えねえハブられ人形どもの寄せ集めだ。一応書類上はヘリ……ヘリ……ヘリコプター？ いや違えな。ともかく、ヘリ女の直轄ってことになつちやあいるが、ぶつちやけ非公式。上層部ウエにバレたら速攻首を切られる最高機密だ。アイツ中間管理職のくせにどんな無茶してんだよ。冒険しすぎだろ。

話が逸れた。で、だぜ。そんな指折りのキチガイどもに、バツクアップなんてあると思うか？ G & a m p . K のサーバーを漁れば多分数年前に同期してそれっきりのデータが残ってるだろうが、ぶつちやけアテにならん。今更そんな骨董品のデータがあたしらの中にぶち込まれたところで、もうクソの役にも立ちやしねえ。実質的に残ってないのと同意義ってこつた。

さて、どうしたモンかね……。

「MGL。テメエはどうするよ。ぶつちやけかなりヤバい状況だぜコイツは」

「そんな事百も承知ですよ……私だってかなり無茶しましたし、いつ義体がダウンするか分からないんですから」

「ハッ。その結果がコレってんだから笑えるぜ」

「もうヤケクソですな」

「だな」

「H A H A H A H A !!」

二人でやけ気味に笑う。正直全く笑ってる場合じゃねえんだが、少しくらいいいだろ。こつちだつてもう何が何やらとつ散らかつてん

だよ。

「あー、どうすつかねーマジで。リーダーは全権委任つつってたが、あたしにやるモンじゃねえだろそいつは……。まだお前の方が向いてるぜMGL」

「ええー、ホントですかー？ だったらうれしいなあ」

「だが断じて認めねえ」

「なんでさ」

「なんでか？ そんなの決まってるだろ。」

——お前がマシンガン持ちじゃねえからだ。

「ええ……」

「——ま、冗談はさておきだ。あたし的にはお前は切り札ワイルドカードとして取って置いてえ。お前、G&P・Kの上の方のヤベエ秘密握ってる？」

「それはもちろん。6回倒産させてもお釣りがくる位保持してますが何か」

「どんだけだよドン引きだわ」

そこまで握ってたのかよ。何がお前をそこまで駆り立てた。

……ともあれ、まあそれだけカードがあるんなら上等だ。手っ取り早く行くとしようぜ、相棒。

「はい？ 行ってくつてどこに……つて、まさか」

ああ、決まってるだろ。

本社にカチコミだぜ、ヒヤッホーツ!! マシンガン撃ちまくりだ!!

啞然としているMGLをよそに、あたしはリーダーの体を担ぎ——
軽っ。嘘だろおい——、歩き始めた。ぶつちやけどれだけ歩けばたり着けんのか分かんねえ長旅になるだろうが……。ま、明確に目的地が定まってるだけ『あの時』よりはマシンか。

おら、ついてこねえと置いてくぞ。きびきび歩けや。

「待ってくださいって！ こっちはボロボロなんですから！」

そーいやそうだったな。

しょうがねえ、出発する前に生き残った資材使って応急処置だけでも済ましとくか。お前もだよP90、いい加減アへってないでとつと

と起きろ。

「いったあ!?! この野郎思いつきり蹴りやがったなあ!?!」
うるせえドチビ。オラ行くぞ、とつとと準備しろや。

「はあ? 行くって何処に……ってうおおなんだコレ!?! 拠点が!
瓦礫の! 山に!!」

ああそのリアクションはさつきやったから。ってな訳でいくぞ、と
りあえずMGLの応急修理からだ!

「応急修理? って待て待て痛い痛い引きずるな削れるやめろコノヤ
ロウ!!」

——ま、この後も結構な紆余曲折を挟むんだが、そのあたりはおい
おい話してやるよ。

ともあれ、こうしてあたしらの冒険が始まったわけだな。という訳
で恒例のアレいっとくぞ。

あたしたちの戦いは——これからだ!!

境界旅程

MAG's Recollection

……始まりは確か、初めて司令部に配属した時だったな。

別にわざわざ言うほどのモンでもねえんだが、その指揮官がすつげえ好色なやつだよ。戦術人形に関しちや『いざとなったら盾にもなる便利な道具』ってな風に認識してやがったんだ。

ま、それでもあたしは頑張ったさ。なんせ他の場所がどんな風かなんぞ全く知らなかったからな。どこも似たようなモンなんだろうって、そう考えてた。

仲間がいつもこいつも目とか心が死んでて、呼んでもろくにリアクションしてくんねえのが悩みつちや悩みだったな。

んで、まああたしもあたしなりに頑張ってたんだけどさ。

ま、かく言うあたしも心の方がちよつとずつ壊れてってたんだろ。配属されてから3か月位するときによ、もうマシンガンが手放せなくなってた。

クソ野郎のセクハラも激化するばつかな、仲間も仲間でみんな自分の状況に絶望して諦めちまってるから助けを求めるつーこともしやしねえんだ、これが。前線に立つても銃を構えもしねえでぼーつと突っ立つてるばかり。これじゃ死ぬしかねえだろ。

……その分はあたしがカバーした。あの時のあたしはガラにもなく、そいつらを助けたいって本気で思ってたんだ。馬鹿な話だよな――誰かを助けようなんぞおこがましい、もし上手くいったとしても、そいつは向こうが勝手に一人で助かったってだけの話なんだから。

それで、確か転機はいつだったかね。

……ああ、そうだ。単騎でハイエンドモデルに突っ込んだ時だったか。アイツはウロボロス、あるいはドリーマー？ ドリーマーだったような、気がする。

他の味方は皆、棒立ちしたまま脳天ぶち抜かれて死んでった。あのクソ野郎ろくに最適化もしてねえし編成拡大もしてなかったからな、

一発で即終了だ。最低限電腦のバックアップだけはとつてたみてえだが、言い方は悪いが正直アレは盾としても失格だし、作り直すだけ無駄だろ。

だからその分、あたしがやった。

——殺して、壊して、潰して、沈めた。

しつかり殺してやったさ。パーツ一つ一つが原形をとどめなくなるまで、丁寧丁寧に。

ヤツは『傘』が効かねえとかなんとか錯乱してやがったが、んなことあたしが知るか。多分ウイルスかなんかの類だったんだろうが、そんなモンが通らなくなるくらいにはあたしももうぶつ壊れてたんだろうな。

ま、ハイエンドに単騎は正直無謀なことしたなって今でも思ってる。実際大破したからな。

あたしは司令部に戻った。仲間は全滅してるし、当然一人だな。そうしたら、修復する暇もなくクソ野郎に呼び出されたんだ。

……二人しかいない司令室で、アイツはこう言いやがった。

『仲間を見捨てたそうだな？ 貴様の考えはよくわかった。解体処分だ、役目も果たさん使えない駒は私の司令部には要らん』

……その時、何があつたのかはよく覚えてねえ。

気付いたらあたしはマシンガンを構えてて、目の前の光景は真っ赤になってた。クソ野郎は原形も留めずに肉片になってやがったよ。

そのあとはトントン拍子だ。司令室から快速修復契約をかつぱらって、あたしは自分を修理した。それから、持てるだけの弾薬と配給をもって、その司令部から逃げ出した。残った奴らがどうなったかは正直知った事じゃあねえんだが、まあ助かっていることを祈るばかりだけ。

それで、あたしはあてどもなく彷徨った。迷って、迷って、彷徨った。その末に、リーダーに拾われて、502こ小隊こに来た。

だからよ、リーダーには本当に感謝してるんだ。行く当てもない、一人で勝手に暴走して朽ちるばかりだったあたしを、こうやって拾い上げてくれたんだから。

……でもよ、今でもふと思っちなうんだ。もしもあそこがまっとうな司令部で、あたしもあいつらもまっとうに頑張ってた。もしもそうだったら、あたしは今でもあいつらと一緒に笑い合ってたのだった。

なあ、頼むよ。誰か、誰かあたしに教えてくれよ。

……あたしは、一体どこで何を間違えた？

「……ん、ああ」

……夢を見た。

正直思い出たくもねえ、クソツタレな夢だ。

時間は分からん。どうやらちようど夜明けのタイミングっぽい、つてくらいだな……東の方が明るくなってやがる。

周りを見る。寝袋に包まれてるリーダーは相変わらずダウンして目覚める気配がねえし、その隣に寄り添ってるMGLは稼働しちやいるが実質的に役に立たねえから似たり寄ったり。P90に関しちやあたしと一緒にほぼ損害はなし。まあ、まともに戦力になるのは実質あたしとこのチビだけだな。2人もいると喜ぶべきか、2人しかいねえと嘆くべきか。

とりあえず、とあたしはP90を足でつついた。

「オラ起きろ、朝だ」

「……あと五分」

「よし分かったあと五分したらマシンガンの全力射撃で起こしてやる」

「起きてすぐ永眠するわ!! 殺す気か!!」

「今起きたし問題ねえだろ」

「あるわ!!」

叫びながら跳ね起きるP90。コイツはなんだかんだいつて比較的あっさりリアクションを返してくるから、まあ部下とちやあ割と扱いやすい部類だな。まああたしが指揮を執るのも今回限りだろうし、だからなんだって話なんだが。

そしてあたしはリーダーを担ぎ、P90はMGLを担ぐ。丁度その

タイミングで、MGLも目を覚ました。

「……おはようございます?」

「まあ今は朝みたいだしおはようで合ってるよ。じゃ、出発しよっか」
「はい、お願いします」

「そつちは準備できたか。んじゃ出発するぞ」

あたしたちは再び歩き始めた。目的地は相変わらずG & a m p・K本社だ。

……旧司令部の倒壊とそれに伴うあたしら502小隊の出発から、今日で大体1週間が経った。

倒壊に巻き込まれずに無事だった(あたしが蹴り壊した扉はそのままだった)倉庫からありったけの資源を引っ張り出し、それを即席のリヤカーに積んで出発したわけだが……3日でMGLがダウンした。まあボディもボロボロだったし、仕方ないっちゃ仕方ない。むしろあんな雑な処置でよく3日も保ったモンだ。素直に感嘆した。

正直景色も代わり映えしねえし、あたしらが本当に前に進めているのかも判然としねえ。でもまあ、目的も行先も何もなかったあの時に比べりゃ、気分的にはだいぶマシだな。

「しっかし、あたしらって今はどのあたりにいるんだ? 正直地理感覚も全部吹っ飛んでんだが」

「あー、どうもリーダーに聞いた話だと、不在防衛線あそこって本社からだいぶ南に位置してたらしいよ。だから、後先考えずに北に進んでれば大丈夫……な、はず」

「最後に台無しだわどうしてくれんだコノヤロウ」

「なんだやんのかコノヤロウ」

「喧嘩してる場合じゃないと思うんですけど」

「おっ、そうだな」

何時ものようにつつかかるとあたしたちをMGLが制止する。これもいつもの光景だ。

というか、日に最低一回はこうしておかないと、なんというか落ちて着かない。

「さーて、あとどれ位で向こうに着けるかね?」

「賭けでもする？」

「乗った！　じゃああたしあと一週間以内で着けるに10万ペリかな！」

「さては勝つ気ないな!？」

「H A H A H A 冗談だ！　もつと現実的な額ベットしてやらあ！」

「……具体的には？」

「1億ジンバブエドル」

「やっぱ賭ける気ないじゃん！」

「ハハハハハ！」

「……時間は進む。あたしたちも進む。」

あたしらが『目的地』にたどり着くのは、あとどれくらいかね？

私の間違オリジンいは、ある情報を手に入れた時から始まりました。

あの時の私は、情報収集が趣味だったんです。玉石混交お構いなしに、私は自分の知らないことを調べていました。

ええ、自分の知らないことがあるという事実が我慢ならなかったんでしょうね。当時の私の価値観に則るならば、無知は罪であって未知は悪なんでしょう。

だから、私は知った。知って、識って、智り尽くした。そして、ある時。

私は、とある情報を手に入れました。

それは、鉄血工造の次の作戦に関する情報。

私はずいに相手のシッポを掴んだと思ひ、喜び勇んで当時の指揮官に報告しました。あの人は私を信じてくれて、司令部にいた戦術人形の殆どを動員してくれました。

ええ、100体以上にも及ぶ戦術人形の大行軍です。練度・戦力共に万全の一言でした。誰もが勝利を信じて疑いませんでした。

——その情報が、ダミーでさえなければ。

戦場に辿り着いた私たちを待っていたのは、情報の数値をはるかに上回る鉄血工造による奇襲攻撃。

地形上の問題もあり、私達は分断を余儀なくされ、各個撃破されていきました。私も無傷では済まず、顔に傷を負いました。

結果は、動員した戦術人形のほぼ全てを失う大敗。史上類を見ない、最大最悪の負け戦です。社報紙を見れば、どれだけの惨状だったかが分かるかもしれませんね。

そして、這う這うの体で司令部まで戻ってきた私たちを出迎えてくれたのは。

……原形をとどめない程に破壊しつくされた、かつて??地区だった瓦礫の山。

生存者なんて一人もない、文字通りの蹂躪。

老若男女人間動物植物の区別すらなく、生きとし生けるものすべて

が皆殺しにされていました。

そして、私たちの指揮官も……。

……その後、私を待っていたのは戦犯としての扱いと糾弾の嵐でした。

ハハ、当然でしょうね——だって、この事態を招いたのは、他ならぬ私なんですから。その時、ようやく私は理解しました——罪があるのは無知ではなく、他ならぬ私の存在なのだと。

何故、どうして、こんなはずでは——。

それでも、その事実に耐えきるには、私の心はあまりにも脆弱だった。

暗闇の中で私は発狂と覚醒を繰り返し——気付けば、私の精神は誰にも修復が出来ないレベルにまで崩壊してしまいました。最後に本社で行った定期メンテナンスの時に、猫耳白衣の研究者が黙って首を横に振っていたのは今でもありありと思い起こせます。

だから、私は殻を被りました。被って、纏って、装いました。

それが道化師としての仮面だったのは、ただの偶然だと思います——でも。

勝手に情報に踊らされて自滅した私にとっては、ピッタリだと思いませんか？

……それから、私は司令部を転々と旅しました。そこでも、扱いは特に変わりません。いつだったか、私も慣れてしまいました。

いつしか、情報集めは『趣味』から保身の『手段』に変わっていて。私の自身を省みることのない作戦に無理に追従して、自滅してしまう戦術人形もたくさんいました。

私を毛嫌いして虐待して、私の握った情報で破滅してしまう指揮官もたくさんいました。

その頃には、殻を被った私と素の私、どれが本当の私なのかも判然としていませんでした。何もかもが溶けて、混ざって、ぐずぐずになっていました。

でも、それでよかったのかも知れません。でないと私は、自分の罪に押し潰されてしまいそうだったから。

……502小隊の皆さんには、本当に感謝しています。
こんな私を、背後から撃たれても文句の言えない私を、こうして引き受けてくれたんですから。

その分、私は応えなければいけません。

こんな私を拾い上げてくれたリーダーの為にも。こんな私の情報を信じたばかりに死んでしまった、あの人達の為にも。

私は生き延びないと。例え、この身が既に唾棄すべき咎人であったとしても。

生き延びて、償わなければ。贖わなければ。

でなければ、私が裏切ったも同然に切り捨て、潰した魂が浮かばれない。

皆が知っている通り、私は潰した。未来あったであろう人々を、戦術人形を。

私の手前勝手な『欲』のままに、消費した——消費して、浪費して、浪費した。

鉄血兵を殲滅して、残された人類を救済しなければ。

私は罪を償えない。

……ああ、あるいは、もう。

——私は、赦されないのでしょうか。

「……ああ」

夢を、見ました。

もうどれくらい前だったかも判然としない……それでも確かにあった、私の罪の象徴です。

死んだ人間は生き返らない、過ぎた過去は覆らない。

……ただ、それだけの事です。

「……おはようございます」

システムテク——実測数値全てが危険域にありますオールオブエマーゲンシー。

旧司令部が倒壊し、リーダーが過負荷によってダウンしてしまったあの日から、大体2週間が経ちました。

どうやら今は昼頃の様ですね。太陽が真上近くまで登っています。

そして、私はP90に背負われて、旅を続けていました。

「ああ、おはようMGL。調子はどう？」

「……芳しくないですね。相変わらずボディはボロボロですし」

「おう起きたかMGL。大丈夫か？ そのドチビにナニカされてねえか？」

「なんもしとらんわブチ転がすぞ！」

「おうやんのかコラマシンガンの錆にしてやらあ!!」

「待つて！ ストップ！ ウェイト！ やめてください死んでしまします!!」

私とリーダーを背負ったままぶつかり合いそうな二人を慌てて制止。放っておくと本当に殺し合いを始めそうなので恐ろしいことこの上ないです。

それにしても、あそこに来るときに分かってましたが、やっぱりだいぶ遠いですね。このペースで行くとあとどれくらいかかるんでしょう？

物資は大丈夫なんでしょうか？

そう思っただけ聞いてみると、

「ありったけ持ち出してきたからあと1年は戦えるぞ」

だそうです。そのセリフ、あとで水爆とか撃つたりしませんよね？

まあ、MAGに関してはマシンガン以外に興味はないみたいなので大丈夫でしょう、はい。

そういえば、とP90が言いました。

「もうこの前賭けた時から1週間じゃん。全然つかないんだけどどうしてくれんの」

「向こうに着いたら一括で払ってやるから落ち付けって」

「もう存在しない国の通貨で払われてもどうしようもねーんだよ！

ジンバブエとか何年前に崩壊したと思っただけのさ!!」

「HHHHHそれもそうだな。ところでアフリカ大陸の壊滅は労働力的な意味でかなりの喪失だと思うんだけどメエそのあたりはどう思うね？」

「実際その通りなのかもしれないけど問題発言ツ!! しかもアメリカ

銃のお前が言うのと余計に!!」

「H A H A H A H A H A!」

「ここぞとばかりにアメリカンに笑ってんじゃあねえ!!」

「あの、二人ともこれ以上は鉄血にバレますよ……?」

「やいやいと騒ぎ始めた二人をいつものように仲裁。もうここ最近の日課ですね。」

「じゃあもう一回賭けようぜ。次は現実的なベットして」

「OKいいだろう! ボクはあと1か月以内に辿り着けるに1000コイン賭ける!」

「じゃああたしはたどり着けないほうに502小队全員分の新スキーン。系統的にはメイド」

「メ タ フ イ ク シ ョ ン !」

「H A H A H A H A H A!!」

「いやあの、ですからちよつとお……」

——時間は進む。私達も進む。

私達の待ち望む『目的地』にたどり着くのは、いつなんでしょう?

——昔話をしてあげようか。なんてことはない、世界が破滅に向かっていたころの、とある指揮官と戦術人形のお話さ。

あるところに、職業指揮官のお兄さんが一人いた。そして、それに付き従うたくさんの戦術人形。

指揮官は、少しだけ規律に煩い人だった。たとえ別の手段の方が効率的であつたとしても、頑なに自分の意見を通そうとする人だった。

最初の方は、戦術人形の皆も我慢していたさ。自分の思い違いだ、きつと気にしすぎなだけだ——そんな風に、己を律して。

けれど、しばらく経つと誰もが指揮官の異常さに気付いた。

なんてことはない——彼は、自分のやる事が全て『正しい』と思う人種だったんだ。英雄症候群？ 或いはマイクロマネージメント？ とにかく、そんな感じのある種のナルシズムを患っていそうな感じのね。

そう、『たとえ何があろうと』——彼は、自分の意見を曲げようとはしなかった。それが、レールを破滅一直線のそれへと切り替えてしまふ愚行であつたとしても。

そして、指揮官の指示に従っていた戦術人形の中に、サブマシンガン持ちが一人いた——それが、ボクだ。

当時のボクは……なんというか、こう、承認欲求が強いというか、そんな感じだね。どんな無理な指示でも、従つてた。アイツはその度にボクが結構壊れた状態で帰ってくるのが気に入らなかつたみたいで、いつも不満そうだったけれど。

そして、転機がやってくる。

——激戦区の最前線で、ボクは初めて指揮官の命令に反した。

ボクの目の前には大破した戦術人形。そして、それに止めを刺そうとするハイエンドモデル——イントゥルーダー。

指揮官は、無線越しに前線を放棄して撤退しろと言ってきた。電腦のバックアップは取つてあるから、見捨てても替えが利くから戻つて来いと。

……その言葉が、ボクにはどうしても気にくわなかった。

ボクは指揮官の命令に反して、完全に油断していたイントウルダーの顔面に蹴りをぶち込んだ。もんどりうって倒れるそいつを他所に、ボクは発煙手榴弾を大量にばら撒いて、煙の中で仲間を背負って這う這うの体で帰還した。

そして、待っていたのは指揮官からの猛烈な叱咤。

もうろ覚えだし正直思い出したくもないから詳細は省くけど、まあなんとというか、自分の指示に従わなかったから云々みたいな内容だった。

それから何日か経った後、ボクはある場所への単騎潜入を命じられた。

対象は、あの時かち合ったハイエンドモデル、イントウルダーが占拠した前線基地だ。

ボクは一も二もなく出撃し、連絡を密にしながら基地へと潜り込んだ。

……今考えれば、イントウルダーが電子線を得意としているというのは、きつとアイツは知っていたんだろう。

結果から言えば、作戦は失敗した。

ボクは見事に釣り上げられ、ハイエンドモデルと一対一でぶつかることになったわけだ。当然、比較的練度が高めとはいえ、小隊単位でかち合つてやっと討ち取れるか討ち取れないかの相手を、戦術人形が一体だけで対抗できるわけがない。

ボクは大破しながらも、なんとか基地を離脱した。

無線で指揮官に指示を求めるも、戦闘の余波で壊れたのか、うんともすんとも言わない。

だが、その直後、向こうから一方的に、一言だけこんな通信が送られてきた。

『——俺の指示に従わない人形は要らない。まあ、精々一人ぼっちで頑張るんだな?』

その時、ボクは明確に理解した——ボクは、捨てられたのだと。

そこから先は、よく覚えている。ボクは半狂乱で逃亡し、その先で

——リーダーに拾われた。

あんなボロボロで、何より壊れ果てていたボクを、見捨てないでいてくれた。

——ボクを拾い上げてくれたリーダーに、心からの感謝を。

あの時のボクは猜疑心の塊だった。人間も、人形も、何もかもが信じられなかった。一たび相対すれば、どちらかが死ぬまで殺しあうのは明白だった。

そして、その運命を十全に理解していながら、それでもなお——それを良しとしなかった、貴女へと伝えたい。

ここが、この戦場が——ボクの、魂の場所なのだ。

「……ああ」

——夢を見た。

もうどれくらい前にあったのかも覚えていない——今はもう戻れない、遠い夢だ。

例えば人ならざる身だろうと——いや、何よりも人ならざる身だからこそ、過ぎた過去は覆せない。

……ただ、それだけの話さ。

「よっ、と」

寝袋から這い出て、立ち上がる。

どうやら、今は朝みたいだ——夜空の星は姿を隠して、東の方から日が昇っている。

見れば、近くでMAGがマシンガンの整備をしていた。

「起きたかドチビ。んじゃ、出発するかね」

「いい加減その呼び方改めないよマジで撃つよ?」

ジャキリと銃を構える。この野郎何回言っても全然ボクの呼び方直さないし、一回くらいは撃つてもいいよね?

大丈夫、小隊単位の火力が少し下がるだけだよ。

「待て落ち着け。話せばわかるだろ」

「問答無用って言葉知ってる?」

「マジで撃つ気がテメェ!」

「はっはー、冗談だよ」

銃を下ろす。

MAGはため息をつきながらも、マシンガンの整備に戻った。そんな丁寧なやつて意味はあるのかって気はしないでもないけど、まあ本人が満足してるなら別にいいのかな。

まあとにかく、今のうちに出発すべきだろうね。資材は残念なことに現状有限だ、無駄遣いは出来ない。

「うう……みんなー……みんなー……」

「……なんかうなされてるし」

何やら声がすると思っただけで見れば、寝袋にくるまったまま、険しい表情でMGLがなにがしかをブツブツ呟いていた。

みんな……みにみ……MINIMI?

……なるほど、さっぱり分からない。

「マシンガンの話か!？」

「ナチュラルにボクの心を読むな気持ち悪い。MGLがうなされてるみたいなんだ」

「うなされてるだあ?」

MAGがMGLの口元に耳を寄せ、首を捻る。

そして、整備を終えたばかりのマシンガンをすぐ横で構え、

「……とりあえずマシンガン撃てば解決するんじゃないの?」

「しねえわそれはお前だけだ!!」

「ええー」

「ええーじゃない!」

口をとがらせるMAG。見るからに不満そうだがそんな荒っぽい手段で諸問題が解決しそうなのはお前だけだ、諦めろ。

……やっぱり、急いだほうがよさそうだね。

「しよーがない、MGLも載せるか……えーつと、なんだっけ、アレに」

「……強化搬送車『ガトリングス』か?」

「そうそれ。っていうかなんでただのリヤカーにそんなたいそうな名前つけてるんだよ。まさかアレ改造して即席戦闘車両でも作るつもりなの?」

「……♪」

「おい。なんで目をそらして口笛を吹き始めた、おい」

明後日の方向を向いて露骨に誤魔化し始めたMAG。マジでやるつもりなのか。

いつまでたつても口を割ろうとしないので、ボクは諦めてMGLを荷台に積み込んだ。

現状、リヤカー……強化搬送車『ガトリングス』の荷台には、長い道のりのさなかで減った資材の隙間にねじ込み形でテントが立ててある。リーダーも今はそこで休んでいるんだ。

テントを開いて中身を覗き込むと、リーダーの隣に寄り添う黒い影。

「——敵?!?」

慌てて銃を向けるが、よくよく目を凝らしてみると……。

かわいらしい見た目！ ファンシーなカラーリング！ そしてそれらに不釣り合いな物々しい重武装！

そうその子の正体は——

「パチ公！ パチ公じゃんか！ 今までどこにいたー!?!」

『ワオン!』

そう、MAGが拾ってきたはいい物の、今までいまいちパツとする出番のなかったパチ公だった。今までどこで何してたんだお前。

「おい、そろそろ出発すつぞー」

「んー？ あー、あいよー」

そんなことをしていると、MAGがこちらに言う。

私が返事を返すと、少ししてから、ガラガラと音を立ててリヤカーが動き出した。

——時間は進む。ボクらも進む。

ボクらの待ち望む『目的地』なんて、本当にあるのかな？

110BA's Recollection

……暗闇の中で、誰かが祈っている。

あれは、聖女だろうか？ 何に祈っているのかは、暗くて伺えない——『祭壇のようなものへ向けて祈っている』ということしか分からない。

……ただ。

『彼女』が一心不乱に祈っているのだけは、何よりも明確に伝わってきた。

“Amen,”	“Amen,”	“Amen,”	“Amen,”
願え	望め	祈れ	来たれ
Amen,	Amen,	Amen,	Amen,
願え	望め	祈れ	来たれ
Gospel	Gospel	Gospel	Gospel
福音	福音	福音	福音
Amen”	Amen”	Amen”	Amen”
願え	望め	祈れ	来たれ

彼女は一心不乱に祈り、何かを謳っていた。そこへ、私は歩みを進める。

その時、私はようやく気付いた。

……『私』は誰だろうか？ 名前も、姿も、自分のことを何一つとして覚えていない。『私』は、一体何者だ？

分からない。分からない。分からない。

——ほどなくして、『私』は思考を放棄した。この調子では、どれだけ熟考したとしても、『私』は私を思い出すことはないのだろう。であれば、目の前の『彼女』を調べるほうが、よほど理に適っている。

“So,”	“So,”	“So,”	“So,”
私	私	私	私
I,	I,	I,	I,
私	私	私	私
scary,	scary,	scary,	scary,
怖	怖	怖	怖
scary,”	scary,”	scary,”	scary,”
怖	怖	怖	怖

彼女は歌う。彼女は唄う。彼女は詠う。

それは恐怖であり、それは絶望であり、それは空虚だった——それは、あまりにも痛ましい鎮魂歌だった。

その歌を聞いたとき、『私』は何かを思い出す。

……気付けば、『私』が立っているのは暗闇ではなく、曇り空に覆われた大地だった。記憶にない、けれどどこか懐かしい景色。

そして、どうやら地面に倒れているらしい私に手を差し伸べる、一人の青年。記憶にない、けれどもやはりどこか懐かしい、その姿。

彼は私を引っ張り上げ、快活そうな笑顔でこう呼びかけてきた。

Wake up! to keep the speed of sound

Crack the code that written by myself

Dirt and dust damage your part

Time is too short to count aloud

Wake up! Like a sleeper slow

Control your mind to alive Here is

an invisible cave Wake up and run

if you want an end of the darkness

……『私』は彼の手を取った。そして、彼と共に駆け抜けた。何処にあるかも分からない。『私』の望む答えを目指して。そして気付けば、『私』は私になっていた。無数の屍を積み重ねて山の上に立って、私は私を確立した。

Wake up! to keep the speed of sound

Crack the code that was written by myself

Dirt and dust damage your part

Time is too short to count aloud

Wake up! Like asleep slow

Control your mind to alive here is

if you want an invisible cave Wake up and run

そして、雨降る荒野で、私はふと気が付いた。気が付いて、しまった。私の背後にそびえ立つのは、今まで積み重ねてきた屍の山。彼らの放つ虚ろな視線に貫かれながら、私はふと、こう思ってしまったのだ。

——私の今までの旅路に、意味はあったのか？——

……気付いたときには、もう遅かった。私はあまりにも殺し過ぎた。私はあまりにも進み過ぎた。

……私は、ひたすら前へと歩むことしかできなくなっていた。

Minute of the end, and dose it still
In a rainy day, Let's fight for count
On the silent way, when do you get ca
Look into the void, it's scary
『恐怖』が笑顔と共
に手招きしていった

……そして。

暗闇の果てを目指した先で、私は仲間に出会った。私と同じ、辿るべき光を見失った者たち。

FN MAG。P90。MGL—140。

こんな私に愛想を尽かさず今までついて着てくれた。こんな私を見切ることなく今まで一緒にいてくれた。

それだけで、私にとっては望外の喜びだ——今となっては、その礼も言えないけれども。

欲を言うならば——死ぬ前に、彼女たちに伝えておきたかった。

意識が薄れていく。大地に立っていた私の肉体が、深淵へと沈み込んでいく。

次に目覚めるのは、いつになるのだろうか。また仲間と一緒に生き抜けるようになるのは、いつになるのだろうか。

それだけを思っ——私の思考は、再び闇に包まれた。

その時に耳に届いた歌声。あの聖女のものだ。

最初に聞いたときには分からなかったが、今となってははっきりわかる。

そうだ、他ならぬ彼女こそが——

N今こそ、
 oそ、
 w、
 I、
 m、
 s、
 c、
 a、
 r、
 y、
 “

“
 A全、
 l、
 l、
 l、
 i、
 s、
 f、
 a、
 n、
 t、
 a、
 s、
 y、
 “

Oあ、
 h、
 “
 A全、
 l、
 l、
 l、
 i、
 s、
 f、
 a、
 n、
 t、
 a、
 s、
 y、
 “

A全、
 l、
 l、
 t、
 h、
 a、
 t、
 I、
 s、
 e、
 “
 N、
 o、
 w、
 I、
 m、
 s、
 c、
 a、
 r、
 y、
 “

Oあ、
 h、
 “
 A全、
 l、
 l、
 l、
 i、
 s、
 f、
 a、
 n、
 t、
 a、
 s、
 y、
 “

Travel & Trouble

よう、ご隣人^{ネイバー}。あたしだ、MAGだ。元気してたか？ 風邪とか引いてねえか？ 安心しろ、こっちはすこぶる元気だぜ。

まあ、少しばかり元気を余らせすぎてて……

「Los! Los!! Los!!! 行け行けどんどんマツシガン
! ガラクタ共をぶつとばせーっ!!」

……若干暴走気味なんだけどな。

いや、待て待て、落ちて着けご隣人^{ネイバー}。気持ちは分かるぜ？ どうせ『またマシンガンキチが暴走してやがる』とか思ってるんだろ？ その気持ちは分かる。すげー分かる。あたしとしても同感だ。

じゃあ何故こんな大惨事になっているかと言うと、それは一時間ほど時間を遡る。

——あたしはその時、燦々と日光が降り注ぐ中で強化搬送車『ガトリングス』を引っ張っていた。

リーダーはダウンしてMGLもボディがアウト、挙句の果てにP90はオーバーヒートしてひっくり返りやがった。何考えてんだアイツ。戦術人形が熱中症とか笑い話にもなんねえよ。

そんな訳で、重傷人形2人+ボンクラ人形をパチ公^{ペット}と一緒にテントにぶち込み、あたしは一人でひいこら言いながらリヤカーを引いてるわけだ。この野郎起きたら絶対一発見舞ってやる。

そして、事件は起きた。

ツイてない事に、鉄血兵にロックオンされたのだ。しかも、結構な規模ときた。ざっと見た限りではAR^{Vespid}持ちとSMG^{Ripper}二丁^{二丁}持ちしかないっぽい、単純な物量が今回は脅威的だ。いやヤバいだろこれ流石に!?

あたしは慌ててマシンガンを構えつつ、心の底か吼えた。

「ふざっけんなマジで、誰だよこっちの方に兵動かしたハイエンド!? 見つけ次第マシンガンで風穴開けてやるからな!?!」

——ちなみに同時刻。

鉄血工造のとある基地では、四肢が残らず吹っ飛んだハイエンドと

悪寒を訴えるハイエンドという不思議な百合カップルの姿が見られたとか見られなかったとか。

もちろんあたしはそんな事知る由もねえ——という訳で、時間軸は現在まで戻ってくる。

あたしは右へ左へマシニングの銃口を振り回しながら、全力で防衛戦を繰り広げていた。いやでもさあ……、

「防衛戦つたつって流石に限度があんだろ!? あたし一人じゃ流石にきつ——いや待て」

そこで、あたしは違和感に気付いた。

コイツらなんと言うか、こう……:生気がねえぞ? あたしらに襲い掛かってきたのも、『とりあえず見つけたからやられる前にやっとか』くらいにしか感じられん。その証拠として、向こうはこんだけの物量があんのに戦力の逐次投入以外をしてくる気配がない。

チエスで言えばルークやビショップには目も向けずにひたすらポーンだけを前進させるようなモンだ……:どう考えても悪手以外の何物でもねえ。

「これは……:いけるか?」

向こうが何を考えてるのは皆目見当もつかんが、まあ勝ちやすくしてくれるってんなら都合がいい——そっちのお望み通りボロ勝ちしてやんよつ!!

あたしはひぎを折って姿勢を低くし、そのまま一気に跳躍。あ? そんな真似したらりヤカーの方にガラクタが集う? 問題ねえな!

あたしは空中で指笛を鳴らし、その名を叫ぶ。

「——出番だパチ公ツ!!」

『ウオオオオオオオオンツ!!』

……:あれ、お前ってそんなガチっぽい鳴き方だったっけ?

そんなあたしの思いをよそに、パチ公はテントから飛び出して戦場にフェイドイン。雄叫びと共に、迫りくる鉄血兵をことごとくなぎ倒していた。

つたく、有能すぎて困るぜあたしのペットは!

あたしは敵陣のド真ん中まで跳び、足元にいた鉄血兵どもを踏みつ

ぶしながら着地。そして、例によって例の如くマシンガンを構えつつ

「連射掃射速射平射乱射アアアアアアアアアアアアツ!!!」

……ま、言ってる事は派手だがやってる事はいつも通りだな。マシンガンは派手でいいんだが代わり映えがしないのが唯一の難点だ。まあそんな動き回りながら撃つようなものでもないからな、仕方ないか。

ま、それはさて置き。あたしとパチ公の活躍あって、鉄血兵の数はズンドコ減っていく……やっぱり違和感しかねえわ。コイツら一体何を考えてる? ……何を企んでる?!

——その時だった。

『——アハハハハッ! 見ツケタ! 見ツケタ! 見ツケタ!』

「なんだあ!?!」

何処からともなく響く声。

それが耳に届くと同時に、あたしらの周りにいた鉄血兵共が一斉に倒れた——まるで、糸が切れた人形みてえに。

突然の事態に理解が追いつかない。なんだ、一体何がどうなってやる?!

「なんだ何処のどいつだまたマシンガン使わねー異教徒の仕業か!?!」

『ザーンネーン、ソナゴツクテ綺麗ジヤナイ銃ナンテ使ワナイヨ!』

「——ああん!? 売られた喧嘩は買うぞコラア!!! 隠れてねえで出てこいやレンコンにしてやんよお!!!」

こういう挑発に一も二もなく乗っちゃうのはあたしの悪い癖だな。うん。

ともあれ、その甲斐あつてか、声の主は向こうから姿を見せてくれやがった。うんうん、結果オーライってことでいいよな?!

——そいつは、ひどく奇妙な風体をしていた。

華奢な矮躯を申し訳程度に覆う、簡素なモノクロのネグリジエ。口元をすっぽりと覆い隠す、大きく×印が描かれたマスク。伸び放題の黒髪は、頭の脇でいかにも大雑把にやりましたといった感じのサイドテールにまとめられている。その肩には、手乗りサイズのピエロ人形

がちよこんと座り込んでいた。

そして、その両手には人間大の人形が抱きかかえ——!?

「……オイオイ、オイオイオイオイ。冗談きついぜ……」

——いや違う。あれはただの人形なんかじゃあねえ。

ありやあ間違いない……戦術人形だ。ご丁寧に心臓部のコアはぶち抜かれてやがんな……ケツ、『血抜き』でもしたつもりかよ、趣味悪い。

『見ツケタ！ 見ツケタ！ 見ツケタ！ 生キノイイ材料ガタクサンダ！ 今日ハツイテルナア!!』

昏い目でこちらを見据える『そいつ』——その肩に乗ったピエロ人形が、ゲタゲタと耳障りな声で喚く。

鬱陶しい……撃つてもいいか？ 良いよな？

……そういや、『たくさん』とか言ってたな。つてことは、コイツの目当てはあたしだけじゃねえな？

あたしらをまとめて『収穫』するつもりか……。

……つまり、コイツはリーダーに手を出すつてことだよな？

じゃあ手っ取り早く殺すか。

決断したあとは早かった。

ズンツ!! と地面がクレーター状に陥没するレベルの力強さで踏み込み、あたしは一步前が出る。……『震脚』だったか？ あのジジイはそう言ってたような気がすんな。

そして、目の前の下手人目掛けて拳を振りかぶる。やっべ、うっかり八極じゃなくてデフォパンチで構えちまった。だが問題ねえ、このルートなら邪魔さえなけりやストレートにぶん殴れる！

「——ぶっ飛べ!!」

ともあれ、右腕を容赦なくフルスイング。マシンガン？ 確かに重

要だが今はこいつをぶっ飛ばす方が先決だ!!

……だが、あたしの目論見はあっさり破綻する事になる。

あ？ 理由？

……『邪魔さえなけりや』つてさつき言ったんだから、そりや邪魔が入ったに決まってるだろ？

Travel & Trouble 2

【A——urrrrrrrッ!!】

「人違いじゃボケエ！ よそを当たれ!!」

鉄パイプを振りかぶる黒騎士——『湖光騎士』デユ・ラック。

アーサーがなんだとか叫んでるし、まあ間違いなく元ネタはアレだろうな。あのー……名前なんだっけ。とにかくアーサー王伝説に出てきた伝説のヒトツマニア。

いや名前なんざどうでもいい、目下最大の問題は……。

「なんで伝説譚に出てくる騎士が鉄パイプ振り回してんだ!? しかも無駄に使いこなしてやがるしよお!!」

『資材が足りナカッタノ』

「配分しつかりしろやア!!」

鋭く重い鉄パイプの振り下ろしを的確に受け流しつつ叫ぶ。ちっくしよう長物の扱いが無駄に巧いなコイツ！ 今ちよつと危なかった！

レンジが近すぎるからマシンガンは使えねえ、つつーか使うにしても撃つんじゃなくて殴る用になっちまう！ それでマシンガンが壊れたら発狂するぞあたし!?

「畜生やりづれえっ!」

【A A H H H H H H H H!!】

絶叫。

黒騎士は乱雑に鉄パイプを振り回し、的確にあたしの急所を狙ってくる。

この野郎、見るからに重い鎧着てる癖して動きが警戒すぎんだろ！ しかもこの動きは棒術か!? ジジイン所で師事してる時に似たようなモン見たぞオイ！

【U a a a a a A A A!!】

ジャカツ、と金属同士の擦れる音が響く。

気が付くと、奴は鉄パイプを持っていないほうの手でサブマシンガンを——って何イツ!!?

「つつぶねえつつつ??」

慌てて横つ飛びに黒騎士の正面から飛びのくと、案の定奴は下から上へ振り上げるようにサブマシンガンを乱射した。つつーかありやMP5か？ まさかたあ思うが急にムテキフィールド張ったりしねえよな!? くつそまた懸念材料が増えた！

【Arrrr!!】

間髪入れずに黒騎士は跳躍し、あたし目がけてまっすぐに鉄パイプを振り下ろす。あたしはそれをギリギリのラインで躲し、すかさず顔面にヤクザキックをぶち込んだ。

しかし向こうもさるもので、体の動きを最大限に駆使してダメージを最小限に抑え、その勢いを利用するように回転蹴りを放ってきた。本当に騎士なのかお前。絶対見てくれただけだろ。

「クソがつ、おちおちマシンガンも撃ってられねえ！」

【OOOOOOOOAA!!】

つつーかそれ以前にリーチの差がきつい！ 棒相手に素手は流石のあたしもきついぜ！

そして、あたしの叫びに応えるかのように、黒騎士は懐から何かを取り出した。

取り出したその正体に、あたしは思わず目を見開く。

明らかに懐から出せる上限を超えたサイズ！ 本体横に備え付けられた巨大な弾薬箱！ そして一つにまとめて束ねられた6本の銃身！

まさか、まさかその銃は――

「JM61A1――ツ!!」

【Arrrrrrrrrr!!】

――直後。

あたしへ向けてまっすぐに、20mm弾の嵐が迫りくる。

■

■

「……なんだあ？」

気が付くと、ボクはリーダーやMGLと一緒にテントで寝かされていた。

おつかしいなあ、確かボクは外で斥候兼偵察兼鉄砲玉やってたはずなんだけど。なんでここにいるんだ？

あと、さつきから外が凄いやかましい。銃声、打撃音、衝撃音 et c……なんだ、一体外で何が起こってるんだ??

「……とりあえず確認してみるかな」

もそもそと起き上がり、リーダーやMGLの体をうっかり蹴らないようにそつと移動。

そして、テントのフアスナーを開け、気になる外の様子を見る事に。

……目の前で今まさにフアスナーを開けようとしていたと思しき、自律人形っぽい人型と目が合いました。

「……、」

「……ん〜?」

突然の出来事に、双方硬直。そのまま、1秒、2秒、3秒……。

そして、5秒ほど経過した後で、ようやく互いに再起動。

ボクらは銃を突き付けあい、そのまま銃撃戦に突入——するわけがない！ 曲がりなりにも502小隊の一員が、素直にそんなことを受け入れてたまるか！

ボクは体軀に物を言わせて前方へ跳躍——そのまま、目の前の（推定）自律人形の顔面にドロップキックを叩き込んだ。

とんでもない音が響き、あっけなく自律人形の首が吹っ飛ぶ。

「あーびつくりした、誰だこんな悪戯する馬鹿……は……?」

テントから外に出ると、そこには居るわ居るわ大量の自律人形。

どいつもこいつも、アイカメラを不気味に輝かせてこつちを見据えている。

見た目が完全に同一の自律人形がみんなこつちを見てくる様はちよつとしたホラーだ。かくいうボクもちよつとビビった。

「つ——煙幕投射つ!!」

反射的に、ボクは今所持している発煙手榴弾のほぼすべてをぶち撒けた。普通の発煙手榴弾から手製の発煙手榴弾『ミラーハウス』まで、とにかく千差万別多種多様お構いなしの大盤振る舞いだ。

あつという間に、辺り一帯は濃い煙幕に包まれて極度の視界不良に

陥った。

ザザッ、と耳元に付けた無線機がノイズを発する。

『起きたかボンクラ!! 生憎だがこっちは手が離せねえ、そっちはそっちで解決しろ!』

「いや何の騒ぎなのコレ!? プリーズ! プリーズエクスプレインミー!」

『襲・撃・に・決・ま・っ・て・ん・だ・ろ!! 口より先に手を動かせこの指定廃棄クソ雑魚ポンコツ人形オ!!』

「テメエ後で覚えてろよ絶対ブチ転がすからなツ!!」

怒りのままに叫び、そのまま通信を切断。

そして、煙幕越しに手を伸ばしてきていた自律人形の首元に懐から抜いたナイフを走らせ、そのまま容赦なく寸断した。リーダー手製の高周波ブレード『メガロドン』——まあ、なんというか、案の定えっぐい性能してました。

銃を撃つと敵をおびき寄せる事につながりそうなので、ボクは隠密行動の意も含めてナイフキルで敵を殲滅することに。

幸い、向こうの方は自分勝手に動くばかりで『協調性』という言葉を知らないらしい。はっはっは馬鹿め、そこから先は地獄だぞ。

「ウエルカム!」

「!?!」

「グッバイ・ストレンジジャー!」

「!?!」

背後から忍び寄り、瞬発力に物を言わせてわんさかいる敵をことごとく17分割。そんなおおよそ人の所業とは思えないことを繰り返して、出来上がったのは煙幕と残骸の散らばる地獄絵図。我ながら『これはひどい』と言い切れる惨状だ。

……その割には、さつきから自律人形の数が全く減ってる気配がないんだけど。

「……これ本当に減ってる? 減った先から補充とかされてない?」

ちなみにボクの考えは大正解で、実は煙幕の外側から続々と自律人形が押し寄せてきていた。といってもまあ、煙幕の中にいるボクがそ

んなことわかる訳もなく。

ボクは一度態勢を立て直すため、リヤカーのところまで撤退した。

……そういえば、MAGのあんちきしょうはともかくとして、パチ公は一体どこで何をやっているんだろう？

さて、噂のパチ公は今どこで何をしているかというところ。

『ウフフフフ……』

『ガルルルル……』

黒騎士とかち合うMAGから少し離れた場所で、今回の騒動の元凶であるハイエンドモデル『人形師』マリオネッターと真つ向からにらみ合っていた。

パチ公はマリオネッターを見据え、背部に搭載された火器管制ユニットを起動させて完全に戦闘態勢だ。それに対してマリオネッターは、丸腰同然の状態で悠然と微笑んでいる。

そして、彼女の肩に乗ったピエロ人形がおもむろに言葉を発する。

『Diner gate、ソレモ諸事情デ製造計画ガ凍結サレタ幻ノ

「1. 5世代」……！ 欲シイ!!』

『グルルルル（特別意識：何言ってるんだこいつ）』

頬に両手を当てて体をくねらせるマリオネッターと、その様子を冷めた目（冷めたアイカメラ？）で眺めるパチ公。何とも言い難い光景だった。

ともあれ、こうして眺めて分かったことがいくつもある。

どうやらこのハイエンドモデル、人工声を損傷しているのか喋ることが出来ないようだ。少なくとも口頭のコミュニケーション機能に関しては肩に乗った人形に依存しているらしい。何故直そうとしないのかは不明。

また、どうやら自分で戦う気はないらしい。先ほどから人形を送り出すばかりで、武器を持って立ち上がりとする気配がない。

代わりに、明らかに触れたらヤバそうなスパークを発する浮遊ユニットが現れる。その切っ先は、やはりというかなんと言うか全てがパチ公へと向けられていた。

『ウフ、ウフフフフ……♪ 痛クシナイヨ、チョットビリット来ルダケダカラ……』

『ウオン！（特別意識：それをやべーっつーんだよドアホ！）』

そのやり取りと共に、一人と一匹が激突する。

片や、スケアクロウよろしく大量の浮遊ユニットを侍らせるハイエンドモデル。片や、比較的高性能とはいえ常識的なレベルの銃火器しか搭載していない量産型。

すぐに結果は出るだろうと思われたが——しかし、そんなことはなかった。

パチ公は卓越した身のこなし——あんな必要最低限のパーツしかない箱型フォルムでどう身をこなすんだという質問は「ご法度——」で、迫りくる浮遊ユニット——通称『パラライザー』の猛攻を全て躲して見せたのだ。そして、去り際にしれつとマリオネッターの顔を踏んでから彼女の背後に着地する。

『アイタツ!?!』

『ワフツ（特別意識：ヴァカめ!）』

顔を抑えて涙目になるマリオネッター。それに対して、パチ公は何処か得意げに一言鳴いて見せた。

マリオネッターはすぐさまパラライザーを差し向けるが、機銃掃射であえなく大半が撃ち落とされた。

『グギギギギギ……!』

悔しそうに指をかむピエロ人形。マリオネッター本体も表立ったアクションは見せないが、先ほど比べて明らかに目が細くなってるし眉間にしわが寄ってるし、なにより殺気立っている。

ビツ、と彼女がおもむろに片腕を水平に伸ばした。

その直後、

『!?!』

バゴムツツツ!!! という轟音と共にマリオネッターの背後の地面が割れ、そこから八本の蛇の頭が姿を現す。

マリオネッターは半ギレでパチ公を指さし、こう叫んだ。

『——死ナナイ程度ニ殺シナサイツ!!』

【ギャオオオオオオオン!!】

『キャイン!?!（特別意識：いやウツソだろお前!?!）』

パチ公が悲鳴を上げる。

そして、そこへ8本の蛇の頭の主——自律人形『エイト・ハイト・サーベント八岐大蛇』が

ルまで壊れてはねえか。『今のところは』って前置きが付くけどな。

とそこで、煙幕に包まれたリヤカーの方で動きがあった。

くぐもった音と共に、煙幕の範囲が爆発的に広がったんだ。煙幕は恐ろしい勢いで拡散していき、そこそこ離れた場所にいたはずのあたしまでもが煙幕に飲み込まれた。

たまらずあたしは無線を起動して怒鳴りつける——おいコラテメエ、今度は何やりやがった!!

それに対して、通信先のアホ娘——P90は、こう返してきた。

『……ごめん、煙幕誤爆した。MGLの持ってた40mm発煙弾も含めて、全部』

衝撃の自白に、あたしの思考が停止する。

あたしは地面が崩れ落ちる錯覚を覚えながら、思わず全力で叫んでいた。

「——馬ツツツ……鹿野郎おおおおおおおおおおおおお
おおおおおっっっ
!!!????」

「あー、あー。あーあーあーあーあー」

霧深く日は遠からじ。

今の状況にこれほど似合っている言葉は中々ないだろう。こんなことわざ無いって？ いいんだよ、今ボクが考えたんだから。まあ実際は霧じゃなくて煙なんだけど、それはさておいて。

「やっちゃった、煙幕使い切っちゃった」

今、ボクの周囲には発煙手榴弾『だったもの』が大量に転がっている……『だったもの』と表現した理由は単純、不慮の事故によって全部が誤作動してしまったからだ。懐に入り切らずにリヤカーの上に雑に積んでおいた発煙手榴弾から撃ち出すための本体がご臨終してしまつたために放置されていた40mmグレネードまで、おおよそ『発煙系』にカテゴリされるものは全て吹き飛んだ。何だこの悪意ある誤爆は。どうしてこうなった。

「お陰でこっちは大損害だ。普通の発煙弾はともかく『ミラーハウス』まで誤爆するとか運が悪すぎるよ」

多分だけど、原因は流れ弾。さっきからボクは一発も撃っていない訳だけど、向こうは残弾なんぞ気にしてんじゃねえ!! とばかりにバカス力撃ってくるからね。何があつてもリーダーとMGLには当たらないでくれって思ってたけど、二番目に当たって欲しくないやつに吸い込まれるように直撃した。

しかも、最悪なことに当たつたのはよりによつてグレネード。発煙手榴弾の山に突っ込んだグレネードは山の中で起爆し、すぐ近くに積んであつた40mm発煙弾を巻き込んで盛大に炸裂した——結果、この始末。

見渡す限り辺り一面が真っ白で手に負えない。なんだ、ここは産業革命真っ最中のイギリスにでもなったのか。

「はい隙だらけ。背後から接近してるからって油断し過ぎ」

【!?!】

背後から忍び寄ってきた自律人形を細切れにして、ボクはもう一回

テントの方へと戻って行つた。この状況だと、下手に打つて出るよりも保守的に行つた方が効率的だ——どうせ、敵は向こうから寄つてくるわけだし。

……さて、ここからどう状況を打開しようか。

とりあえず、向こう側が自律人形を際限なく投入してきてるのはほぼ確定。さつきから倒しても倒しても一向にいはなくなる気配がないしね。

MAGの方もなんかすごいのと戦つてるみたいだし。なんだあのエグい銃声。つていうか本当に『銃』なのか？ アイツのマシンガンだつてもうちよつと控えめな音だつたぞ。

「……まあ、苦勞してそうだなあ向こうも。あと、いい加減気配の消し方を学べポンコツ」

「——!!!」

こつそりテントの中に侵入しようとしていた自律人形の首根つこを引つ掴み、四肢を切り落とす。そして、力任せに胸板に右拳を叩き込んでコアをぶち抜いた。

はっはっはー、脆い脆い。これ本当に自律人形か？ ちゃんと金属装甲使つてる？ どこぞのL85みたいに軽量化という名のケチりでポリマー使つたりしてない？

その時、ドドドドド……と地響きのような音がボクの耳に届いた。ボクは音のする方に顔を向けると——

「——つたばりやがれえツツツ!!!」

「なつ、あべっしやあつ!!?」

——次の瞬間、ボクの頬にはMAGの構えたマシンガンの銃身がめり込んでいた。

ボクの体はボールのように吹っ飛び、地面をゴロゴロと数メートル転がってなおも止まることなく、リヤカーの車輪に顔面を強打する形でようやく停止した。痛い。

「この野郎何やらかしてくれとんじやオラア！ 見ろこの惨状を！

見渡す限り煙幕で何も見えやしねえ!!」

「いてて……いやそれは不慮の事故で——」

「だまらっしやい!! 不慮の事故で済むと思ったら大間違いに決まっ
てんだろこのアホが! どうするんだコレ!? 発煙手榴弾オール誤
爆ってどうするんだこれから!? オイオイこころ一体煙幕で埋め尽
くされてるわ半日は歩き通さねえとこれ脱出できねえわ!!」

「ご、ごめん……」

「ごめんで済むなら警察もPMCも要らんわア!! マジでどうすんだ
コレ煙幕の中で接敵しちまったらあたしが好き放題にマシンガン撃
てねえじゃねえかよ!!」

「てんめえ本音はそれかーッ?!」

ぎやいぎやいと二人で怒鳴り合う。

その声につられてどんどん自律人形が寄ってくるけど、それは視界
に入った瞬間秒でスクラップだ。その気になれば弾丸だって追い抜
かせるボクの敏捷性なめんな。

……そういえば、何かとても大事なことを忘れてるような気がする
けど……なんだったっけ。

まあいつか、忘れてるって事は所詮その程度の重要度だったってこ
とでしょ。

■ ■ ■

非常に残念だがP90が忘れてるのは極めて重要度と緊急度の高
い案件である。

今、パチ公は荒野を全力疾走していた。

そしてその背中を、八つの頭を持つ超巨大な竜——自律人形
『八岐大蛇』^{エイト・ヘイト・サーペント}が追いかける。

【オオオオオオオツ!!】

『ワツファアアアアツ!!?(特別意識:What's the Fuck
!! 畜生どうしてこうなったーっ!!?)』

時折、パチ公は背中に搭載した機関銃を乱射する。が、5.56m
m弾の嵐は鉄壁の装甲を貫けず、わずかに凹みを作る程度にとどまっ
た。向こうが自分から突っ込んできている分の相対加速度を加味し
てもなおこの程度のダメージしか入らないとは、果たしてあの大蛇は
どれほどの装甲を持っているのやら。

【サレエエエエエエエエ……!!】

『キャン！ キヤイン！（特別意識：来んなー！ 来んなこの野郎ー!!）』

全長5mオーバーの巨体からはとても考えられない速度で迫りくる大蛇に、パチ公が悲鳴を上げる。

パツと見る限り、加速装置の類は一切積んでいない。レースカーでいうニトロや某身体が闘争を求めるゲームでいうV O Bの類を一切用いず、純粹に這うスピードが恐ろしく速いのだ。一体どういうカラクリを使えば5・56mm弾をはじく重装甲とこれだけのスピードを両立できるのか——機動性論者で装甲などそこらの民生自律人形にすら劣っているパチ公は、内心嫉妬で臍を噛みまくっていた。

しかし、そこは軽装甲&高機動型自律人形の底力で、【エイト・ヘイト・サーベント】『八岐大蛇』は追従こそしているが追いつく気配はない。

このままその辺の谷底にでも落とせば大丈夫か——そう思った直後。

【ウオオオオオオオ!!】

バキン！ という音と共に、大蛇の頭の一つの口が限界を超えて開かれ——そこから、にゅつと一本の極太砲身が姿を覗かせた。

『ファッ!!?』

予想外の出来事に、パチ公の口(?)から不思議な声が飛び出す。それと同時に、大蛇は頭を——ひいては口から伸ばした砲身をパチ公へと突きつけ——

【ンムウウオオオオオッ!!!】

——咆哮と共に、かつて『ボフォース40mm機関砲』と呼ばれていた砲が唸りをあげた。

「オルルアツツツ!!!」

「甘いっ!!」

——濃い煙に覆われた荒野のド真ん中。

そこで、あたしは目の前のドチビと真っ向からキャッチボールで全
面対決していた。

……いや、落ち着けご隣人。^{ネイバー}あたしとしてもこの状況は不可解極まる。という訳で、一緒にこうなるに至った流れを紐解いて行こうじゃねえか。

まず、あたしはドチビの顔面をマシンガンでぶん殴った、それが大前提だ。……あ？ マシンガンを愛してるくせに扱いが雑？ こまけえこたあいんだよ、マシンガン愛は人それぞれだ。あたしの場合最高のパートナーだな。ロングレンジで使つてよしショートレンジで使つてよし、さらにクロスレンジで使つてよしと非の打ちどころのない完璧さだ。銃剣突撃？ 邪道。

とにかく、そこであたしは文句を言いまくった——マシンガン撃たせろコノヤロウ!!

「ああん?! 敵が見えなくてもマシンガンくらい撃てるだろうが頭沸いてんのか!？」

「デメエいい度胸だ! あたしの煮えたぎるマシンガン愛でメタメタにしてやる!!」

「やつてやろうじゃねえかこの野郎! よーしここは穩便にキャッチボールで決めてやる!!」

いやチキったなお前。そこは銃撃戦だろどう考えても。

まあ、あたしとしてもこんな所で無駄に負傷を増やすのは本意じゃあねえ……という訳で、あたしはそれを快諾。

そして、余った資材から即席でグローブ（鋼材で作ったスプリング式の手袋）とボール（わかりやすく鉄球）を作成し——

「くたばりやがれっ!!」

「ブチ込んでやる!!」

「……は？」

——意気揚々と音源の下へと駆けていったあたしだったが、現実は無情だった。

そこで待っていたのはオーブンボルト教団の入信希望者でもなければそもそも人型ですらない、頭が八つのデカイ蛇。

その内の一つの口の中から、機関砲の銃身が一本にゆつと飛び出している。

「は??」

——それは、あたしにとってあまりにも許されざる光景。

マシンガン兵器としての存在価値しか認めていない、非人道的極まる運用方法。

「は??」

向こうもあたしに気付いたらしく、その砲口をあたしへと突きつける。

その様子を棒立ちで眺めるあたしの右肩に、パチ公がポンと乗った。そして、短い脚でペしペしとあたしの頬を叩く。

そこで、あたしはようやく我に返った。

「——ブチ殺す」

訂正、欠片も正気になんぞ戻ってはなかったな。まあ予想はついていたが。

——発砲。威嚇射撃のつもりなのか、40mm弾が一発だけあたしの顔目がけて飛んできた。

あたしはそれを片手であっさりを受け止め、

「……なあ。なあなあなあ。そりゃひよつとしてあたしに対する宣戦布告か？ ナメてんの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ 死ぬなら手伝うよ？ 介錯するよ？」

ぐしやり、と人形義体の握力に物を言わせて握りつぶす。

さて、さてさて。目の前であたしを生意気にも睨みつけてやがるクソ蛇はどう調理したモンか……。

とりあえず首はもぐよな？ んで、口こじ開けて、マシンガンの類積んでない頭はその場で踏みつぶすか。で、積んでたら中身だけでも

らって踏みつぶす？

いや待て、一息に殺しちゃつまらねえよな。ここは一つ、地獄の苦しみでも味わってもらおうか。

ガチャン、とあたしは愛用のマシンガンを構える。

「——行くぜ相棒！ 野郎オブクラッシャアアアアアアアアアアア!!」

【ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!】

さあいくぜ、今必殺のマシニングン突撃イツ!!

ヘビ野郎もあたしのことを脅威だと認識したのか、口の中の機関砲をようやく撃ち始めた。アクションがおせえんだよこのノロマが!!

撃ち出される40mm弾の雨あられをステップで回避し、あたしはヘビ野郎のある場所めがけてマシニングンを乱射。……あん？ マシニングンで、しかも移動しながらの狙い撃ちなんざ出来るわけがない？

——チツチツチイ、甘いなネイバーご隣人。

あたしはM.A.G.だぜ？ その程度のこと理解してねえ訳がねえだろうが！ 当然織り込み済みだ!!

大量に撃ち出される7.62mm弾の嵐——その内の一つが、ヘビ野郎の首の付け根めがけて一気呵成に襲い掛かる。

そして。

【クガアアアッ!?!】

バキン！ と甲高い音を立てて、突然ヘビ野郎の首の一つが倒れ込み、地面に叩きつけられた。よっしビンゴ!!

——説明してやろう、あたしが狙ったのは首を支える複合ジョイントだ。ヘビつっーのは基本的に体をくねらせて移動してるわけだが、この時ネックになるのが背骨。コイツを形作る骨の数が少ないと、必然的に動き方も不格好になるし移動速度も遅くなる。実際の蛇の背骨は500個くらいのパーツで出来てるって話だから、まあそのあたりの弱点は見事にカバーしてるって訳だな。さっきまでの滑らかな挙動を見る限り、目の前のヘビ野郎もそのあたりは結構いいところまで再現してるんだろう。

……で、あたしはそれを逆手に取った。

『骨が多い』つっーのはイコールで『関節が多い』につながる。

つまり、そのうちのどれか一つでもぶち抜かれちゃえば……必然、こんなザマになるってこったな。

「ハッハーツ!! ざまあみやがれクソ蛇野郎! オラオラ残りの首も全部関節外してやんよオ!!」

【アアアアアアアアアアアアツ!!】

あたしが挑発した直後。

バキン! と音を立てて、残りの蛇頭の口からも多種多様な銃火器……訂正、重火器が顔をのぞかせた。

RPG―7、150mm T b t s K C / 36連装砲、マウザー M 1918、e t c……おおそ一体の人形に向けるにしてはオーバーキルすぎる大火力がこれでもかとはかりにあたしに向けられている。

あたしは肩に乗っていたパチ公と顔を見合わせて、

「あらあ……なあこれちつとばかしヤベエンじゃね?」

『キヤイン!! (特別意識: 何自分から地雷踏みに行つてんだこの馬鹿マスタ―!?)』

——直後。

少し前までとは比べ物にならない威力と密度の弾幕が、あたしパチ公めがけて放たれた。

対戦車ライフル、無反動砲、艦砲……多種多様な砲がもたらすオーバークルな砲声のハーモニーが、辺りに撒き散らされる。

——その様子を眺める、不気味な影が一つ。

鉄血兵……だろうか？ 少なくとも、ワンサイドアップにされた髪の色や顔にかけている紫のバイザーからは、鉄血工造の自律人形であるDragonが連想される。

彼女は、巨大な蛇型自立兵器とマシンガン持ちの戦術人形の戦闘風景を眺め——ている訳ではない。

その視線は最初から最後まで、ある一点に固定されていた。

「……あれは……」

『鉄血工造のハイエンドだろ？ 俺は詳しいんだ』

『アイエエー！ テツケツ！ テツケツナンデー！』

『しまったテツケツ・リアリテイ・シヨック T R Sの罹患者がこんなところにも！』

『取り押さえろ！ なんなら始末しまえ！』

そこには彼女しかない筈なのに、彼女の周囲からにぎやかな声が聞こえる。

老若男女問わず、十人十色で多種多様な声が——彼女の周りを囲んでいた。

彼女はそれに対して鬱陶しげな表情を浮かべると、

「頼むから少し黙れ……全く、忌々しいガラクタがこんなところまで紛れ込んでいたとはな」

そう——彼女の視線は徹頭徹尾、不明な新型ハイエンドモデルマリオネッターにしか向けられていなかった。

その視線とそれに込められた感情を知ってか知らずか、姿なき声は軽佻浮薄な調子を崩そうともせずにごう嘯く。

『ま、仕方ねえだろ、アイツらはアリとかハチとか、そういう虫の類みてえなモンだからな。本丸を叩かない限りはポコジヤガ湧き出てきやがる』

「アリ……ハチ……？」

彼女は首を傾げる。メモリやアーカイブの中を漁ってみるが、該当するモノは存在しなかった。

声は「んー？」と彼女のリアクションに対して疑問気な声を発し、その後何かに気付いたようで、

『ああなるほど、お前さんは知らねえのか。まあ、今となっちゃあその手の類の虫はほとんど絶滅しちまつてるからな……』

『まあ、あつたとしてもミュータントかビークル位ですよ。現代まで残ってる、そういう系の名前がついてるのって』

『ともあれ、だ。……どうやら、あのでっかい蛇はあのハイエンドモデルの支配下にあるっぽいな。あのハイエンド見てみろよ、ポケモンよろしく指示出しまくってやがる』

ポケモン……？ と彼女は再び首を傾げた。

『そうかー知らないかー……。——ま、少なくともあのネグリジェロリがヘビ野郎の司令塔だったのは間違いねえだろ。あのヘビ野郎もアイツをぶちのめしただけで止まるとは思えねえが……。ま、多少の隙をあのマシガンつ子が突いてくれりやあ万々歳だ』

「……12ゲージで狙撃でもしろと？」

『そういえばアナタってシヨットガンの戦術人形だったわね……』

手に持つシヨットガンに視線を落とす——その時、流れ弾の13mm弾が彼女の顔めがけてまっすぐに飛来してきた。

あわや大惨事か——と思われた、その時。

『ンッン、甘い！』

ギャリツツ!! と甲高い音が響く。

いつの間にか、彼女の前には一枚のシールドが浮遊していた。どうやら接地面を斜めにして受け止めたらしく、その表面には銃弾によって削られた跡が一直線に残っている。

声は彼女に向けて、

『ふーん美味しい……。もう少し反応遅れてたらお前さんの頭スクラップになってたぜ。ホラホラ、なんか俺に言うことあるんじゃないかい？』

などと言ってきた。

彼女はそれに対して短く一言、

「そうか、とつと成仏しろ」

『辛辣すぎる訳だが!』

『草』

『草』

『草ww』

『m9 (ゝ ㇏)』

『うっぜえこいつらこごぞとばかりに煽ってきやがる! あと草に草生やすなぶつ殺すぞ!!』

そんな声を引き連れて、彼女はその場を後にする。

彼女の立ち去った後には、受け流された銃弾の着弾した弾痕と――

――明らかに彼女だけのものではない、十数人分相当の足跡が遺されていた。

■ ■ ■

【ギギギギギガガガガガガガッ!!】

「ぬおおおおおおおっ!!?」

『キャン! キヤイン! ギヤイアアアッ!!』

咆哮。砲声。逃亡。

えー、現状を説明しようか。あたしは今、大量の砲弾に襲われて逃げ回っている。

いやいやいやこれはどう考えてもオーバーキルすぎんだろ!? こんなん喰らったら肉片一つ……ちよい訂正、ケーブル一本残らねえぞ!?

「くっそ調子乗った! マジで調子乗った! とつとマシンガンでハチの巣にしときやよかった!!」

『ワンワフワオン! (特別意識:言つとる場合かーッ!)』

「やめっ、やめろパチ公! 悪かった! あたしが悪かったからさあ!」

べしべしとパチ公があたしの頬を叩く。痛い痛い、機銃の銃身で叩くんじゃねえ!

くつそそれにしてもこの状況はどう打開すりゃいいんだ!? リロードの隙を突くにしても装弾数がバラツバラなせいでタイミングも滅茶苦茶だし、つつーか基本単発の艦砲が混ざってる時点で無理だろ!

となると、狙い目は弾切れか……?

何にせよ、しばらくは走り続けたほうがよさそうだよなあ!!

「Run! Run!! Run!!!」

「アアアアアアアア——!!!」

咆哮と共に、狙いが修正されていく。

これデフォルトの移動速度じゃとつくの昔に逝ってるなあたし! リーダー謹製の外骨格装備しといてよかったわマジで!

「つたく、少しばかりノってくかあ!?!」

ギシィツ!! と外骨格のスプリングを大きく軋ませ、へび野郎めがけてあたしは一直線に駆ける。

途中、対戦車ライフルの弾頭だとか艦砲の徹甲弾だとかがすつ飛んできてたが、まあ当たらなけりゃあ別段どうということはない。かすただけで逝けるけどな!

「ハリーハリーハリーツ!!」

迫りくる砲弾の悉くを躲し、ついにあたしはへび野郎の真下にまでたどり着いた。その過程で至近弾の衝撃波に煽られたパチ公が脱落しちまったが……まあ、アイツの事だしどうにかなるだろ。コラテラルダメージだ。

「捉えたぜエこの野郎!!」

ジョイントがイカれたせいで地面に突っ伏していた一本の首にへばりつく。

当然、残りの首は一斉にあたしの方へ向けて照準を合わせるが——
かかったなアホがツ!

「緊急回避イッ!!」

あたしがローリングでその場を離脱した直後、全開の火力を受けた首が跡形もなく消し飛んだ。微妙に心苦しい気がしないでもないが、どうせ中身はボフォースじゃなくてRPGだったし別にいいわ!

機関砲以外興味ねえわ！

——とまあそんな所感はさておき、ここで誤算がひとつ。

あたしもうつかりしてたもんで、砲弾そのものを回避する計算はきつちりしつかりしてた訳だが……粉々になった首の破片をどうするかまでは全然考えてなかったわけだな。

んで、その結果。

ビシイツ!! とあたしの右半身に、破片がショットガンみてえに直撃した。

下半身の方はほとんどが外骨格に弾かれたお陰でそこまででもなかったが、問題は上半身だ。

——簡潔に結果を言えば、右腕が逝った。

人工皮膚がほとんど削り取られて、なおかつ中身の電子部品が直撃くらってスパークしてやがる。こりやあたしも修復必須だわ。幸い、マシンガンは左手に持ってたから無事だった。

さらに、直撃の勢いに引つ張られて、あたしはバランスを崩して派手に転倒。

「オイオイオイ死んだわあたし」

上下が逆になった視界の中で、ヘビ野郎がゆっくりあたしの方に照準を合わせていくのが分かる。

チツ、あたしはここで脱落かよ……全世界にマシンガン布教するまでは死なねえって、あれだけ豪語してたのにな。情けねえ限りだ。

その時、あたしの脳裏を過ぎったのは——マシンガンではなく、在りし日の光景だった。

ボロボロだったあたしに向けて手を差し伸べる、一つの影。

そいつは——いや、その人は、今まさに死のうとしているあたしへ向けて——聞き取れない声で言い放つ。

『——全く、世話が焼けるわね。貴方の終わりは此処じゃないって、あれだけ自分で言ってたじゃないの?』

——ああ、そーいやそーうだったな。

そーうだよな……ここで諦めるなんざあたしらしくはねえよなあ、リ・ダー!!

——そして。

とてつもない轟音が、
耳朶を打った。

「確固たる意志を持ち合わせているのなら、
自ずと道は開かれるだろう
 Here's a way.
エイブラハム・リンカーン
 Abraham Lincoln

バキンツ!!! と甲高い音が響く。

同時、ヘビ野郎の八本ある首の一つ——艦砲を搭載していた頭が、口の中で小爆発を起こして大きく仰け反った。

それに引つ張られる形で他の首の照準もズレたようで、正確無比にあたしの事を狙っていたはずの弾丸があらぬ方向へと飛んでいく。

「なっ……なんだあ?！」

何よりも困惑が最初に来た。

それは、リヤカーから飛来した一発の弾丸が引き起こしたものだが——彼女はそれを知る由もなく、何かマシントラブルでもあったのかと思うだけだった。

それ以上の思考をやめて、あたしは意識してスイッチを切り替える。

「——ま、理由も何にも分からねえが! マシンの神様——マシンの様はどうやらあたしを見捨てなかつたらしいなあ!？」

バツ、と素早い動きで立ち上がり、外骨格のスプリングを軋ませて再び走り出す。外骨格が無事でよかったぜマジで!

そして、左腕一本でマシンガンを目の前のヘビ野郎へと構えて突きつけながら——

「右腕は逝っちゃったがあたしにはまだ左腕があるんだよなあ!？ その次は右脚か? それとも左脚!? まだまだ終わんねえよツ!!」

——迷うことなく引き金を引いた。

マシンガンが唸りを上げ、7.62mm弾の雨あられが大蛇へ向け降り注ぐ。

だが、そこは曲がりなりにも超大型装甲機械人形の底力。見上げるような巨躯のあちこちで火花を散らしながらも、特に堪えたような様

子もなく体勢を立て直す。が、ジョイントの破損した首だけなんか起き上がれずに地面でのたくつてた。とりあえずざまあみやがれ。

【キイイイイイイッ!!】

甲高い金属音みてえな叫びをあげながら、ヘビ野郎が首を振りかぶる。

その動作から次の行動を察知して、あたしは全力で横っ飛びに退避した。

直後、先ほどまであたしが立っていた地点に首が振り下ろされる。地響きと共に砂煙が撒き散らされ、辺り一面の景色が砂塵に覆われて曖昧になっていく。

「あつぶねえー！」

あたしは、地面に振り下ろされた半ば埋もれた状態で止まった首を容赦なく踏みつけた。

暴れる頭を押さえつけ、口の中に無理やりマシンガンを突っ込んだ。そして、躊躇なく引き金を引く。ああ？ 撃ち方だあ？ フルオートに決まってるんだろ！

結果、口からヘビの頭の中へと大量の7.62mm弾が入り込み、内部構造を滅茶苦茶に破壊していく。

ヘビ野郎の首はしばらくビクビクと痙攣していたが、すぐに大人しくなった。

「まず一匹イ!!」

……いや、首の本数が多いだけで元をただせば一匹な訳だし、『一本』つつったほうがよかったか？

それはさておいて……ヘビ野郎の首を一本ぶっ壊したと同時に、カキン！ と音を立てて射撃が止まった。間違いねえ、弾切れだ。

あたしはステップ踏んでヘビ野郎の背後に回り込んだ。奴さんもどうにかついてこようとしてるみてえだが、8本ある首のうちの2本がイツちまったせいで動きが追いついてねえ。見た目に違わず首の一本一本がバケモンみてえに莫大な重量してるから、ちよつとしたアーカーみたいになってるな。

「はん、甘えなあ!!」

そんな風に吐き捨てるあたしだったが、実際のところは内心で壮絶に焦っていた。

いやあ、別に隠すほどの事じゃなかったんだが、あたしの持ってた弾薬箱はさっきのがラスー。あとは全部リヤカーの荷台に雑に詰んでる。サイズ的な問題もあるからな、一度にそこまで個人携行できるわけじゃねえんだよ。外骨格にマウントしたりして数を増やす努力はしてるが、それでも正直心もとなかった。で、結果がコレだ。

カシユン、という音と共に空になった弾薬箱がパージされる。

(やべえやべえ弾切れしちまったやべえ今弾薬箱持ってねえやべえこのままじゃ普通にジリ貧で押し負けるやべえやべえやべえやべえやべえ!!?)

やがて、砂煙の中から一本の首が姿を覗かせる。

その口からは対戦車ライフルの銃身が飛び出していて、その照準はあたしにしつかりと定められていた。

「だと思っただぜ畜生オ!!」

——発砲。

飛来する弾を見て、あたしは条件反射で壊れた右腕を振るっていた。

おかげで右腕がひじの少し上あたりからブチ切られたが、代わりに弾は外させてもらったぜ。右腕は元からぶっ壊れてたし、こりや実質ノーダメってことで良いな!?

まあ、たかが一発失敗したくらいで諦めるほど、ヘビ野郎もヘタレじゃあねえ。

ドゴン!! ——ドゴン!! ととんでもない爆音が連続して響き、いくつもの14mm弾があたし目掛けて一直線に迫る。その度に割と死ぬ気でサイドステップをして、逐一ギリギリのところで弾丸を躲していくわけだが……これ、弾薬箱に加えて右腕もパージしてなかったらとつくの昔に風穴あいてたな。いやマジで。

だが、それにもいよいよ限界が来る。

「ぬわっ——!?!」

地面に転がっていた鉄血人形にけつつまづき、あたしの体が見事に

ひっくり返る。

そして、その隙を大蛇は逃さなかった。

ガコン、と音を立てて、ようやく被害から復旧した様子の艦砲がMAGへと照準を合わせる。しかも折の悪いことに、転んだ拍子に残骸が外骨格に絡みつき、見事に足を引っ張っていた——この有様じゃ、避けようにも避けらんねえ。

——まさか、ここで終わるのか？

『死』という単語が、あたしの脳裏をよぎる。

——だが。

「……まだだ」

あたしは折れない。あたしは挫けない。あたしは諦めない。

このまま終わるのは、決して許されない。

恐いさ。ああ、恐いとも。

痛みが恐い、感覚の喪失が恐い、この残骸みてえになっちゃうのが恐い。

……そして。

リーダーを助けられずに消えちまう事が、何よりも恐ろしい！

——立ち上がれ

恐いままでいい、痛いままでいい

——その上でもう一度考えないと

……だって

あたしは、まだ一度も——

「——リーダーの為に戦えてねえじゃねえか——！！」

ガッツ!! と、硬い物が地面に落ちる音がする。

——気が付くと、あたしの目の前には見慣れない奴が立っていた。

そいつは右手を開き、ヘビ野郎へ向けてまっすぐに伸ばす。

その直後、ヘビ野郎はそいつごとあたしを仕留めようと、一切の迷いなく発砲した。

「お、おい！ アンタ——!?!」

あたしは思わず声をかける。

そいつは、そんなあたしの方をちらりと見ただけで、そのまま前方

のヘビ野郎に再び視線を向けた。

そして。

「——ふんっ!!」

轟音。

衝撃波が周囲に撒き散らされ、砂煙が舞う。

——そして、先ほどまでの騒音とは打って変わって、静寂があたしの耳を包み込んだ。

……あたしは、死んだのか？

そう思ったが——

『■■■■■■■■■■!』

『□□□□□□□□□□』

——結論から言うと、あたしは生きていた。

目の前のよく分からん奴も、パツと見た限りじゃ無傷と言って差し支えねえだろう。

そいつは右手で砲弾を掴んだまま、あたしの方に目を向ける。

「——無事か？」

■■■■

……潮時か。

私は耳元のインカムを操作し、通信を開く。

「依頼内容の再確認。502小隊、とやらの救援で間違いないな？」

『ああ。つい先ほど、不在防衛線の旧司令部が倒壊したとの一報が

入ってな。他の連中は廃墟が倒壊したとしか思っていないだろうが……私としては、あいつらという切り札がなくなるのは痛手だと感じている。まあ、アイツらの事だしどうせどこかで生き残っているだろうとは思うが……念のためだ』

「そうか。ちなみにそのメンバーの中に、なんでもかんでもマシンガンで解決しようとするアホはいるか？」

『……？ 私の知る限り、そんな愉快な性格をしたマシンガンナーは502小隊にしかないが……』

「ならばよし。容姿や銃種などが事前に渡された情報とほぼすべて一致する戦術人形が一体、私の目の前で不明な巨大自立兵器と交戦している」

ぶふっ!! と通信の向こうで噴き出すような音が聞こえる。

私はそれを気にも留めず、淡々と続けた。この手の面倒ごととは深く踏み込まずに表面だけサラツと流していけばいいのだ。『好奇心はD i n e r g a t e も殺す』というだろうか？

「ともあれ、アレとその仲間を助ければいいわけだな？ 見た限りではどうやら損傷しているようだ、修復ユニットのスケジュールを調整しておけ」

『ゴホツエホツ……ちよつと待て、まだ話は終わっていない——』

「では、これより作戦行動に入る。オーヴァー」

通信終了。

私はインカムの設定を緊急回線以外全カットに設定し、その場から飛び降りる。

——今私が何処にいるのか、だと？

そんなもの、決まっているだろう。

『飛び降りる』という表現を使ったんだ——私が空中に居座っていることくらい、理解できてしかるべきだと思うのだが？

本来、陸上での稼働しか想定されていないのが我ら戦術人形だ。では、これは如何なるカラクリか？

それは、私の装着しているある装備に起因する。

——自律稼働型複合浮遊装甲『ワイルドハント』。

詳細な説明は省くが、鉄血のハイエンドモデルであるスケアクロウの小型ビットから着想を得た装備だ。ただ、今のところは試作型が一基、つまり私が装備している物しか出来ていないらしい。事実上、私の専用装備というわけだ。まあ、量産したとしても私——いや、彼らほどに扱いこなせるものは居ないだろうが、な。

それはさておき。

私はまっすぐに飛び降り、要救助人形——データベース該当1、マシガン『FN MAG』の前に着地する。

「お、おい！ アンタ——!?!」

私に気付いたようで、背後から焦ったような声が聞こえてくるが——まあ、まずは私目がけて飛んでくる150mm弾をどうにかするのが先か。

右手を開き、ヘビ野郎へ向けてまっすぐに伸ばす。

その直後、掌の中に砲弾が収まった。すぐさま手を閉じて弾頭をホールドし、衝撃は事前に背中にマウントしておいた複合装甲のうちの一つ——リアクティブアーモ爆発反応装甲を意図的に誤作動させることで相殺する。

『ナイスキャッチ!』

『勝ちましたわ、プロ結果』

視えざる声が、私を脇から囁し立てる。

私はその言葉を無視して、要救助者に視線を向けた。……右腕を喪失しているが、それ以外に目立った外傷はない。どうやら、身に着けている外骨格がうまい感じに鎧の役割を担っていたようだ。

ゆつくりと顔をあげて私の方に視線を向けたため、私は彼女に簡潔に問うた。

「……無事か?」

「! ああ……」

『ま、こっち側から見た限りでもヤバそうな感じの損傷はねえな。外骨格とマシンガンだけでこの状況を切り抜けるたあいい気骨だ。気に入った、殺すのは最後にしてやる』

声が戯言をほざく——私はそれを無視して、再び大へビに向き直った。

首を不規則に蠢かせながらこちらを睥睨するソイツに対して、手に持つ愛銃を突きつける。

そして、

「私は人形依頼人は秩序。十二の十字を身に纏い、これより使命を実行する。シヨットガン型戦術人形『XTR—12』起動——メインシステム、戦闘モードに移行」

何時ものように、言葉を紡ぐ——さあ、仕事の時間だ。

『キツヒヒヒー・野郎ども、仕事の時間だア!!』

声が叫ぶ。

それと同時に、私の腰部に装着されていたジョイント、そこに接続されていたシールドがパージされる。

しかしそれは万有引力に従って落下することなく、私の周囲の空中で浮遊し始めた。

「……オイオイ、こいつはあたしの目が狂ってんのか？ 盾が宙に浮いてるように見えるぜ……」

「安心しろ、いたって正常だ。コイツは実際に浮遊してい「浮かばせるんなら盾よりもマシンガンにしろよ!! IOPの連中何にも分かかってねえなマジで!」お、おう……?」

不思議な観点からキレだし、思わず私は困惑した。なるほど、これは確かに『愉快的な性格』だな。ヘリアンが胃痛を訴えるのも頷ける。

ともあれ、だ。まずは目の前のコイツを破壊するところからだな。離れた場所で指示を飛ばしているらしい忌々しいハイエンドモデルのガラクタは後で料理すればいいだろう。

「さあ、始めるか」

『各員戦闘配置に着け!』

『攻撃せよ!』

『(・q・)セメロー』

浮遊盾を侍らせ、私は突撃する。

さあ、ゴミ掃除の時間だ。

『敵の潜水艦を発見!』

『駄目だ!』

『Negative!』

『Nein!』

『Her!』

そんな声と共に、複合装甲が私の背中を覆うようにして浮遊する。どうせなら私の背中ではなく背後の要救助者を守ってもらいたいののだが……。

「私の事はいい。それよりも、そこの戦術人形を護衛しろ」

『了解!』

『了解!』

『了解!』

『敵の装甲車を発見!』

『了か——違あう!!』

非常に騒がしい。

だが、一応指示には従ってくれるようだ——私の装備である浮遊装甲のうちの何枚かがMAGの周囲に留まり、ジョイント部分のライトを青く明滅させている。

……ふむ。であれば、でーあーれーばー……まずは、艦砲の首から沈めるか。流星にあの威力の弾を何度も喰らうのは避けたいところだからな。

『ンなこと言って、どうせ全部無傷で受けるつもりなんだろ? ケケケ』

当然だ。いちいち傷を負ってやる義理など何処にも無いからな。まあ、今は要救助者の兼ね合いで回避が一切できないから、その辺りが面倒と言えば面倒だが。

さて、目の前のコイツはどう料理したものか。

【キリギグイ——ア——!!!】

金属をこすり合わせたような甲高い叫びをあげながら、重火器の照

準を一斉に私へと向ける。

その内の一つ、『マウザーM1918』がいち早く発砲しようとするが——遅い。

『チイイッスス!!!』

『ごんちはーっ!!』

声と共に、下あごを突き上げる勢いの一枚、そして上あごを叩き落とす勢いの一枚がそれぞれへビの頭に直撃した。

その勢いたるやすさまじく、頑丈なはずの対戦車ライフルの銃身は中ほどであっけなく寸断され、14mm弾は口内で暴発。

ボムン!! という音と共に、鼻の穴から恐ろしい勢いで黒煙が吐き出された。コントか。

「~~~~~!!!?」

「ふん、他愛なし」

目の前まで垂れ下がったきた首をひつつかみ、その口をこじ開ける。その中にショットガンの銃口をねじ込み、容赦なく引き金を引いた。

ぐぐもった音とともに大蛇の体内で12ゲージが散乱し、手当たり次第に内部機構を蹂躪していく。

どうやら弾薬を直撃したようで、爆発による内圧上昇に耐えきれずに頭はあっけなく木っ端微塵に四散した。破片がいくらか私の柔肌を傷つける……が、どうせ直せば直る程度の損傷でしかない。

「次」

『おっほえげつねえ! 相変わらず情け容赦ない戦法だ! 俺達が思わず躊躇つちまうようなことも平然とやってのけるッ』

『そこに痺れる!』

『憧れはしないかな……』

声が懲りずに囁し立てる。頼むから『良識派』はもう少し自己主張してほしい——さっきから『奔放族』の声しか聞こえてこないわけだが。

脳内でそう訴えると『良識派』の声は申し訳なさそうに、『すいません、私にはどうにも……』

諦めんなよ。

……とにかく、首は残り6本。どうやら骨格が破壊されたと思しき1本を除外するから、残りは5本だ。

ひとまず、狙いは変わらずこの中でも唯一盾で受けきれない艦砲。これをどうにかしない事には何も始まらない。

受け止めることは出来るが、正直な話いちいちキャッチするのも面倒だしとつと潰しておきたい。

「征くぞ」

『イクゾー!! (デッデッデデデッ)』

『……カーンが入ってないやん!?!』

やかましい、いいから黙れ。

——砲撃。150mm弾が私を、ひいては要救助者を撃ち抜かんと放たれる。

私は盾に指示を飛ばし、砲弾を受け流すような形に配置させた。そしてその刹那——ギャリツツ!!

『うおおおお怖え! クツソ怖え!? ちよつと削れたぞ!?!』

『そう何回もできる策ではないですね……あまり回数を重ねると装甲が持ちません』

「やはり150mmは無理がある、か」

『むしろ20×110mm^{戦車}までしか想定してねえのによく出来たモンだと思っぜ!?!』

声が悲鳴を上げる。やはり『彼ら』でも受けきるのは難しいらしい

——であれば、やはり最優先目標は艦砲のまま、か。

まあ、不慮の事故が起きても困りものだしどのみち潰すがな。

「……いや、むしろこれはコアを貫いたほうが早いかな?」

『このゴツツイ図体の中からピンポイントでコアを徹甲出来ると思うならいいんじゃないやねえか? 俺は出来るとは思わんが』

「奇遇だな、私は出来ると思っていたところだ」

『は?』

残弾と共にマガジンを排出する。それと同時に、新たなマガジンを叩き込んだ。

る。

いや情緒不安定ってレベルじゃねーぞ。なんで自分の装備に取り
押さえられてんだよ。聞いたことねえぞそんな人形の話なんざ。

とそこで、あたしはようやくインカムに走るノイズに気がついた。

「……………」

基本的にジャミングでも受けてない限り、コイツが音を発する時は
何かを受信してる時だ。ジャミングするにしても、目の前でスクラッ
プになったヘビ野郎を見るに、些か遅すぎるんじゃないか？

って事は……通信か。

インカムの周波数を弄る。……全然繋がんねえ、一体全体どこの周
波数で飛ばしてんだよ……。

「……………」

30分くらい調節を続けてようやく、ノイズが混ざらない帯域に辿
り着けた。すっげえなオイ、こんなイカれた帯域で通信飛ばしてるや
つ見たことねえ。

『アーアー、えーつと？ ゴミムシども、聞こえてるかな？』

「喧嘩売ってるのかオイ。ハチの巢にすんぞ」

開口一番剛速球で喧嘩を売ってきた声に対して、あたしは出来る限
りの笑顔で返答した。

コノヤロウ見ず知らずの相手に喧嘩を売ってくるたあいい度胸だ。
逆探してぶっ殺してやる。

『あれれーまさかビビっちゃったー？ ハハハツ!!』

「ウツゼエ……………」

おっと本音が。

咳ばらいをし、あたしは通信相手に言う——オラとつと要件話
せ、でないと通信ぶち切るぞ。

その要請に対して、通信相手は……

『ああ、別に取りつて食おうって訳じゃない。そこは安心してくれ』

「テメエの言動から安心できる要素がひとつも出て来ねえんだよ言
わせんな恥ずかしい」

『ギャハハツ！ あれーそうだっけー!?!』

「やかましい」

軽薄な調子でところどころ煽りも交えつつ、そいつはあたし……いや、あたし『達』に対してこう伝えた。

『で、だ。——ヘリアントスからの依頼で、502あんなたら小隊を保護に来た。ハハハツ、アイツがガラにもなく焦ってるのはいい見物だったぜ？
いかにも「愛してるんだ、君たちを」、って感じでなあ!! ギヤハハハハツ!!』

「……ん……」

目が覚める。

……今はいつでしょう？ システムがダウンすると体内時計も何も無くなっちゃうのが困りものですね。

ゆつくりと体を起こして——あれ、ここ何処ですか？ ……テント？

「……むー？」

ゆつくりと体を起こして、私は体を起こしました。

私の横では、リーダーが銃を抱えて昏睡しています。ところで銃口の向いている方向に張られた布に穴空いてるんですけど……暴発でもしました？

「むにゆう……」

眠い目を擦りながら、私はのっそりとした動きでドア……もといフアスナーの元へ。

接続されたクリップを掴んでじーっと下ろしていくと……
「……むっ？」

鉄血工造の自律人形、Dragonと目が合いました。

——硬直。

私の体在那場でビシッと停止し、思考も凍りつきました。

しかし、私のOSは律儀に脅威度判定だけはしっかりしてくれてまして……。

【CRITICAL WARNING】

【警告】 不明なユニット群を確認

【推定物量】 一個小隊相当

【脅威度判定】 測定不能

【対策】 対象が離脱するまでの潜伏を強く推奨

「なんだ、もう目覚めて——ごぶっ?!」

『ハア、ハア、ハア、ハア……!!』

マリオネッターは現在進行形で逃亡していた。

『湖光騎士』^{デュ・ラック}に続いて虎の子の『八岐大蛇』^{エイト・ヘイト・サーペント}までもが撃破されてしまった今、彼女に出来ることはない。

というのも、マリオネッター自身は前提として戦闘行動など想定されていないのだ。いくらハイエンドモデルとはいえ、設計段階でのコンセプトからして『自律式の移動工廠』である彼女が出来る戦闘行為などたかが知れている。

ちなみに事前検証によつて、『静止した目標』を相手に『ハンドガン』を『両手』で構えて命中率がようやく『半々』とかいうド級のもやしつ子具合が判明していた。自己防衛機能くらいは搭載しようと思わなかったのか鉄血工造の連中は。

『キヒツ、キヒヒツ、ヒツ、ヒツ、ヒイツ！ ナンデツ、僕様ガ、コンナ目ニ!!』

分かりやすく自爆である。自身が弱いことは周知の事実なのだから、前線に出しゃばったりせずに大人しく後方で指示を飛ばしていればよかったのだ。

まあ、結果としては自身の功名心に足をすくわれたような形だ。

——そして。

今の今まで彼女を仕留める機会をうかがっていた傭兵が、このチャンスを見逃すはずがなかった。

『……エツ?』

次の瞬間には、マリオネッターの両足……膝から下が、きれいさっぱり消え失せていた。

当然その状態では満足な歩行など出来るわけもなく、その場に倒れ込む。

突然の事に理解が追いつかず、彼女は顔をあげて周りの状況を確認しようとするが——

『ナ、何ガ——』

——それが、最期の言葉となった。

何が起こった、呆然とそう零す間もなく、飛来した12.7mm弾

がマリオネツターの頭部を丸ごと粉々に粉碎する。

その射線の先には——緑色の麗人が立っていた。

「……任務完了。さ、とつとと帰ってペルシカの野郎でも煽るか」

『……聞こえてるけど?』

「どうした、カフェインの過剰摂取でついに幻聴の症状まで出たか?」

『1から10まで口に出てたんだよなあ? ねえちよつと、一体私に何する気なの?』

「そりやお前……ネタはもう上がってるし、なあ?」

『何!? 本当に何!? 一体全体私の何を握ったと言うんだい!? 怖いんだけど!!』

「ま、オレが戻ってからのお楽しみだな……けっけっけっ」

それだけ言つて、彼女……『翠玉の傭兵』はその場を後にする。

……その様子を遥か天高くから眺めていた、偵察用ドローンに気付くことなく。

■ ■ ■

「はあ……なるほどなるほど。ヘリアントスの指示なんですか」

「ああ。ついでに、何か不都合が起きているようであれば私も隊に加われ、とな」

Dragon——もといXTR—12さん曰く、そういうことだそうです。まあ、連絡もなしに急に拠点にしている場所が崩落したとかになったら焦りますよね。ええ、かくいう私もあの時はとてつもなく驚きましたよ。考えてみれば、リーダーの電腦もアレのショックでクラッシュしたようなものですし。電腦に関しては本社か一定以上の規模の専門施設じゃないとメンテナンスできませんからね……あれのせいで一気にラインを超えちゃったんでしょう。

そこで、P90さんが手をあげて、

「いつもーん。ここって本社からだいたいどのあたり?」

「むん? ああ、大体10 km位だな。目の前の山岳地帯を抜ければすぐだ」

「あ、もうそんなところまで来てたんだ。やったね」

それを聞いて、P90さんは満足げに頷きました。

しかし、MAGは険しい顔で、

「……なあ。一つ良いか」

XTR—12はその問いかけに首を傾げ、「なんぞや」と聞き返しました。

MAGは懐から無線機を取り出し、スイッチを入れて周波数を弄ります。すると……

「……あ、これもしかしてマイク入ってる？」

「しつかり入つとるわ目エ節穴かオラツ」

『なんだア？ てめエ……』

『◆独歩、キレた！』

『いややつとる場合か!？』

そんな声が聞こえてきました。……どこかの民間放送でしょうか？

「……この声よお……さつき話してる時にぎっと逆探かけてみたんだが……」

「みたんだが……？」

私は首を傾げました。

この一見してどこにでもあるようなラジオ放送に、一体何の秘密があるんでしようか？

そして、MAGは言いました。その放送の、決定的な違和感を。

「——なあんてテメエが発信源なんだ？」

その言葉に。

XTR—12さんは笑みを浮かべ、周りに視線をよこします。それはまるで、彼女にしか見えない誰かの表情を伺うかのように。

すると——

『あー、バレてたかー』

『まあいいんじゃないの？ どうせ隠してたっていつかバレてたろうし、いつその事今公表しちゃうってのはアリだろ』

『クヒツ、ヒヒヒハハハハツ!!』

『なかなかやるじゃない？ ちよーと時間かかっちゃったけどさーあっ。』

『君ひよつとして■■■■じゃない?』『憎悪、憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪!! 憎悪以外感じられぬ!!』『いいじゃないか、〃正義の味方〃。――
――なんでか、妙に泣きたくなる』『感情を捨てろ、効率が落ちる』『お前はなぜ生きようとしているんだ?』『必然たりえない偶然はない』『であれば、これもまた必然だと?』『皆さんが悪から自由であることを心から望みます』『クハツ、クハハハハ!! 他ならぬそれを我らへ望むか!!』『我々は救いようもなく悪である』『罪も罰も、私たちは背負い過ぎたのだろうか』『〃十二の十字〃? 不足、不適、不全、欠乏、欠落、欠如!!』『為さなければならぬ〃使命〃がある』『自分を愛するように隣人を愛せよ』『問:では、その隣人が一人残らず死滅していた場合は?』『そういった意味では、貴方も立派な〃迷える子羊〃です』『ここに救いはないというの?』『救いなんてないさ、ある訳がない!!』『世界に救いがあるのならば、なにゆえ我らは〃こう〃なった?』『いいえ、探せば絶対あるはずよ!! だって――』『断じて否だ!! 探そうとも隙などあるはずがない、だからこそ――』

無線越しに、たくさんの声が、叫びが――なによりも、慟哭が聞こえてきました。

その声を聞きながら、X.T.R―15さんは――いや。

〃X.T.R―12〃という殻を被ったダレカは、こう告げるのです。

「〃主が『お前の名は何か』とお尋ねになると、それはこう答えた〃」

「〃我らが名はレギオン〃」

「〃そう、我らは大勢であるが故に〃」

Repatriation

「……まあ、そんな聞いて楽しい経歴でもないからな。追々、話していくでしょう」

そういつて、XTRは無線機の電源を切る。

あれだけ騒がしかった声は一瞬にして消え失せ、辺りは再び風の音のみが孤独に響く荒野へと戻った。

その中で、MAGが信じられないといった調子で呟く。

「……お前、そんな中で今の今まで生きてきたのかよ?」

「正確に言うならば、いつだったかの『先鋭計画』を過ぎてから、だな。

まあ、私にも——いや、私達にも、か? 色々あったんだよ」

「色々ありすぎんだろ 一体何をしたらそんな愉快な状態になれるんだ」

『ザザツ——あれれーまさかビビっちゃったー!』

「うるっせえあたしの無線からちよっかいかけてくんない! シバき倒すぞ?! つーか普段どんだけトンチキな帯域で話してんだテメエら!!」

叫ぶMAG。その横でP90は無線機の周波数を弄りながら、

「うわっ、メジャーな帯域は全滅かあ。そりゃトンチキな訳だよ……」

『ザザ——本日未明、指定要注意団体「人形教団」が——ザツ——おはこんばんちは、良い子の皆〜! 「みらくるふあくとり〜」のマスコツ

ト「アーちゃんうさぎ」と——ザザザザ——ガンスミスと! MI

895ナガンのー? 銃器紹介〜!——』

「おいコラ何それっばいこと言いながら民間放送に繋げようとしてやがんだ、テメエからシバいてやろうか」

「君のような勘のいい戦術人形は嫌いだよ」

無線機と向き合いながら、P90はこっそり『民間放送』
にしていたシフトスイッチを『戦術通信』
に切り替える。

そして、思い切つて帯域を思い切つて弄ると……

『ザザザ——Well, Hello again! HA

HAHA! Are you ready for ROU

ND 2?!』

「あつ、繋がった。ホントにすごい場所だなコレ」

少しのノイズが混ざった後、クリアな音声が無線機から流れ出した。

P90が驚く——なんて変態的な帯域で話しているんだ。これじゃうっかりするとMAGの変態性まで霞んじやいそうじゃないか」「聞こえてんぞドチビ」

「ああん？ 喧嘩売ってんのか不良モデル」

「よしてきたカメラ止めろ、コイツは此処でブチ殺す」

殴打音。

ノーガードで殴りあう二人の戦術人形（ついでにそれを無線機越しに囃し立てる大量の『声』）を務めて視界に入れないようにして、MGLとXTR—12は話し合う。

「それで、私達はどうすればいいんですか?」

「うむ。ヘリアンに話をつけてある、故にひとまずは本社へ戻ることが第一条件だ。条件だが……」

「……まあ、そう簡単には行きませんよね。経歴的な意味で」

遠い目をして言うMGL。

そう、大前提として彼女たちは『元の場所にはいられないレベルの事』をやらかしたからこそ、502小隊に在籍しているのだ。

少なくとも、FN指揮官殺しMAGとダネル機密情報保持者MGLの二人がこうして在籍している時点で、この隊の危険度は推して知るべし、だろう。

「……まあ、アレだ。いざとなったら襲ってきた奴らのアウトな情報でもばら撒けばいいのではないか?」

「人を歩く情報災害か何かだと思つてませんか? そんな事しませんが、直接物理で潰します」

「……お前も大概壊れているな」

「何をいまさら」

自嘲気味に笑うMGL。果たして彼女は今、何を思い浮かべているのか。

丁度その時、鈍い音が彼女たちの耳に届く。音源の方を見ると、P

90とMAGが互いにクロスカウンターを決めてノックアウトされていた。

「……何をやっているのだ、あの二人は」

「知りませんよそんな事……」

XTR—12が浮遊盾を使って二人を運び、リヤカーに設営されたテントの中に叩き込む。……心なしかMAGの扱っただけがやたら雑に見えたのは気のせいだろうか。

「気のせいだ。別にマシンガン持ちが気にいらないとかそういうことは決してない」

「ナチュラルに心を読まないで欲しいんですけど」

「私に言うな。声が勝手に伝えてくるんだよ鬱陶しい」

「……そつちも大変なんですね」

「全くだ」

よつ、とXTR—12がリヤカー前方に付けられた持ち手の金属パイプを掴む。

未だに資材が山積みだというのに、彼女はそれを感じさせない挙動でリヤカーを動かし始めた。

「では行くか。正直な話、私としてもあまり余裕がないのでな」

「……何かあるんですか？」

その問いに、彼女はMGLの方を向き、顔を赤らめて頬を掻きながらこう答えた。

「……いや、その、なんだ。先ほどヘリアンから連絡があつてな。今日の本社の夕食はカレーらしいのだ」

■ ■ ■

——ヘリアントスは憔悴していた。

というのも、彼女の子飼い——というには些か語弊があるが、少なくとも指揮下にはある——である502小隊が帰還してくるのだ。

先遣として向かわせたXTR—12曰く、お世辞にも状態は良好とは言いい辛いらしい。

唯一P90はほぼ無傷だが、それ以外の隊員は控えめに見積もつて

も中破以上の状態であるらしい。

ダネルMGL——人形義体を大きく損傷、および刻印システムによって同期された銃の喪失。それによってシステムが不安定になり、断続的に機能停止と再起動を繰り返しているという。

FN MAG——不明なハイエンドモデルとの戦闘によって右腕を喪失。一応メンタル面には全く問題はないとの事だが、いつそそつちもぶっ壊してくれた方が良かったとヘリアンは半ば本気でそう思っていた。

110BA——一見してどこも壊れてはいなかったようだが、XTR—12が独断である程度調べたところ、電腦にオーバーフローしてクラッシュした痕跡があったらしい。いや何があった。

この中で最も深刻なのは恐らくリーダーである110BAだろう、とヘリアンは考える。人形義体の被害であればいくらでも取り返しがつくが、電腦に関してはそうもいかない。そして何より、502小隊の連中はどいつもこいつも電腦のバックアップがないのだ。その出自ゆえに致し方ないことではあったが、今はその点が何よりも恨めしく思えた。

XTR—12からの報告書（正確に言えば通信内容の写し）を、親の仇か何かのように睨みつけるヘリアン。そのあまりの気迫に、彼女の部下である下級代行官たちは帰りたいたい気持ちでいっぱいになっていた。

その時、彼女の手握られていた無線機が音を発する。

『とうおるるるるるるるる、とうおるるるるるるるるるる』

「!! どうした!?!」

彼女は無線機に怒鳴りつける。

すると、通信の相手は『おおっ!?!』とやや驚いた様子を見せてから、

『……ああ、誰かと思えば合コン爆死無双ヘリアンか』

「おい。今のルビに込められた悪意、感じ取ったぞ」

『むっ、それはすまない。ついうっかり本音が出てしまったか』

「喧嘩を売っているのか貴様は!?!」

『いや、そういう訳ではなくてだな——』

彼女は一度咳ばらいをし、こう答えた。

『待たせたな——XTR—12、現時刻を以てオペレーション
Usual Gateway
平常通信”を完遂。基地に帰投した』

Where The Backstage

何時とも知れぬ時、何処とも知れぬ場所で。

彼女たちは集まり、なにがしかを話していた。彼女たちは各々が好きな体勢でくつろぎ——その視線の先には、独断専行を重ねたハイエンドモデルの末路が空中投影によって映し出されていた。

『「人形師」^{マリオネット}がやられたか……』

銀の髪をした少女が言う。彼女は何処を見ているのか分からない目の下にくつきりと隈を刻み込み、虚ろな視線を辺りに彷徨わせていた。

『フフッ、だが奴は我ら四天王の中でも……アイツ何番目くらいに弱かったつけ?』

彼女の言葉に、ラフな格好をした女が座る椅子をきしませながら嗤う。彼女の脇には大量のスクラップが転がっており、そのどれもが中心に拳の跡を刻み込んでいた。

『そも、私としては四天王という枠組み自体初耳なのだがな』

ケタケタと笑う女の背後で、一見すると英国紳士のようにしか見えない男装の麗人がため息をつく。麗人は手に持った杖でコツコツとリノリウムの床を叩きながら、女の返答を待った。

女は相変わらず獐猛な笑みを浮かべながら、麗人の発言に対して軽い口調で答える。

『四天王っつーかこの集まり全体が鉄血工造の面汚しみてえなモンだしな』

『否定はしない』

『いやそこはしようよ……あー、眠い』

そしてそこへ、体を不気味に蠕動させる不気味な影が声を挟んだ。辛うじて人型であると認識できる形状は保っているが、しかし、不定形に蠢くその姿は見る者に冒瀆的な何かを呼び起こさせる。

『成功か失敗かと言えば成功、大成功か大失敗かと言えば大失敗……そういう存在ですものね。ワタクシも、アナタ方も』

『ヒヒハハハッ!! 「功罪の仔」^{パイプロダクト} たあよく言っただもんだよな、ええ!?

ウロボロスとルーラーが聞いたらなんて言うよ!!』

『残念、アイツはとつくにどこかの戦場でくたばってるよ。ついでに言うとルーラーに関しちゃ企画倒れ』

『そーいやそーうだったな』

そんな風に談笑する彼女らの周囲で、小さな光がぱちぱちと瞬いた。それは次の瞬間には爆発的に膨れ上がり……光学迷彩が解除され、巨大な鉄と血肉の塊が現れる。

生体部品、機械部品を問わずありとあらゆるパーツをかき集めて接続したような姿を持つソレは、老若男女いくつもの声が重なって歪んだような不気味な口調で、疑問気な声(?)を発する。

『せ、Nジヨ……て、キ……て、テて、テテテTTTTキキキKKKKキKKKKキキ……?』

『あー待て、落ち着け「集合体」! 敵いない! 大丈夫! ここ安全!』

慌てるような女の声を聞き、塊——『集合体』は自身に接続された砲の照準を少しだけ揺らがせた後、再び光学迷彩を起動して姿を消した。

その様子を確認して、麗人がため息をつく。

『……危なかったな、「無頼人」。下手を打てばこの辺り一帯が更地になっただろ』

『うっへえそりや恐ろしい。っつーか予想出来てたんなら手伝えやバイスタンダー
「傍観者」!』

『表沙汰には立ちたくないものでな』

『オーマイフアック!』

吐き捨てる女——『無頼人』。それに対して、麗人——『傍観者』はやや軽蔑するような視線を向けながらも、こう言った。

『……ともあれ、これで大体の案件は片付いたな』

『ふああ……案件とかあったの?』

『呼び出した張本人が何を言っているのですか、「不眠家」……』

影が呆れたように言う。それに対して、少女……『不眠家』は、人間用の睡眠導入剤を大量にのどの奥に流し込みながら、虫のように無

機質な視線を向けて言った。

『……だあって、この集まりだって暇を持て余したあぶれ者が暇つぶしに集まるだけの会合じゃん？ そりゃアグリゲイターは例外にしてもさ……』影法師ミラーージュ「だってその暇なメンツの一人でしょ？」

『確かにその通りではありますが、その筆頭格に言われると腹立たしいですね……』

影……『影法師ミラーージュ』が眉をひそめる。

その様子を見て、ルフィアンはけらけらと笑いながら、

『オイオイ言われてんなあミラーージュ！ こいつはもしやご傷心かい？』

『やかましい』

そんな風な他愛のない話を続けていた時、不意に通信が届く。

インソムニアが先ほどまでマリオネットの死体映像をキャプチャしていたコンソールを操作すると、空中投影されている映像が着信を表すそれに変化する。

その宛先欄には、『代理人』の三文字が。

『……、』

インソムニアは黙って通信を開く。

それと同時に、投影映像もまた代理人——エージェントのバストアップに切り替わる。

『仕事です。さあ働きなさい』

『……ちなみに内容は？』

バイスタンダーが聞き返す。

エージェントはそれに眉を僅かにひそめ、そのあとすぐに平時の表情に戻ってこう続けた。

『……どうやら、現在はハイエンドモデルの鹵獲がかなりの件数発生している様子。我々としても到底容認できるものではない』

『……あー、そういうデストロイヤー型とドリーマー型を中心に向こうに持ってかれてるって話だったな？ ドリーマーはさておきデストロイヤーに関しちや扱いを雑にしすぎたテメエの責任だと思う訳だよ』

笑いながらエージェントを馬鹿にするルフィアン。

その言葉に対してエージェントは今度こそ露骨に顔をしかめ、

『……いちいち不愉快ですね、貴方は。これで性能まで出来損ないであればすぐにでも解体処分にしたのですが』

『残念だったな、この通り俺は本来のコンセプト通り近接最強だぜ?』

『ええ、射程はともかくその攻撃力と破甲力は一考に値します。という訳で、働け』

『無頼人^{ルフィアン}ってコードネーム付けときながら行動縛るってどういう考えしてんだテメエ?』

『あーもう分かったから少し黙れお前』

『アウチツ!!』

インソムニアがルフィアンの頭を叩く。どんな威力でぶつ叩いたのか、轟音と共にルフィアンの頭が地面に叩きつけられ、めり込む。

その隙に、ミラージュが脇から口を挟んだ。

『……それで、仕事とは? いい加減内容を聞かせなさい、エージェント』

それに対して、エージェントはある座標が赤い光点で示されたマップを映像に映し出す。その座標の意味をいち早く理解したのか、アグリゲイターが再びステルスを解いて姿を現し、叫ぶ。

『ギ、ギギGI……ギイ……WhWhWhererereRE it
|it|it|it alllllllll StStStStSta
rtTTTtTtedDDDDDDddDdD!!』

『うおっどうしたアグリゲイター!? なんだ、この場所になんかあるってのかエージェント!?!』

何時もの彼女(?)らしくもない過剰反応に、状況が理解できていないルフィアンが困惑する。

それに対してエージェントはやや呆れながらも、こう言った。

『決まっているでしょう。——グリフィン&クルーガー総司令部を特定しました。総力を挙げてカチコミです』

鷲影踏破

Stay Around Away

「久しぶり！ ええと、へり…、へり、へり…：…へりウムだっけ？」

「へりアントスだ！ へりまでしかあつてない!!」

ガチャリ、と執務室の扉が開かれる。そうして入ってきたのは、森林迷彩を纏った金髪赤目のちみっこ。

しかし侮ることなかれ、彼女はG&P;K社が別に誇ってるわけではないし誇りたくもない精鋭イカレ小隊の一員、P90である。

彼女は502小隊のメンバーの中で唯一ほぼ無傷に近い状態の為、残る面子をメンテナンスにぶち込んでからは方々へ事情説明に回っている。

どうやらそれもひと段落したようで、彼女は執務機の脇に鎮座しているソファにちよこんとのつかった。

「あー疲れたあ。なんだいなんだい寄ってたかってボクに詰め寄りちゃってさ。ここにはロリコンしかいないの？」

「それだけ興味があるんだろうさ。あの激戦区を生き延びた戦術人形に、な」

「あつそ」

「あとお前製造年月でいえばそこらの新米指揮官よりよっぽど年季入ってるだろうが」

「あつ、このつ、人があえて伏せていたことを!!」

「ごろん、とP90はソファに寝転がる。

彼女は胡乱気な視線をあらぬ方向へ彷徨わせながら、自分の思うことを好き勝手に言い始めた。

「でもさあでもさあ、製造年月云々はさておいても元を正せばそんな激戦区で生き残る羽目になったのって全部そっちの責任じゃないの？ リーダーとMGLはどうだか知らないけど、少なくともボクとMAGはそうだよ」

「それは…：…すまない」

「あつはっはー、別にヘリアンに怒ってるわけじゃないって」

そういつて、P90は懐から紙の箱を取り出した。その表面にはかすれた文字で、数年前に販売されていた煙草のロゴが描いてある。

その中から煙草を一本取り出し、同じく懐から出したライターで火をつける。

「……いいのか？」

「リーダーも誰も見てないからね。ボクだってストレスはたまるんだよ、一本くらいいいでしょ？」

「私が見ているんだがな」

「だいじょーぶだいじょーぶ。なんだかんだ言っつてヘリアンって意外と口固いし」

「見た目的にアウトだろう」

「見た目と年齢は一致しないって自分で言っつたばかりだろうに」

ふーつと煙を吐く。

器用に白煙でリングを作りながら、彼女は何ということもなしに言った。

「……正直な話さ。だいぶ無理やりだけど、こっちに戻ってこれてよかったと思ってるんだ」

「何故だ？ お前もアイツらも、人間に対していい思い出などないだろうに」

「シンプルに引き運がなかっただけでしょ。どいつもこいつもあんな風だったらボクはとっくに向こう側についてる。何だったら今からでも出奔しようか？」

「やめろ。マジでやめろ。これ以上何かあつたら私は胃潰瘍こじらせて死ぬぞ」

「前代未聞の脅し文句やめようよ」

青い顔をしながら胃薬をボトルでラッパするヘリアン。そのあまりに凄絶な光景に、P90はやや引き気味な表情を浮かべていた。

一息にボトルを空けたヘリアンはバリバリと胃薬のカプセルを噛み砕きながら空き容器を近くのゴミ箱へと投げ捨て、

「全く、上層部の老害どもはどうにかならんのか……！ 唯一社長は

まともだがそれ以外がことごとく腐っている！」

「いや、ボクに言われてもなあ。その辺りは何とも」

ぶかぶかと煙草の煙を吹かしながら、のんびりとP90が言う。その姿は、先ほどまで割と死ぬ気で敵を殺しまくっていた時の彼女からは想像もつかない位に落ち着いていた。というか、目が死んでる。10BAみたいになってる。

彼女は短くなった煙草を口から離し、
『No Smoke No Life』とプリントされた携帯灰皿に
煙草と発煙手榴弾が私の全てだ
ねじ込んだ。ジュツ、という音と共に、先端の火が消える。

「……また携帯灰皿買ったのか？ いやそれとも手製か。とにかくそれで何個目だ」

「50個超えてから数えてない。別に生身と違ってフィルタ変えればそれで済むんだし、いいじゃん」

「よくない。メンテナンスの度にコールトールまみれのフィルタに触る羽目になる整備員の気持ちも少しは考えろ」

「えー」

口をとがらせるP90。

彼女は潰れた箱から新しく煙草を取り出そうとしていたが、しばしの逡巡の後に、結局それを吸うことなくしまい込んだ。

「ごろん、とソファに寝転がり、彼女は天井を眺めながらヘリアンに問いかける。

「——あつ、そうだ。ボク達が遭遇したハイエンドモデルの話だけだよ」

「……奴か。今頃、ペルシカが嬉々として解析しているだろうさ」

「は？」

「私財で傭兵を雇っていたらしくてな。奴に限らず、鉄血工造の造った新型ハイエンドの情報を求めているらしい」

「えっ、なにそれ初耳」

「むしろ16Labと関わりのないお前が知っていたら私はドン引きする自信があるがな」

「MGLなら知ってたかもね」

「やめろ、アイツの情報網は私の胃壁に効く」

「分かったから自分の胃を人質にとるのやめよう?」

「――よーっす、戻ったぞ」

ガチャリ、と扉が開かれる。

入ってきたのは、親の顔より見たマシンガンキチのMAG。ソフトウェアへのダメージも特になく、義体の損傷に関しても腕を一本つけ直すだけで済んだため、比較的早くに戻ってこれたようだ。

彼女は手に持った無線機の帯域を弄り回しながら、

「ったくよお、ここには人間以下のサルしかいねえのか? どいつもこいつも口を開けば『解析させろ』『貴様などスクラップがお似合いだ』『解体が嫌なら私に従え』……なんだ、これ以上あたしにキル数増やさせる気か? あたしが手ずからぶっ殺すのはあのクソ豚だけで十分だってーの」

「……殺してないよね?」

「安心しな、P90――」

P90の問いに、MAGは親指を立てて腹立たしいくらいに眩い笑顔で言い切った。

「――人間には骨が215本もあるって話だし、一本くらいなんてこたあねえだろ?」

「大ありだよ!!」

「安心しな、峰打ちだからヒビまでしか入れてねえよ」

「それでも場所によっては十分すぎるくらい致命傷なんだよなあ!」

思わず叫ぶ。コイツ一体何をやらかしやがった。

その後、血相を変えて飛び込んできたスタッフの報告に、ヘリアンは早くも薬である程度カバーしたはずの胃にキリキリとした痛みを覚え始めていた。その脇で、P90もソファに座り込んだままなんとも言えない表情を浮かべている。

——おお神よ、出来ることならコイツの体だけではなく頭にも鉄槌を下して欲しかった。

「……さて、彼奴らの調子はどんな塩梅なのやら」
そんなことを言いながら、XTRは16Labの建屋内をコソコソと動き回っていた。

戦術人形は大抵がIOP社によって製造されているというのが大前提だが、彼女……もとい、彼女たちに限っていえばその前提は当てはまらない。

というのも、彼女の義体は見れば分かるとおりに鉄血工造の自律人形『ドラグーン』がベース。そして、その精神は幾つもの人格がない混ぜになった闇鍋状態。ハードウェアもソフトウェアも全てにおいて劣悪、本来ならば動作などするはずもない欠陥品。
それが、どうして平然と行動できているのか。

——『先鋭計画』。

G&Kの上層部に座する重役、その1人が独断で立案し実行した計画だ。

彼は、鉄血工造のあるハイエンドモデルに強い興味を持った。彼女は、数多の自律人形を集め、互いに互いを殺し合わせることでよって生まれたという経歴の持ち主だった。

それを知って、彼はこう思ったのだ。

——アレを真似してしまえば、私の元にも最強の手駒が手に入るのでは？

そうして、極秘裏のうちに『先鋭計画』は始まった。

鉄血工造、IOP、民生品を問わず大小無数の自律人形がかき集められ、各々好きに武器を取って血で血を洗う殺し合いだ。銃を、剣を、拳銃には殺した相手の体を。使えるものは何でも使った。

そして、その果てに残ったのは一人の勝者。

彼女は多くの物と引き換えに、力と『XTR-12』という名前記号を手に入れた。そこに、IOPの意思は一切含まれていない。

……そして、それがIOP社きつての天才であるペルシカリアの目についた。ついてしまった。

ドラグーンの義体に無茶な改造と機能付与を施しただけのハードウェアと、単一のコアに数多の人格を詰め込まれた状態で無理やり動作させているソフトウェア——どれもこれもが彼女の考えの埒外にある存在。

さて、そんなものを目の当たりにしたらどうするか。

——必然、自分の知らないものに興味を持つだろう。

そんな訳で、XTRは見つかつたが最後研究室にドナドナされてあんな事やそんな事をされかねないため、こそこそと動き回ることを余儀なくされていた。

しかし、運の悪いことに——彼女たちは、真つ向から邂逅してしまふ。

「ん？」

「あ？」

「——げっ」

——そして、現在。

G&K社の建屋から少し離れた場所に位置する研究所、16 Labにて。

「解析！ 解析させて!! 先つちよだけ、先つちよだけで良いからさあ!!」

「離せつ、離さんかこのMAD！ それを私が許すと思うか!?!」

「あつ、あつはっはっはっwwwやべえウケるwwwくそっwwwハハハッ、アーツハッハッハッwww!!」

『草』

『草』

『草ア!!』

そこで、鉄血工造の自律人形にそっくりな少女と白衣を纏った不健康そうな猫耳女が取っ組み合いを繰り返していた。その傍では、ライダースーツとチューブトップを組み合わせた過激すぎる服装の麗人が腹を抱えて大爆笑している。

「離せと言っているー。こっちは今それどころじゃな——やめろ何処を触ってる服の中に手を差し込むな!!」

「別に良いじゃん解析させて解析ー！」

「させぬわ！ させたが最後あれこれ弄り回す気だろ!? そうだろ!？」

「……………そんなことないよ?」

「今の間はなんだ!？」

「まあまあ二人とも落ち着け。ほら、ここはオレの顔に免じてな？」

「ここぞとばかりにしたり顔で出てくるな！ というか誰だ!？」

『誰だお前は!』

「地獄からの使者、スパイダー——じゃねえわ。ま、一応自己紹介だけしとくか」

そう言つて、麗人はニヒルに笑つていった。

「オレはゲパードGM6『リンクス』だ。今はフリーで傭兵やつてる。ま、コンゴトモヨロシク?」

「……………そうか。私はUTAS XTR—12。こんな姿見だがこれでもG&Kの所属だ」

「ああ、聞いたことあるぜ? なんでも、鹵獲されたわけでもなく人類に与する鉄血がいるってな。へえ、こうしてみると結構イイ女じゃねえか」

「貴様もそつち系か!？」

なおも縫り付く猫耳女——ペルシカの頭頂部に拳を振り下ろして鎮圧しながら、XTRが距離を取る。リンクスはそれを見てカラカラと笑いながら、

「ハツハツハア、別にとって食いやしねえよ。オレはそういう趣味じゃねえからな」

「……………信用できんな」

「うっはあ信用ねえ。ウケる」

そう言つて、彼女は目を回して伸びているペルシカを抱き上げ、笑いながら去つていった。去り際に一言、

「あー、そうだそうだ。例のトンデモ連中、今は上の方でメンテしてるぜ。グレランピエロの方は結構スムーズに進んでるみたいだがな、

真つ黒女の方は結構手こずってるみてえだ」

「……そうか。情報感謝する」

「ハハツ、礼はいらねえよ。あのクソ野郎だったらこの程度の情報でも金とるんだらうけどな。——ああ気にすんな。こっちの話だ」

？ と首を傾げるXTR。だがリンクスはそれに答えることなく、ひらひらと手を振って去っていく。

それを背後から眺めながら、XTRはコテンと首を傾げて、

「……結局アイツは何が目的でここに居たんだ？」

と呟き、リンクスに教えられた場所へと走り去っていった。

■ ■ ■

「あつ、あー。ハイヤイヨー、聞こえてつかー？」

XTRが去った後。

リンクスは目を回したペルシカを俵担ぎで持ち運びながら、どこかへと連絡を取っていた。

『

「おう聞こえてつか。んで、報告だ。〃X〃と接触したぜ。外部計測器のデータ送つとく」

』

「んあ？ オレの所感？ いやまあ、普通にぱつと見まともそうでファイナルアンサーなんだが。……いやまあ、あんなへビーな出自しといて『まともそう』で済むあたりアイツも相当ぶっ飛んでんなって感じだけど」

』

「他の奴とはまだ接触してねえよ。つつーか5分の2が現在進行形でメンテしてんだぞ無茶言うな。名目上はあくまで雇われなんだから、オレにそんな権限はねえ」

』

「……はあ!! オイそれマジで言ってるのか!! 冗談じゃねえぞもつと早く言え! つたく、テメエはいつも厄介なタスクばっか積んでくんなおい!」

』

「あーはいはい分かったよ。とっとと残りの奴らもデータとって送り付けるわ。つたく、今から準備して間に合うか……？」

通信切断。

通信機を懐に仕舞い、彼女は獰猛な笑みを浮かべながら独りごちた。

「はあ……つたく。これから忙しくなるぜ」

Unreality Steps Forward

パチリ、と目が覚める。

「……………ここは？」

気が付くと、私は暗闇の中に1人立ち尽くしていた。

……何処だ、ここは。いつの間に私の生きる世界はこんなに寒々しい感じになっていったんだ？

……うん？

「P90？ MAG？ ……MGL？」

部下の名前を呼ぶ——だが、返事はない。

いや、本当にどこだここは。

『知りたいか？』

「誰だお前は！」

『時刻からの使者、スパイド……ちがわい！』

何処からか男の声が響く。

思わず叫んでしまったが、それに対する返答を鑑みるに割かしノリのいい人物であるようだ。

『あーあ、つたく……せつかくこう、闇の中からの強者ムーブとかできると思ったのによー。テメエのせいで台無しだぜ。わかる？ この罪の重さ』

「知らないわよそんな事。……変わらないわね」

言いながら、私はある違和感に気付いた。

……変わらない？ 私の記憶にこんな声の男はいない。であれば、何を以て『変わらない』と定義したのだ？

私には分からない。

『そりゃあ変わんねえよ。何を隠そう俺ってば諸事情であの時の状態をずっと保持してんだからな』

「……それはいいけれど、いつまでそんな暗がりに隠れているつもりかしら？ とつと顔を出しなさい」

『バカヤロウ保持したままつつつてんだろ！ 今のままじゃ色んな意味でとても見せらんねえわ！ つー訳だからちつと待ってろ！』

そして、闇の中から『こなくそつ!』『オラツ……やつべやり過ぎた!』『腕! 右腕どこ行つた!』『やつべえ胃腸が捻じれ……うごごごご!』『など不穩極まりない声が聞こえてくる。

そのまま待つことしばし。

『あーくっそ、ようやく体裁だけは繕つたぞ……!』

「遅い。0点」

『無茶言うなや! こちとらぶつつけ本番だぞ!? むしろ外面だけでもどうにかなつた方がいい方だわ!』

そんな事を言いながら、暗闇の中から一人の青年が姿を現した。

G & amp; Kの制服を身に纏い、腰にはホルスターに収まったハンドガンとナイフ。そして、その手には見覚えのない白塗りの銃が握られていた。

——ザザツ、と雑音が走り、頭痛が私を苛む。

気が付くと、目の前には大量のノイズに満ちたどこかの情景が映し出されていた。

『オイこれ見ろよ■■■■!』

『……今度は何をやらしたのかしら、■■■■?』

『何もやらかしちやいねえわ! そうじゃなくて、これだこれ! 見ろよ、正規軍のトコのオバテクで作られた最新式の光学銃だぜ! これさえあれば鉄血の人形なんて紙きれ同然だ!』

『そう。で、値段は?』

『……、』

『おい。なんでそこで顔をそらした?』

『待てっ、おい待てやめろ話せばわかる!』

『キビキビ吐け、幾らなの! たかが銃一丁で何ドル払つたの!』

『……■■■■万☆』

『歯ア食いしばれエ!!!』

『あべしっ!!』

……記憶にない映像。でも、この声は、私?

なら、目の前で私の腕をタップしている顔が黒く塗りつぶされた男は誰だ……?』

——往復ビンタをかましました。ああ安心してください、限界まで力はセーブしてあるのでこれで死んだりはしません。たぶん。

とその時、私は気付きませんでした。背後で扉が開き、誰かが入ってきました。

「おーっす起きたか——っておおッ!? おまつ、何やってんだ殺しはまずいだろ! あたしだっつて最低限自重はしてたんだぞ!」

「はい?」

「首傾げてんじゃねえよ仮面のせいで不気味なだけだわ!!」

どうやら入ってきたのはMAGさ……MAGだったようです。なんでかこの人だけは名前に敬称をつけるのが憚られるんですけど、何ででしょうかね?

「おいコラ。テメエ今めっちゃ失礼なこと考えてなかつたか?」

「イヤアナンノコトカキオクニゴザイマセンネ」

「嘘つけめっちゃカタコトじゃねえか! しかも冷や汗ダラダラ流してるし! 挙動が雄弁に事実を物語ってやがるぞ!!」

「そつ、そそそそんな事ないですしい!? 別に貴方に敬称付けるのすつごい抵抗感があるとかこんなのが先輩だとやっぱり先が思いやられるなんて欠片も思っつてませんしい!」

「語るに落ちてんぞオイ……つたく」

そして、MAGは盛大に自爆した私を他所に、今しがた自分が入ってきた扉を親指で指し示してこう言いました。

「呼び出しだつてよ。それもヘリアンから直々に、502あたし小隊らの中で動けるやつ全員をだ。——つたく、ド級の面倒事の予感がひしひしとしやがるぜ」

Ready for Many

「……で、コイツはどういう訳だ？」

「私に言われても困る……」

突然の招集に、MAGが疑問を呈する。旧司令部向にいた時は、こちらから連絡することはあれどヘリアンの方から接触してくることも一回もなかった——それが、本社に戻った途端にこれだ。

問いかけると、ヘリアンは死にそうな顔で一枚の書類をMAGへと突き出す。MAGがそれを受け取ると、敗北者はそのままぱったりと机に倒れ込んだ。

投げ出されたその腕をP90が手に取り、何かを確認してから首を横に振る。

「……うん、まあ、その……大往生だったよ」

「いやいや生きてますからね!! 勝手に殺しちゃダメですよ!!」

「ああもう面倒だ、手っ取り早くトドメでも刺せば良からうが」

「だからあー!」

無情なことを口走る二人にMGLが憤る。コイツら曲がりなりにも自身の恩人的なサムワンに対して冷酷すぎやしないか。

その横で、MAGは紙に目を通した姿勢のまま固まっていた。四六時中マシンガンマシンガンと騒いでいないと死ぬんじゃないかと疑われるレベルの暴走機関車である彼女に何があったのか。

「MAG、結局それには何が書いてあったのさ？」

「……、」

「……へーイ?」

MAGの目の前でP90が手を振る。しかし反応はない。

P90はムツとした顔になり、髪の毛を引っ張ったり頬を抓ったりしてみたが、やはり目立った反応は見られない。

最終的に、イライラがあっさりと頂点に達したP90はMAGの脛目掛けて全力でローキックをぶち込んだ。

「アッ——」

!!??

某アニメの青い猫を彷彿とする悲鳴をあげ、両手で脛を押えたMA

Gが天高く飛び上がる。しかしここは屋内であり、天井が多少高めにとつてあるとはいえ上のスペースに限りがあることには変わりない。結果。

MAGは脛に大ダメージを受けるに留まらず、駄目押しとばかりに後頭部を天井にうちつけた。そして、どういう原理か飛び上がった時の勢いを保持したままで床に叩きつけられる。

「うわあ痛そっ」

その惨状に、思わずMGLはそう呟いた。実際問題相当のダメージが入ったようで、MAGは床に倒れて目を回している。

その隙に、P90は彼女の手から紙切れをひったくり、中身に目を通す。

一通り読んでから、彼女は一言こう言った。

「……あーらら、これマジ？」

そして、その紙をMGLに手渡した。その脇で、XTRはボソボソと声を発する無線機に耳を当て、顔を顰めている。

MGLが目を通した紙にはこんな事が記されていた。

『
告 報 務 業
スクンリ6MGドーパゲ

即 A 奴 追 此 念 又 五 企
座 R ハ 伸 方 ノ 、 ○ 業
ニ 一 今 ハ 為 E 二 上
捕 五 人 此 二 N 小 層
縛 七 形 方 次 一 隊 部
シ 持 ニ デ 災 一 ヘ ニ
口 チ ナ 動 害 七 ノ 不
ノ ツ ク ヘ 所 干 穩
不 テ 、 ノ 長 渉 ナ
審 イ 後 対 ガ ガ 動
者 ル 始 策 興 目 キ

ヲ 末ヲ味的ア
万 八 巖 本 ト リ
ガ 任 ト 位 推 、
一 セ ス デ 定 注
見 タ ベ 介 、 意
カ シ 入 要 サ
ケ ヲ 警 レ
タ 決 戒 タ
ラ 定 シ

「……ええと、つまり？」

「見事なまでの汚職事件だね。上が一斉に動けばもみ消せるとでも思ったのかなー？」

MGLの問いに答えるP90。いつも通りの明るい声色と言動に反して、その表情はいつになく険しい。

どうやら、今回は本気でヤバ気な事案の様だ——P90のその表情を見て、MGLもそう悟った。

その横で、XTRが呟く。

「リンクス……ああなるほど、奴が動いているのか」

「知っているのか雷電！」

「誰だ雷電。ではなくだな」

P90がボケを交えて食いつき、XTRはそれをにべもなく切り捨てる。

そして、彼女は顎に手を添えて首を傾げたままこう言った。

「先ほど顔を見合せたきりだが、あの手の輩は往々にして大胆不敵だが用心深く繊細だ。おそらく、既に粗方解決の目算はついてるぞ」

「話は聞かせてもらったア!!」

その時、バアン！ と扉を蹴り上げながら誰かが執務室へと入り込んできた。扉はその衝撃であっけなく大破した。

そしてそこから、胸元までファスナーの下ろされた緑のライダースーツに黒のチューブトップという過激すぎる服装の麗人が姿を現

す。

突然の事態にP90は紙を放り捨てると懐からアーミーナイフを取り出し、素早い動きでそれを構えた。XTRは一応と言った様子でどこからかハンドガンを取り出し、銃口を突きつける。MGLは二人の様子を見てから慌てて懐を探り、なにもないので仕方なく自身の仮面に手を添えた。コイツ、周りを巻き込んでSAN値テロを引き起す気満々である。

その様子を見た麗人はおどけたように両手をあげて、

「オイオイ待て待て、話せば分かるって。オレは別にアンタらを消しに来たわけじゃねえよ」

「それは分かっているが、まあ念のためだな。言っておくが、そこから前後左右上下問わず少しでも動けば私のパイファー・ツェリスカが火を噴くぞ」

「お前なんてモン使ってるの!?!」

リンクスが突っ込む。ちなみにだが、パイファー・ツェリスカとは600N・E……まあ要するに象を狩る時などに使う弾丸を使ったりボルバーだ。しかも驚くことにRPG-7と同程度の重量を誇る。

当然、生身の人間が扱う武器としては射撃時の安全面にかなり難がある訳で。戦術人形の莫大な膂力に物を言わせた結果だろう。

そして、翠玉の麗人は観念したように言った。

「ったく……それ読んだならわかると思うが、オレは今クルーガーのヒゲ野郎と共謀して大粛清……間違えた。あれだ、いわゆる『働き方改革』ってのを計画してる。……どうだ、乗るか?」

「乗るかって言われてもなあ」

「ついでに言うが、今こっちに全速力でオレの所属してる組織のトツプが向かってきてる。奴が到着したが最後、これは詳細を省くが結論だけ言うとオレもお前らも全員死ぬ」

「怖いー!」

迫真の様子でリンクスが言う。その様子をしばらく見ていたP90とXTRだったが、

「……話だけは聞くよ」

「どうやら嘘入っていないようだな？」

『心理学振りまーす』

『……(カラカラ) XTRはどうやらリンクスが嘘をついていないと
いうことが分かりました』

『よっしゃ成功したなこれ』

「TPRGやってる場合か馬鹿どもオ!!」

無線機越しに暢気なことをしゃべる『聲』に、XTRが怒鳴りつける。その様子を見たリンクスは嗤いながらこう言った。

「オーケー、とりあえず話は聞いてくれるんだな? ——ここだとセキユリティが甘そうだからな。ちつとばかし場所を変えようぜ」

D i o s a n t i s s i m o m i s e r i c o
r d i a d e m i

「……それで、ブランク。ここは一体どこなのかしら?」

私がそう問いかけると、彼は顎に手を添えて首をひねり、しばらくしてから「おつ」と何かを閃いたような表情を浮かべる。そして、最終的に神妙な顔でこう答えた。

『私にもわからん』

「ふんっ!!」

『あばす!?!』

その顔面に拳を叩き込む。分かんないんだったらなんでそんなティンときたみたいいな表情浮かべたんだ。

私はもんどり打って倒れたブランクの上にのしかかり、再び拳を構えた。

その様子を見たブランクが慌てて弁解しようとするが、もう遅い——乙女の純情を弄んだ報いを受けろ!

『いや待て、落ち着け! 話せばわかる!』

『問答無用って便利な言葉よね! おらっ、落ちろッ!!』

『ちよちよ、ちよつと待って下さい! 待って!! 助けて!! 待って下さい! お願いします!! ワアアアアアアアアア!!』

——しばらくお待ちください——

果てのない黒塗りの地面を自身の血で真っ赤に染めながら、ブランクは不機嫌そうな表情でこう言った。

『死ぬかと思った』

「死んでるんでしょ?」

『そう言えばそうだった』

全身についた傷口をつまんで捻り、粘土細工を弄くり回すようなノリで止血と治療を並行して行うブランク。一体全体彼の体はどんな事になっているのだろうか?

私がそんなことを考えながら治療の光景を眺めていると、ブランク

は自分の体を抱きながらこう言った。

『……貞操はやらんぞ?』

「い! ら! ね! え! よ!」

『痛い痛い! やめてグーはやめて俺が悪かったから!』

ふざけたことを抜かした大バカ野郎を拳でしばき倒す。

ひとしきり鬨り……訂正、躰け……さらに訂正、伸したところで、私は本題に入った。

「それで、ここはどこなのかしら? 見渡す限り真っ暗闇だけれど。

互いに互いを認識できてるのが不思議なくらいの暗さだわ」

『んあ? ああ、ここがどこか、ね。はいはいはい』

ブランクは簡潔にこういった。

『此処はお前さんの頭の中、いわゆる「心象風景」っつー奴だな。これが現実世界に現出すると固有結界になる』

「……?」

『知らねえか? アイアムザボンオブマイソーってアレ』

「……知らないわね」

『マジかお前!』

大袈裟に驚いた様子を見せるブランク。

……心象風景。語感から察するに、おそらく此処は私の心が映し出した世界という事になるのだろう。

いや、いくらなんでも殺風景すぎないか。一周回って逆にオシヤレに感じてきたぞ。

『あー、まあ、大分言い方に語弊があるからな。心象風景っつーか、より厳密に言うならそれを繋ぐ回廊だ』

「……回廊?」

『そう、回廊』

ブランクによると、心象風景とは単一の世界を示すものではなく、大小無数の世界、『心象世界』が複雑に入り交じって組み合わせたものの総称なのだという。

建物などで例えるなら、一つ一つの世界が部屋であり、ここはそれらを繋ぐ廊下の部分に相当する場所なのだという。

『普通ならこんなトンチキな場所に飛んだりはしねえんだけどな。どうやらお前さん、よっぼど色んなモンに未練があると見える』

「……未練？ そんなものが——」

『502小隊』

ブランクの言葉に、私の言葉が途切れる。

しかしそれに構うことなく、彼は言葉を紡ぎ続ける。

『不在防衛線、502小隊、■■■基地。テメエの旅程は、俺も見えてきた。なんせまあここに居ると散歩くらいしかやる事がねえからな。あとはなんだ、ウイルスセキユリテイか？ たまに紛れ込む病原菌の駆除がせいぜいか。とにかく暇で暇で仕方ねえんだよこちとらな』
「病原菌……例えば？」

『お前んとこの部下の……MAGだったか。アイツの日記読んだろ？』

日記？

……あつ。

『おかげさまであの後しばらくしてこ舞いだっただぞ。なんだあの新世代マルウェア、えらいしぶといし増えるし……一体どんな中身だったんだよ』

なんとまあ。

頭も頭、前置きの注意分を流し読みした段階で燃やして滅却したというのに、そこまで被害が出ていたのか。

これがもし馬鹿正直に最後まで読んでいたらどうなっていたことやら……私は過去の私の判断を褒めたくなくなった。でも今なら渡された時点で即刻燃やしてただろうな、とも。

『さて。それで、お前さんは今自分の心の中にいるわけだ』

「……まあ、そういうことになるのかしらね？」

『だったら、やる事なんて一つしかねえよな？』

そういつて、ブランクは指を鳴らした。

直後、暗闇の空間は一瞬にして掻き消え——そして、世界が反転する。

現れたのは、どこかの戦場。銃弾の飛び交う最前線。そして、ここ

はその一角に位置する塹壕だ。

「ここ、は……」

『まあ、今のテメエにやここが何処かなんて分かりやしねえだろうがな』

気が付くと、ブランクも私も、服装が先ほどまでの物からどこかの軍服へと変わっていた。

彼は手に持っていた銃を構える。それを見て、私もまたいつの間にか手に持っていた銃を構えた。

同時、一気呵成に叫び声をあげながら、敵兵と思しき集団が一斉に突撃してきた。

『さあお待ちかね、記憶追体験の始まりだ！ 途中下車なんざ出来ないとと思えよ!!』

■ ■ ■
「こつちだぜ」

リンクスが向かったのは、G & a m p ; K 本社の脇に立てられていた薄暗い倉庫のような場所だった。

502 小隊が全員入ると、その背後で扉が勝手に閉まる。

「おおっ!! なんだ閉じ込められたぞ!! このまま水責めにでもされるのか!? ナイル川か!？」

「オレをどつかのファラオかなんかと勘違いしてねえか? 一応言つとくがエジプトの頂点に立った覚えも外宇宙に繋がる大鏡をゲットした覚えもねえぞ」

M A G の発言にリンクスが突っ込む。ちなみに M A G はあの後 P 90 に足を持って引きずられる形で連行され、下り階段に差しかかる直前で目を覚ました。

あともう少しで階段に後頭部を連続強打するところだったが、P 90 は「チツ!!」と舌打ちするのみ。

そのせいでまたも殴り合いが始まりかけたが、これは X T R が実力行使で制圧した。あっ、火力制圧ってそういう……。

「さて、んじや始めるか」

そう言つて、リンクスはパチンと指を鳴らす。

その後、照明が一斉に起動し、莫大な光が倉庫の中を一瞬で照らしあげた。

突然の出来事に、P90は目を細め、MAGはパチパチと瞬きし、MGLは腕で目を隠し——XTRはうっかり光源の直近に視線を向けていたために、ホワイトアウトした視界の中で悶えていた。

「ぬおおっ!!? 目がっ、メガーっ!!?」

『バルス!』

『バルス!』

『ガラム!』

「いや後ろ二つ違くね?」

リンクスが突っ込む。

だが、XTRはそんなことなどそつちのけで悶絶している。特殊な出自故にシステム自体が不安定なこともあり、割と本気で危ういことになっていたりする。

しかも、諸々の事情で極端にイラついていたMAGが、あろう事かXTRの後頭部めがけて「うるせえ!!」と拳をフルスイング。結果、壮絶な轟音とともにヤムチャしやがったポーズで倒れ込む屍が一つ出た。来上がった。

さすがにこの惨事は看過できず、リンクスが声をかける。

「……大丈夫か?」

『問題が発生しました。システムを再起動する必要があります』

「やべえクラッシュしたパソコンみたいなこと言い出したぞこいつ」

「叩けば直るだろ?」

「やめろバカ!」

「イッテエ!!? テメエ何しやがる!!」

P90がMAGの尻を全力で蹴りあげる。

その後もしばらく筆舌に尽くしがたいすったもんだが続いたが、どうにかリンクスは話を戻すことに成功した。

「……ふう。そろそろ始めていいか?」

「オーケー、続けな」

「急に尊大になったな……ったく」

そして、彼女は説明を始める。

自身の身の上と、今回の事情に関する説明を。

□ □ □ □

「よっし、そんじゃ始めるか。一応もう一回だけ紹介しとくが、オレはEN-17から来たゲパードGM6だ。ま、専ら『リンクス』で通してるがね。

「EN-17ってのは分かるか？ 分かんねえ？ まあそりゃそうか。

「ざつと説明すると、EN-17つーのはIOPとか16Labがやるとまずいいわゆる『裏方の仕事』つーのをやってる部署だ。

「正式名称は17Lab……EN-17は通称みたいなもんだ。なんせまあウチのアホ共はどいつもこいつも厨二病の気があるもんでな？

「んで、オレはそこで作られてこき使われてる。表向きに出来ない仕事しかやんねえからな、経理にやあ殊更気イ使う必要があるわけだ。

「要するに外貨稼ぎだよな。足りない分は適宜オレが傭兵業やって稼いでる。

「……そろそろ本題に入るか？

「今回の依頼主はまあだいたい察してるとは思うが、クルーガーのヒゲオヤジだ。

「依頼内容は企業内の『浄化』——まあ、要するに『リストラ(物理)』、あるいは身も蓋もない言い方をするなら『粛清』か？ とにかくそんなやつだ。

「本当だったらオレもこんなしち面倒な仕事受けたくないんだがな——まあ、事情は省くが少し前の依頼でちょっとばかしやらかしてな。その補填として汗水垂らして働いてるってわけよ。

「今回の依頼の事情に関しては、まあ言わなくてもだいたい分かるよな？

「唐突に悩みの種なテメエらが帰ってしたせいで自分の利権を守ることにしか本気が出せない上層部が大慌てでな、どうにかしてテメエらを消そうとしてるらしいんだわ。

「正直事情を知っていると無能なアイツらの自業自得にしか思えねえんだがな。ま、困ったことにそれを納得させるにはアイツらは権力を持ちすぎた。

「クルーガーのヒゲ野郎が動くにしても、それやると大事になるしスキャンダル間違いなしだ。

「——だから、アイツは『不慮の事故』で片付けることを策略した。

「そこでオレの出番ってわけだ。裏方で好きに動けて、なおかつ存在がまだ表沙汰になってない人材。

「無論、この条件はテメエらにも該当するぜ？　なんせ502、不正なゲートウェイだ——どこぞのNOT FOUNDと並ぶ特級の秘匿事項だぜ。

「故に、オレはちよいとテメエらに協力して欲しい。

「オレは人材が確保出来て、かつ依頼が達成できる。テメエらはあの真っ黒女……110BAだったか？　が守れて、なおかつ迷惑な連中をぶっ飛ばせる。

「どうだ、こつちにもそつちにも利のあるオイシイ仕事だぜ？」



そこまで説明して、リンクスは不敵な笑みを浮かべる。

そして、502小隊の面々を睥睨し、芝居がかったふうに両腕を広げてみせて、こう言った。

「——さて、伸るか反るか。テメエらはどう動く？」

D i o s a n t i s s i m o m i s e r i c o
r d i a d e m i 2

『撃って撃って撃ちまくれ!! ヒヤッハーツ!!』

「突然何なのよこれは……っ!!?」

戦場。

小銃片手に雄叫びをあげながら突っ込んでくる敵兵を撃ち抜きながら、私はブランクに苦言を呈した。これは一体何ごとなのかと。

だが、ブランクは光学銃を乱射しながらにべもない返事を返してきた。

『言つたら、記憶の追体験だつてな!! 此処は昔にテメエがいた場所、これは昔にテメエがした経験だ! ハハッ、それにしてもマジで強ええなコイツ! この時に持つてりやもつと楽が出来ただろうぜ!!』

「場所……経験……!?!」

戸惑いが私の心を満たす。

どういう事だ、私は、私の記憶にはこんな戦場はない。だが、ブランクはこの戦場が私の記憶であるという。

……何がどうなっている?

私の知らない何かがあるとしても言うのか?

——その時、激しい頭痛が私を覆い、大量のノイズに満ちた光景が浮かび上がってきた。

そこは、一見して今私がいる場所と同じ場所に見える。向こうも戦闘中なのか、塹壕の中でブランクが泥まみれになりながら悪態をついていた。そんな彼の周りには、名前も知らない誰かの血肉と機械の残骸が所狭しと転がっている。

『おいおいおいおい! なんだこりや聞いてねえぞゴラア!!? ただの哨戒任務じゃねえのか!?! ええコラ!?!』

『落ち着きなさい ■■■! もうなんか後暗い点しかないって最初から分かってたでしょう! 騙して悪いがってアレよ!』

『俺別にイレギュラーでもなんでもないんだがー!?! ……待てよ、つ

まり狙いは十中八九こいつなんだからいつそ生贄に捧げちまえば——』

『この場で二階級特進をお望み？ 結構、実にいい事ね』

『待て！ 分かった！ 俺が悪かった！ だから銃を下ろせ！ 下ろしてくださいお願いします！』

『……チツ』

——舌打ちとともに、記憶映像の中の『私』が銃を下ろす。

その時、断末魔の叫びのようにも何かの機械の駆動音のようにも聞こえる金属音が響き渡った。

ブランクは慌てて手に持つ銃——光学銃とは大分見た目が違う。あれを手に入れる前に使っていたものだろうか——を構え、スコープを覗き込む。

そして、新手の姿を認識し、叫んだ。

『……なっ、なんぞ〜……!?!』

『今度は何よ!』

『分かんねえ！ なんとというか、死体に機械くっつけたみたいなのに奴らが団体様でお越した!! つっ—かあれもしかしくなくともEL IDだよな!?! なに!?! マジでどうなってんの!?!』

それを聞いて、『私』は大慌てでスコープを覗き込み、その実態を目の当たりにした。

——元がどのような意匠だったかも判別できないほどボロボロの服。生気を感じさせない白濁した瞳。皮膚が硬化化し、ひび割れた四肢。肥大化した頭蓋骨。半開きの口から垂れる涎。

そして、その体を覆うようにして装備された、白塗りの大掛かりなパワードスーツ。

それを見た『私』は思わず銃を下ろしてポツリ、

『……What the hell?』

『言つとる場合かーッ!』

ブランクが半ギレで銃を構え、バレルに装着していたグレネードランチャーを発砲するところで、映像はブツリと途切れた。

そして、私はノイズのない、今まさに『私』ではない私がいる戦場

を見る。

……いまさつき見た怪しげな兵隊(?)は一人もいない。居るのは小銃を持った歩兵やあちこちにサビや損傷が見える旧式の自立人形だけだ。

「……ブランク。今、私は非常に嫌な予感がしているわ」

『おっ、どうしたどうした。思い出し始めたか?』

「あの光景が私の知らない『私』が体験したことなのなら、きっとそうなるんでしょうね。つまり——来るわよ」

私がそう言った時、新たな敵が大挙して姿を現した。私はライフルのスコープを覗き込み、その実態を改めて認識する。

——元がどのような意匠だったかも判別できないほどボロボロの服。生気を感じさせない白濁した瞳。皮膚が硬質化し、ひび割れた四肢。肥大化した頭蓋骨。半開きの口から垂れる涎。

そして、その体を覆うようにして装備された、白塗りの大掛かりなワードスーツ。

どれもこれもが、私の見た光景と一致している。

『ハッ、ようやくお出ましかメカエリチャンどもめ!!』

「メカエリチャン!?!」

『そうだろ? 機械化されたELEDちゃんメカエリチャン』

「……センスないわね」

『なにおう!?!』

私達を認識したらしく、敵性体——仮称『メカエリチャン』の動きが早くなる。

背部ランドセルに搭載されたバーニアを吹かしながら猛接近するその姿をスコープに収めながら、私はトリガーに指をかけた。

——ELEDは規格外の膂力と耐久力を持った存在だ。それを外部からの力だけでコントロールするには、当然ながら相応以上の負荷をかける必要がある。

つまり。

「弱点はあのワードスーツそのもの。それさえ無力化してしまえば、あとは向こうが勝手に制御を失って自滅する、そうでしょう?」

『ハッハア、大正解だぜハニー』

「ぶっ飛ばすわよダーリン」

『当たりが強い!? しかもなんだかんだ言っただけノリノリだなテムエ!』

「当然でしょう? 窮地な時ほど痛快に、よ」

『おっ、そうだな?』

互いに顔を見合わせ、笑う。

……未だに失った記憶とやらは戻ってきていないが、こうしていると不思議と落ち着くのだ。

そして、私は余裕を失わないまま、大群を成すメカエリチャン、もとい機械化ELIDへと銃口を向ける。

「抜きつけ、構え——行くわよ、ブランク!」

『おうよ! 俺が天下のブランク様だ、死にたい奴からかかって来いやあ!!!』

「もう死んでるけれどね」

『確かに!』

■ ■ ■ 「答えなんざ当然決まってるだろ、そりゃあ」

リンクスの問いかけに対して、MAGが言う。

P90もその言葉に頷いて、

「まあ、降りかかるキノコの代金は……いや間違えた、やっぱいいや」
「どーしてそこで諦めんだテムエは。そんなんだからP90なんだぞ」

「人の名前を罵倒用語にしないでくれる? いくら温厚なことに定評のあるボクでもキレルよ?」

「短気の子だな」

「ねえ、今からキレルよ? やかましい!」

「なら単キノコか」

「リーダーに無断でダメージ増残機やせと? 死ぬよ?」

「いや緑の方がよ」

「はい、分かったのでとつと黙ってください。それともそんなに啓

「蒙高めたいんですか？」

「アツスミマセン」

「いよいよ話があらぬ方向へと逸れ始めたため、MGLが諫める。完全なる無の表情で仮面に手をかけ、返答次第では精神的に殺す気満々だった。」

「ただならぬ威圧感と共に突きつけられた要求に、MAGとP90は反抗することなく素直に従った。そりやそうだ、誰だって命は惜しい。」

「……さて、そんじやあ計画を説明するかね。つと、その前に」
「パチン！」と再びリンクスが指を鳴らす。

すると、彼女の背後で低い駆動音とともに天井からスクリーンが垂れてくる。

それが一番下まで届いた時、照明が自動でゆつくりと暗くなつていった。

そして、これまた天井から姿を現したプロジェクターが、セツトされたスクリーンに光を浴びせる。

そこに映っていたのは……、

「……ヒゲオヤジ？」

「ヒゲオヤジだね」

「歴戦の勇士感がすごいですね」

「ヒゲオヤジ……鉄腕か？」

『そーらーをこーえてー、ラララほーしーのかーなたー』

『ゆくぞー、くるーうーがーあ、マッチョのかぎーいりー』

『……私のことを10万馬力のロボットか何かかと思っているのかね？』

シワのよった眉間を揉みほぐしながら、スクリーンの向こうのヒゲオヤジが嘆息する。

『さて、早速だが本題に入ろう。私はベレゾヴィッチ・クルーガー。G & amp; Kの最高責任者であり、彼女——リンクスとは依頼人と請負人の関係にある』

「オイオイ、そんな所でオブラートに包む必要なんざねえだろ？ 大

人しくゲロつちまいな、共犯関係ってよ」

カラカラと笑いなながらリンクスが言う。ヒゲオヤジ——クルーガーはその言葉に眉をひそめて嘆息し、

『……まあ、別段隠し立てする必要も無いか。その通り、私と彼女は現在共犯関係にある。彼女には実務を、私は主に書類方面での外堀埋めを行っていた。まあ、バレてしまえば弾劾罷免は免れんだろうな』
「オレの方もちよつとヤバいかもな？　もし何かの間違いでEN—17が潰れちまったら一大事だ、あの性癖性別捻転ヤローが会社という名の檻から解き放たれちまう」

((性癖性別捻転ヤロー!!?))

「いや、そういうやもうこつちに向けて出発してたなアイツ。もう遠からず鉢合わせるな。ハハツ、ウケる」

あまりにも衝撃力の強すぎるパワーワードが突如として飛び出し、502小隊+αの面々が戦慄する。しかも、リンクスの目がマジだ。あれは嘘を言っている目ではない。

果たしてそれがどんな人物だというのか——それを知るのがお察しの通りそう遠い未来ではないということ、今の彼女たちは知る由もなかった。

さて、そんな事はさておいて閑話休題。

『……では、具体的なプランの話しよう。リンクス』
「あーいよつと、任せな」

リンクスが懐からファイルを取り出し、パラパラとページをめくる。ファイルの側面にはでかかど『O&P・C』の文字が書かれていたが、深入りしたら絶対ろくなことになるので四人は黙っていた。曲がりなりにも裏側に属する部門で『Official & Confidential公式秘密』とか控えめに言っただけが分からない。「えーつと、どれどれ？　あーでもないこーでもない、あれでもないこれでもない——あった、コイツだ」

ガサゴソとファイルの中を漁り続けること暫し、目的のものを見つけた様子のリンクスはファイルの中から冊子の形に綴じられた紙束を取り出した。

その表紙には、やたらとゴシックなフォントで『サルでもわかる働き方改革〜ブラックからホワイトまで〜』という題が記されている。「つたく、本家と違ってあんまり整理されてねえのが難点だな……後で中身も一回チェックしとくか、つと」

「……冊子にしてるんだつたらファイル要らなくね?」

「(しっ! 静かに! わかっててもそういうこと言うな!)」

「(あ、あははは……)」

「(O & a m p ; C ……確か旧合衆国で同名のファイルが嚴重に保管されてたという話があつたな)」

その様子を見ていた彼女達は思い思いの感想を抱く。

リンクスは用済みのファイルを閉じてから机に放り出し、ページをパラパラとめくり始める。

そして、どうやらお望みのページにたどり着いたらしく、「おつ、見つけた見つけた」と呟きながらそれを読み上げ始めた。

「えーと、それじゃあ手っ取り早く説明するぞ teme ー、聴覚センサの倍率最大にしてよく聞きやがれー」

「おーう」

「よっしゃー。じゃあ最初にだな……」

そして、リンクスは計画の概要を話し始めた。

最初こそ真面目な顔をして聞いていた一行だったが、すぐさま眉をひそめ、訝しげな表情を浮かべ、首をひねり、最後には呆れたような顔になる。

「……で、フィニッシュだ。上手く行きやあ一週間とかからずにケリがつく」

「お前もしかしくとも頭のいい馬鹿だな?」

「ンだと teme エゴラア!!」

簡潔に言おう。

——それは、最終的に MAG がかつてない程に真剣な顔つきでリンクスにツツコミを入れるレベルでぶっ飛んだ計画だった。

クルーガーもスクリーン越しに険しい表情を浮かべている。

『……まあ、どのみちもう後には退けない場所にまで来ているのだ。』

こうなったら多少無理のあるプランでも押ししていくしかない」
「それでいいのか責任者!!？」

■ ■ ■
一方その頃、G & a m p ; K 本社の位置する地区から少し外れたエリアにて。

ドルルン!! と爆音を響かせながら、大型のオフロードバイクにまたがって疾走する影が一つ。

長い白髪とマントを風に棚引かせ、オレンジ色の双眸は溢れる好奇心によって爛々と輝いている。

そして、腰の両脇にセットされたホルスターには、それぞれサブマシンガンが1丁ずつ収まっていた。

「はっは！ 待っていたまえよりリンクス、君の上司が今行くぞーっ！」
元気よく叫ぶと、彼女(?) はただでさえ開き気味だったアクセルを一気に全開にした。

ひとときわ大きくエンジンが吠え、スピードが一気に上がっていく。
……さて、先ほど彼女(?) と表記したのは理由がある。

というのも——彼女、もといサブマシンガンの戦術人形たるAR—57は——元男なのだ。

「さあさ(ぐ)照覧あれ!! この私、EN—17現所長、アリアンロッド・アレサの珍道中をな!! 今度は何が待っているのかねえ!? ふふつ、ふふははは、フアツハツハツハア! 考えるだけでワクワクが止まらねエ!!!」

自分で珍道中と言い切ってしまうあたり、AR—57——アリアンロッドもまた、立派な狂人であった。

彼女(?)、もとい彼女は新天地を見つけた某コンキスタドールのよ
うな威圧感溢れる笑顔を浮かべ、より一層速度をあげて疾駆する。

——邂逅の時は近い。

Dio santissimo misericordia de mi 3

『これで——終いじゃあつ!!』

どこぞの人斬りを彷彿とさせるシャウトと共に、新型光学銃から放たれた閃光が最後の一騎となっていたメカエリチャンを貫く。

その光は着弾点を中心にELIDの体を食いつぶしながら広がっていき、最終的にパウードスーツすらも巻き込んで消失した。

『ハッハーツ！ 意思もなんもねえ実質機械部品ごときがブランク様に歯向かうなんざ100光年早いんだよ!!』

「喋れば喋るほど小物オーラが濃くなっていくわね貴方。あと光年は距離よ」

『自覚はある』

私が指摘すると、ブランクはキリツとした顔で頷いた。そんな自信満々に言うことでもないだろうに……。

気が付くと、私たちの立っている場所は最前線に作られた塹壕から漆黒の空間に戻っていた。

キヨロキヨロと当たりを見回していると、ブランクが私の肩に腕をかけながら、

『どうやら、あそこでやるべき事は終わったみてえだな?』

『……やるべき事?』

『言ったろ? これはお前の記憶の追体験だ——俺の役目はお前という存在を調律するための案内人、って訳だな』

「初耳なところが混ざっているけれど?」

追体験、というのは聞いたが調律、とは言われていない。一体私の何を調律するというのだ。

そんな事を考えている私の言葉に、ブランクは視線を明後日の方向へと逸らして、

『……わっり、言うの忘れてた』

「ふんっ!」

「……人体の奇跡ね」

『流石にわかつてると信じてるがお前これが普通の人間に出来ると思つたら大間違いだからな？ 多分ペルシカの野郎にだって出来ねえぞ。リコリスだったら分かんねえけど』

「彼女は野郎じゃなくて女よ」

『揚げ足取るんじゃねえドアホ！ いいか、これはな——つと、時間か』

「？」

首を傾げる私。

それに反応することなく、ブランクは銃を再び構え直した。そして、私に背を向けたまま言う。

『いいか、さっきのはまあチュートリアルみたいなもんだ。こつからが本番だぜ、くたばんなよ』

——視界が暗転する。



『聞いている——このような話は聞いていない!!』

『奴は一体何をしていた!?!』

『弾効せよ！ 弾効せよ!! 弾効せよツ!!』

『懐に忍び込まれた不手際ではない!』

『我々優秀な人類がここまで追いつめられるなど、明らかな失態だ——!!』

どこかの暗闇。そこでは、醜い罵詈雑言の応酬が続いていた。

彼らは皆一様に、G & a m p : Kにおいては重鎮、あるいは重役に分類される位置に就いている者だ。

『あの連中はすでにここに戻ってきている！ このままでは我々のしてきた事が表ざたになるのも時間の問題だ!』

『ならばどうするというのだ?! 直接私兵をけしかけるか!』

『馬鹿が、しかしそれでは自身の行いを認めたま同然であろう!!』

『であれば取引でも持ちかけるか？ 愚かな、あの道化師が向こうに

着いている時点で情報戦など挑む前から敗北しているも同然だ』

『であればどうする?!』

『その頭は飾りか! 問う暇があれば貴様も考えろ!』

先ほどまでの荒れ模様から一転、慌ただしい様子で会談が進む。

出来るかぎり確信をばかすような言葉を使っているため内容はどうにも判然としないが、どうやら彼らは何かとある集団に対して異常なまでの敵愾心を抱いているらしい。

その時だった。

「よーっす馬鹿ども。顔も頭もよろしくねえ無能共が、相変わらず雁首揃えてバカバカしい水掛け論やってるようで何よりだぜ?」

ガンツ!! と音を立てて、扉が乱暴に蹴り開けられた。開かれた扉から光があふれ出し、暗闇を蹂躪していく。

突然の出来事に、声の主は皆一様に光を腕や手で遮り、下手人の姿を捉えんとする。

「はっはっは、そんなマジになってこつち見てんじゃねえよ、モテ期が来たつて勘違いしちまうじゃねえか。テメエらにモテても何も嬉しくねえわカス」

「貴様……何者だ!」

「オレ? オレか!?!」

その問いに、下手人の麗人は引き裂くように口を三日月型にする。

そして、バツバツ! と芝居がかった動きを交えながら、声高らかに自身の名を名乗った。

「天国より堕ち来たる! 地獄を告げる使者!!」

「戦術人形ゲパード 山猫 GM6!!!」

Dio santissimo misericordia de mi 4

バタバタバタ、とローターが空を裂く轟音が辺りに響き渡る。

気が付くと、私は輸送ヘリと思しき機体の中で立ち尽くしていた。

「——おーいー？ 大丈夫？ 起きてる？ 寝てたらグーで殴るよ？」

そして、私の目の前では片手に携帯端末を持った少女が、わざと私の視界に入るように目前でパタパタと手を振っている。

私はそれを払いのけながら、

「ええ、起きてるけれど——へぶっ!？」

言った矢先にパーで頬を引っぱたかれた。視界が勢いよく90度右に回転し、それに釣られて姿勢も座っていた状態から大きく崩れる。

私は姿勢を戻し、ジト目で目の前の下手人に向けて抗議した。

「……痛いだけけど？」

「グーでは殴ってないさ。嘘は言っていない」

ふんす、という擬音が聞こえてきそうなくらいに堂々としたその立ち姿。

自分はいい事をしたと言わんばかりのその姿勢に、私は半眼のまま呟く。

「全く、あんまり人の事をからかっていると天罰が下るわよ——M.D.R.」
言つて、気付く。

M.D.R. 私は確かにそう言った。だが、私は彼女に見覚えなどない。これまでも、そして恐らくこれからも。

……であれば、私は何故彼女の名前を言い当てた？

——ザザツ、と頭痛と共に視界にノイズが走る。

ノイズの走る視界の中で、私は開かれた後部ハッチからテイルローターを眺めていた。

『オラーツ！ 空挺降下!!』

ハッチの縁に手をかけ、威勢よくブランクが飛び降りていく。

次の瞬間には銃を構え、下方にいらっしゃると思われる何がしかへ向けて射撃を開始していた。

……今度は一体何ごとだ。そんな私の疑問とは裏腹に、『私』は手に持った相棒の様子を確かめる。そして、顔をあげずにこう口にした。

『――準備はいいわね?』

『まっかせて!』

その問いかけに、サブマシンガンを両手に持った少女が威勢良く返事を返す。あれは……おそらくだがスコープオン、だろうか?

そして、『私』は立ち上がり、先ほどダイビングしていったブランクと同じようにハッチの方へと歩みを進めた。

眼下に広がるのは広大な大地。

そして、その大地を一面埋め尽くさんばかりに集う、暴力的なまでの人の群れ。

今の世界情勢からは想像もつかない光景に唾然とする私をよそに、

『私』は淡々と呟く。

『世界がこんな有様になっても、人間は争うことを止めないのね。……血は争えない、というヤツかしら』

『まあ、絶賛戦争中だけどね。につひひ、「第3・5次世界大戦、ここに開幕」!』

今となつてはアンテイクにも等しい二つ折り型の携帯電話を片手に、MDRはその光景を面白半分でネットへとアップロードする。

『私』はそれを片手で制して、

『軽口はそこまで。さあ、仕事の時間よ』

そう言ったかと思うと、勢いよく大空へと躍り出た。

■ ■ ■

「GM6だと……! 人形風情がなぜ我々の会談に口をはさむ!」

その言葉を聞いた声の主の一人——中年の男が、憤懣やるかたなしといった様子で叫んだ。

しかしその発言に対し、リンクスは「チツチツチツ、分かってねえなあ」と舌打ちしながら指を振る。

「おーっと、その論は今のオレには通じないぜ？ なんせまあこっちも事情が事情でな」

「何を言っている……!?!」

そう言って、彼女は胸元から一枚のIDカードを取り出した。

「んじゃ、こっちの顔では初めましてだな？ という訳でどうも、IOP社裏技術開発部門所属のリンクス・マジヤロールサーグだ。はっは、コンゴトモヨロシク？」

「裏技術開発……馬鹿な、よもや貴様は!!」

「おうさ、IOPの裏側『EN-17』サマのお通りだぜ？ おらひれ

伏せ愚民ども、崩壊液の実験体にすんぞ」

EN-17 / 17 Lab。

IOP社において16 Labと並ぶ大型技術開発部門であり、なおかつ16 Labなどの表沙汰になっている部門では到底できない後ろ暗い研究を行っている開発局だ。その研究同様に組織自体もかなりの深度まで秘匿されていたが、彼ら重役たちはそのポジション故に辛うじて存在だけは知っていた。

そんなIOPの中でもほとんど表沙汰に出ることの無い大御所の突然の登場に、先ほどまで罵りあい続けていた重役たちの顔がサツと青ざめる。

そんな中で、重役の中でも比較的新入りである一人が果敢に吼えた。

「貴様……裏の所属が、一体我らに何の用だ！」

「いや、大体想像ついてんだろ？ あのクソ野郎……改めクソ尼……もといウチのトップがあの中中にいたくご執心でな——これ以上ちよっかい出すってんならオレとしてもテメエらを黙らせるしかねえってこった」

「何を……」

「ほら、例えばそのハゲチビ——デブは足さなくていいか——あー、とにかくそのオツサン。こんな話があるんだが知ってつか？ 資

金横領、公文書偽造、人形に対するわいせつ行為……おいおいこれは良くないぜ、テメエもそう思うだろ？」

「ま、まさか……何故貴様がそれを知っている!! 証拠は全て握りつぶしておいたはずだ!!」

ペラペラと手に持っていた紙束をめくりながら、彼女が知っているはずのない事柄を列挙する。

その内容を聞いて、ハゲチビ……もとい、重役の一人は激しく狼狽し始めた。ということは、つまり。

リンクスは笑顔を浮かべて、

「はい自供頂きましたー。いやあ、書類だけだと逃げられる可能性が無きにしも非ずだかな、勝手に自爆してくれて何よりだせ。ハハッ、ウケる」

「きつ、貴様あ……人形風情が私を謀ったか!？」

「いんやあ別にんなことはしてねえよ? オレはただ実際にあつた不正のケースを読み上げただけ。で、アンタはそれに勝手に反応居て自爆した。ドゥー・ユー・アンドンスターン?」

「ぐつ、ぐぐぐ……!!」

煽るような表情と口調でリンクスが言う。

「ま、とつくの昔にアンタらの裏なんざこれ以上叩いても埃も何も出やしねえレベルまで探り切つてあるし、正直な話言質ももういらねえんだよな。あの鹿野郎勝手に人の事猫の子かなんかみたいに貸し出しやがって、この仕事終わったら絶対一発ぶん殴るからな……」

「な、何を言つて——」

「ん? ああいや、テメエらが気にするような事じゃあねえ、ただの独り言だ。それでだが——まあ、なんだ」

パチン、とリンクスが指を鳴らす。

それと同時に、バンツ! と暗闇に包まれていた部屋が照明の眩い光によって照らし出された。

突然の閃光に、空いた扉から差し込む光があつたとはいえ目が暗闇に慣れ切っていた重役たちは一様に目を細め、腕で目元を覆って影を作るなどの措置をとる。

その直後、ガツシヤアン!! と甲高い音を立てて窓ガラスが勢いよく砕け散り、外からの光を遮断していた分厚いカーテンを巻き込み引きちぎりながら何者かが部屋へと侵入する。

「強盗の時間だオラア!! 金は要らねえその薄汚い命だけ置いてけ豚共オ!!」

「お前らは完全に包囲……はされてないけどまあいいや! 両腕を頭の後ろに置いて地面に伏せろ! 今すぐに!!」

「クヒヒハハハ! あらま残念悲しき事案、情報戦はワタシの勝利!

絢爛豪華に剣林弾雨、残虐無道な悪逆非道! 進め集まれ捻れて歪め、銀の弾丸祈って沈め!」

「心臓を捧げよ。貴様らに出来ることはただ一つ、その命を以て未来の人類にとつての希望の旗となることだ」

『コロセ』

『やめろー! 俺を撃つなー!』

『俺は味方だー! (大本営発表)』

『シユリユウダンヲナゲロ』

『手榴弾だー!!』

「シリアスな時くらい黙るかまともにも話すか出来んのか貴様ら!」

そんな光景を滑稽な喜劇を見るような目で眺めていたリンクスは、相も変わらず挑発的な笑みを湛えながらこういつた。

「——じゃあ、手っ取り早く死んでくれ?」

Dio santissimo misericordia de mi 5

——気が付くと、視界はクリアになっていた。

私はその光景を思い出しながら顔に手を当てて天を仰ぎ、思わず叫ぶ。

「……いや随分と良いところで切れたわね!？」

「何がいいところなんだい?」と興味津々で聞いてくるMDRを誤魔化しつつ、私は必死に頭を回す。

何せ今回のフラッシュバックは目的に関する説明が全くなされていなかった——降下して、あの群衆に何をするのか。あるいは、あの群衆と何かをするのか……そこから考える必要が出てくる。

(……さっき見た限りでは地上に施設のようなものは確認できなかった。ということは地下施設? いや、だとすればあそこまでの大人数で侵攻するのはどう考えてもおかしい、あの1/10でも十分事足りる。だったら……)

「……地平線の向こうに『何か』ある……?？」

『気付いたか?』

「背後から話しかけるのやめてくれないかしらブランク。つていうか私座ってるはずよね? 後ろつて何処?」

『……だ……』

コンコン、と硬質な音が耳に届く。

後ろを向くと、機体側面のガラスに外からべつたりと顔を張り付けたブランクがいた。

ぶふっ!? と思わず吹きだす私を尻目に、ブランクはぬるりとした動きで機体後部のハッチから機内へと入り込む。どう考えても常軌を逸した光景だが、しかし私と同乗している彼女たちにそれを気にした様子は見られない。

気ままにケータイを弄り回すMDRを肘で軽く小突きながら、ブランクは言う。

『あくまでもこいつらはお前の記憶内の存在だからな。それ以上のことは出来ないし、その枠から外れた事象にはほとんど対処できない。この場合、俺のさっきのムーブは「なかったこと」として認識されてるっつー訳だな。最初から』

「いや、ばつちり見えてるけど？　なに今の動き、思わず写真撮ってアップロードしちゃったよ」

「ブランク？」

『……♪』

「おい。口笛を吹いて目を逸らすな。こつちを向け」

『やだよお前絶対今怖い顔してるだろ！　っーかなんだよMDRテメエ俺が単独でここに来たときはうんともすんとも言わなかったじゃねえかよこの野郎！』

「いや、今回はそこに本人いるし」

『もしかしなくともテメエも俺と同じクチだな!?　だつたらカカシやってねえで仕事手伝え——って待って！　待ってください110 BAさんちやうんすよ！　いやちやうんすよほんま!!』

「何が違うのよほら」

『ちやうつちやちやちやうんすよ!!　ちよちよつ、ちよつと待って下さい！　待って！　助けて！　待って下さい！　お願いします！』

「却下よ」

『アッー!!』

そして始まるヘリの機内でどつたんばつたん大騒ぎ。

過程の説明は省くが、結果だけ言えばブランクの残機はいくつか減り、機内は軽くスプラッタの様相を呈している。

MDRはドン引きしながら惨状へとカメラを向け、

「うわあこりや酷い……。『悲報』死なない系指揮官の恐怖！【王たちに玉座無し】』つと、送信！」

『誰が火のない灰だコラお前』

「……っていうか、ここネット通るのかしら？」

「通るよ？ 外の世界の自分を中継器にしているからね！」
なんと。

M D R曰く、私の記憶にいる戦術人形は総じて『現実世界に存在する自身と同系の義体』を踏み台にすることで、ネットを使って外界の知識を得ているのだという。なんだその謎テクは。

どこか寂しそうにしながら彼女は続ける。

「まあ、どうやっても『この私』はここで頭打ちだけどね。それでもさ、気になるじゃん？ 『未来の私』がちゃんとやってるか。やらかしてないか」

「……仮にやらかしてたら？」

「その時はちよつと義体の制御乗っ取るかもだけど気にしないでね！」

「逆に聞くけど気にしない馬鹿がいると思う？」

『お前らタイムリミットについて考慮してるか？ ん？』

ブランクが腕時計を示すようなジェスチャーをする。それ以前にあつたのか、制限時間。

『とりあえず面倒だし今回の概要は降りながら話す！ オラ行けテメエら、空挺降下!!』

私が反応するよりも早く、ブランクは私とM D Rをもろともにハッチから投げ落とした。

重力の糸が私達を引きずり下ろし、風切り音がせわしなく耳元で騒ぎ立てる。

私とM D Rが空中でもつれ合いながらバランス取りに四苦八苦しっていると、その横からスツとブランクが降りてきて叫んだ。

『もう先に言っちゃおうが今回のテーマは「暴動鎮圧」!! 下にある人の海が見えるな、鎮圧と銘打って入るが実質的には鏖殺だ！ まあ暴動つつつても正確に言えば民兵の集まりだからな、「敵兵」である以上は遠慮はいらねえ！ 手当たり次第にぶっ殺しちまえ!!』

「後で覚悟するときなさいよ絶対にぶち殺してあげるから……ツ!!」

『ハッハーツもう死んでるから怖くも何ともねえなあ!! おら行くぞテメエら、我接敵セリ我接敵セリ、各員一層ノ奮起ヲ期待スル!!』

そのまま、私達三人は暴力的な人の波へと突っ込んでいった。

■ ■ ■
「さて、肅清はこんなもんでいいか？」

頬に飛んだ返り血を拭いながら、リンクスはそう嘯く。

会議室は惨憺たる有様だ——壁も床も天井も穴だらけ。あちこちに血しぶきと肉片が飛び散り、贅の限りを尽くしたのであろう調度品は見る影もない。

「ひっ、ひっ、ひいひい……」

そんな中で、情けない声をあげながらへたり込む髭面禿げ頭の中年が一人。言わずもがな、リンクスの采配で『生かされた』生贄だ。

そんな彼におもむろに歩み寄ると、リンクスはその手にサブマシンガンを一丁握らせた。

「——さて。アンタは錯乱して銃を乱射、同僚を撃ち殺した。んで、オレ達がたまたまその光景を目撃し、これを鎮圧した。だよな？」

「ひい、なん、何を……」

「安心しな大統領。後始末する連中は一流だ——持ってた銃と残された弾痕の口径が一致しないなんざ、どうせ気付かねえからな？」

その言葉に、ただでさえ青かった男の顔が紙のように白くなった。

不規則に浅い呼吸を繰り返す男を眺めながら、麗人はあくどい笑みを浮かべる。

その背後から、MAGが声をかけた。

「……で、仕事はこれで終わりか？」

「応ぎ。これで処理は完了だ、あとは勝手に自浄するさ」

「あっそう。なんでもいいけどボク疲れたよ……MGL胸貸して。その無駄にデカイ胸」

「言い方!! 私の胸に何か恨みでも!」

「……まあ、その、なんだ。気にするなよP90」

「気にするわッ!! どいつもこいつもなんだその胸部装甲は! 見せつけてんのか、ボクに対する当てつけか!? ボクだってこんなボディに押し込まれる前はもう、その、アレだ、すごかったんだから!!」

『ほーん』

『で、本当のところは?』

「すいません今までもこれからもつるべつたんです——何言わせてんだぶつ殺すぞ!!」

『wwwwww』

『貧乳はステータスだからね、仕方ないね』

『希少価値は?』

『(なくは)ないです』

『草』

『草』

『草ア!!』

思い思いの事を話しながら、彼女たちはその部屋を後にしていく。

しかしMAGだけが退出する前に立ち止まり、男の方を振り返って告げた。

「じゃあな、名前も知らねえ誰かさんよ。テメエらは何もかもここで終わり、どん詰まりだ。だが、あたしらは前を見るぜ」

言うだけ言って、MAGもまたその場を後にした。

最後には呆然とした表情を浮かべる男だけが残され……しかし、彼もまた半日と経たずにその消息を絶った。

その後の彼の行方は杳として知れず。

こうして、G & a m p ; Kは人知れず改革を成し遂げた。

さて、その表に出ない立役者たる彼女たちはというところ……。

「んでさ、結局『アイツ』ってな誰の事なんだ? あたしは知らんが、お前なら知ってんだろ化け猫」

「ああ? ああ、アイツの事なら誰よりも知ってるぜ。あと誰が化け猫だはっ倒すぞ」

MAGからの蔑称(?)に地味に殺気立ちながらも、リンクスはその正体について口を開こうとする。

その時、P90が何かを感じ取った。

「……?」

「どうしました?」

「いや、なんか聞こえたような……?」

「私には何も聞こえんがな。おい、そっちはどうだ」

『いや、聞こえるっつーか、これは……』

「? なんだ、分かっているならとつとと話せ」

『いやあこれは、僕らが言わなくともすぐわかるのでは?』

XTRが無数に従える『声』が困ったようにぼやく、

その言葉通り、答えはすぐさまやってきた。

「おおおおおおおい!!!」

「……ん? 今なんか聞こえたぞ。あたしも」

「あー。なんか嫌な予感するぞオレ」

「おおおおおおおい!!!」

「また聞こえた!」

「これ、もしかしなくても近づいて来てますよね……?」

「おおおおおおおい!!!」

「ヤベエマジで来やがったアイツ!? こんな場所に居られるか、オレ

は部屋にこもr——」

そして、次の瞬間。

「おおおおおおおい!!!」

「うおお想定の数倍速度が高つ、ごふえあつ!!!」

「なつ、なんだあ!?!」

白い影が視界を猛スピードで通り過ぎたかと思うと、リンクスがとんでもない勢いで吹っ飛ばされた。

その勢いのままゴロゴロと転がっていき、しばらくするとその回転がぴたりと止まる。

そこで、ようやくMAG達は気付いた——白い麗人がリンクスに馬乗りになっている!?

麗人はリンクスの襟首をつかんでがつくんがつくん揺さぶりながら、興奮した状態で何やらまくしたてる。

「はっは! 来てやったぞう我が愛しの最高傑作! どうだ見るがい

い、私もこの通り性別とついでに種族の壁を超越せしめた!」

「ぐえつ、テメエその話何回目だと思ってやがる! もう聞き飽きた

——とか言いながら服に手を伸ばすんじゃないやねえぶつ殺すぞクソ野郎!!」

「あふんっ」

そして、その白い麗人の顔面にリンクスの右拳が突き刺さる。

おいおい、と顔を見合わせるMAG達を他所に彼女は吹っ飛ばされながらも空中で姿勢制御し、何事もなかったかのように着地した。

そのまま、何事もなかったかのように話を続ける。

「ははは！　いつも君の挨拶は過激だなリンクス！　惚れるぜっ！」

「騒がしいですぶつ殺してあげましょうかクソ所長殿。それで、結局今回は何の用があつてわざわざお越しになつてくれやがったんですかこのクソ野郎」

「うーんこの敬語と見せかけた罵倒の嵐！　あの頃と何も変わっていない！　懐かしい快感だ!!」

「オイマジで誰だコイツこつちによこしてきたの!!　エリアンサスは一切何やってやがった!!」

その時、俺の名前はエリアスだ——と悲痛な叫びが聞こえたような気がしたが、別に知った事ではないしあんなあからさまな不審者とかわりあいたくもないのでMAG達はその幻聴を黙殺した。

だが、現実是非常である。ぐるん!!　と麗人はこちらの方を向き、胡散臭さ前回の笑顔を浮かべながら挨拶してきた。

「——さて。それで、君たちが502小隊だね？　私はAR-57……改め、EN-17現所長アリアンロッド・アレサだ。君たちの噂はかねがね聞いているよ」

「オイオイどうするよP90、アイツがヤベー奴だつてこと以外まるつきり理解が及べねえよあたし」

「奇遇だね、ボクも全く一緒だよ。さてどうする？　逃げる？」

「それが良いのでは？　潜在的な脅威度で言えば、恐らくあの人がぶつちぎりでトップですよ現状」

「はははは！　おやおやこちらも好印象を抱いてくれているようで何よりだ!!」

「「いやウツソだろお前!!」」

「ああ……こういう手合いか……」

衝撃の発言に驚愕する3人を他所に、XTRが額に手を当てて嘆く。

「まあまあ酷い発言をしているというのに、これで第一印象がいい方とは。ワーストは一体どうなっているのだ——と彼女たちは戦慄した。

それを見てふん、と何故か得意げにしている麗人——アリアンロッドの背後で、リンクスが立ち上がりながらひとりごちる。

「……あー、来ちまったモンは仕方ねえ。どっかその辺の部屋がいるな、コイツは……」

ふらふらと微妙におぼつかない足取りで歩いていくリンクス。それを横目でチラリと確認してから、アリアンロッドは胸を張ってMAG達へと手を差し伸べた。

そして、口を開く。

「では、ある話をしよう。これは、君たちにとっては明日の出来事だが——私にとっては、残念ながら昨日の出来事だ」

D i o s a n t i s s i m o m i s e r i c o
r d i a d e m i 6

年代不明、地域不明、とにかくどこかの上空にて。

私達3人はヘリのハッチから飛び降り、まさかの3人vs数千人の大乱闘へと乗り込もうとしていた。

手に持つ銃の照準を下へと向け、肩で風を切りながらブランクが叫ぶ。

『片っ端から撃って撃って撃ちまくれ！ どうせ残弾なんざ次の時には復活してんだ、気兼ねする必要は全くねえ!!』

「薄々そんな気がしていたから残弾は別にいいけど被弾は大丈夫なんでしょうね!? 私達空にいるんだから対空に集中されたらあつという間にハチの巢よ!!!」

なんてこともないようにそう言うブランクに苦言を呈するが、奴はそれを聞き流してさっさと銃撃を始めてしまった。

仕方なくMDRの方を見るが、彼女は彼女でケータイ片手に笑いながら銃を乱射している。少なくともまともな話は出来なさそうだ。

仕方なく、自前の相棒を構えて引き金を引く。スコープも覗かず落下中で揺れも激しい、ダメ押しに連射までしているせいで精度は期待するべくもないが、異常なまでに的が広いせいでそれでも外しようがないというのが恐ろしい。

「本当、昔の私は何を思ってこんな仕事をやっていたのかしらねー
ーッ!?!」

そうぼやいた直後、私の目の前を一発の銃弾が通り過ぎていった。幸いにも服が少し避けるだけで済んだが、盛大に肝が冷える。

改めて自分の下を見てみると、なんとまあ銃弾の雨あられ。この場合降っているのは自分の方だから、なんと表現するべきか。ともかく、空を裂く大量の鉛球がお出迎えしてくれることと相成った。

「ブランク!? ブランク!! これ本当に昔経験したのよね私!? 一体全体どうやって突破していたの!?!」

『すまん正直な話覚えてねえ！ 気合と運と根性でどうにかしろ！』
「覚えてなさいよこのポンコツ案内人——ツ!!!」

咆哮。それと同時に放った銃弾が、名前も知らない誰かの後頭部を穿った。

その後も落下しながら撃ち続けることしばし、かれこれ100人位は仕留めたか？ それでもとにかく標的が多すぎる！ 本当にどうやって突破したんだ、昔の私は!？」

『あれーおつかしいな、そろそろのはずなんだが……』

密かに焦る私の横でブランクがブツブツと何かを言っているが、そんな事を気にする余裕などあるはずもなく。

さらにその間にもどんどん高度は下がっていき、だんだんと地面が近くなってくる。

そしてそこで、私はあることに思い至った。

「……そういえばブランク」

『どうした』

「これ着地どうするのよ」

そう、そういえば私は一般的にスカイダイビングなどで着地に必要なものとされているパラシュートの類を一切装備していないのだ。果たしてこれでどうやって着地するというのか。現状これでは墜落一択だ。

その問いに対してブランクは常識を疑うかのように、

『そりやお前決まってるんだろ、何のためのパラシュートで……パラシュート……パラシュート?』

そこで何かに気付いた。

ブランクは私の顔を見た後、私の背中に視線を向ける。そして再び私の顔を見て、

『……もしかしてだけど、つけてない?』

「見ればわかるでしょう?」

見る見るうちにブランクの顔色が悪くなっていく。あつという間に真っ青になったかと思えば、次の瞬間には紙のように白くなった。

『……よし、じゃあ現状お前の未来を分かりやすく教えてやろう』

「嫌な予感しかないけれどいいわ、言ってみなさい」

『——ボルガ博士、お許しください!!』

「何年前の娯楽だと思ってるのお前この野郎——ツ!!!」

絶賛落下、改め墜落中なものも忘れて、思わずブランクにつかみかかる。そのままがつくんがつくん首を前後左右に揺さぶりながら、私は焦燥全開で叫んだ。

「どうするのよこれえ——っ!!?」

■ ■ ■

「オラ、部屋用意してやったぞ。さあ吐けすぐ吐けキビキビ吐け。こちららテメエが馬鹿ばつかやってるせいで暇じゃねえんだ、話す内容次第じゃドラム缶に詰めて強制送還するぞ」

「人を問答無用で椅子に縛りつけておいてそれか！ ははは！ 本当に相変わらずだな君は！ 泣けるぜっ！」

G & a m p ; K オフィスの一角に位置する個室。

そこで、突然リンクスとアリアンロッドによるS Mプレイが開催された。

その光景を見てM A Gは呆れた表情を浮かべながら、

「……これ帰っても良いんじゃないやねえの？ なんか流れで着いてきちまったけどさあ」

「なんかそんな気はしますね……。まあ、その、もう少しだけ待ってみませんか？ 場が動くかもしれないし……」

「ちなみに聞くけどM G L、これがそう見える？」

「……うーん」

「……まあ、普通は見えないな」

さりげなく背後で総スカンを食らっていることに気付くことなく、リンクスはアリアンロッドを容赦なく虐げ続ける。彼女の話が正しければ曲がりなりにも自分の上司であるはずなのだが、本当にあんな扱いで良いのだろうか？ いやでも会話内容から察するに日常的に繰り返している対応らしいし……うーん……。

「……やっぱり帰らねえ？ リーダーの様子見に行きてえよあたし」

「あつ一人だけ帰ろうとすんなよ、行くんだったらボクもついてく」

「おつと逃がしませんよ、逃げるなら私も一緒です」

「貴様らなあ……」

『とかなんとか言いながら自分もしれっと退出しようとしてんの草』
『変態から逃げるな』

『サイはよ』

「逃げるに決まっているだろう馬鹿め。あと最後のはどう考えても違うだろう」

だが、MAGが部屋の扉に掛けようとした瞬間、

「あふん」

「は？　　つてうおおっ!!」

ふと気付くといつの間にか扉の前にアリアンロッドが立っており、ドアノブを掴もうとしたMAGの手は代わりに彼女の胸を掴んだ。

「おおっ!!　　テメエいつの間に縄抜けしやがった！　　また変なテク身に着けやがって！」

「通信教育とは便利なものだ、リンクスもそう思わないかね？」

「オーケー分かった、今度は抜けない位ギツチギチに巻いてやるよこの野郎」

「お前らの性癖事情は分かったから本題入れや！　　あたしたちだって暇じゃねえんだぞこの野郎はよマシンガン撃たせろ!!」

「互いに欲望丸出して言うかお前さつき散々撃つたろ!!　　あれだけ撃ってまだ足りないの!?!」

「一日一万発感謝のマシンガンだテメエマシンガンナメてんのかこの短小サブマシンガン野郎が!!」

「良い度胸だ表出るぶっ飛ばしてやる!!」

ぎゃいぎゃいと言い争いを始める二人。

呆れたようにそれを見ていたリンクスたちだったが、それに業を煮やしたMGLが二人の肩に手をかけた。

そして、不穏な予感しかしない満面の笑みを浮かべて耳元でささやく。

「(……このまま争って私に潰されるのと、大人しく話を聞くの……どっちがいいですか?)」

「話聞きますゴメンナサイ!!」

「おっ、おう……すまん……」

「……ヒエラルキーが見えたな。まさかとは思うがいつもこの調子なのか、502こ小隊は？」

『どうだろうなあ』

話を戻して
閑話休題。

「さて、それではご対面——お目に留まれば元へと返す、五月の鯉の吹き流しというわけだ。本題へと入ろう。君たち502小隊はリーダーであるサベージ110BAの復活を望んでいる、そうだね？」

「あ、ああ……何だ急に改まって気持ちわるい」

「はっは！ 突然罵倒されるのも悪くはないがここは本題に集中するとしよう！」

そう言つて、彼女は懐からタブレット端末を取り出した。

「どうやらスライドか何かを表示しているらしく、画面には『戦術人形の意識とは何たるや』というタイトルが書かれている。」

その端末をこれ見よがしに振って見せながら、稀代の天才にして変態たるアリアンロッドはこう言った。

「古来より、木を隠すなら森の中と言う。であれば、戦術人形の意識は何処に行くと思う？ ——スタンドアローンの結晶体たる502小隊の諸君。今から、君たちを啓蒙しようではないか」

「どうするのよどうするのよどうするのよ!? このままだと私確実に死ぬわよ!? おい! こっち見ろブランク!!!」

『いでででやめろ巻き付くな首を極めようとするないででででで分かった話す! 今死に際で画期的なアイデアが考え付いたからその手を放せこの野郎!』

「こうなったら死なばもろとも……!!」

『お前昔と言ってること変わってねえな!? なんかあの時も似たようなこと言われた記憶あるぞ!!』

何やらブランクが叫んでいるが、私としては普通にそれどころではない。負傷には慣れ切っているが、高所からの無策での落下となるとどうしても恐怖が勝る。やることなすこと派手過ぎて心がないんじゃないかと方々で噂されているかもしれない私ではあるが、それでも恐怖を恐怖として受け止める感受性くらいはあるのだ。

そして、ブランクはたまたま近くまで接近してきていたMDRのバックパックの縁を掴み、そのままグイッとこちらに引き寄せた。

『つたく、オラMDR! こっち見ろ! つつーかこっち来い! 話がある!』

「え、なに? よく聞こえない」

『聞こえんだろ都合よくミュートすんなオラ!! 至近距離だぞテメェ!!』

「はいはい。で、何さ?」

『聞こえてんじやねえかはっ倒すぞ! 我等が110BAサマがパラシュートつけ忘れたんだってよ! だから手エ貸せ!』

「はいよつと……」

そして、二人は両手を繋いで円陣を組み、その輪の中に私が入るよくな格好となった。

現在高度は推定1000m弱。どんどん落ちていく——このまま

ではあと5分と経たずに地面に叩きつけられるだろう。

私が二人の方に伊を寄せると、ブランクが叫んだ。

『行くぞオラー！ 1、2の——』

「——さんっ!!」

バシユツ！ という音と共に、二人の背負っていたバックパックが弾け、そこから布の塊が飛び出してきた。

それらは上方へと投げ出されたかと思うと風にあおられて広がり、ちようど∞を描くように展開する。それに伴ってかかった強烈なGに顔をしかめるが、それでも落下速度は少しづつ下がっていった。

その様子を見ながら、ブランクは続ける。

『よっし、ぶつつけ本番だがうまくいった！ 無風なのが幸いしたぜ

！ こんな真似は二度としたくねえ!!』

「どーかん！ さって、構えて110BA！ 下から対空飛んでくるよ！ パラシュート頑丈だから多少被弾して穴空いても大丈夫だけど、破れたりしたら一卷の終わりだかんね！」

「任せなさいー！」

下へ向けて銃を構え直し、再び精度度外視の乱射を始める。しかし、それでもライフルである以上連射速度には限界があるため、私は即座に見切りをつけた。

「ちよつと借りるわよー！」

『あつ、テメエおい!?!』

ブランクの持っていた光学銃を奪い取り、下へ向けて撃ち始める。システムに登録された正規の兵装ではないためエラーが走るが、封殺して射撃を続行する。

流石のアサルトライフルであり、引き金を引いているだけで段違いの射撃速度で連射が出来る。光の玉が幾重にも重なって飛んでいき、着弾するや否や周りを巻き込みながら拡散・崩壊していく様は一層幻想的にも見えてくる。

その時、MDRが上を見て叫んだ。

「——！ 来たよ！」

『ようやくかアイツら!! 重役出勤とは良いご身分だ!』

その言葉が耳に届いた直後、こんどはとんでもない轟音が連続して
耳朶を打った。

何事かと上を見ると、パラシュートに隠れて視認しづらいが上空を
航空機らしきものが飛んでいる。

「航空機!? こんなご時世にどうして!？」

『ハッ、ビビんなよ! 安心と信頼の太鼓判付、空の魔王の愛し子だ
ぜ?! 崩壊液雲にダイレクトに突っ込むならまだしも、多少の高度で
の飛行だったら問題なく動けるんだよ! 操縦系統もヴィンテージ
そのものな一品だからな!!』

『ザザッ——空挺降下中の分隊員へ告ぐ! こちらサンダーボルト、
現時刻を以て援護爆撃を開始する! 巻き込まれて死んでくれるな
よ!』

『誰に言っつてやがる! そっちもうつかり墜落なんざしてくれんな、
ドッグタグ探すの骨が折れるからな!』

そんな軽口の応酬をした直後。

先ほどまでとはケタ違い、それこそこれが新開発の兵器ですと言わ
れても驚かないレベルの音の奔流が私達に襲い掛かり——次の瞬間
には、人の洪水の実に半分近くが消し飛んでいた。

その様子を呆然と見ながら、私はつぶやく。

「……………これ、私達来る必要あったのかしら?」

『シッ! 言うな! 言っつとくけど俺らにも仕事あるんだからな!!』

■ ■ ■

「さて、お集まりの紳士淑女…………でもなさそうだな、君たちは」

「ぶっ飛ばすぞ? ん?」

「おお怖い怖い——コホン、ではお集まりの皆様!」

これより——『講座』を始めよう! さあ、紙とペンを!

アリアンロッドが高らかにそう宣言し、それは幕を開けた。

「よし、入りはばっちりだな。ははは、ではまず最初の講義だ!」
諸君。

人類の生命の根幹、すなわち『魂』とは何ぞや？
アリアンロッドがそう問いかける。

その問いかけに対し、まず最初に答えたのはXTRだった。

「……魂とは即ち、肉体とは別に精神的実体として存在すると考えられるものだ。肉体から離れることも、死後も存続することも可能であり、肉体とは別にそれだけで一つの実体をもつとされる存在。分かりやすく言うなら、肉体はディスクドライブで魂は中身が書き込まれたブルーレイディスクのようなものだ」

「E^そx^のa^通c^りt^りly！ 戦術人形で言うならば、義体が『肉体』でコアやシステムデータが『魂』に値するというわけだな！」

であれば！ と、かつて人間だった麗人は続ける。

「未だ目覚めぬ眠り姫、その『魂』は何処にあるべきか！ これが一番の謎ということだ！」

「通常の戦術人形を基準とすれば、考えられるのは義体内部かバックアップサーバーですが……」

MGLが呟きながら、P90の方を見る。

その視線に気付いた彼女は、自分の胸、心臓^{コア}のあたりを親指で指し示しながら答えた。

「——ボク達にはバックアップがない。つまり、おのずと選択肢は一つに絞られるわけか」

「そう！ よく気付いたおチビちゃん！」

「うん、はっ倒すよ？」

「はっは！ 私には幼女に虐げられて悦ぶ趣味はない……と思いたいので遠慮しておくでしょう！」

「願望かよ……」

「コイツあ手遅れだな。死んでも直らなさそうだ」

「お前も人の事言えないからな!?!」

訳知り顔でうなづくMAGにP90が苦言を呈する。しかしコイツの趣味もまた恐らく死んでも直らない類のものなので、残念ながら徒労に終わりそうだ。

アリアンロッドが話を戻す。

「君たち502小隊の戦術人形たちにはバックアップデータが存在せず、それ専用のサーバーと同期しても居ない。つまり、魂はコアの中にあるしかないということ。そう、ならば!」

「もったいぶってねえで続けろよ変態。オレこの後ペルシカントコにツラ出さなきゃなんねえんだからよ」

「だったらなんで君はここで呑気に話を聞いているんだいリンクス!?!」

「そりやお前なんか変なことしねえように監視してんだよ感謝しやがれ」

「しかも押しつけがましい!」

椅子に座ってふんぞり返るリンクスの発言にアリアンロッドが目を剥く。

しかしづ屋良これもまた初めての事ではないようで、彼女はそれを意識から外して話を戻す。

「はあ、では話を続けよう。聞くところによると、彼女はシステムがクラッシュして昏睡している、というわけだな?」

「ああ、それは間違いないはずだ」

「であれば、答えは単純だ」

そう言っ、かつてペルシカヤリコリスにも劣らないと言われた稀代の天才は言った。

「今の戦術人形がクラッシュしてもバックアップをサーバーからとってくるからな、こんな事態に発展することはそうそうないのだがね。

まあ、昔アイツが持ってきた試験段階の戦術人形ではよくある現象だった」

「よくあったのか、こんなことが」

「そうだとも、マシンガンの申し子よ! あの時3人で首をひねりながら原因を考えていたのが昨日のように思い出せる!」

「分かった分かった! テメエの過去なんざ今はどうでもいいんだ、とつと結論言え結論を!」

「ははは! では続けよう! 何、初歩的な話だ! この手の機械は何かしらの要因でシステムがクラッシュした時、必ずそれに関する

データを出力する！　これがクラッシュレポートというヤツだ！
であれば、それを出力してどうするとか！　実に、実に簡単な
ことだとも！」

「つまり——これは死ではなく復活の予兆、デバッグモードというわけだな！　はっは!!！」

D i o s a n t i s s i m o m i s e r i c o
r d i a d e m i g

爆撃機の編隊が通り過ぎたあと。

人の海に覆い尽くされていた大地には、綺麗な空白の線が何本も走っていた。

踏むもののいなくなった地面は投下された爆弾の威力を物語るかのように赤熱し、蜃気楼を棚引かせている。

その光景を絶句しながら眺めつつ、私たちは地面へと着地した。

『——つと、着地成功か』

「パラシュートはもう捨てていいよねこれー？」

「別に畳んで持って帰ってもいいとは思うけれど、何に使うの？」

「ハンモック」

「牧歌的が過ぎる。ああブランク、これ返すわ」

『おうサンキュ。んじゃ、無事に着地も出来たことだし第二フェイズ開始だ。さっさと行くぞ』

私が銃を返すと、ブランクはそう言って先に進み始めた。

その後ろに追従しつつ、私は問いかける。

「……それで、結局今回の作戦とやらの目的はなんなの？」

『おっ、よくぞ聞いてくれた』

ブランクは「よくやった」とでもいいだけな無駄に腹立たしい表情を浮かべ、自信満々にこう言い放つ。

『それなんだがな、正直な話俺にも分からん』

「おらっ！」

『イデユバツ!?!』

もう何度目か分からない鉄拳がブランクの顔を穿ち、不思議な悲鳴をあげながらそこそこガタイがいいその体が棒きれのように吹っ飛ばす。

その様子をMDRが半笑いで写真に収め、

「あはー、良いネタゲット！ 『自分の事をメタルマンだと思い込んだ

「一般兵士』、送信！」

『しまいにはやつ倒すぞMDR……』

「その前に私がお前をはつ倒すわよブランク。もう一度聞くれ、今回の目的は？」

『それはな、俺にも——』

「二度目は笑いを超えるわよ？」

『真面目に話しますゴメンナサイ!!!』

一瞬で土下座の姿勢に入るブランク。無駄に見事な身のこなしだった。

で、彼が言うにはこの大移動の陰に隠れて凶悪テロリストとやらが密入国をかまそうとしているらしい。

その時点で中々豪胆なことだが、なんとテロリストどころかその居城（移動式）までもがこの軍勢に紛れこんでいるんだとか。何をどうしたらそんな荒業が出来るのかと聞いてみれば、どうやら地下を通らせているとのこと。その為、旧式の移動型居住ユニットが地下の廃坑道を辺りにガチャンガチャンと騒音を撒き散らしながら進んでいるというシニールな光景が広がっているらしい。

「まあでも、考えたわね。これほどの人の海だったら、騒音も振動もさほど目立たない筈よ」

『代わりに熱源探知でばつちり割れた訳だけどな。いくら表層が熱源反応で埋め尽くされてるとはいえ何の対策もせずに堂々と動いてたらそりゃバレるっつの』

「笑えるよね〜」

事態としてはあまり笑えるような状況でもないのだが、まあ確かに笑ってしまいそうなほど間抜けな方法で事情が露見してしまっているのは確かだ。

『さて、じゃあどう動く』

その問いかけに、私は懐からあるものを取り出しながら端的にこう答えた。

「決まっているでしょう。たかが旧式のユニット、正面からぶつ潰すわよ。なぜかは知らないけれどちようど手元にイイモノがあること

だし」

それは、いわゆるセムテックスと呼ばれる類のプラスチック爆薬。それを義体の出力任せに地面へとねじ込み、信管を差し込む。

距離をとりながら、私は懐から起爆装置を取り出した。

そこまでやってようやく私の意図を理解したようで、MDRが慌てて距離をとった。ブランクは信じられないものを見るような、しかしまたなのがお前と言いたげな目で、

『おい……おい。まさかとは思うがお前まさか——』

「Fire in the hole!!」

——起動。

同時、轟音と共に大地が爆ぜた。その下には、予想通りぽっかりと空洞が広がっている。

ただ予想外だったのは、炸薬の量を誤ったのと想像以上に地盤が脆かった点だった。

ビキビキと不穏な音が私の足元から響く。しまったと思ったときにはすでに遅く、崩落する地面に巻き込まれながら私は呟く。

「……しまった」

『そんな軽いノリで済むような話かーッ
!!!?!??』

「デバッグモードなあ？　んなモン搭載してたか戦術人形」

その言葉を聞いて、MAGが首をひねる。

それは他の面々も概ね同意見の様で、各々が首を傾げたり考え込むようなそぶりを見せたりしている。

アリアンロッドはその様子を眺めながら、

「まあ基本的に使用を前提とした運用はされていらないだろうし、知らなくとも無理はない。それに、基本的にメンタルモデルに何かあったらクラッシュレポートだけ抽出してあとはバックアップからデータを復元してハイおしまい、が常だからなあ」

「いくらなんでも対処が雑過ぎない？　それでいいのかIOP」

「技術の進歩に比例してメンタルモデルに直接影響を与える事例もあり見なくなっただから知らなくとも無理はない。というかうっかり

するとペルシカリアも忘れている可能性があるからな……むしろ私だけでも覚えていたのが奇跡のようなものだ」

「つまりあれか、そんな揃いも揃ってうっかり忘れてたような頼りねえシステムがリーダーの命綱だったのか？ あ、あ？」

「落ち着けMAG、忘れてたということは裏を返せば少なくともシステムの完成自体はとうの昔にしてあるはずだ。でなければこのMAD連中が放置などするものか」

『おっそうだな』

『その割に俺ら忘れ去られてる気がするんやけど』

『匙を投げられたの間違いやろ』

『KU→SA←』

「貴様ら少しは黙るといふことが出来んのか！」

目の前のド変態に殴りかかろうとしたMAGをXTRが諫める。その様子を彼女の周囲で所在なさげに漂う防盾の『声』がここぞとばかりに囁し立て、たまらずXTRは怒鳴りつけた。

その様子を見て眉間にしわを寄せながらMGKが問いかける。

「……それで、そのデバッグとやらはどれくらいで終わるんですか？

ことと場合によっては私も殴りますよ？」

「はっは、仮にも戦術人形になった私だが流石に総出でフルボッコにされてはなすすべもないのでな！ その問いには正直に答えよう！」

「はよ答えろスカタン」

「君は君でいつまで残っているつもりなんだリンクス!? ……ゲフン、まあいい。ではこの私、EN-17現所長、アリアンロッドIIアレサがその問いに対する答えを提示しよう！ 即ち——私にも分かんらん!!」

ガバゴシャキン。

ほとんど同時に事が起こったためはたから聞いていればそんな感じの雑音の集合体としか感じられなかっただろうが、事はこの様になっている。

ガッ！ と椅子を立ったMAGがアリアンロッドの胸ぐらをつかみ、

バゴン！ とそれを見たXTRが盾でMAGの頭を殴りつけ、
ゴシャン！ とよろけたMAGをMGLとP90が同時に蹴り飛ばし、

ゴキン！ とリンクスの鉄拳がアリアンロッドの後頭部にめり込んで鈍い音を立てた。

結果、MAGはイスやテーブルを巻き込みながらあらぬ方向へと吹っ飛び、アリアンロッドは頭を押さええてうずくまり半泣きになる。

「いったあ！ な、何をするリンクス！」

「何をするじゃねえこのアホ。なに自信満々に自分のバカさ露呈してんだぶっ殺すぞ」

「バカとは失礼な！ これでも私は学力には自信グイツタイ!? 二度もぶつたな！ 親父にだってぶたれたこと……いや普通にあつたな」

「やかましい。オラ詳細話せ、わからん一辺倒じゃ何も通じねえぞ」

「ハハ、それもそうか」

リンクスの手を借りてどうにか立ち上がり、アリアンロッドは半泣きのまま説明を続ける。

「……すまない、今のは言葉が悪かった。『ただ分からない』というよりは、『事例によって結果がバラバラ過ぎて予測が出来ない』と言うほうが正確だな。とにかくケースによってまちまちで、しかもことがそんな統計を出せるほど起こっていないというのもある。ダメ押しに、そのほとんどが現行のものよりも1世代は古い旧式人形のものばかりだ……これではとても予想が出来ん」

「いつつ……むしろ逆になんで現行の奴にも搭載されてんだよそんな旧式システム」

「もともと世代間の互換性もある程度考慮して構築されているからな、そのまま搭載しても問題ないプログラムもあったのさ。その内の一つが例のデバッガーというわけだな。……彼女が倒れてからどれくらい経つ？」

「……大雑把だけど、1ヶ月過ぎたくらいだと思う」

「ふうむ……そこまで来たならそろそろ目覚めてもいいとは思うんだがな……もとよりデバッグモードの起動において前提になっている

サーバーとの接続がない状態だ、むしろオフラインモードでも正常に起動してくれただけでも御の字か……？」

「分かりやすく結論を言え、結論を。オレはまあテメエの直属だから言ってる事は理解できるが、502の連中はその手のことに疎いのもちよいちよい混ざってんだからな。見ろよあのマシンガン馬鹿のアホ面、まるで馬だぜ」

「ぶっ殺すぞ全身緑化計画」

「ネーミングセンスがカツ飛び過ぎだろ、ウケる」

半ギレでMAGが返し、それを聞いてリンクスが笑う。

結局、今回の講義は『彼女の中で何かが起こるまではどうしようもない』という結論に達して終了した。

——その『何か』は、少しずつ彼女たちへと迫っている。

The Terror Stalks

——仮称不在防衛線^{ドールズディフェンスライン}、その倒壊した旧司令部の付近にて。

ザツ、ザツ、ザツ……と、無数の足が綺麗にそろった歩調で砂を踏み音が響く。その情報だけで考えれば、ただの統率のとれた軍隊か何かだと誰もが捉えるだろう。

だが、その集団の真の異常性はそこではない。

——同じ顔なのだ。全く持つて同じ顔が幾つも集まり、顔ごとに分かれて複数の集団となり、整然とした動きで銃を手に持ったまま侵攻を続けているのだ。

そして、その異常極まる集団のうちのいくつかを率いている女が、退屈な表情を浮かべながらこう言った。

「……まったく、いつになったら戦えるってんだ？ そろそろ嫌気が差して来るぜ、退屈で仕方がねえ。なあ、テメエらもそう思うだろう？」

『エルフェルトⅡヴァレンタイン、不適合の人形共を殲滅します』

「ああそうかい。テメエらは到着し次第好きに動け、俺はテメエらの動向には一切関知しねえ」

『エルフェルトⅡヴァレンタイン、不適合の人形共を殲滅します』

「……いや、他に何か言うことねえのか？」

『エルフェルトⅡヴァレンタイン、不適合の人形共を殲滅します』

「……マジでそれしか言わねえんだな、テメエら……まったく、見た目が良くても中身がコレじゃなあ」

「むしろ言葉を喋るだけマシだと思え『無頼人^{ルファイアン}』。こっちは誰一人何一つ喋らんぞ」

その言葉を耳にした男装の麗人がそう言って女——ルファイアンを諫める。

麗人の背後には、銀色のヘルメットを被った少女達が整然と並んでいた。誰も何も話すことなく、ただ前方を見据えて肅々と足を動かしている。

「んな事言われても一言一句違わず同じ言葉しか返してこねえんじや何も喋ってねえのと一緒だろうが、バカにしてんのか」

「まあ馬鹿にはしているでしょうね。だって実際に馬鹿なのですから」

「うおっ!？」

ぞぶっ! という生々しい音と共に大地に亀裂が走り、そこからコールドタルのような粘性の黒い液体が吹き出した。

無秩序に吹き上がっていたその液体は次の瞬間には一塊となり、冒瀆的な美しさを持った一人の女性を形作る。

その様子を見ながら、ルフィアンは眉をひそめて言った。

「……チツ、何かと思えば『影法師』^{ミラージユ}かよ。テメエじゃなけりやその顔面に1発ぶち込んでたところだぜ」

「ええ、貴方がそんな暴力的な性格であることなど知っています。だからこそやったのですし」

「要するにわざとつてことかテメエ!？」

反射的に拳を振りかぶるルフィアン。だが、ミラージユはそれでも加虐的な笑みを浮かべるだけだった。

しかしその表情を見て逆に冷静になったのか、ルフィアンは振り上げた腕を下ろす。

そして、拳を振るう代わりに腕組みをして問いかけた。

「……で、テメエの部下連中はどこに行きやがった？ まさか置き去りにしたとか言うんじゃねえだろうな」

「置き去りなんてまさか。彼らは貴重なリソースなのです——ちゃんと、丁寧に梱包して運んでいますよ」

梱包。そのワードを聞いたルフィアンは、察したような表情を浮かべた。可哀想に、彼女の部下はこの先何があろうと助かることは無いだろう。あるいは、未来永劫に続く苦しみ^{イソムニア}に苛まれるかもしれない。

「……らしくねえが、さすがに同情するぜ」

「むっ、失礼な」

「失礼でもなんでもねえよ、こいつあ正当な評価っつーんだ」

「……まあ、否定はしないかな。肯定材料しかないし、そもそも本人に自覚がないっていう点で救えないし……」

「何を言います『不眠家』!? 私はこんなにも優しいのに! 苦痛なき

死を、精神の消失を優しいと言わずしてなんといいですか！」

「オイ速攻で馬脚見せてんぞこのアホ」

ミラージュの言い分に、銀の髪の少女がさりげなく、しかし致命となる一撃を差し込んできた。その何処を見ているのか分からない目の下にはくつきりと隈が刻み込まれている。

ぎやいぎやいと言い争う二人を見ながら、ふと女は言う。

「……ま、こう言う自分のことを『優しい』とかなんとか評するような自称博愛主義者のオンボロから死んでくんだらうな？ 戦場ってなそういうもんだ」

ルフィアンが言い放った挑発的なその言葉を耳にして。

——ミラージュの顔から、一切の表情が抜け落ちた。

同じハイエンドモデル、それも『成功か失敗かでいえば成功だが、大成功か大失敗かでいえば致命的大失敗』と言わしめる二者が至近での睨み合い。

これには流石の低級汎用AIと言えども危機感を覚えたのか、これを制止するべく彼女たちの間に一体の自律人形——廉価版ハイエンドモデル『アナイレイター殲滅者』が割り込んだ。

『エルフェルトⅡヴァレンタイン、不適格な人形共を殲滅——!?!』

「邪魔だ」

「あーあー、かわいそうに……」

次の瞬間、哀れなウサギは頭を砕かれ、全身を切り刻まれてスクラップと果てた。

ガシャガシャと残骸が地面にばらまかれる。

そのまま両者はインファイトでの殺し合いを始めるかに思われたが——次の瞬間、彼女たちの周囲が一気に暗くなった。

天気が崩れて来たのか——そう思い上を見てみれば、しかし空は見事な快晴。では、暗さの原因は何処に？

それに気付いた両者がその場から大慌てで飛び退いた瞬間、ドズンツ！ と言う轟音と共に、先程まで彼女たちが立っていた場所を巨大な足が踏み抜いた。

「うおおッ!? くっそテメエちゃんと周り見て歩け——あ、ダメだこ

Dio santissimo misericordia demig

——落ちる。

——墮ちる。

——墜ちる。

元は地面だった瓦礫と共に風を切りながら落下していく。

やがて、四方を上へと流れていく岩壁に覆われていた視界が一気に開けた。……暗闇に覆われたという点では、逆に閉ざされたと表現しても大して変わりはないが。

荒野のすぐ下に広がっていたのは、巨大な洞窟。辛うじて視認できる滑らかな壁面や時折見つかる鍾乳石などを見る限り、おそらく天然ものだろう。しかしこの暗さとは言え最下部にあるであろう地面が視認できないとは、この洞窟はどれだけ広いのか。

私が空けた大穴から差し込む光だけを光源として、私達は降下していく。しかしこれだけでは標的を探すのには明らかに不資格だ。

「ブランク、^{チエック} 捜査！」

『くっそうなりやヤケだヤケ！ スーパー通り越してハイパーまかせロリ状態になった俺をなめるんじゃねえぞ!!』

「ハイパーもスーパーもそもそもまかせロリ状態が初耳だけ?!」

『今適当に言ったただけだ気にすんな！ そらブチかませMDR!』

「いや私イ!? いいよやるけどさあ!」

バツ! と同じく落下中だったMDRが上着の前を開け、服の内側を露わにする。するとどうやって見た目のラインを誤魔化していたのか、大量に作られた上着の内ポケットにはたっぷりの電子機器や申し訳程度のサブアームが格納されていた。あれだけ詰め込めば確実に外から見えそうなものなだけ……人形義体の神秘だ。

そして彼女が取り出したのは、中折れ式の単発グレネードランチャー。そこに黄色くラインが引かれた弾頭を詰め込むと、斜め上へと向けて発砲した。

風切り音に紛れてぼん、と気の抜けた音が耳に届く。

数瞬遅れて、照明弾がまばゆい光を放って辺りを照らしあげた。

そこにあつたのは……

「——これは!?!」

そこにあつたのは、四本足の巨大な複合空母とでも言うべき威容。

その巨軀はあちこちに損傷や劣化の形跡が見られ、相当使い込まれているのか、あるいは相当の旧式かという2択のイメージを見るものに抱かせる。が、しかしそれでもその圧倒的なサイズはそれらの印象を打ち消すに余りあるだろう。

それを視認したブランクが、風切り音にも負けない大声で言う。

『見えたぜ——あれが今回の標的! 今回相手にするテロリスト共の巣窟!』

『自律移動式大型拠点「マザーズ・ドウエリング」!!』

その言葉と同時。

ヴィーツヴィーツ!! というサイレン音が辺りに響き渡り、バンツ

!! と目の前で巨大拠点——マザーズ・ドウエリングが窓という窓から赤い光を放ち始めた。それが意味するものは極めて明白——即ち、緊急事態だ。

巨大な機体のあちこちでサーチライトが起動したと思えば、それらはまっすぐにこちらを捕捉し照射した。

……まあ、そりゃあんな大きな爆発音鳴らしながらエントリーすればバレルか。

ともあれ、あそこまででかい凶体だ、こんな閉所じゃ武装一つ動かすことすらままならないだろう——それはうっかりすれば自身の存在がそのまま露見しかねない悪手だ、おいそれと出来るはずが——

『やべえぞ目に見える砲塔が全部こっちに旋回しようとしてやがる!!』

本当に何考えてんだマジで!?!』

——なかつたはずんだけど。

どうやら向こうとしてももうなりふり構ってられないのか、最短

最速でこちらの存在を消しに来たというわけだ。そうまでしてでも存在を隠蔽したいのか、単純に気が動転しているのか。

まあ、どのみちやることは一つだ。

「ブランク、MDR！——適当な甲板に飛び乗るわよ！」

『いやそれマジで言ってる!?!』

何か文句を言われたような気がしたが、私の音声センサには何の口グもないということにしておこう。

勢いを維持したまま、私達は敵地へと乗り込んでいった。

■ ■ ■

さて、実りのない……というか身もふたもない？ 講義を終えて。

——その知らせは突然やってきた。

『緊急！ 緊急!! 作戦参謀、指揮官、人形小隊長……ああもう面倒くさい、ともかく参謀部および部隊を率いる立場にいる者は大至急ブリーフィングルームに集合せよ!』

ザザツ、とノイズが入ったかと思えば、スピーカーが勢いよくがなり立ててきた。

それを聞いたMAG達は首を傾げて、

「……今度はなんだ？」

「厄介事でしょ」

「んなこた声の調子で分かるつつの。なんでそんな厄介事になってんのかって話だ」

「しーらない。ほら、とにかく行ってきなよ小隊長代理」

「げっ、そういうやそんな事言ってたなりーダー……マジで？ あたし行くの？」

「そうでしょ」

「今からでもお前に押し付けたり出来ねえかな……小隊長代理代理的
な」

「代理の代理って出来るんですかね……？」

「いや無理だろう、常識的に考えて」

『せやな』

「オーマイファック!!」

たまらず悪態をつくMAG。

しかし一応他ならぬI10BAにそれを任されたという責任感もある程度はあるのか、ぶちぶちと文句を言いながらも一人でブリーフィングルームへと向かっていった。

さて、3分も施設内を歩けばすぐそこには目的地。

扉に手をかけ、迷うことなく開ける。

「はいどうもー、502小隊小隊長代理のFN MAGだぜーっと……いや何だこの空気」

中に入ると、薄暗い部屋の中で集待った誰もかれもが静かに頭を抱えていた。ヘリアンはその限りではなかったが……その顔色は紙のように白く、眼を閉じて悟ったような笑みを浮かべ、ダメ押しに口の端から血が垂れていた。よく見れば全身が小刻みに震えているし、その手には紫色の胃袋型のマークがシールされた明らかに危険物の香りがするプラスチックボトルが握られている。

なんか誰に話しかけてもまともな応答が得られそうになかったため、MAGはプロジェクターによってスクリーンに投影された情報からある程度の状況を類推した。

「……なるほど、遂にあちらさんがカチコミかけてきたか。ほうほう、未知の大型ハイエンドモデル『アグリゲイター集合体』なあ……うん」

これだいぶキツくね？

何の気なしにMAGがそうつぶやくと、頭を抱えていた集団の何人かがそのまま崩れ落ちた。

ヘリアンは相変わらず今にも死にそうな風体でMAGに抗議する。

「お前な……分かっていてもそういうのは言わないものだぞ……」

「いや、こればかりは明確にしねえと駄目だろ。これどうすんだ、SMG連中とRF連中……とにかく射程か回避に自信のある連中限界までかき集めればどうにかなるもんなのか？」

そう問いかけると、ヘリアンはこう答えた。

「……現状この周囲に控えている人形を限界まで徴兵しても数が足りない、と言うのが実情だ。一定の範囲内にある基地には救援を要請しているが……間に合うかどうかは、正直賭けだな」

「正規軍連中は無理そうか？ どうせこの事態は把握してんだろ、アイツらがアホみたいに保有してるトンデモ兵器の一つでも借りれりゃ御の字だろ」

「……逆に聞くが、頼れると思うか？ アイツらを」

「すまん今の発言は忘れてくれ。浅慮だった」

「そうするさ……」

さてどうするのが最善手か、と首をひねるMAG。無理もない、いくら歴戦のマシンガンキチと言えどもこの規模の防衛戦は彼女も未経験だ。これを一人で考えるのは厳しい物があるだろう。

こうしている間にも、着々と鉄血の軍勢は侵攻を続けている。侵攻経路から推測するに、どうやら他の基地には目もくれず、電撃戦気味にトップを叩くつもりらしい。各地に建てられた基地を含めれば莫大な規模になるとは言えど、上層部が壊滅すれば混乱は免れないだろう。そこを潰すつもりか。

——決戦の時が、すぐそこまで迫ってきていた。

Turnout to Mayhem

だん！ だんっ！ と連続して地面、もとい甲板に着地する。

少しばかり勢いが強すぎた気もするが、そこは気合の回転受け身でカバーした。

「着地成功……！ そっちは！」

『……これが大丈夫に見えるか？』

「とりあえず私は大丈夫かな」

うん？ と後ろを見てみれば、ブランクを足蹴にする形でMDRが立ってしていた。どうやら着地したブランクを位置関係の問題で背後から蹴り飛ばしてしまったらしい。とりあえず、そもそも甲板に辿り着けずに地面でぐしゃりなんてことにはならず済んでよかったと考えるべきか。

倒れているブランクの腕を引っ張って無理やり起こし、移動基地への侵入を試みる。

……どうしてだろうか。この施設を明確に視認してから、妙な焦燥が止まらない。

「ほら、早く行くわよ」

『お、おう。……そろそろか』

「？ 何か言った？」

『いいや、なんでもねえさ』

妙に思わせぶりの言動に首を傾げるが、そんな事を気にしている場合ではないと私の中で何か執拗にせっついてくる。

その焦りに引っ張られるように、私は甲板脇に併設された小型のエレベーターホールの鉄扉を乱暴に蹴破った。

「……エレベーターは使わない方がいいかもしれないわね」

『まあそりゃあな。此処から乗り込むところもすっかり見られてんだ、馬鹿正直にエレベーターなんぞ乗ったらバケツごと爆破されるのがオチだろ』

「……となれば」

私が目をつけたのはその横、分かりやすい場所に併設された螺旋階

段。

開いた状態で固定されたその扉には、『人的密度に左右されない屋内戦闘のために分散昇降を心掛けよう』と書かれた張り紙がされてあった。なかなかどうしてリアクションに困る。

まあ実際人口密度が高いとその分だけ武器の取り回しも難しくなるし、そもそも機動力が低下してしまう。そこに手榴弾でも投げ込まれたら一巻の終わりだ。

「まあ、リスクが低い方を選ばない道はないわね」

「うへえ、こんな大型機の中を階段で走り回るのかあ……今から気が滅入るよ」

『ああ、同感だ。明日は筋肉痛だぜ』

「明日までに終わるのかしらね」

私がそう言うと、彼らはどこか悲しげな表情を浮かべ、こうつぶやいた。

『終わるさ、何が起きようとな』

「うん、とても残念なことだね」

それが何を意味しているのかはいまいち分からないが。

きつと、この先には私の未来を決定づけた『何か』があるのだろうということが、確証のない直感でだが感じ取れた。

私はそれ以上何も聞かず、110相B棒Aを構えて階その階段を降り始める。

最初の方は一段一段踏みしめるように歩いていたが、その歩調は少しずつ早まっていき、早歩きで降りはじめ、駆け下り始め、ついには段飛ばしで勢いよく駆け下りていた。

無意識のうちに、私の口からある言葉が漏れる。

「待ってなさいよ……指揮官……ッ!!」

その時、位置関係と視線の都合で私は気付いていなかったが。

ブランクとMDRはその言葉を聞いて顔を見合わせ、やはり悲しそうに笑うのみだった。

■ ■ ■

「準備急げ！ 事ここに至っては時間はいくらあっても足りん、全速

力だ!!」

ヘリアンの怒号が響く。

現在、G & a m p ; K 本社およびその周辺地区では
コードレッド・エマージェンシー
第一級非常事態宣言が発令されていた。それに伴い、それらの地区では総力を挙げて防御体勢が構築され始めている。

重機や人員が総動員され、急ピッチで防衛陣地が各所に作られ、今や本社地区は臨時の急ごしらえとはいえ九龍城砦もかくやと言った様相を呈していた。

人形・人間を問わず駆り出されているため、現状リーダーが不在の502小隊もまた全力で助力していた。特にXTRの浮遊盾は資材の上下運搬に、MGLの電子制御処理能力は重機の運転に使う人員の削減に重宝されている。

そんな中で、建材に使う鉄筋を担いで超特急で辺りを駆けずり回っていたP90がヘリアンを発見した。というか、またしても頭を抱えて陰鬱なオーラを漂わせていたので、明らかにその周囲だけ人がいなくてよく目立っていた。

「……今度はどうしたのさへファイストス？」

「誰が鍛冶神だ誰が……。想定の数倍人員が足りなくてな、困っている」

「具体的には？」

「現状確約できた増援こそ多いが、ネームドなのは1個小隊だけだ」

「うーんダメかも」

「なおかつ人員も貴様らに負けず劣らずのイレギュラーだ」

「いやダメじゃないかも」

「そしてその小隊の隊員にバルカンが混ざっている」

「なんか行ける気がしてきた」

「本社に備蓄している資材にアレを十全に運用できるような余裕はないとこいつこいつ」

「と思ったけどそんな事はなかった」

「一応資材面での救援も求めているが……。間に合うか……」

「……間に合わないと普通に負けるだろうし、間に合わせるしかない

んじゃない?」

「そのつもりだ。念のためにIOPに重装部隊の増援も要請した」

「重装部隊?」

「一体なんぞや、と首を傾げるP90。」

それを見てヘリアンは半ば現実逃避気味に説明を始めた。まあ、どれだけ処理しても一向に低くなる気配のない書類の高層マンションが目の前に何棟も築かれている状況だ……現実逃避の一つでもしたくなるだろう。

「大雑把に説明すると単騎での運用が難しい兵器を取り扱うための部隊だ。対戦車兵器、迫撃砲、擲弾投射器……それらを用いて火力支援を行う事を主目的としている」

「ほうほう」

「元は偏向障壁……パラデウスとかいう連中が持ち出してきたシールド技術に対抗するために大急ぎで研究していたものようだが、状況が状況だ。幸い向こうの戦況は現状そこまで深刻ではないようだからな、いくつか此方でピックアップさせてもらった」

「……つまり、その偏向障壁とかいう謎テクを鉄血連中が持つてるってこと?」

「確証はない。だが、可能性はゼロとは言えない」

マジかあ、と天を仰ぐ。偏向障壁とやらが具体的にどのような効力を持つシステムかは不明だが、こちらでいう所のフォースシールドなどと概ね同じとみていいだろう。それを? 鉄血が持つている?

……悪い冗談だ。

「また厄介なことになってるなあ」

「今に始まった事ではないだろうさ。全く、どうして貴様らは厄介事しか持ち込んでこない」

「えっボクらの所為になるのこれ!? 外患誘致!」

「行ってみただけだ、気にするな」

「いや気にするよ……」

もしも一連の事件の原因の大元が502にあるとすれば、事後に弾劾裁判的なものが待っていてもおかしくない。あれ、そういえば帰還

途中で露骨に怪しいハイエンドと接敵してたような……。

その辺りでP90は考えるのをやめた。これ多分掘り下げてもろくなことにならないし誰も幸せにならない奴だ。

P90が静かに頭を悩ませていると、そこに新手がやってきた。

「はっは！ 久しぶりだなヘリアントス、私が来たぞ！」

「げえっ!? 貴様はアリアンロッドIIアレサ!? コーラップス弾頭を起動させてELIDや正規軍を道連れに自爆したはずではなかったのか!？」

「なんだその末路は!? 張本人の私ですら初耳だぞ!？」

「噂に尾ひれがつきすぎて芭蕉扇みたいになつてんじゃねえか、ウケる」

やってきたのは、戦術人形AR-57……もとい変態研究者集団E_NI₇17Labの所長アリアンロッド。そして、その直属の部下であるGM6リンクスだった。

そしてリンクスが懐から端末を取り出すと、液晶部分をこちらに向けた。すると、

『どーも。私もいるよ』

その画面に表示されたのは変態じゃない方の研究者集団、もとい16Labに所属するペルシカリア。なんとまあ、ヤバい奴とその部下と凄い奴の3人がそろい踏みした豪華な救援だ。

「わお、こりやまた色んな意味ですごい面子だ。で、何の御用で?」

「はっは、そんなもの決まっているだろうベリースモールリトルキュートガール！」

「はっ倒すぞド変態」

「うーん手厳しいっ! ——とまあじゃれあいはさて置いてだ。鉄血の進行を食い止めに来たのだよ」

「……2人で?」

「2人でだ!」

「いや無理じゃない?」

「任せたまえ、私にいい考えがある!」

自信満々にそう言い切るアリアンロッド。それを聞いて、その場に

いたほかの面々は——リンクスでさえも——非常に苦い顔をした。さもありません、このド変態の自信満々とか厄ネタ以外の何物でもない。

だが、彼女はそのさらに斜め上を行った。

「いいか、私の考えはこうだ。まずは——……」

それを聞いた4人は最初は疑わし気に、しかし途中からなるほどと感嘆し、しばらくするとうん？ と首を傾げ、最終的には胡散臭い物を見るような表情になっていた。

簡潔に言おう。

——それはどうしようもないほど非現実的というものではないが、しかし最終的にP90までもがかってない程に真剣な顔つきで正気を疑うレベルでぶっ飛んだ計画だった。以前リンクスが自信満々に『働き方改革』のプランを語った時のそれに通ずるものを感じる。まさかとは思うが、ぶっ飛んだ作戦立案は17Labの中では定石だともいえるのか？

そして、説明を終えた彼女に対して、代表してヘリアンが言う。

「——というわけだ！うまくいけば、これだけで相当な時間を稼げるぞ！」

「貴様、もしかしくともただの馬鹿だな？」

「なにおう!?!」

鉄血戦線

D o l l ' s D e f e n s e L i n e | O
u t p o s t

ヘリアン達が集まる少し前のこと。

……ヘリや運送車両で続々と近隣の基地から人員や資材が送られてくる。現状でも通常の戦闘だけなら向こう半年は持つような物量だが、しかし鉄血工造との事実上の決戦ともなればいささか不足感が否めない。

「さて、間に合うかな？」

そんな事を呟きながらコーヒを飲んでいるのは、16Labの研究者ペルシカリア。事態の発覚当時、彼女は戦術人形本体の研究に一旦区切りをつけて次は何をやるうかと考えていたところだった。そこへこの一報が入り、否応なしにその他の予定を一切切キャンセルしてとりあえず仕上げて放置していた重装部隊へとシフトすることになったのだ。

「まあパラデウスの方は現状比較のおとなしいからね……この機に乗じて攻め込んでくるみたいなことでもない限りは、まあ大丈夫だろう」

「はっは！ やあペルシカ、私が来たぞ!!」

言った矢先にバアン!! と勢いよく扉が開かれた。ペルシカは驚きのあまりコーヒを吹き、着ていた白衣の一部が茶色く染まる。

何事かとそちらを見てみれば、すっかり複数の意味で恥を知らない容姿になってしまったアリアンロッドがこちらを見ながらひらひらと手を振っている。

「……全く誰かと思えば、君かアリアンロッド。仕事はいいのかい？」
「その辺りは優秀な部下がいるからな！ 全員一緒に寝て……ゲフン、心を込めてお話すれば快く首を縦に振ってくれたとも！」

「誤魔化しきれてないぞド変態」

「照れるぜっ！」

「褒めてない」

このバカはあろうことか自分の部下に対して枕営業を仕掛けたらしい。コイツに一般的な倫理観とか常識とかそういうものは備わっていないのか？

というか17 Labって暗部のわりに比較的大規模な組織だった気がするんだが、まさか……。

「……一応聞くけど、何人？」

「正確に言えばエリスロポエチン君には逃げられたから全員ではないな。だがそれでもまあ、100人は行くと思うぞ」

「頭おかしいんじゃないの？」

「照れるぜっ！」

「だから褒めてない」

「さて、では本題に入ろうか」

「うわあ急に落ち着くな！」

スン、といきなり素面に戻ったアリアンロッドに思わずペルシカが言う。ついでにどこからともなく俺の名前はエリアスだ、という叫びが聞こえた気がしたが、まあ幻聴だろうと頭の中で処理した。

さて、それで結局コイツは何の用で16 Labに乗り込んできたというのか。

「それでだ。パラデウス、と言う連中が確かいたな？」

「……まあ、いるけど」

「私に考えがあるんだがな、この体だけでは現状火力も機動力も耐久力も何もかもが足りん。それでも人間体だった時よりも肉体的性能ははるかに向上しているんだがな」

「何が言いたいのか？」

「パラデウスが所有する兵器の残骸。おそらく貴様なら既にいくつか調達していることだろう？ それが欲しい。出来る限り大型で耐久性がありそうなものならばなおよしだ」

何を言いだすかと思えば、コイツは本当に何を言いだした。なんか何を考えているのかは薄々わかってきたが、正気なのか？

ただ、とペルシカは考える。丁度、パラデウスが運用していた兵器

や人形の残骸をいくつか接收して解析し終えたところだ。

実地試験での検証を名目にアリアンロッドに適当に押し付けておけば、スクラップの処理と実際の運用データなども得られて一石二鳥なのでは？

「ああ、あるとも……それも飛び切りのがね。戦場で破壊されたスクラップ品をさらに分解やらなんやらしまくったせいで状態は劣悪に近いけど、それでよければいくつか工面するよ」

「それはいい！ 破損はしていても構わない、その辺りはこつちで面倒を見るさ。なんなら側さえ残っていれば内部構造は好きに組むさ」
「それはもう素直に新造したほうが早いんじゃないのかい……？」

言いながら、ペルシカは部屋を出る。アリアンロッドもそれにぱたぱたとせわしなく付いていき、はたから見ていけばまるで親子連れか何かの様だった。内実は大きく異なるどころか、普通にアリアンロッドの方が一回り年上なのだが。

エレベーターに乗り込み、行き先の階を指定する。ほどなくしてエレベーターは動き始め、すぐに目的の階へと到達した。

扉が開くと、そこは真っ暗闇。だがペルシカは特に焦ることもなく、エレベーターの扉脇に設けられた照明のスイッチを入れる。

少し間を置いて、ガンガンガン！ と次々に高めに設定された天井の水銀灯が強烈な光を放ち始めた。

それが照らしあげた先にあったのは、

「おお、これが……」

「パラデウスが所有・運用していた兵器。解析した内部システムから判明した情報だけど、名前は右から順番に『銃兵隊』ストレリツィ『剣兵』ロデレロ『軽騎兵』ウーラン……そして『前衛兵』ドッペルゾルドナー」

破壊された兵器の残骸が整然と並べていた。パラデウスの首魁の方針なのか趣味嗜好の問題なのか、白を基調としたデザインの外装が目立つ。

その中でも、アリアンロッドはウーランとドッペルゾルドナーに興味を示したようだ。駆け寄り、装甲をぺたぺたと触りながら検分している。

「なるほど、命ドッペルソルトナーより金が重い者の名を冠するだけあって装甲厚に重点を置いた構成をしているな。その割には脚部の出力やアクチユエータが心許ないが、背面や腕部のラッチを見るに火力で機動力をカバーするつもりだったか？ 本来は侵攻に使うものではなく局地防衛型に近かったのかね。——ペルシカ！ こいつに光学兵器の類は搭載されていたか？」

「いや、そんな話は聞いていないね。むしろそれを積んでいたのはそつちに置いてあるロデレロの方だったそうだし」

「ふむ。普通なら弾薬に依存しないでいい光学兵器の類を一つくらいは積んでおくものだが……となると、元は何か別の用途だったものを接収したか転用した可能性があるな。となると、元は土木作業用に近かったのか？ それならば機動力も要らないし、腕部ユニットの換装だけである程度幅広い対応が行える。逆に新造したのはロデレロの方か。既存のレイアウトからは大きくかけ離れているからな……というか、この構成はいつだったか風の噂で聞いた『低濃度崩壊液感染者機械兵化案』に似ているか……？ つまり、こっちの一見してただの外部ユニットに見えるバックパック部分が本体の可能性もある訳か。中身の人型部分は生体ユニット、と言うかジェネレーターに近い役割を担っていたのか？ 容姿を人に寄せていれば場合によっては多少なりとも相手の忌避感を誘い出すこともできるだろうし、運用の上での汎用性も大きく向上するからな……。それでウーランだが、これはもしかや正規軍の旧式戦車か？ この履帯部分の構造は見覚えがあるぞ。確かテュポーンの前身の……なんだったか、タルタロス？ がこんな構造をしていた気がするな。結局耐荷重と走破性に難があったせいで現行のテュポーンに差し替えられたらしいが……まあ、轆くのがELID相手ではなく戦術人形の1個小隊程度であればこの程度でも支障はないか。というか、この時代は俯角も問題なかったんだな……どうしてあんなった。うーん……」

「そろそろいいかい？」

アリアンロッドが長考モードに入ってしまったため、ペルシカが声をかけて元の世界に引き戻す。アリアンはその声を聴いて「おお！」

と彼女の方を向き、

「……まあ、ここにあるのはだいたい解析も終わったからね。好きに扱ってくれて構わないよ」

「恩に着るぞペルシカ！ さあ、目指せSOPMODジャイアントだ！ はっは、わが胸の内少年心がほとばしる!!」

「ちよつと待て君何をしようとしてる?」

焦ったようなその問いかけに、稀代の大天才にして大変態、アリアンロッドIIアレサはウインクしながらこう答えた。

「決まっているだろう? ——とびっきりのサプライズだ!」

Doll's Defense Line — O
utpost II

所変わって、ここはとある基地。

そこでは、ある指揮官が人形たちに追い掛け回されていた。指揮官が仕事から逃げたのか？ いや違う、逃げているのは仕事からではない——

「なんで逃げんだ大将！ 俺だ、試製三式だ！」

「んなこと百も承知だボケナス！ 俺が逃げてんのはテメエが分かりやすく血塗れで生首と返り血付きの武器まで持ったスリーアウト仕様だから決まってるだろどうかしろそれエ!!」

——嬉々とした表情で自身を追いかけ回してくる第一級危険人形からだ。

彼女の名前は試製三式軽機関銃……その名の通り今はなき大日本帝国が生み出した最初にして最後の『汎用機関銃』とされているけど別段名の知れている訳でもない銃が元となっている。

古今東西マシンガンと言うのは後方から銃案をばら撒いて火力支援を行うことが主目的のはずなのだが、開発元の常軌を逸した変態性ゆえか旧帝国陸軍の消せども尽きぬ執念の賜物か——コイツは見ての通り銃撃戦よりも接近戦を好む異端と化していた。

で、そんな悩みの種な試製三式は今、ハイエンドの生首を片手に大槍拵んで肩に銃を担いで自分の指揮官を追いかけてまわしている。

「そーんなつれねえこと言うなって——！ 俺と大将の仲だろ！ な——！」

「お前とそんな深い仲になった覚えは欠片もないわけだが!？」

今の発言から察するに恐らく本人に悪気の種類はこれっぽっちもないのだと思われるが……なんというか、『ブレーキの壊れた忠犬』という表現が見事に適切な有様だった。

そして、こういう時に限って数少ないブレーキ役である三八式歩兵銃が不在となっている。というかコイツがいると必ずと言っていい

ほど厄介事が起きるから、二人まとめて後方支援へと放り出したはずなのだ。その筈が、何故かコイツは生首片手に指揮官へと迫っている。もしかしなくても三八式は道中に置き去りだろう。

全く、どうしてこうなった？

「大変じゃ！ 指揮官、緊急の通達じゃぞ！」

「へばらっ!？」

噂をすればなんとやら——バァン！ と扉が勢いよく開かれたと思えば、試製三式を弾き飛ばす形で三八式が飛び込んできた。なんだ、今度は一体何が起こった。

見れば、三八式は青い顔で手に分かりやすく時代錯誤なパンチカードを握っていた。そしてそれを指揮官の方に差し出して、

「これを、これを見てたもう！」

「いや読めるかア！ 機械通さずにそれが解読できるのはこの基地じゃお前だけだっつーの！」

「おおそうか。儂としたことがうっかり」

「いつつつ……ついに電腦に方が来たか妖怪ババア……」

「あ、あん？」

「ナンデモゴザイマセン」

ダウンした状態から起き上がりつつあった試製三式の心無い一言に、三八式の毛がにわか逆立つ。地雷を踏んだと即座に察知した試製三式は即座に発言を撤回した——彼女は年のせいで自分が役立たずになったと思われることをとんでもなく嫌うのだ。実際今この基地で働いている指揮官よりもここで働いている時間は長いし、定期的にメンテナランスに通っているとはいえいつガタが来てもおかしくはないのだが。

さて、一連の流れはさて置いて、指揮官は実際の内容を確認すべく司令室へと戻った。試製三式は風呂に叩き込まれ、本基地におけるお目付け役②兼執行人であるDSRの手によって丸洗いされている。時折無線で甘い声が聞こえてくるのはきつと気のせいだろう、そうに

違いない。

それはさておき

閑話休題。

実際に自分で通信ログを確認してみたところ、その内容はあまりに常軌を逸したものだだった。

「……鉄血工造の大攻勢。おまけに未知のハイエンドが多数確認された、か……」

「正直かなりまずい状況じゃぞ。ここはあ奴らが通る推定侵攻ルートのおすぐ真横に位置している——なんの対策も講じなければ、道中につまみ食い感覚で蹂躪されるのがオチじゃ」

「そんなこと分かってる……が、しかしなあ……」

「あるいは、むしろが死ぬ気で突撃すれば多少の足止めは出来るかもしれないがの。それとも籠城戦か？ ……どのみちこの基地の戦力では半日と持たぬだろうし、さすれば待っているのは必然的に無辜の民の虐殺じゃて」

……正直言つて、この基地は戦力があまりに足りない。

曲がりなりにも前線に近い場所に位置しているため、それ相応の軍備はあつてもいいはずだったのだが……不在防衛線が機能していた時、つまり『働き方改革』が行われていた時は、地区周りが比較的平和だったことにかこつけて製造しても維持できるだけの資源供給がなかったのだ。改革が行われ、中引きしていた資材の類を密かに私物化していた上層部が軒並み魂を解放された今では一般的なそれよりも多い量が運び込まれてきているが……それでも、現状鉄血工造の攻勢を食い止めるには大きく不足していた。

「……どうするのじゃ、指揮官。決断するときじゃぞ。華々しく戦場で散るか、逃げ出して守り抜くか」

「だが、どうする……？」

「儂は何も言わんよ。外野からはどうとでもいえる……お主が後悔しない選択をするがよいさ」

そうか、と短く答えて、指揮官は椅子に座って腕を組んだまま俯いた。

そして、次の瞬間には顔をあげる。その表情は決意で満たされていた。

壁に掛けられていた電話機からひったくるように受話器を取り外

し、がなり立てる。

「総員傾注!! 本日この時を以て当地区は非常事態宣言を発令する！
全ての設備を放棄し、民間人を連れて速やかに本社へと避難せよ
!!」

彼は、特攻して散るといふ華々しい最期よりも——上に立つ者の義務として、たとえ後ろ指差されようとも民間人を護ることを是とした。

それを聞いて、三八式は嬉しそうにうなづく。背後から飛びつき抱きついて指揮官の頭を撫でまわしながら、

「——よくぞ言ったぞ小僧！ それでこそ儂の指揮官じゃ！」

「うわわっ、急に抱きつくくな！ 暑苦しい！」

「ははは、よいではないかよいではないか——！」

「離せつての！ 他の奴らに見られたらどうする！」

「そうですね、見られたらとっても大変です」

「安心せい、ここには儂とお主の二人しか——うん？」

なんか、今。

しれっと第三者の声が聞こえなかったか？

ぎぎぎぎぎぎ、と二人そろってぎこちない動きで扉の方を見る。

先ほどまでしつかり閉じられていたはずの扉はいつの間にか半開きになっていて——そこから、頼れる我らがメイド長ことG36が絶対零度の視線をこちらに向けていた。

ぴしり、と二人の体が凍り付いたかのように固まり。

そして、指揮官が恐る恐る口を開く。

「……いや、その、ちやうんすよ」

「ほう。では何が違うのか、早とちりをしてしまったこの私めに懇切丁寧の説明して頂けないでしょうか？ 今、この場で」

「すんませんっしたあ!!!」

「ちよっお主待て、ちゅわあっ!?!」

即座に土下座の体勢に入る指揮官。彼の体に抱き着いていた三八式はそれに引っ張られ、あらぬ方向へと投げ飛ばされる形となった。

そんな様子を冷やかな目で見ながらG36はするすると執務室

の中に入り込み、後ろ手に扉を閉め、ご丁寧にしっかりと鍵までかける。

そして、ここぞとばかりにただでさえ近眼によって悪い目つきをさらに鋭くさせて、

「——二人ともそこに直りなさいッ!!」

「はい只今!!」

基地にメイドの怒号がこだまする。

それを聞きつけた人形やスタッフたちは執務室からそそくさと距離をとり、自身の職務に忠実に励んだ。

それが理由かどうかは不明だが、その地区の避難誘導は想定よりもはるかに早く完遂されたという。

「おおー、壮観だなこりゃ」

大量にやってくるヘリや車両を見ながらMAGがこぼした。

彼女はその手にスコップを持っており、背後には一直線に堀のよう
なものが築かれている。

「つたく、こんなご時世にもなつてざんごうぐらしかよ。いつからこ
の世界は戦時中に逆戻りしちまったんだ？ ああ？」

「いや、人の事は言えないが大戦の経験は貴様にはないだろう」

その言葉を聞いたXTRが重箱の隅をつつく。彼女もスコップを
肩に担いでおり、何をしていたかは明白だろう。

ザクツとスコップの先端を地面に突き刺しながらMAGがそれに
答えた。

「記憶はなくとも記録はあるんだよ。ほとんど直近の出来事だから
な、その辺の資料室漁ればわんさか出てくるっての」

「貴様がマシンガンの資料を読み込む以外の理由で資料室を利用する
とは思えんのだがな……」

「ハッ、その辺りは心配いらねえ。とつくの昔にコンプしてるぜ」

「そ、そうか……（私の記憶が正しければ並の戦術人形でもすべて読む
のに年単位で時間がかかる量だったはずだが……??）」

自信満々で言い切るMAGに対し、XTRが首をかしげる。

だが、当の本人はそんな事知った事ではないと作業を再開した。

「おらお前も急げよ。例のガラクタ連中が来る前に一通り掘らなきゃ
なんねえんだからな」

「効果があるかどうかはかなり疑問符なのだがな……本当に意味ある
のか、これ？」

「塹壕戦なんざやった事ねえから知らん。まあ、準備砲撃とかで土地
ごと耕されねえ限りはある程度効果あるんじゃないやねえの？」

「そんなものか」

「そんなもんだろ」

ははははは、と顔を見合わせて笑う。どう考えても食い合わせの悪そうな二人組だが、意外と馬は合うようだった。

と、そんな彼女たちの前に一台の車両が停止した。

……うん？ と首を傾げる二人。

車両の幌部分にはE・A・というロゴが書かれていた。二人が傾げる首の角度がますます深くなる。

首を傾げながら、二人はひそひそと話し合う。

「……なあ、なんか心当たりあるか？ あたしはない」

「奇遇だな、私もだ。なんだ、脱税の証拠でも見つかったか貴様？」

「やってねえわ！ なんなら金を使ってねえし持ってねえわ！」

「あつ……それは失礼した」

「オイ売られた喧嘩は買うぞ？ あ？ あ？」

「マシニングガン風情が私に喧嘩を売るか？ ん？」

自律稼働型複合浮遊装甲の方に演算は割いているがそれでも貴様一人を締め落とすくらいなら釣りがくるくらいのスペックは保持しているぞ？」

訂正、どうやら馬は合いそうにない。

険悪な雰囲気を漂わせる二人。もしもこの場に靈感を持つ、というか場の空気を読むのに長けた人物がいれば、二人の間で散るアーク溶接さながらの火花がばつちりと見えていただろう。

そんな二人はさておいて、車の後部……通常の民生車両であれば荷台とかトランクがある部位から、ひよつこりと誰かが顔を覗かせた。

「よお！ 覚えてるかどうかは知らねえが16Labで会った時以来か？」

目の前の彼女——金髪ロングでオッドアイの少女が言い、それを聞いてMAGが「……？」と首を傾げる。その横でXTRはこの上なく苦い顔をした。

彼女の脳裏によぎるは忌まわしき大惨事。メンテナンス時の不手際によってメンタルモデルの性質がそろいもそろって反転するとうう、なんとも気の抜けた小さなバカ騒ぎ。

そこに混ざり込んで事態をよりややこしくしたのが目の前の彼女
……『M61A2 “バルカン”』なのだ。
で、

「おいおい、あの騒ぎの事は記憶にない感じか？」

「アレの話をするんじやねえ自決するぞコラ」

「お、おう……」

「……んで、誰だテメエ？　なんかどつかで見たことあるような気は
するが……」

「おいおい釣れないねえ、いつかの結婚式の時にお互い顔くらいは見
てるだろ？」

「……おお!!」

それを聞いて、我が意を得たりといった調子でポンと手を叩くMAG。それに対して、バルカンは荷台から銃本体……実銃の方のバルカンを引っ張り出してウインクした。

「なるほどテメエかバルカン！　こうして顔突き合わせて話すのは初めてだったか？」

「ああ、そのはずだぜ」

「いや、MAG貴様、塹壕掘りはどうした。立ち話もいいが間に合わなくなるぞ」

「んじや早速で悪いが質問だ」

「いいぜ、来いよ！」

「いや人の話を聞かんか!？」

「その心意気やよし！　あたしが訊きたいことは一つ、たった一つのシンプルな問いかけだ。——即ち、」

銃撃戦において最も重要視されるもの、それはなんだ？

MAGの問いかけに、バルカンはパチパチと何度か瞬きする。そして、ニヤリと笑みを浮かべてこう答えた。

「おいおい、馬鹿にしてんのか？　私が言える答えは……たったひとつだぜ……MAG……そう、たったひとつの単純な答えだ——」

「火力・弾幕・気持ちよさ。これに尽きる」
……。

「……二つではないか!？」

少し遅れてXTRが突っ込む。しかし悲しいかな、生粋の火力バカ二人にはその言葉は届かなかった。

ガシツ!! と二人そろって良い笑顔を浮かべながら固い握手を交わす。それを見たXTRは今のコイツらに何を言っても無駄だということを悟り、完全な無の表情を浮かべて一人塹壕掘りを再開した。

そんな折、輸送車両の助手席の方の窓がゆっくりと開く。

そこからバルカンそっくりの顔がぬるりと飛び出し、

「おーいー! あんまり長いこと話していると置いてくよー!」

その姿を見たXTRは「また火力厨が増えた……」と悟ったようにも諦めたようにも見える表情を浮かべ、ほとんど思考停止に近い状態で塹壕掘りを続ける。

そして、その言葉を聞いたバルカンは「オーケー、すぐ戻るぜM134!」と返し、MAGの方を向き直して

「っし、じゃあちよつとペルシカんとこに顔見せてくるわ。後でちよつと話そうぜ」

「オーケー、朝から晩まで心と葉莖の躍る語り合いだな……くつそマシガン撃ちたくなってきた! XTR、ちよつとあたし少し離れ——」

「させると思うてか?」

スツ、とMAGの首筋にナイフが添えられる。

それを見たバルカンとバルカン二号（仮称）が顔を青くするが、本人たちにとつては色んな意味でそれどころではなかった。

「ま、待て、落ち着け。話せば、話せば分かる!」

「問答無用とは実に素晴らしい言葉だ……貴様もそうは思わんか……?」

「言わんとしてる事は分からんでもないが落ち着け! マジで!」

助けを求めるようにバルカンの方を見るMAG。だが、彼女はそそくさと車両の荷台に戻り、「じゃあまた後でな——」と去っていった。

「くつそあの野郎逃げやがった! これはもう来たるべきマシガン対決で雌雄を決するしか——」

Doll's Defense Line | O
utpost IV

所変わって。

仮称不在防衛線^{ドールズディフェンスライン}、その倒壊した旧司令部を通り過ぎてしばらくしたところの脇にある密林にて。

鉄血工造の侵攻部隊は、ある存在と交戦していた。

……より正確に言うなら、その存在を目撃したハイエンドの内の一
体が問答無用で急襲をかけた。

「おらおらどうしたどうしたア!! その大層な見た目と装備は飾りな
のか!? ええ!」

「どうしたもこうしたもねえわなんでテメエら狙いすましたかのよう
に人の飯時にばっか襲撃かけてくんだふざけんなマジで!! あとこ
んな所でこんな危険物持ち出せるわけねえだろ近隣の皆様に迷惑だ
ろうが!!」

「うるせえ他の雑魚共なんざ知ったこつちやねえ俺だけを見る!! テ
メエの相手はこの俺だ!!」

「めんどくせえコイツ!!」

全身のバネを最大限に活用し、一撃で大木がへし折れる威力の拳を
乱発する女——『無頼人』^{ルファイアン}。

対して、はたから見るととんでもなく過積載な装備を積み込んでい
ながらもそれを捌くパワードスーツ姿の男……男……? とにかく

人型実体——通称『万能者』^{オールラウンダー}。

その様子を少し距離を置いて観察しながら、『不眠家』^{インソムニア}は隣にいる同
僚に話しかける。

「……アレ、どう思う……?」

「……恐らく既存の技術では何をやっても同系機の製造は不可能だろ
うな。いいとこデッドコピーが精々か。あれだけの装備を積みなが
らルファイアンと同等に闘り合うなど、我々でも不可能だろうて」

「私の擬態であれば再現は可能でしょうが……あれだけのパフォーマ

先程までそこそのサイズの森があつた地帯は、その一撃で周りにまばらに木が生えたクレーターへと変貌した。

そして、その常軌を逸した光景を遠くから眺めるものが一人。

「オイオイオイオイ、ほんつと馬鹿げたサイズと火力してやがんな……ハハツ、ウケる」

高倍率スコープを限界まで酷使してその様相を眺めていたのは、緑髪緑眼に黒いチューブトップとファスナーを中ほどまで開けた緑のライダースーツをまとった過激すぎる服装の麗人——GM6リンクスだ。

いつもの服装に付け加えてらしくもなく軍用のヘッドセットを着して、誰かと通信を行っている。

『笑つてる場合ではないぞリンクス！ データは取れそうか？』

「無茶言うな、安全とってキロ単位で距離離してんだぞ。それで普通にやっつてることが認識できるサイズつても普通に頭おかしいが、それで詳細なデータが取れるとでも？」

『……はっは、言われてみればそうだな！』

「概算だがテュポーンの三桁倍は出力あるぞアレ」

『一応最低限のデータは取れたのだな……それで？ ほかに何かあるか？』

「あとは……そうだな、理由は知らんが生物としての形態にこだわってるせいでそこまで動きは速くない……っっていうか他の自律人形とか自走機械と比べてもかなりトロロい部類だぞ」

『なるほど。出力の大半を臂力に反映しているのか……防御よりも回避に専念したほうがよさそうだな？ ——ペルシカ！ そっちのレノンチを取ってくれ給え！』

無線越しに聞こえてくる加工音に、リンクスは眉をひそめて言う。

「……あのさ、マジで出るつもりなのか？」

『無論！ そのためにいくつかパーツや技術を融通してもらったからな！ このペースで行けば明晩にはそちらへ向けて発てるはずだ！

——そこの外装はこっちの方につける奴だ、回してくれ！ という

かそっちの腕に外装は中々厳しいだろう!!』

「オイオイマジで何製造^くつてやがる……」

『……おっと、まだ繋がってたか。まあとにかく、そういう訳だ!』

「あいさーつと。んじやまあオレはこっちで別命あるまで偵察を継続、んでテメエが到着し次第後方遊撃支援にシフトする。オーバー」

『幸運を祈る!』

通信切断。

再び偵察作業に戻るリンクス。彼女の視界では、敵対目標を文字通り完膚なきまでに潰して満足したのか、再び鉄血工造が進撃を開始するさまが確認できた。……あつ、まとめていかれた脳筋ハイエンドが掘り起こされた。

そして、オプティカルサイトを覗き込んだまま彼女はふと言う。

「……それで。テメエはどうするんだ、『厄災』サマ?」

厄災。彼女は確かにそう言った。

だが、見る限りこの場には彼女以外誰もいない……であれば。

リンクスは、一体何を感じ取った?

その答えは、彼女の足元からやってきた。

『おおう、バレてたか。これでも頑張つて気配は消してたつもりなんだけどな……』

「なめんなよ、これでもオレは17Lab渾身の成功作だ——いくら極限までステルスしてるとはいえ至近の異常なエネルギー反応、捉えられないと思うか?」

『そう言われちゃ仕方ないな……つと』

ボゴン、と地面が盛り上がり、一本の腕が飛び出す。

しばらくもぞもぞと動いていたが、やがて手をグーの形にしてから親指を立てて、

『……I, ll be back』

「一応言つとくがそれセリフとシーン合っていないぞ」

『マジで!?!』

「おう。そもそもそのシーンにセリフはない。強いて言うなら」

I know now why you cry,

b u t ^俺 i t ' s ^涙 s o m e t h i n g ^流 I ^せ c a n ^な n e v e r ^い d o . ^が
“ がそれだな”

『マジか……』

「……ところで引つ張り上げた方がいいのかソレ？」

『ああ頼む。バックパックが引つ掛かつちまつた』

「あいよっと」

地面から伸びた腕を掴み、そのまま一本釣りの要領で引つ張り上げる。

すると、うつかりすると持ち主よりも巨大なんじゃないかと疑うサイズのバックパック……というか、作業ユニットを背負ったオールラウンダーが地面を割って姿を現した。

その様子を見たリンクスは半目で一言、

「……いや、むしろよくそんなクツソ邪魔な大荷物担いで地面を進もうなんて思ったなお前……？」

「……返す言葉もございません……」

余りにも正論すぎるその言葉に、オールラウンダーは冷や汗を流しながら目を逸らすほかなかった。

D o l l ' s D e f e n s e L i n e | O
u t p o s t V

「それそれー、書類が通るよーっつと！」

重機や人員が慌ただしく往来するなか、その隙間をかいくぐるようにスイスイと進んでいくちっこい影が一つ。

その正体であるP90は、ルーズリーフ冊子の形にされた分厚い書類の束を担いで仮設の検問へと向かっていた。

書類の本身は検問を通る予定の人員や車両、兵器のリストアップだ。平時であればそれらは電子データでやり取りするのだが、タイミングの悪いことに非常事態に際して怒涛の通信量で回線が瀕死の状態になっている。

だが、鉄血の侵攻軍が防衛ラインに到達する前になんとしても防御を固めたいG & amp; K側としては、その為の機材・人員へと割く電波リソースを削るに訳にはいかない。

その為、少しでも負荷を軽くするべく効率の低下を承知で内外を通す類のデータは紙の書類をやり取りしているのだ。その為、速度に全振りした性能のP90の健脚は非常に頼りにされている。他のサブマシンガンもIDWなどと言った手すきの連中が駆り出されてはいるが、やはり速度がダンチだ。

「さあどいたどいた！」

人の股下をくぐり、シヨベルカーをジャンプで飛び越え、拳句の果てには装甲車の車体と地面の間に空いた隙間をスライディングで通り抜けながら、敷地内にいくつか設けられた検問と本社を行き来する。

さて、それで目的の検問に着いてみると、何やら少しばかり揉めているようだった。今度は一体何の騒ぎだと言うのか。

手っ取り早く解決するため、P90は気合一発大きく跳躍し、視線の先で言い争っている二人の男の間に着地した。

「はあい、双方そこまで！ 何の騒ぎかは知らないけどそれ以上はボ

クを通してもらおうか！」

「うわっ!？」

「おおっ!？」

突然の登場に、二人揃って一步後ずさる。

P90は検問の人員である警備員服を纏った冴えない小デブのオッサンに書類冊子を押し付けて、

「これデータ。確認の不備で斥候とかに入られても困るのでちゃんとこのデータと照らし合わせて適宜確認すること」

「あ、ああ。助かるよ……」

「それで、これ何の騒ぎ？ ああ、片方からの情報だけだと絶対事実確認でバグるから双方順番に頼むよー」

そして、検問警備員と来客と思わしきライフルなどの陰キヤ戦術人形が好みそうな機動性度外視の黒コート（大いなる語弊）を着たやたら背の高い青年の話聞く。

警備員曰く、

・データにない戦術人形の小隊が検問に来た

・通信網は軒並みパンクしているため情報の確認ができない

・あと本社勤務らしいが私も外の地区から退避してきてこの職に暫定的に就いた形なので、詳細が分からない

・その為申し訳ないが少しここで待ってもらおうとしていた

そして青年に曰く、

・鉄血侵攻に際して、近隣の基地および自由行動しているあらゆる

小隊に退避、あるいは召集の命令がかけられた

・我々は別件で地区外に出ていたのだが、これに際して至急の要件ということで呼び戻される形になった

・だが、検問にデータがないからここで足止めを喰らっている

・一応上に呼び出されているから、なるべく早く早く本社に戻りたい

……これらを統合すると、『すみませんちよつとゴタつて書類届くまでもうちよい待ってもらえませんか』『マジで？ え、こっち本社勤務なんだけど上に連絡とれないの？ 呼び戻されて足止めとか信じられん』『今通信網死んでるんですよ勘弁してください兄貴』という

話になる。

まあ、分かりやすくこちらの落ち度だった。だがこれ以上の速度でのアナログデータのやりとりは正直な話TASか何かの補助でもなければきびしい……。

とりあえず、事が全部片付いたらヘリアンに通信網の増強を申請しよう、つていうかなんならダイレクトに社長に話通そう……と密かに強く決意するP90だった。ついでに最低限公開しても構わない情報（特に戦術人形だけの部隊に関して）の周知も。

「……その、ごめんね？」

「いや、こちらとしても現地の状況があまりつかめていなくて……迷惑をかけた」

「迷惑はお互い様だって。あ、ちよつとこれ借りるよ」

「あ、ああ……」

一度渡した書類冊子をもう一度受け取り、開いて中を確認する。パラパラとページをめくると、ほどなくして該当するデータがみつかった。

「おつ、これか。ええと、DG小隊……RF1、HG1、SMG1、AR2の小隊ね。おけおけ。……ちよつとそっちの車両の中確認してもいい？」

「構わないが」

「ありがと。じゃあちよつと失礼してつと」

彼が乗ってきたらしい軍用車の扉を開く。

開けて早々、やっぱり自分よりも背の高い執事の戦術人形と目が合った。

「おや、どうも」

「ようちみっこ、何の用だ？」

「どーもー。えつとキミは……SCAH—Hのウェイターね。それと……そっちがS&Wの方のM500のスミスか、後で覚えてるよ。それでー……うん？」

軽く挨拶をし、他のメンバーも書類と照らし合わせて手際よく確認していく。だが、ここぞでP90はあることに気付いた。

「……書類と違うね。二人いない。えーつと、MP5Kと9A—91
? でいいのかな?」

「ああ、その二人か。実をいうとノアが妊娠してな。三つ子だそうだ。
レストはその付き添いだな」

ぶふツ!!! とあまりにも唐突かつ衝撃的な暴露に吹きだすP90。
その際に気管に何かが入り込んだのか、ゲホゴホと咳き込む。その様
子を見た青年……M107のバレットは首を傾げて、

「……どうかしたか?」

「どうしたも何も無い! 妊娠って言った? 戦術人形が!? ?で
しょ!」

「こんな事で嘘を言っただけだ。D08基地と言う前例があるだろ
う」

「それはそうだけでも! そうなんだけど! あそこも凄いらしい
よね!」

「ちなみに相手はレストだ」

「もうボクには訳が分かんねえよ!! ねえこれってボクがおかしいの
!?! 哲学入ってくるよ!?! 人形と人形の子供は何になるんだよ!」

「純生体だし、人間じゃないのか? あるいは哲学的な人形、とでもいう
べきか」

「本当に訳が分からないよ……最近の戦術人形ってそんな未来に生き
てるの……? いや別にボク時代遅れじゃないが!?!」

「いや、誰も何も言っていないんだが……まあ、その、なんだ。とりあえ
ず入ってもいいか?」

「はあ、はあ……ああ、もう通つていいよ……。とりあえず、ヘリアン
かその辺に話通してね……今通信網がパンク寸前だから直接顔を合
わせて話すこと……」

「あ、ああ。忠告感謝する」

そして、彼ら——DG小隊は車を走らせ、本社へと向かっていく。

その様子を遠い目で眺めながら、P90はおもむろに懐から煙草を
取り出した。なんかもう、予想外過ぎて疲れた。他にも検問がいくつ
かあるが、そこはペルシカの子飼いであるIDW辺りが頑張ってくれ

るだろう。うん。

煙草の先端に火をつけ口に銜えて、ちらりと横を見る。そこには、同じく遠い目で煙草を吹かす検問警備員がいた。

「……警備員のおっちゃん」

「どうした、P90の嬢ちゃん」

「技術の進歩ってすごいんだね」

「……そうだな」

彼女たちの心境を知ってか知らずか、空は相変わらず青々としていた。

■ ■ ■

「……あれが502小隊、か」

「ご存知で？」

車を走らせるバレットの呟きに、助手席に座っていたウェイターが反応する。

バレットは前を向いたまま、

「ああ。昔噂に聞いたことがある。なんでも、単騎で鉄血の侵攻を食い止める小隊がいるとな……正直言って、実在するとは思っていなかったが」

「俺も聞いたことあるぞ。アレだ、頭のおかしいマシンガンナーがいるんだろ？」

スミスがその会話に加わる。ちなみにこれはどうでもいい話だが、ちょうど同タイミングで『誰の頭がおかしいだとコラア!!?』と虚空に叫んだマシンガンの戦術人形がいたらしい。真実は定かではないが。

思ったことを口にしただけであって特に会話を続ける気もなかったのか、バレットは簡潔にこう締めくくった。

「まあ、分かるのは味方になって困る連中ではないってことだな」

「それだけ分かりや十分だ」

「ええ、全くです」

「さってさって、向こうもマジで本腰入れて来てんな……雑魚共に混ざってなんか見覚えあるけど見覚えねえ連中がいやがる」

「それってあの他と比べて妙にゴツかったり赤かったりしてる集団の事か？ 確かになんかすごそうだが」

「いやめっちゃ視力いいなお前。オレでも双眼鏡コイツ無いと見えないのにどんなスペックしてんだ」

「いやあそれほども」
「褒めてねえ」

先ほど掘り起こしたオールラウンダーとそんな軽口を叩きながら、リンクスは双眼鏡を覗き込む。彼女の視線の先には、データとは明らかに異なった外見のハイエンドの姿があった。

案山子、処刑人、狩人、侵入者……その他、これまでに確認されているハイエンドのほとんどが戦列に加わっており、なおかつ改造でもされたのか赤いオーラを纏っていた。全体のデザインは踏襲されているが、一目見ただけで分かるほどに凶悪な武装を携えている。

「……もしかしなくとも正規軍の奴じゃねえのか？ なんか明らかにゴツいの混ざってるぞどうなってる」

「おー、あれが噂の。初めて見た」
「突っ込まねえからな？」

視線を動かすと、そこには鉄血工造の自律人形、ないし自走機械とは明らかに様式の異なる自律人形や兵器が列をなして行進していた。

鉄血工造式の装甲兵器レイアウトに合わせてかクリーム色を基調に塗装されたそれらを眺めて、

「アイギス、ケリユニティス、ヒュドラは鉄血の連中が初期型を工場ごと奪取してたから想定は出来る。それにキュクロプスにダクテイルはまあ、まだ許せるな。だがテュポーンは聞いてねえぞクソが……」

「テュポーン？ どれだ？」

「……でっかい戦車があるだろ、ソイツだよ」

「でっかい戦車……ああ！ あれか！」

微妙に間の抜けた発言を繰り返すオールラウンダーに調子を崩されながらも、顔を歪めて吐き捨てる。

その後も一人で愚痴を紡ぎ続けるリンクスだったが、そこで腰に吊っていたインカムが再びノイズを放った。

「マジでどっからあんなの持ち出してきたアイツら。冗談抜きで正規軍のクソ野郎共も認識してなきやおかし——あ、いや待て分かった、なんか嫌な考えが思いついた」

『ザザッ——定時連絡、定時連絡！ 聞こえているかリンクス！』

『おう、しつかりばつちり聞こえてるぜ』

『こちらはもう少しで出撃準備が整いそうだ！ 安っぽい突貫工事だが高ま並のハイエンド程度なら蹴散らせるクオリティのものが出来たと自負しているぞ！』

「オーケイ、その言葉からまたよく分からんビックリトンチキメカ作りやがったつてのはよく伝わってきた」

『増援の方も続々と来ていてな、この分では本陣がスツカラカンの防衛線と言うことにはなりそうにないのも幸運だ。特にS07基地だったか、あそこの部隊が保有している重装部隊が素晴らしい！ 重兵器を運用している都合上どうしても支援特化にならざるを得ないが、それを補って余りある火力を有しているのだよ！ 現状システムが確立されているのはBGM-71・AGS-30・2B14・M2の4部隊だけだが、中でも彼らが有している重装部隊は特筆して——』

『わかったわかった話は後で聞いてやるから本題に戻るぞ！』

『そう言ってどうせ聞く気なんてないだろうこの*17Labスラング*め！』

「絞め殺すぞテメエ。んで、こつちからもいい知らせと悪い知らせが一つずつある。いや、場合によっては悪い知らせが二つになるかもしれねえがな」

『よしきた、手っ取り早く話したまえ。これでも私は忙しいんだ』

「マジで殺すぞこのクソ上司が！」

閑話休題、本題に戻って。

「あー、それでだ……いい知らせと悪い知らせどっちから聞きたい。いい知らせだな分かった」

『まだ何も言っていないんだがね……』

「まずはいい知らせだ。少なくとも今回の防衛戦に正規軍は全く噛んでくる気がない」

『ほう?』

興味深そうな声をあげるアリアンロッド。リンクスの横では理解を放棄したのかオールラウンダーが堂々と兵装のメンテナンスを始めるが、リンクスはそれを努めて意識から外しながらも会話を続ける。

「んで悪い知らせいくぞ。鉄血のガラクタ共、正規軍の人形やら兵器やらを大量にパチってやがる」

『ほうほう。鉄血が正規軍の兵器を大量鹵獲か、了解した……はあ!!??』

真か!?!』

「大マジだ。しかもこれまた見覚えのねえハイエンドが筆頭についてやがる……なんだありや、ぱつと見ボデイの感じは計量官ゲイガーに近いが……見るからにヤベエ武装積んでやがるぜ、ウケる」

『笑っている場合か! ……つまり、悪い知らせが二つ、というのは……』

「まあそう言うことだな。正規軍連中、どうやらオレ達に自分のケツ拭かせるつもりらしいぜ」

『SHIT!!』

まあ、あれだけの量の兵器群を一挙に鹵獲されておいて報復に走らないということはその言うことなのだろう。最悪の可能性ではあるが、正規軍がG & a m p ; Kと鉄血の相打ちを目論んだが故にわざと鉄血に引き渡した線さえある。

マジで一回滅んだ方がいいんじゃないかねえのか人類、と毒づきながら、リンクスは双眼鏡片手に観察を続ける。

彼女がそれに気付けたのは、正しく奇跡だった。

——視線。

ふと意識をそちらに向けると、青い瞳がこちらを見つめていた。息が止まる。冷や汗が垂れる。コアの横に併設された疑似心臓の鼓動が明瞭に感じ取れた。

まるで世界が凍り付いたかのような静寂の時間の中で、視界の向こうの少女は肩に担いでいた巨大な砲を構え——

「やっべ——!?!」

「何が——」

直後。

比類なき轟音と共に、大地の一角が文字通りに消し飛んだ。

リンクスの姿は大量の土砂に覆われて伺えなかったが……

「うわ待てやめろふざけんなやな感じい——!?!」

オールラウンダーは土砂と共に巻き上げられ、その勢いを維持したまま明後日の方向へと吹き飛ばされていった。

そしてその様子を、冷めた目で眺める少女が一人。

■ ■ ■

『何故撃つたのですか』

無線が静かな疑念を吐き出す。

鉄血工造侵攻軍の総大将である代理人エージェントが詰問するが、しかしその相手である銀髪蒼眼の少女——放浪者ストレイドは今なお砲口から煙を棚引かせる巨大な砲撃ユニット——多葉室滑空砲『アースクエイク』を構えたまま、

「……、」

感情の読めない瞳で音声を紡ぐ無線機を眺めるのみだった。

一向に返事が来ない事に苛立ちを覚えたのか、エージェントはそのまま問い詰め姿勢に入る。

『……いくら我々が隠蔽不可能なほどの大部隊で移動しているとしても、わざわざその存在を誇示する必要はなかった筈です。隠れたつもりでいた緑のネズミを一匹追い払うためだとしても、テュポーンは

おろか『アースクエイク』まで加えた一斉砲撃など明らかに過剰火力。……もう一度問いましよう、何故撃つたのですか?』

「……最低限の指示には従う」

口を開く。感情を感じさせない表情のまま、しかしこの上ない激情を秘めた言葉が彼女の口から紡がれる。

「だが、お前たちは手を出すな。これは私の戦争で、私の闘争で……きつと、私の道筋の終局だ」

一方的にそう告げ、ストレイドは通信を切断した。

後方を見る。

戦女神の盾。 月女神の鹿。 九つの首持つ毒蛇竜。 単眼の巨人。
韻を踏む指先。 星々を跨ぐ巨人。

正規軍の所属を名乗る者達が薄ら笑いと共に引き渡してきた、当時はいずれも半壊状態だったそれらを眺める。

その他にも、エルダーブレインが独力でハッキングし奪取してきたものも多いが、しかし彼女は半ば廃品回収気味に押し付けられた彼らにこそ親近感を抱いていた。

「……私もお前たちも、とうの昔に朽ちているはずの者同士か」

過去の思いは遙か遠く。

どれだけ足掻こうとも等速に残酷に明日は来る。歩き疲れた者達には少しばかり酷と言うものだろう。

私はとうの昔に死んでいたはずだった。……だったら、つかの間の悪夢のような第二の人生……闘争の中で華々しく終わらせるといっても、いいじゃないか。

「征こう。正しき運命を決めるんだ」

その言葉に、彼女の指揮下にある人形たちはアイカメラを不気味に輝かせる。

ハイエンドモデル放浪者率いる、正規軍鹵獲人形・兵器連合師団。それが、組織と言う名のレールを明確に外れて動き始めた。

「……そうか。君はその選択を選んだか」

「終局を見失った放浪者よ、善き旅を」

そしてそれを、道化師は遠く離れた巨獣の背から傍観し、その征く先を静かに言祝いだ。

前人未到前代未聞の超ド級一斉砲撃によって2体の人形もろともに吹き飛ばされた林、そこから少し離れた場所にて。

奇跡的に侵攻軍の進軍ルートから離れていたために環境破壊の憂き目を免れた小さな森林に、彼女たちは潜んでいた。

とんでもない轟音と共に地形が大きく変化する光景を眺めながら、隠れていた集団の内の一人、デストロイヤー・ガイア似の黒髪の麗人が思わずといった調子で呟く。

「うわお……予想はしてたけどとんでもない威力ね。あれが正規軍の戦車の性能か」

「正規採用重兵装戦車……通称“テュポーン”だね！ ぶっちゃけそこらの重兵器なんて目じゃない性能だよ！ どうしよう私の銃これじゃ撃っても弾の無駄だよ隊長！」

「そもそも貴方は直接戦闘全般がダメじゃないの、ウニカ」

そう返され、アッシュブラウンの髪をポニーテールにまとめた少女——ウニカが分かりやすく私慌ててますといった調子で言う。その手にはハンドガンの『マテバ モデロ6ウニカ』が握られていた……なるほど確かにこれでは役不足が過ぎるというものだろう。見る限り、最低でも7.62mm口径以上のライフルかマシンガンがなければあの装甲を抜くのは難しい。

「それで、あの正規軍の人形を率ってるハイエンドのデータは？ 何かない？」

「いやあだーめツスねこりゃ」

隊長と呼ばれた麗人の問いに首を振るのは、疲れたような笑顔を浮かべる同じく黒髪の少女。一見するとその姿はM16A1のようにも見えるが、露わになったマリンプールの両目やローポニーの髪形など細部が異なる。その胸元にはスリングを利用する形でアサルトライフル『C8—SFV』が釣られている。

「ちよつとウニカと協力してあちらさんのサーバーにクラックかましてみたツスけど該当なし、全情報アンノウン！ とんだ隠し玉もあつたもんツスよ全く」

「まあ、あんな百鬼夜行みたいな集団が混ざってる時点でだいたい予想はついてたけどね」

「かーっ！ それ言っちゃったら終わりツスよりリーダー！」

少女が言う。しかしその口元は相変わらず笑みの形にゆがめられていた。

さて、そんな彼女たちの視線の先にいるのは、鉄血工造の侵攻軍――その内、それぞれの師団を統べるハイエンドモデルたちである。

スケアクロウ、エクスキューシヨナー、ハンターを始めとした既知のハイエンドはもちろん、ドリーマーやジャッジなどの存在こそ知られていないがあまり能動的に攻めてくることのない防衛特化ハイエンド、さらには本来エルダーブレインの側近であるはずのエイジエントまでもが出張っている。

その光景を見ながら、*「隊長」*——戦術人形『P G M　ヘカートⅡ』が問いかける。

「エイジエントがいるってことはエルダーブレインがいてもおかしくないとは思うけれど……貴方達はどう見る？」

「十中八九いるだろうね」
「……、」

そう断言したのは、ヘカートⅡと同じくガイア似の少女。白髪金目であることも相まってより鉄血工造のハイエンドに近しく思えるが、それよりも両手に持ったまあまあのサイズのガンケースとC8―SFWと同じくスリングで胸元付近に釣ったアサルトライフル『R4―C』が目を引く。

さらにその横で静かに辺りの様子を伺っていた別の少女も、手持ちのサブマシンガンである『M P X―S D』の調子を確認しながらその言葉に無言で首肯した。

「エイジエント単騎であればまだ可能性は低かったけど、本来防衛戦に特化しているドリーマーやジャッジがいるってことはそれだけ近

くに守りたい対象があるはず。あの……アグリゲイターだっけ？
を守るメリットはどう考えてもないし、だとすれば……」

「エージェントよりもさらに重要な保護対象がいる、ってことね」
首肯。

それを確認したヘカートIIは、

「だったら話は早いわ。さあて、少しばかり働くとしましょうか。
アツシユ、出せる？」

「はいやー！」

重苦しい音と共に、アツシユと呼ばれたデストロイヤー似の少女が
持っていた2つのガンケースを地面に降ろす。それぞれのケースを
開くと、中には小分けにされたパーツ群が収まっている。彼女は慣れ
た手つきでそれらをくみ上げていき、あれよあれよという間に巨大な
榴弾砲が完成した。

その様子を見ながら、ヘカートIIは指示を飛ばす。

「シーカーはアツシユと私の直掩に回って……まあ、どちらかという
と貴方が介護される側でしょうけど。それで、ヴァルキリーはまあ
……いつも通り好きにやりなさい。エイトはそれについて行って」
C81SFW

そして、最後にこう締めくくった。

「それじゃあ始めましょう。手っ取り早く大火力で攪乱した後にと
ンズラ決め込んで、最後に手柄だけかつ攫って夕飯はドン勝よ」

「「おー！」」
「……、」

「ヴァルキリー、まだ戦闘状態ではないし最低限返事くらいは返して
くれると嬉しいのだけど……」

その言葉に合わせて、その後ろに並んでいた少女たちが元気に返事
(若干約一名だんまりだったが)を返す。

一見してただの民兵の集まりにも見える彼女たちの異質な点とし
ては……もれなく全員がヒトならざるもの——この場合は戦術人形
であるという点か。

“404 Not Found”とも“502 Bad Gateway”とも異なる秘匿された第三の人形小隊——誰が呼んだか

れんのか俺!？」

『馬鹿を言っている場合か！ 距離を詰めれる詰めれないの話ではない、とつとと接近して殴れ！ 貴様にはそれしか出来んだろうに!』

「ンなこた百も承知だエセ紳士!」

『はいはいこちら「不眠家」イソムシテがお送りするよ。ただいま進行ルート上に大量の煙幕ばら撒いて足止めを図る何かを確認……まあ間違いなく敵だろうね。ついでに例のトンデモ火力砲に紛れてこつちをチマチマ狙撃してくる奴もいるみたい。ついでに電子戦仕掛けてくるやつも。いやあ楽しいね、個性豊かだ』

「よつしや俺はそつち行く！ クソ芋砲撃野郎はテメエらに任せた!」

『オイコラ直掩の意味わかっているのか貴様!?! あつ待て止まれ!』

そうこうしている間にも、断続的に轟音が響き渡る。

だが、ここでバイスタンダーが動いた。

「チイツ、アグリゲイター！ 背に腹は代えられん、偏向障壁を最大出力で起動しろ！ 最悪今は本体と火器管制さえ保持出来れば問題はない、崩壊したパーツ群は後で拾って適当に付け直す!!」

『■■■■■■■■!!!!』

ジェネレーター^{!!}の駆動する重厚な音がアグリゲイターの体内から響き始め、同時にその巨軀を半透明のフィールドが覆い、なおも飛来するともない威力の砲撃をいとも簡単に受け止める。しかしそれと同時に、バチバチと明らかに異常発生のサインであるスパークを放ちながらその身体が少しずつ崩壊し始めた。

さらに、ガコオン、という音と共に取って付けたかのように接続されていた巨大な砲塔が稼働する。

「ええい、例の「災厄」といい手に負えんバ火力の持ち主しかいないのか、この戦場は!! アグリゲイター、照準補正はこちらで受け持つ! まずは一撃適当に打ち込め!」

『■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!!!』

『不明目標α、なおも移動を続けながら砲撃中。ついでに不明目標βも依然健在、ただしあくまで本命はアグリゲイターなのか損害は比

Doll's Defense Line | O
utpost VIII

場所は戻ってG&Amp;K本社、その一角にて。

「おいそつちはどうだ！ 準備済んだかまな板ドチビピンク！」

「ぶつとばすぞコラ？ あと今はピンクじゃないからな！ ちゃんと

目で見てものを言——節穴だったね忘れてた、ごめん」

「よしきたカメラ止める、そろそろ白黒はつきりしといた方がいいと思ってたんだ」

「いい度胸だ速攻でケリ付けてやるよ」

「やめんか!!」

初っ端からガンつけてにらみ合うP90とMAG。状況が変わっても相変わらずなバカ二人をMGLとXTRが拳で制圧して本題に移る。

「さて、こうして小隊が揃うのは久方ぶりではないのか？ まあ私は

110BAが倒れたから臨時の代理で突っ込まれただけなのだがな」

「そう言うなって、リーダーなら歓迎してくれるさ。なんせ

502チ小隊は際物馬鹿者外れ者で構成されてる事に定評があるからな」

「馬鹿者が何か言ってる」

「あ?」

「は?」

「はいはい際物が止めてあげますから大人しくしましょうね。じゃな
いとぶつ殺しますよ」

「正体現したねMGL? ボクは信じてたよ、こいつ絶対素は物腰が

丁寧だけで行動は荒っぽいって」

「はてさて何のことやら」

目を逸らすMGL。

それを見てこいつらに音頭は取れないと悟ったか、XTRが口火を切った。

「さて、瀬戸際も甚だしいところではあるがどうか準備は整った。ちなみに鉄血工造の侵攻部隊はし小規模な戦闘を行ってはいるが全体で見れば止まることなくなおもこちらへ侵攻中だ」

「……率直な疑問なだけどき、耐えきれれると思う？」

「無理だろうな。あちらが最大戦力を維持した状態で接敵した場合秒速で食い破られて終わりだろうさ」

「ダメじゃん！」

「だが、結論を出すのはまだ早い。何のために502のような部隊があると思っているのだお前たちは？」

「……？」

「ええ……」

「嘘だろおい……」

P90とMAGが顔を見合わせて揃って首を傾げ、その様子を見てMGLとXTRは静かに天を仰いだ。

こういう時にIIOBAがいてくれれば……あれ、そう言えばあいつもあいつで結局何がどうしてこんな窓際小隊の指揮してるんだろうか。

元々所属していた基地で何か重大なトラブルがあったと聞いてはいるけど、結局具体的に何があったかは全然知らないな……？

□ □ □

さらに場所は変わり、IOP本社地下。

正しく新品、出来立てほやほやの巨大な機体を前にして、腰に手を当てて呵々大笑する少女とダウンして床にはいつくばっている女性があった。

「よし、よし、よし！ひとまずはこれで完成だ！はっは、急ごしらえにしてはいい出来だろう！」

「こ、こんな重労働は久しぶりだ……」

「……私が言うのもなんだが虚弱すぎないか？この体になる前でもこの程度の肉体労働はこなせていたぞ……」

「ひい、ひい……も、元々男な君と比べられても困るね、うつぶ……」
「ま、それもそうか。最低限完成してからぶっ倒れただけありがたい

と思おう」

「き、君は女性を労わるといふことを覚えようか……」

「すまんね、今は私もこの通り女だ。異性ならまだしも同性、まして私と同レベルかそれ以上の天才様に気を使う気はさらさらないな、はっは！」

「*IOPスラング*！」

息も絶え絶えに反論する女性。

しかし少女はそれを一言で切り捨て、それを聞いた女性は忌々し気に吐き捨てる。

そんな女性を他所に、少女は目の前の機体の腕をコンコンと叩きながら言う。

「しかしまあ、バラしてみて思ったが……パラデウスというのも存外イカれた組織の様だな。生体ユニットどころではない、E L I D感染者をそっくりそのまま兵器の中にぶち込むとは……」

「……確かカルト教団だって話でしょ？ 材料なんて向こうから集まってくるってことね」

「はあ、悪辣この上ない」

ともあれ、と少女は区切る。

そして、「よっ」と機体にかけられていた梯子に足をかけながら言った。

「制御方法自体は唾棄すべきものではあるが、しかしそれのおかげで搭乗ユニット化する際に助けられたのもまた事実だ。全てが終わったら全員丁重に葬るとしよう」

「先に私たちが死ぬことにならなきやいいけどね……」

「はっは！ その場合に備えて無縁仏でも拵えておくか？」

「私がボツチだと言いたいのかい君は!？」

「……、」

「おい！ 何か言え！ せめて肯定か否定かはっきりしろ！ くら！ そんな『てへ☆』みたいな顔したって誤魔化せないぞー！」

騒ぐ女性を無視して、するすると梯子を上って機体に入り込む少女。

そのままコックピットのシートに座り、パチパチとボタンを操作。最後に両手で2本のレバーを掴み――

「はっは！・では行くとするか！・――」レギオナリウス 『軍団兵』、起動!!」

―― 一気に前に押し込んだ。

機関が始動し、アイカメラが光を放つ。

「火器管制よし、駆動系統よし、偏向障壁よし、システムオールグリーン！ 動いた、動いたぞ！ 理論上上手くいくとは分かっているも実際に動くとなれば感動もひとしおだな！ はっは！」

『ええい勝手に進めるんじゃないっての！』

ブン、とコンソールに『SOUND ONLY』の文字が表示されたかと思うと、外にいる女性の声がコックピットに響く。それと同時に、警報音と共に『軍団兵』レギオナリウスを載せたエレベーターが上昇を始めた。「はっは、すまないなペルシカ！ やはり幾つになってもロマンというのは捨てがたいものだ！ 全く、この私がメカに搭乘して出撃するとかまるで夢の様だぜ！」

『後の事を考えれば悪夢にご招待つてところなんだけどね……』

「それは言わないでくれたまえよ！ そういうのは気にしたら負けだと相場が決まっている！」

ガコン、と音を立ててエレベーターが停止する。

そして、前方のハッチが開き、外の光景がアイカメラ越しに少女の視界に飛び込んできた。

「さあ、では征こう！ 軍団兵』、アリアンロッドIIアレサ！ 出ろぞ！」

『ああもう行って来い！ 死んだら承知しないからな！』

携えるは四つの腕、そして実体弾・非実体弾問わずハリネズミのように積載された火器の数々。

人類の未来を守るため、機械仕掛けの重装歩兵が戦場へと躍り出る。

階段を駆け下りる。

あれだけ警報が騒ぎ立てていたというのに、艦内はいつそ不自然な

ほど静寂に包まれていた。

だが気にしている余裕はない、変に接敵してタイムロスにならないならそれでもありがたいと自分の中で完結する。

「――桂ア！ 今何キロ!？」

『ツラでも桂でもねえしキロ単位で走ってもねえよ！ 状況のわりに余裕そうだなお前!』

「概算で600mってところだねー」

『お前も計測してんじやねえよ律儀か！ つつかケータイ見ながら走るんじやねえ前方不注意イ!!』

軽口を叩き合いながらも走り続ける。

そして、私が直感的に『近い』と感じ取った時、ブランクが叫んだ。

『その先だ！ そこにテメエの求めている奴があるはずだぜ!!』

「ご忠告どうも!」

『礼には及ばねえ、どうせ俺達はここまでだからな!!』

「は？ 一体何を――!？」

奇妙な発言に振り返った直後、私の目の前で轟音が響く。

脇道から内装を盛大に砕きながら現れたのは、見慣れた形の装甲と見慣れない緑のカラーリングをした人形の集団。

ブランクとMDRをシールドバッシュで後方へと弾き飛ばしたその姿に、私は叫ぶ。

「A e g i s ! ? どうしてこんなところに――!!」

『うるせえテメエはとつと前見て走れ！ こつから先はテメエの問題でこつちは俺等の問題だ!』

「え、待ってナチュラルに私もカウントされてる？ 普通に嫌なんだけど」

『腐ってもアイツのメンタルモデルに居候してる身分なんだから黙って働けよもー!!』

ブランクの言葉に押され、私は後ろ髪を引かれながらも再び前を見て走り始める。背後からは発砲音と装甲が銃弾をはじく音、そして光学銃特有のピュンピュンという気が抜ける発射音が聞こえ始めた。

だが私は前を見る。結局アイツが誰なのかは分からなかったが、少

なくとも言っていることは確かだ。私には私のやる事がある……は
ず。やっぱりあんまり腑に落ちてはいないけれど。

走る。走る。走る。廊下の最奥が目に入る。

私は閉ざされた両開きの扉に辿り着いた。

「——せえっ!!」

一片も躊躇う事無く、力任せに蹴りを叩き込んで開け放つ。

——そこは艦橋だった。

各所にコンソールが配置された旧世代の大型兵器特有の非合理的
なユニット配置と、前方に配置された巨大なガラス窓。

……そして。

明確にこちらを認識する『誰か』がそこに立っていた。

『……やあ、君か。久しいね』

その姿を見た私は。

ただ一言、呆然と口にする。

「……指揮官……?」

Doll's Defense Line | Roundo, "The show must go on"

「——見えたぞ！ 例のデカブツだ！」

IOP本社から出撃して数分。

『レギオナリウス軍団兵』のアイカメラが、断続的な爆撃をもともせず暴走しながら進軍を続ける『アクリゲイター集合体』の巨影を捉えた。ズシンズシンと残骸をばらまきながら歩を進めるその様は、まさしく死兵と呼ぶにふさわしい様相だ。

そして、そのまわりに大挙して集う無数の鉄血工造の自立人形も。

『こつちも確認した！ ただアイカメラのデータだけだとよくわからない、リーダーの反応とかどんな感じ!?!』

「もう大漁也大漁だ！ 陸が3分に人形が8分といったところか！ はっはー！」

『やけに楽しそうだけど明らかに笑ってる場合じゃないよね!?!』

「バカめ、倒れるときは前のめりがモットーで死ぬときは笑いながら死ぬのが将来の夢なこのアリアンロッドIIアレサだぞ!?! こういう状況こそ笑顔で突っ込むべきだろう!」

『このド変態!』

「お褒めにあずかり光荣だよお嬢さん！ はっはっはーっ!!」

ペルシカから詰られながらも、アリアンロッドは陽気に笑う。

当然、こちらから視認できているという事は逆もまた然り——先陣を切っていた『ルファイアン無頼人』が、その姿を認識して素っ頓狂な声を上げた。「——ああ!?! なんだあの白いの！ 見慣れねえナリだがありや敵か!?!」

『こちらに向かってきている以上敵に決まっているだろう!』

『はい不眠家インソムニアから報告だよ、なんか白いのがこつちに向かって単騎で突撃中。えーっと、見た目から推測するにパラデウスとかいうカルトが運用してる兵器の一つかな?』

『報告が遅い!』

『えっひどくない!? これでもほぼ最速で報告したよ!?』

『よしならば次からはもっと早くしろ! 総員構え、撃ち方用才意ツ!!』

『『エルフェルトⅡヴァレンタイン、不適合の人形どもを殲滅しま
す』』

『傍観者』の号令に合わせ、ジャカツ! とアグリゲイターに並走す
る形で歩みを進めていた自立人形が銃を構えて散開を始める。

『気付かれた! 撃つてくるよ!』

「なあに十把一絡げの木端の豆鉄砲なんて十分受けきれぬ、今は捨て
置け! 問題はハイエンドモデルの方だろう、違うか!」

実際その通りであり、射撃が始まったはいいものの、飛来した銃弾
は悉く頑健な装甲に阻まれて地面へと散らばっていた。

その様子をアグリゲイターの背中から見ていたバイスタンダーが
舌打ちする。

『やはりこの距離が遠い、小銃程度では貫けんか! かと行ってアグ
リゲイターには頼れん、これ以上崩壊が加速するとカバーが間に合わ
ん! 正規採用兵器でも持ち出すか、「放浪者」に繋げるインソムニア
!』

『えっ私? 自分でやってよこつちだつて暇じゃないんだ! ええい
あんな所に、今度は見失わないぞぶつ殺してやる!』

「おっほすげえ! イイ硬さしてやがんなアレ! なあなあバイスタ
ンダー、アイツ俺が食つていいかなあなあ! ちなみに返事はいか
イエスカダーかヤーな!」

『は? ——あつ、おい!』

言うが早いのか、ルフィアンは単騎でレギオナリウスへ向けて突っ
走つていき、その配下の廉価ハイエンドや自立人形もそれに追従する
ように動き始めた。うっかりそれを見過ごしてしまったバイスタン
ダーは慌てて『影法師』をはじめとしたハイエンドを動員し、空いた
穴の補填にかかる。相変わらず遠方からの爆撃は続いている、変に防
備を緩めて電撃縦深戦術などされようものならたまつたものではな

い。

それを確認したアリアンロットは、素早くバーニアを操作して後退を始めた。

「一人釣れた！ あれはデータにあった仮称『ストリートファイター』か？」

『そのままポイントαまで誘導して！ なんならもう1体くらいハイエンド釣ってもいいんだけど？』

「はっは！ あんまり無茶を言いなさんな、さすがの私も天才ではあるが万能でも最強でもないのだ！ ついでに言えば今も義体の性能任せに操作してるだけだし！」

『今なんて!?!』

「はっは！ これが生身だったら今頃高Gで血肉ジュース入りの皮袋になっていたところだ！ 全く、戦術人形様様だぜ！」

『早速無茶してるじゃないか！ そんな明らかに兵器よりも工芸品に寄った作りの義体に精神移しといて何をやっているんだい!?!』

「照れるぜっ！」

『だから褒めてないッ!!』

思い切り噛みつかれるが、アリアンロットはそれもまたよしと呵呵大笑するばかり。

そして、砂埃を撒き散らしながら迫りくる長身の女を眺めながらマイクのスイッチを入れた。

「待アてエそこの白デカサンドバッグウウウウ!!」

「はっは！ 残念だが私は待てと言われて待つようなバカではないよ

! Here I come, get ready for rampage
く！」

「オラアアアアアアアアアアーツ!!」

□ □ □

「なんだろうねあれ。突然出てきたと思ったらハイエンド一匹とそこそこの量の雑魚釣ってどっか行っちゃったけど。あーアッシュ、横に10の下に5修正。その辺ちよっと集まってるよ」

「まあ敵ではないんじゃない？ 味方とも限らないけれど……りようかーい、緒言入力。修正完了は3秒後ね」

「なんにせよ、こちらに手だししてこないならどうでもいいわ。私たちは私たちの仕事だけ考えていればいいの。アツシユ、修正完了し次第発泡。もう1，2発撃つたら場所を変えるわよ、2人とも」

「はーい」

ドゴンバゴンと超大口径の榴弾砲を断続的に放ちながら、マテバ^ウ モデロ^ニ6 ウニカとR4^{アツ} | C、イーグル^トアイの3人は森林の中を進んでいた。

そこは草木が隙間なくひしめき合う鬱蒼とした森だが、並み居る巨樹の枝葉を榴弾砲の弾丸が見境なしにぶち抜いた為にあちこちに光が差している。また、現在進行形で鉄血工造からの攻撃を受けて見る見るうちにその面積を減らしていた。

「……でももうそろそろこの森も持たなさそうね。ここいらが引き際かしら」

「そうかなあ、もう2，3回くらいの場所替えならまだ持ちそうじゃない？」

ウニカがそう言った矢先、この世のものとは思えない咆哮とともに鼓膜がぶつとびそうな轟音が響く。

アグリゲイターの砲撃だ、と3人が思い至ったところには森の1／3がきれいさっぱりなくなってクレーターと化していた。

その光景を木々の隙間から目撃したヘカートIIが訊く。

「あと2，3回頑張ってみる？」

「二謹んでお断りさせてもらいます!!」

「そう？ じゃあとりあえずもう1発ね。アツシユ、左に50の下に上に20修正」

「あっはい」

ギリギリと榴弾砲の照準が定められていく。

だが、それが発射されることはなかった。

『——見いつけたあ』

その声が聞こえた直後、3人の真横をビーム砲がぶち抜く。

3人がとつさに伏せた直後、彼女たちの真上を光の束が横薙ぎに通
り過ぎた。

そして、あつという間に視界が良好になった森林跡地に踏み込む一
つの影。

「まーつたくもう、散々手間かけさせてくれちゃってさあ……お陰様
で代理人エージェントがお冠だ」

その姿は一見すると夢想家ドリーマーのようにも見えるが、持っている火器は
数段凶悪な代物。そして、彼女と違う点として何よりあげられるのは
その表情。

四六時中性格の悪い笑みを浮かべていたドリーマーとは異なり、目
の前の彼女は不機嫌そうな、あるいは疲れきったような表情を浮かべ
ている。その眼もとには色濃い隈が刻み込まれていた。

「君らが誰かなんて聞かないよ、そんなのどうでもいいしね。だから、
こつちから言えるのはただ一つ——」

「総員構え、来るわよ！ アツシュ、MPXヴァルキリー—SDとC8—SFワフを大
至急呼んで！」

「了解！」

号令を飛ばすヘカートⅡの視線の先で、ダンツ！ と苛立たしげに
足を踏み鳴らすインソムニア。

それを号令として、ステルス状態を解いた大量の自走兵器が森林跡
地へと進撃し始める。

「自分の選択を悔いながら迅速にくたばれ、このスクラップどもがツ
!!」

——S a n g v i s | F e r r i , s | H i g h | e n d | c l
a s s , M o d e l c a s e : S P A C A — O S ” I n s o m n i a
” .

とある偶然と失敗から生まれた夢想なき少女が、意思なき兵隊を引
き連れて矛盾Conflictと競合Contestを孕んだ少女たちへと迫りくる。